9611 space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第386号1996年11月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

集

栗生明
Akira Kuryu

Monthly Journal of Art and Architecture

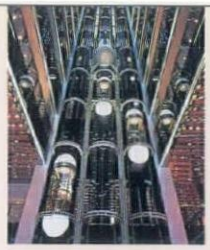
HITACHI

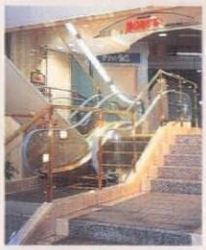
超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。

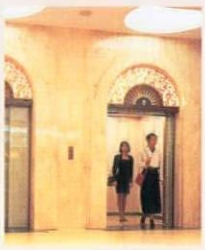
広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

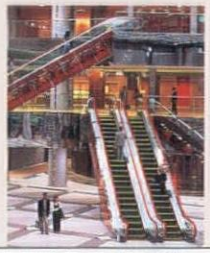
地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の"超高速エレベーター"や、身近な暮らしの中で利用される"車いす用ステップ付きエスカレーター"、"ホームエレベーター"など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



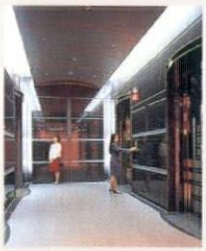



Hotel & Residence

Public Space



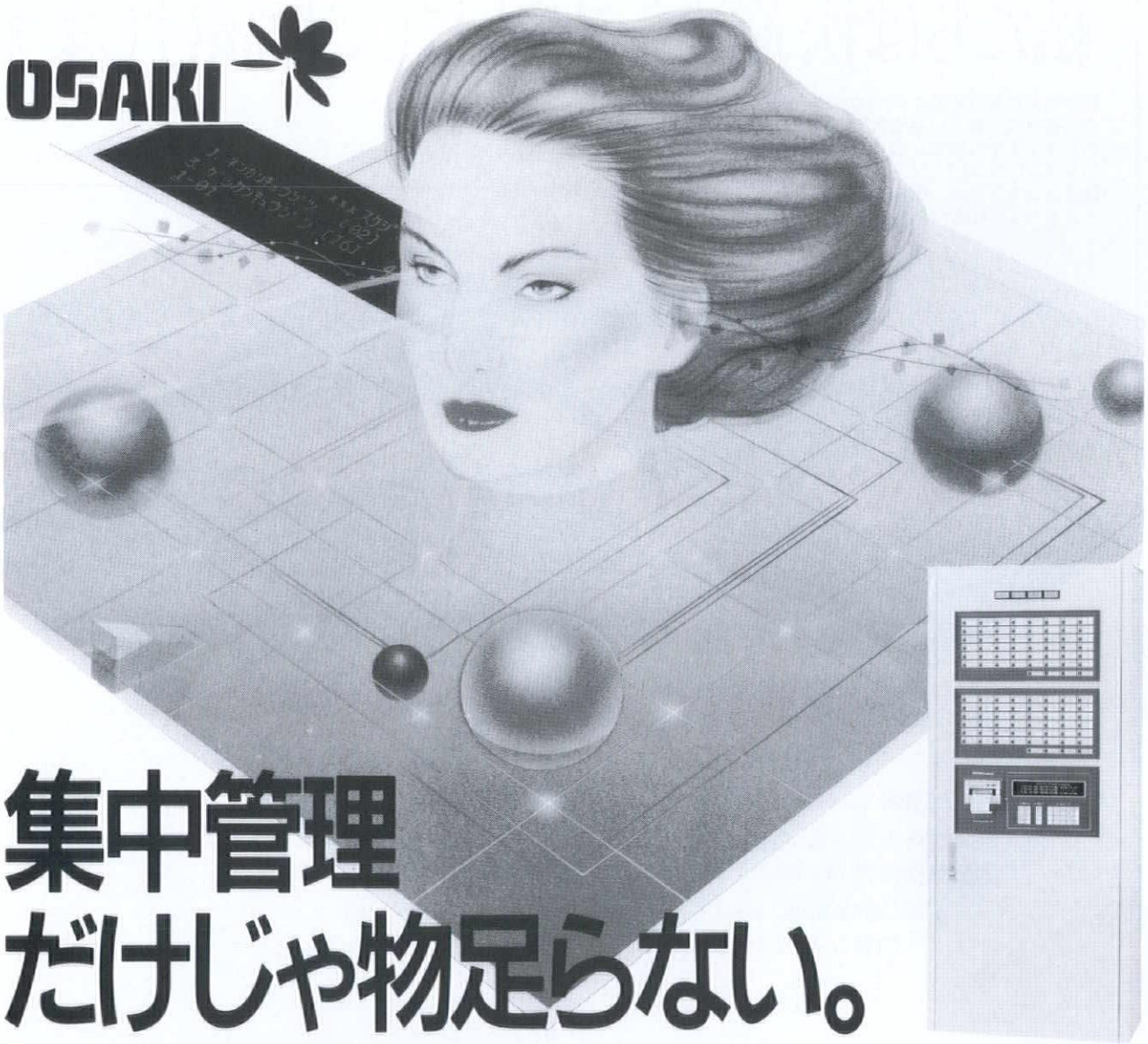
Office Building



Shopping Center

株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111〈大代〉 または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111



集中管理だけじゃ物足らない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム
OSMAC-mini
――中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的にではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。

特　長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全発停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 発停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外部に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 盤内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

●**定格電圧**／100V±10%●**定格周波数**／50Hz、60Hz共用●**管理点数**／運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点●**表示**／5×7ドット モノグリーン螢光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示●**設定操作部**／シートフラットキー、螢光表示管との対話方式●**記録**／停復電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別発停操作記録、運転時間記録、カレンダ設定変更記録●**停電補償**／240時間●**外形寸法**／壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

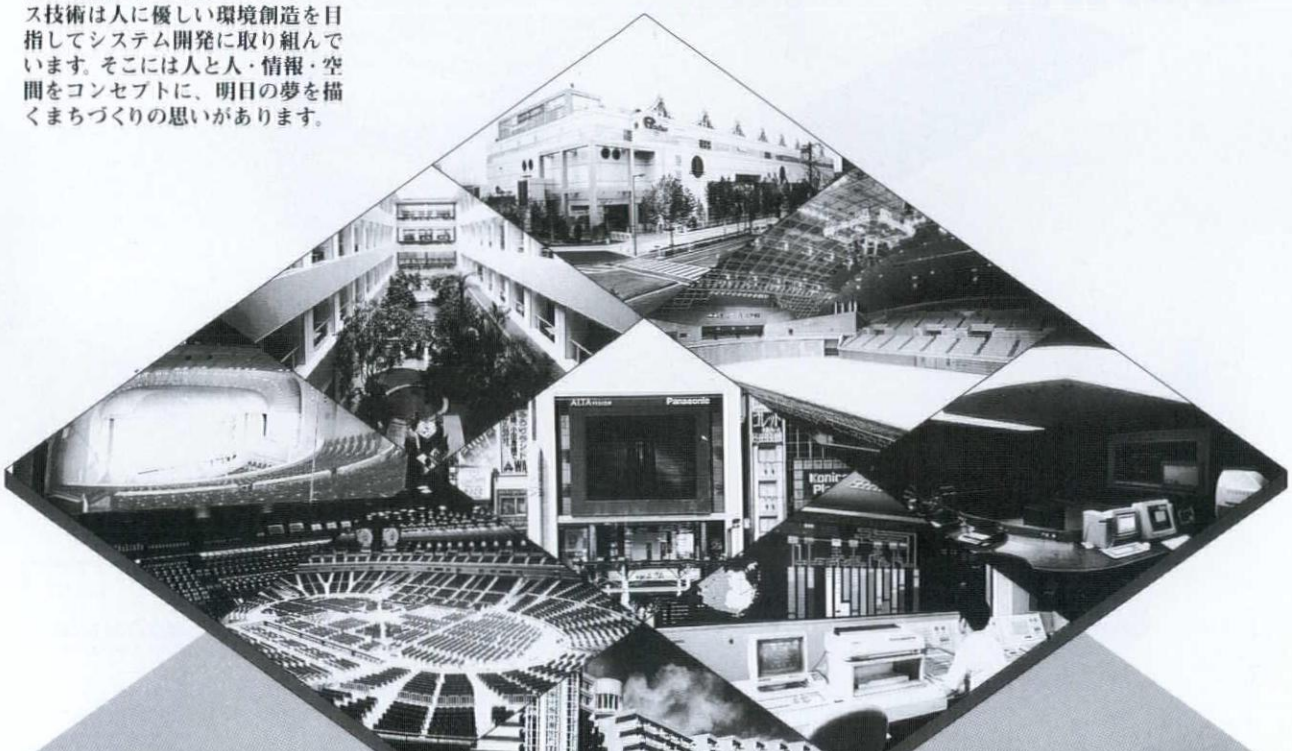
本社／〒141 東京都品川区東五反田2−2−7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556
札幌営業所 ☎011(251)6622　仙台営業所 ☎022(223)3747　千葉営業所 ☎043(221)5714
横浜営業所 ☎045(664)5561　広島営業所 ☎082(243)1611　沖縄営業所 ☎098(832)7406

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーターの提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の提案、設計、施工、メンテナンス

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

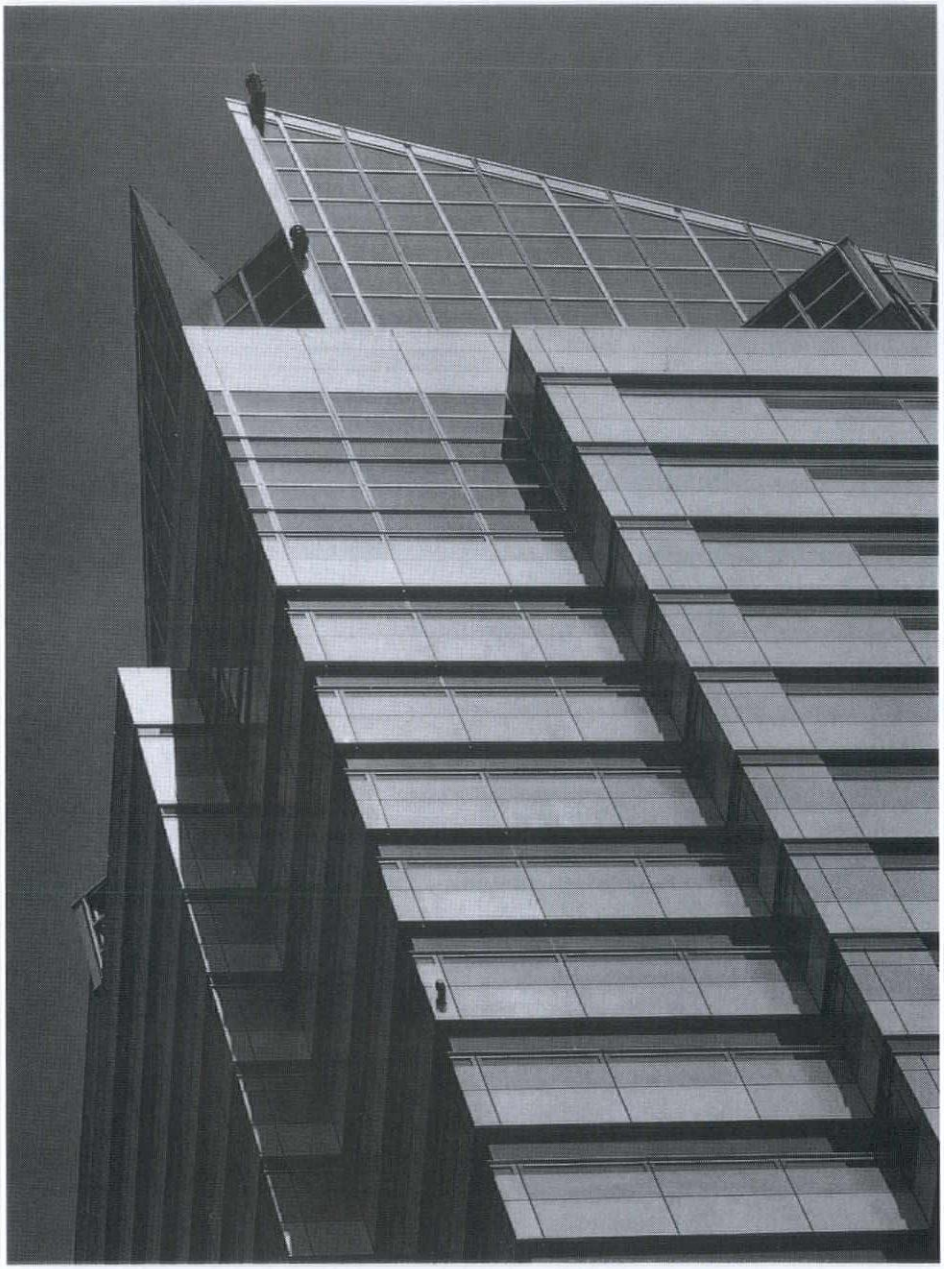
FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。

AV&CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

あしたに出会う場所

たてものは、人と人、人と時代の出会う場所。
豊かなコミュニケーションを生みだす空間を、
わたしたちはつくり続けます。



OBAYASHI

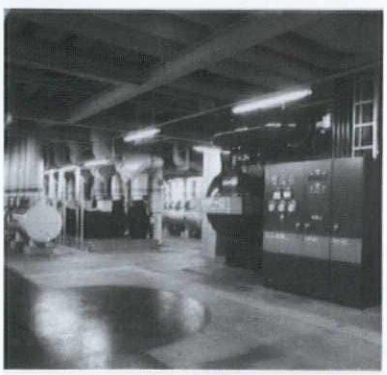
株式会社 大林組

東京本社／東京都千代田区神田司町2-3 〒101 ☎03-3292-1111
本店／大阪市中央区北浜東4-33 〒540 ☎06-946-4400［電話番号案内］

KANDENKO

快適な環境をお届けするのも
——関電工の技術です。

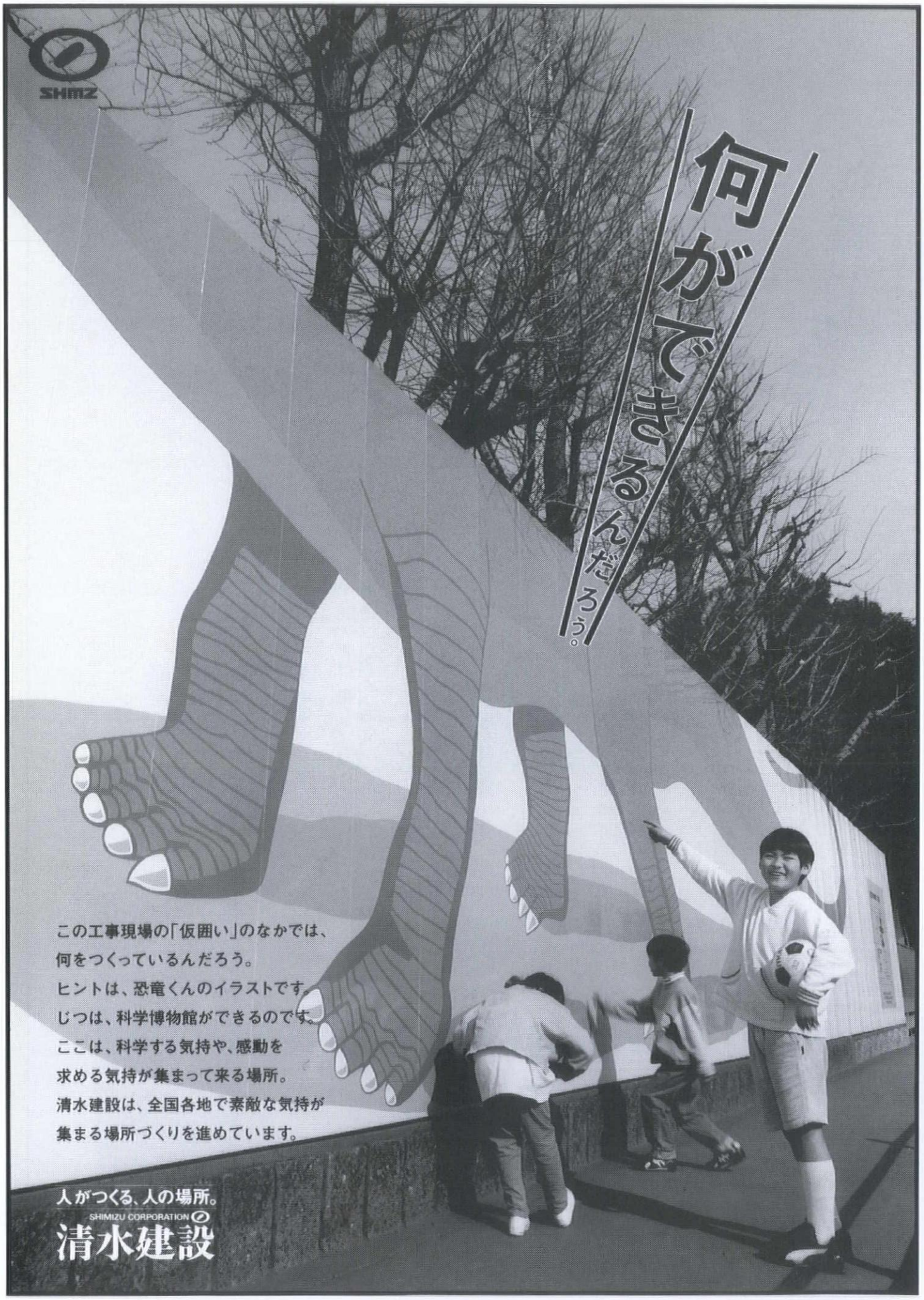
個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場……。人々の営みの場で、いま求められているのが、省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、発電の際に発生するエネルギーを有効利用する「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合せは/環境設備部
本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎:NTT 03(5476)2111 TTNet (4431)2111


SHMZ
何ができるんだろう。
この工事現場の「仮囲い」のなかでは、
何をつくっているんだろう。
ヒントは、恐竜くんのイラストです。
じつは、科学博物館ができるのです。
ここは、科学する気持や、感動を
求める気持が集まって来る場所。
清水建設は、全国各地で素敵な気持が
集まる場所づくりを進めています。
人がつくる、人の場所。
SHIMIZU CORPORATION
清水建設

三和シャッター

地震は玄関ドアを直撃する。

（突然おそう地震）

中高層集合住宅等では、地震は玄関ドア枠にゆがみを与えます。枠の変形や傾きが生じると、開閉に必要な扉とのクリアランスがなくなり、緊急時の迅速な避難に支障をきたします。建築基準法施行令第82条2項では、地震力によって各階に生ずる水平方向の層間変位の高さに対する割合が、間仕切りやドアなど非構造部材に関しては120分の1以内と規定されています。つまり、それだけの変異が生じても開閉のできることが、ドアにも要求されているのです。三和の耐震ドア「フレキード」は、地震に対する機能を備え、毎日の生活に安心をお届けします。

三和の耐震ドア

フレキード

鋼製軽量ドア・鋼製重量ドア

●詳しくはカタログをご参照ください。

三和シャッター工業株式会社

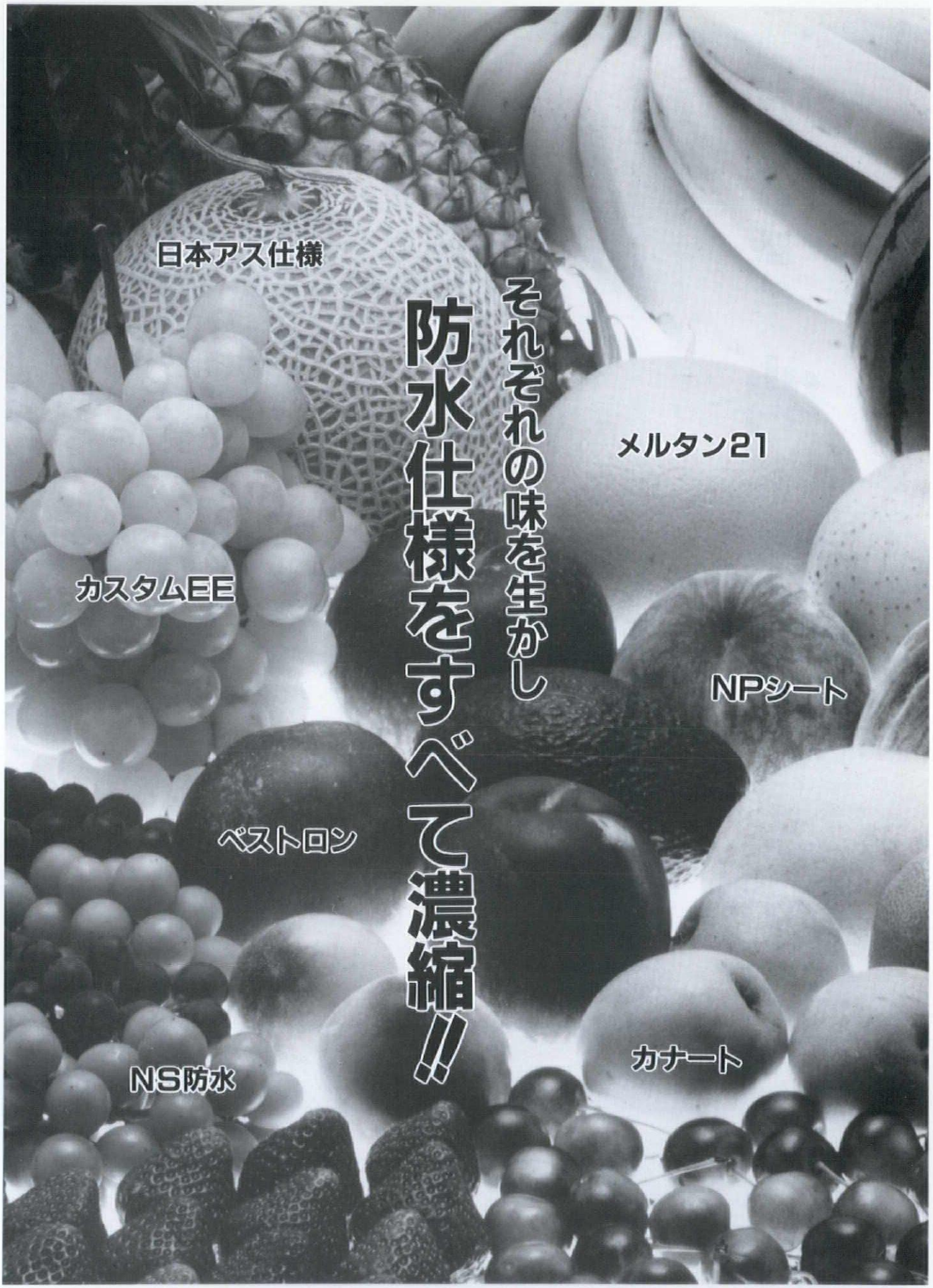
本社 〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1新宿三井ビル44階 ☎03(3346)3011(代表)

赤とんぼの星

あの頃は、日が暮れて、お母さんに怒られるまで
赤とんぼを追いかけていたね。
小さないのちが、人を懐かしい時代に連れ戻し、
ほのかに甘い気持ちにしてくれます。
いまも、こうして、この星で、
赤とんぼと一緒に生きているというよろこびが、
心の底をじんわりとあたためてくれます。
私たちは、道や、ビルや、街が生まれるそのそばで、
静かないのちが精一杯生きていることを
忘れずにいたいと思っています。
大成建設は建築を通じて人類の未来を創造しています。
けれど、様々な生き物たちの場所を借りながら、
この惑星で創造を続けているのだという事実を
しっかりと胸に刻んでおきたいと思っています。

建築の惑星

TAISEI
大成建設



ミズ太郎
マルエス S 日新

総合防水メーカー
日新工業株式会社
営業本部■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京 ☎03(5644)7221(代表) 福岡 ☎092(451)1095(代表)
千葉 ☎043(245)0201(代表) 札幌 ☎011(281)6328(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表) 仙台 ☎022(263)0315(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表) 広島 ☎082(294)6006(代表)
大阪 ☎06 (533)3191(代表) 高松 ☎0878(34)0336(代表)
名古屋 ☎052(933)4761(代表) 金沢 ☎0762(22)3321(代表)

広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

TAKENAKA
CORPORATION

松の芽ばえ

地球と、育つ。

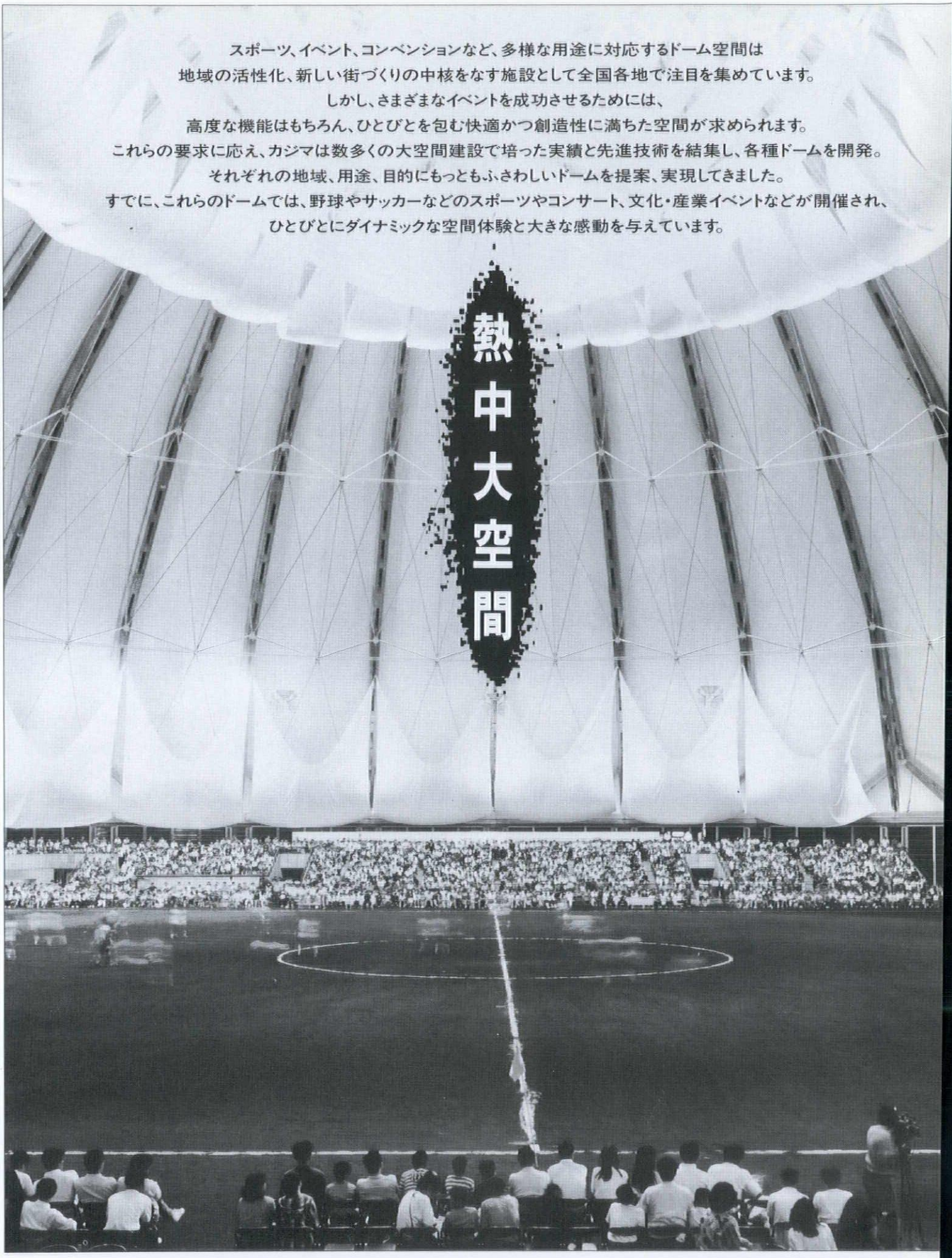
地球環境の再構築は、すでに切迫した課題です。地球が保有する資産を大切に活用しながら、新たな資産を発見・創出していかなければなりません。そのためには、私たち人間はあらゆる生物たちと対話し、その力を借りながら、共に成長していくことが大切です。竹中工務店は、早くから独自の「地球環境憲章」を制定し、地球環境の再構築をめざす新技術を育成してきました。その成果をふまえ、いま、技術のさらなる高度化を積極的に推進しています。

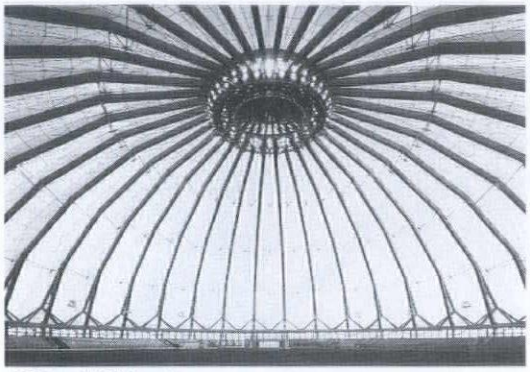
創業1610年
竹中工務店

お問い合わせは ―――― 総本店広報へ
〒541 大阪市中央区本町4丁目1-13 Tel.06(252)1201
〒104 東京都中央区銀座8丁目21-1 Tel.03(3542)7100
[WWW Home page]http://www.takenaka.co.jp/

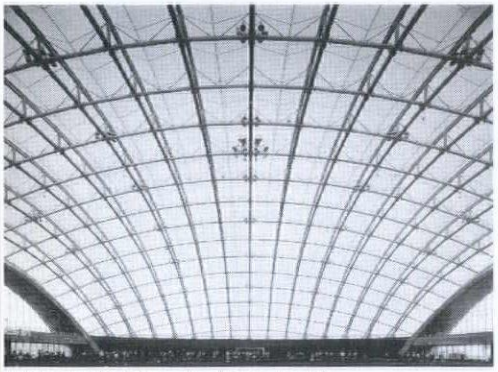
スポーツ、イベント、コンベンションなど、多様な用途に対応するドーム空間は
地域の活性化、新しい街づくりの中核をなす施設として全国各地で注目を集めています。
しかし、さまざまなイベントを成功させるためには、
高度な機能はもちろん、ひとびとを包む快適かつ創造性に満ちた空間が求められます。
これらの要求に応え、カジマは数多くの大空間建設で培った実績と先進技術を結集し、各種ドームを開発。
それぞれの地域、用途、目的にもっともふさわしいドームを提案、実現してきました。
すでに、これらのドームでは、野球やサッカーなどのスポーツやコンサート、文化・産業イベントなどが開催され、
ひとびとにダイナミックな空間体験と大きな感動を与えています。

熱中大空間



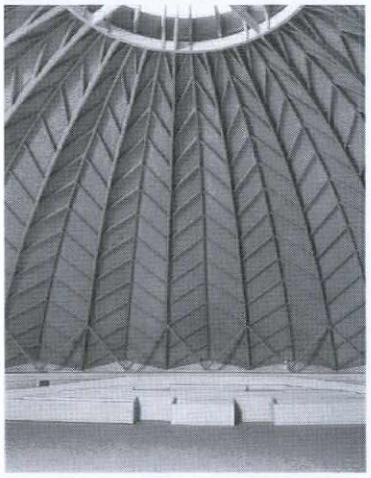


出雲ドーム(木造ドーム)
大空間に日本の伝統美を生かした木造とスチールによるハイブリッド膜構造。

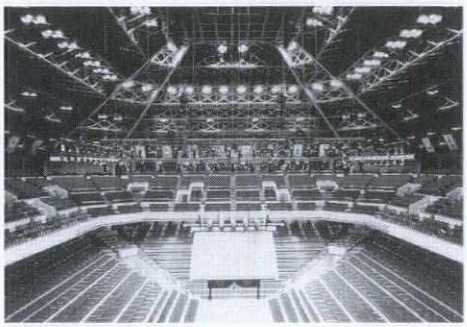


あきたスカイドーム(スーパーパラソル・ドーム)
自然光を透過する膜屋根とスチール造のスーパー・スペースアーチによるハイブリッド膜構造。

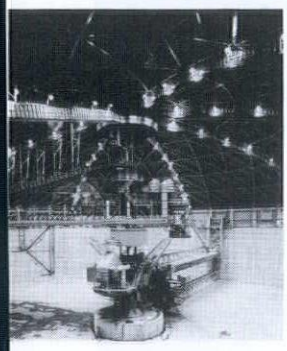
信州博覧会グローバルドーム(木造ドーム)
国産から松材による大断面集成材をはじめて採用。



クリエイティブ・テニスガーデン千葉(エアドーム)
膜屋根を空気で支えるため超大スパンにも対応が可能、戸外のような明るい大空間。



新国技館(スチールトラス)
多様な設計条件にフレキシブルに対応できる豊富なトラス技術ラインナップと建設実績。



竹原火力発電所貯炭場内部(ラメラドーム)
安全性・経済性にすぐれ、あらゆる用途に対応できる鉄骨ドーム。

大空間の安全を支える確かな技術。

強風や地震、火災、温度変化などに対して総合的な観点から最良のものを採用。コンピュータを駆使した構造解析や各種シミュレーションなどにより究極の安全性確保に努めています。

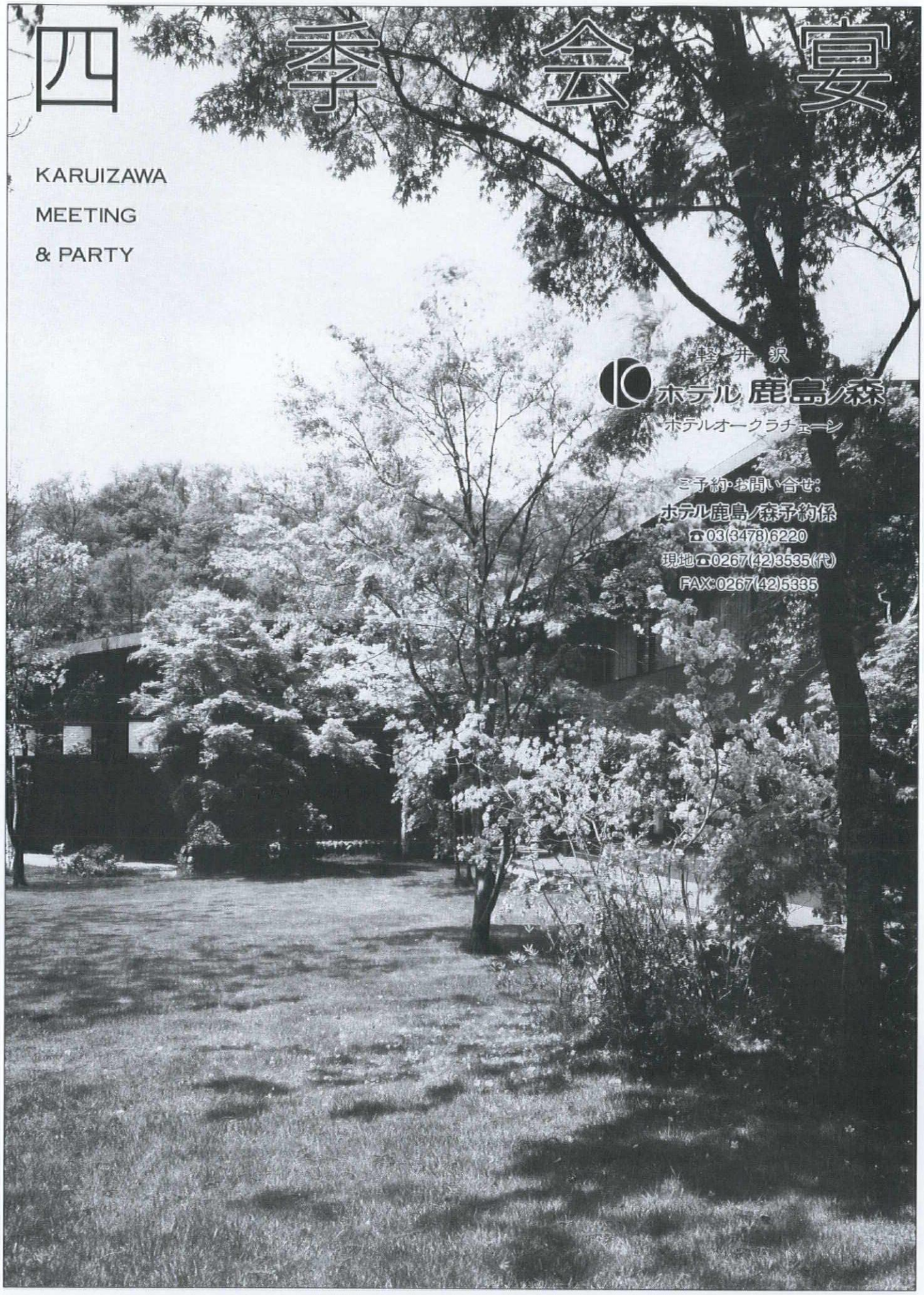
大空間をドラマチックに演出する照明・音響技術。

スタジオ・コンサートホールなどの豊富な設計・施工実績をもとに最新の実験設備による実験・研究を重ね、それぞれの用途に応じたクオリティの高い照明・音響システムを提供しています。

より快適な室内環境をつくる空調技術。

大型模型による温度分布シミュレーションや観客席における気流の実測を重ね、これらのデータを基に、最も快適な室内環境実現のための空調設備をトータルシステムで組み込みます。

鹿島
KAJIMA CORPORATION
本社:〒107 東京都港区元赤坂1-2-7
お問い合わせは
建築技術本部 (03)3404-3311(代)


四季会宴
KARUIZAWA
MEETING
& PARTY
軽井沢
ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン
ご予約・お問い合せ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335

Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

■モダンを楽しみ、ヨーロッパを憩う■

東京都現代美術館宿泊プラン

■期間 ■1997年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日（祝日の場合は翌日）となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を充分に満喫できるプランです。

お一人様料金	
1室1名様利用（シングル）	¥16,500
1室2名様利用（ツイン）	¥13,000
1室3名様利用（トリプル）	¥11,500

※1泊朝食付・美術館入場券（常設展）・お土産・サービス料込み、税別。

HOTEL East 21 TOKYO

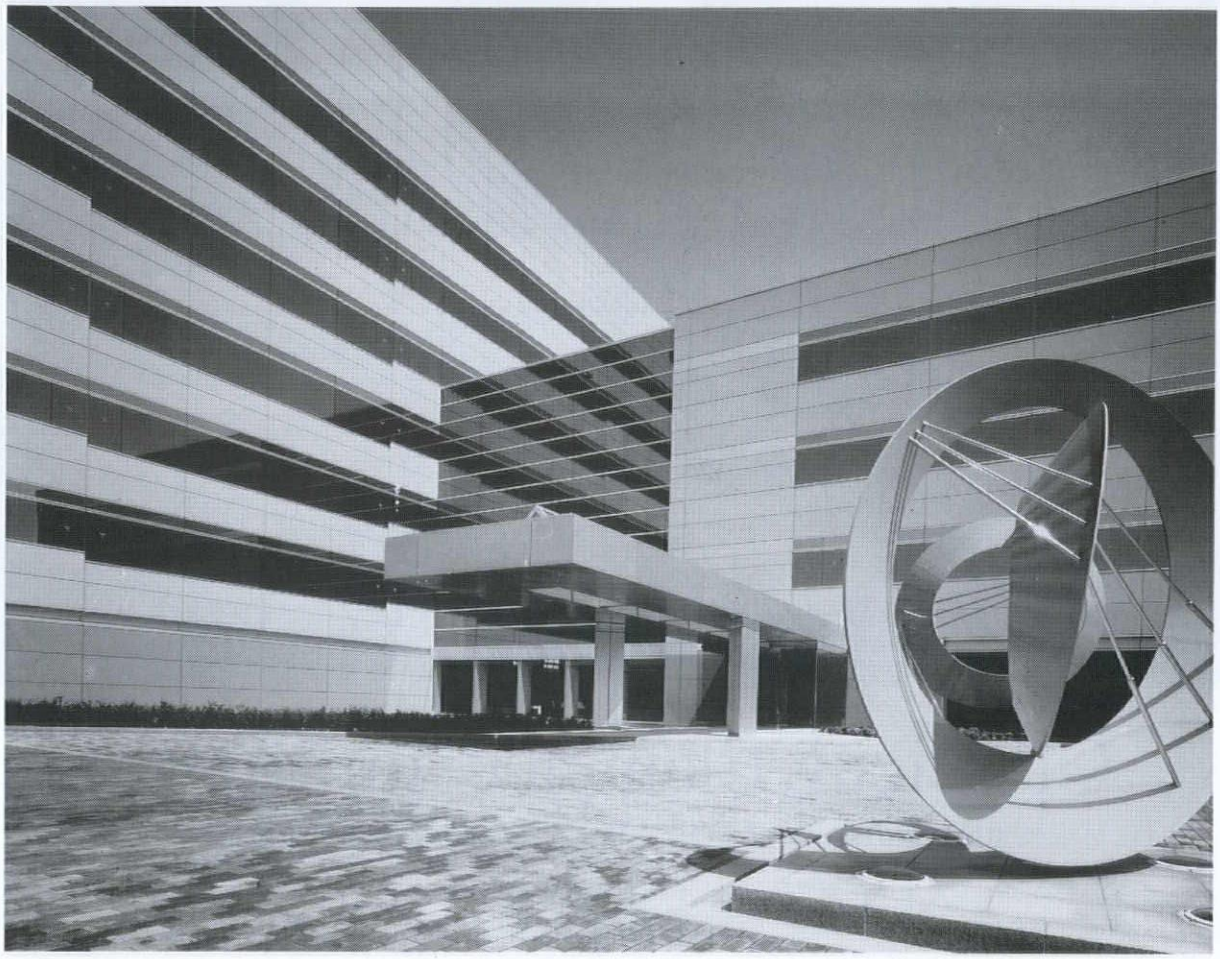
株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・パイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

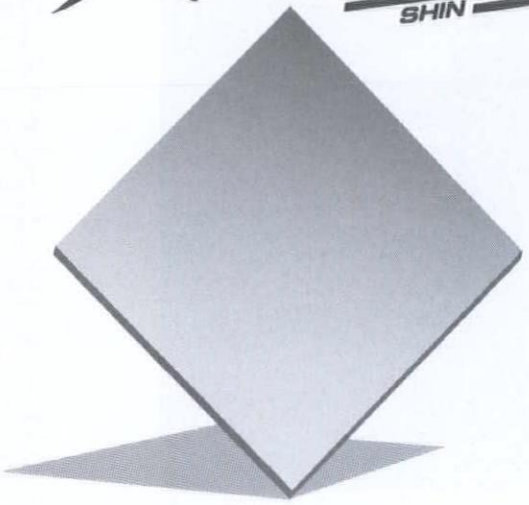
大興物産株式会社

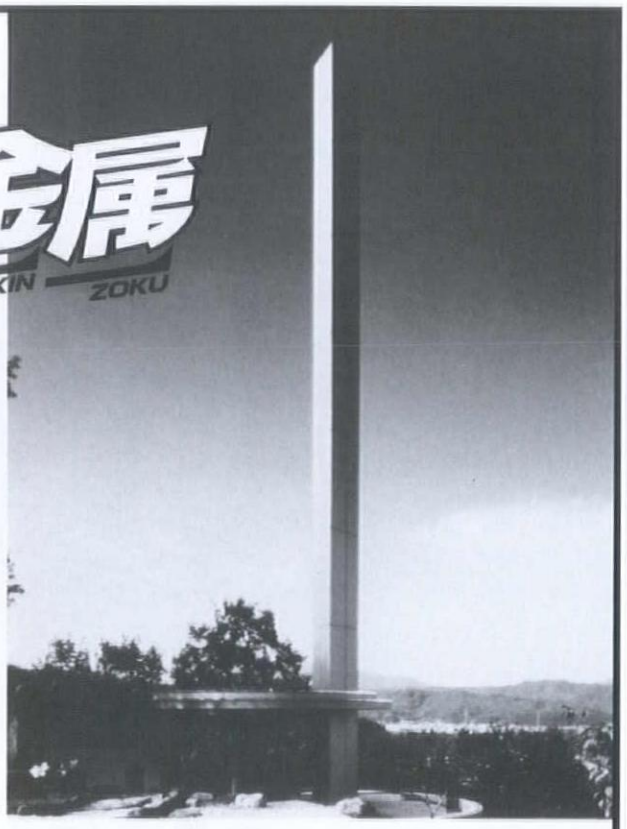
本店 〒107 東京都港区元赤坂1－6－4安全ビル

本店	☎(03)3423-2511	FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841	FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191	FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)3423-2511	FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861	FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624	FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925	FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717	FAX(03)5632-6719	シンガポールオフィス	☎65-3440590	FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171	FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286	FAX(025)243-5248			
大阪支店	☎(06) 762-5661	FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221	FAX(082)249-9270			

チタン・親海金属

SHIN KAI KIN ZOKU





植村直己ふるさと公園モニュメント

KOBELCO 神戸製鋼

株式会社神戸製鋼所 鉄鋼事業本部

東京本社 チタン営業部/〒100 東京都千代田区丸の内1丁目8-2(鉄鋼ビル) TEL.(03)3218-7790(ダイヤルイン) FAX.(03)3218-6592

大阪支社 チタン営業部/〒541 大阪市中央区備後町4丁目1-3(御堂筋三井ビル) TEL.(06)206-6567(ダイヤルイン) FAX.(06)206-6208

名古屋支社 条鋼チタン室/〒450 名古屋市中村区名駅4丁目7-23(豊田ビル) TEL.(052)584-6132(ダイヤルイン) FAX.(052)584-6107

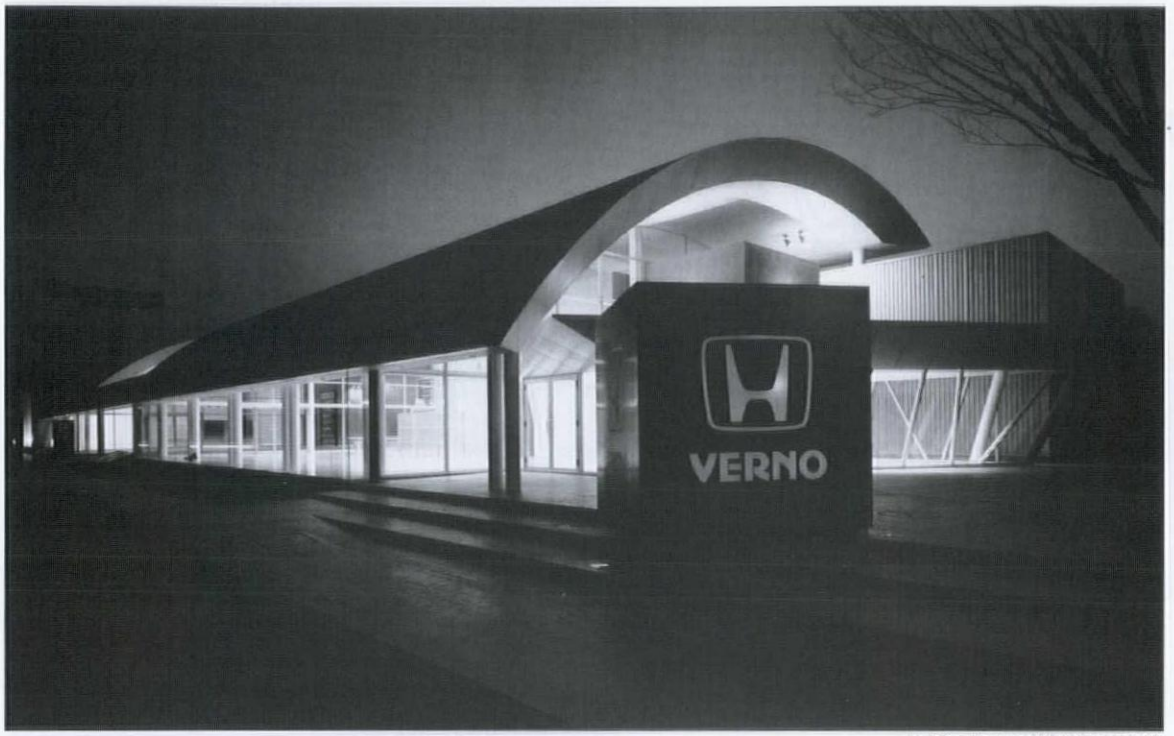
あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。
きっと、多くの方が、
大自然の中をイメージされることでしょう。
私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に
創造していきたいと考えています。
人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、
新しい最適環境を創造していきたい。
もっとナチュラルに、
いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

—光と空気と水を生かす—
ダイダン

景観との調和。地域への共感。そして快適空間へ。

環境の一部としてデザインをとらえる



セキショウ・ホンダふれあいランド

アルミ建材・アルミ加工品の総合メーカー
ビル用カーテンウォール・ビル用サッシ・一般加工品

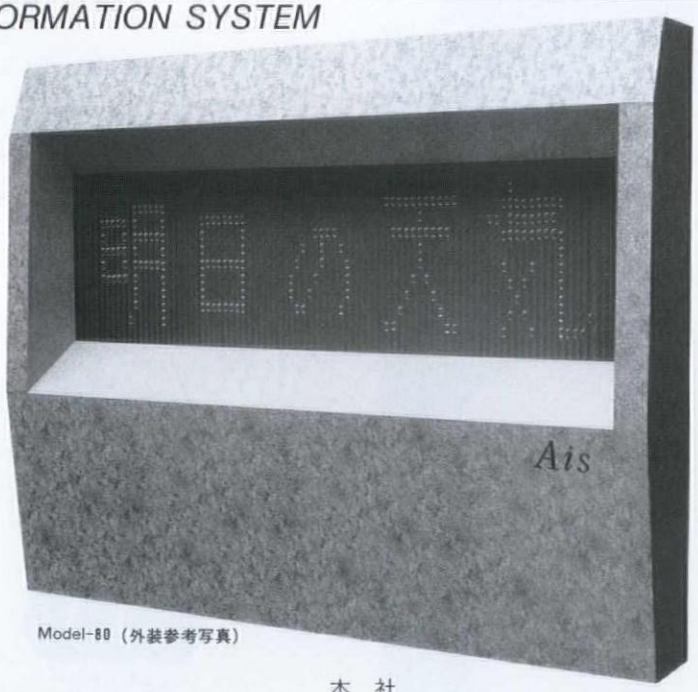
神鋼ノース株式会社

本　　社　〒104 東京都中央区京橋2丁目1番2号（京橋ビル）☎ 03 (3278) 4100（代表）　FAX 03 (3278) 4199
大阪支店　〒541 大阪市中央区備後町4丁目1番3号（御堂筋三井ビル）☎ 06 (229) 3461（代表）　FAX 06 (229) 3469
神戸営業所　〒651 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目81番地　☎ 078 (261) 8255　FAX 078 (261) 9076
東関東営業所　〒315 茨城県新治郡千代田町上稲吉1758番1号　☎ 0299 (59) 4522・4523　FAX 0299 (59) 4597
霞ケ浦工場　〒315 茨城県新治郡千代田町上稲吉1758番1号　☎ 0299 (59) 4111（代表）　FAX 0299 (59) 6322

AIS

情報をエアが伝えます
—エア インフォーメーション システム—

AIR INFORMATION SYSTEM



Model-80（外装参考写真）

"エア"を使った今までにない
インフォーメーションシステム。
意外性が注目度の高い
"情報"を生みだします。

■ スリムなボディでどんなスペースにも。
本体奥行寸法 320mm（外装を除く）
■ 必要なのは家庭用100V電源だけ。
AC100V (50/60Hz)
最大消費電力（照明点灯時） Model-80 900W,
Model-112 1200W
■ ちょっと変わったパーテーションにも。
■ 簡単に移動ができます。
■ 注目度の高い広告媒体として。

KAWAMURA
川村噴水株式会社
KAWAMURA FOUNTAIN CO., LTD.

本　社
〒248 神奈川県鎌倉市浄明寺 3-8-50
TEL 0467-25-3111　FAX 0467-25-1875

東京営業所
〒107 東京都港区赤坂 2-22-21 AS 南部坂 5F
TEL 03-3587-2035　FAX 03-3587-1325

住友精化

未来をか・た・ちにする

●大阪ワールドトレードセンタービルディング
アクアトップF施工

浸透性吸水防止材
アクアシール®

コンクリート素地仕上げ一液フッ素塗料
アクアトップ®F

低汚染型無機系仕上げ材
アクアトップ®SEP

住友精化株式会社

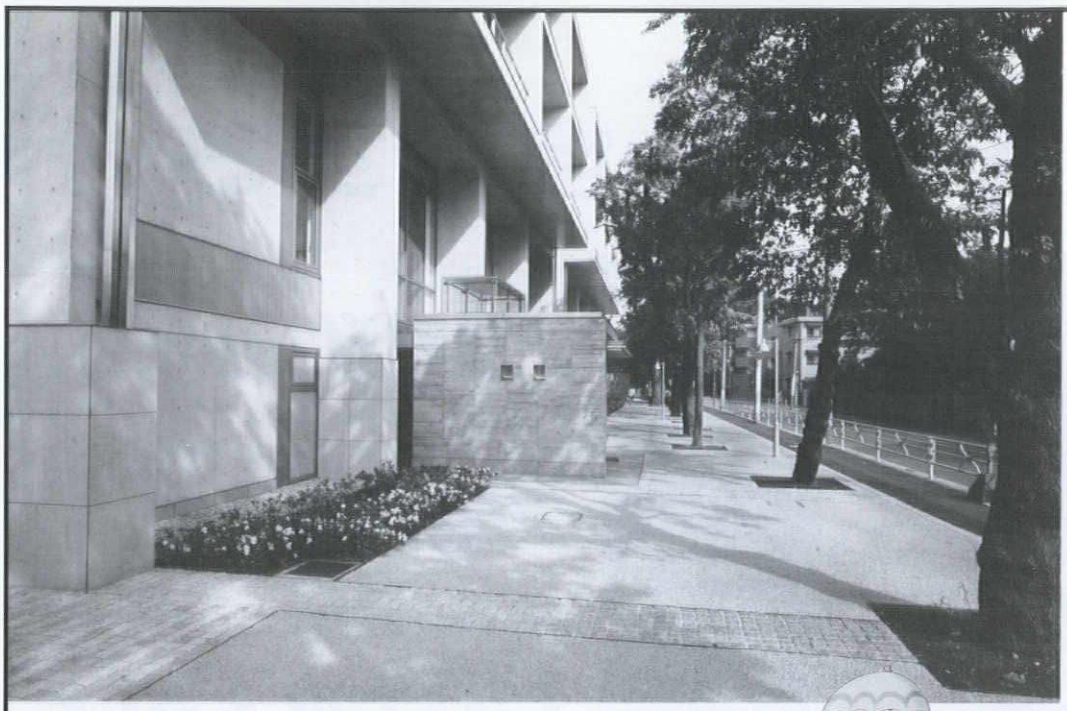
機能品事業部　アクアシール会
本　社(大阪)　〒541　大阪市中央区北浜4丁目7番28号(住友ビル第2号館)
TEL. 06-220-8539　FAX. 06-220-8578
本　社(東京)　〒102　東京都千代田区九段北1丁目13番5号(日本地所第1ビル)
TEL. 03-3230-8534　FAX. 03-3230-8530

FOR HAPPY LIFE

きれいな空気、
きれいな水、
そして快適な
環境。

冷暖房空調設備・給排水衛生設備の
設計、施工に従事するテクニカル集団。

大冷工業株式会社
名古屋市東区東桜二丁目16-36 ☎(052)931-8941

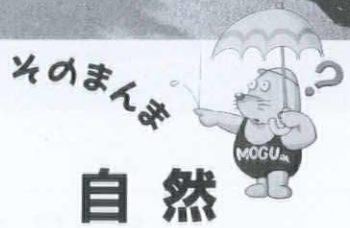


昭和大学附属烏山病院〈東京〉…パーミアストーン桜みかげ
（洗い出しパーミアコン）

パーミアコン®・パーミアストーン®は
「エコマーク事務局認定・環境保全型商品」です。

permeacon
パーミアコン®
透水性コンクリート舗装

■雨水の地下への還元
コンクリート舗装でありながらすばやく水を浸透させるので、地下水の涵養、土の活性、樹木の発育など自然に近い状態をやさしく保ちます。
■快適な歩行性
降雨中でも水たまりや水ハネを起こしません。表面がポーラス状ですのですべりにくく、歩行にも最適です。
■排水設備の軽減
施工の厚さにより透水能力や貯水能力が高まり、50mm/h以上の降雨にも充分に対処できます。側溝、桝などの排水設備が大幅に軽減できます。
■多様な用途に対応
コンクリートなので熱に強く、強度も充分。歩道、駐車場はもとより軽交通道路にも使用できます。吸音、断熱、乱反射防止にも効果的。着色も自由です。



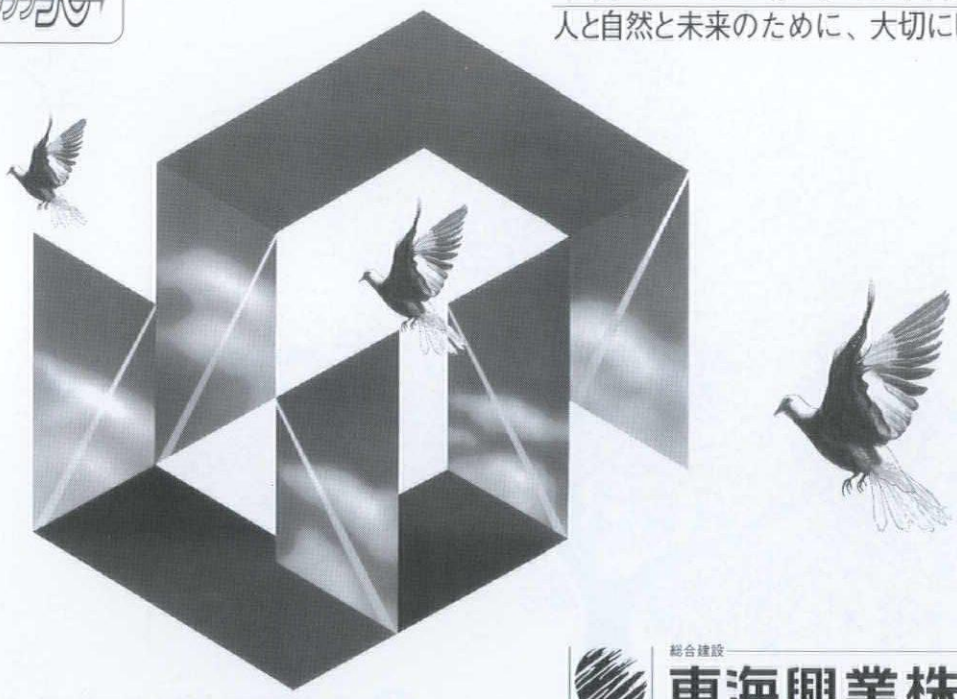
自然

佐藤道路株式会社
本社／〒103 東京都中央区日本橋本町3-6-2 小津本館ビル5F ☎03(3662)5656

東京支店☎03(3662)7711／大阪支店☎06(227)5421／名古屋支店☎052(231)0376
仙台支店☎022(261)8761／北陸支店☎0764(41)5641／広島支店☎082(241)6100
九州支店☎092(716)5544／札幌営業所☎011(709)3930／四国営業所☎0878(23)2101

おかげさまで50周年
NEW チャレンジ50

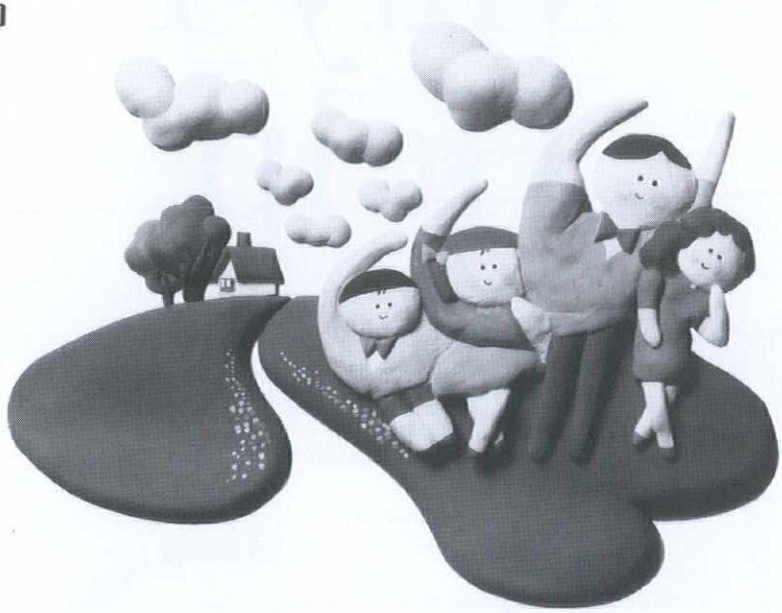
明日の空間を創造する
人と自然と未来のために、大切にします建設の心



総合建設 創造と技術
東海興業株式会社
TOKAI
本社 東京都中央区八重洲1-1-6〒103 ☎03-5200-5111

CHUDENKO

確かな歩み未来まで‥‥



総合設備工事の設計施工　電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

心のふれあい大切に

株式会社 中電工

本店/広島市中区小網町6番12号
TEL(082)291-7411
支店/広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

VALUEとQUALITYを追求するバルカー

鉄骨耐火被覆材

バルカウエット……湿式吹付けロックウール

バルカロック……乾式吹付けロックウール

バルカロックW　乾式吹付けロックウール(スラリー工法)

リフボード……繊維混入けい酸カルシウム板

耐火遮音間仕切壁

バルカウエットウォール　湿式吹付けロックウール耐火間仕切壁

VALQUA 日本バルカー工業株式會社

本　社　〒100 東京都千代田区丸の内3-3-1(新東京ビル)　☎03(3212)8571
工事事業部　〒105 東京都港区芝3-39-8(コンチェルト三田ビル)　☎03(3769)1721
札幌事業所　〒060 札幌市中央区北三条西2-1(カミヤマビル)　☎011(222)7038

Kinden CORPORATION
May I Help You?
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 配電工事担当
架空配電設備
地中配電設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 電力工事担当
発・変電設備
架空送電設備
地中送電設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 情報通信(広域)工事担当
CATV設備
移動体無線通信設備
光通信設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 情報通信設備(構内)担当
データ通信設備
統合ネットワーク設備
LAN設備　構内映像設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 内装設備担当
システム天井
OAフロア インテリア内装
小規模建築
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 空調・衛生設備担当
空気調和設備
給排水・衛生設備
クリーンルーム設備
公害処理設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 一般電気設備担当
ビル電気設備
工場電気設備
施設電気設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 計装設備担当
ビル計装設備
工場計装設備
パワープラント計装設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 国際事業担当
アジアエリア
太平洋エリア
中近東エリア
他海外ネットワーク
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん エネルギー有効利用システム担当
地域冷暖房設備
コージェネレーション設備
氷蓄熱空調設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 防災・防犯設備担当
自動火災報知設備
避雷誘導設備
防犯設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 新エネルギー・システム担当
太陽光発電設備
燃料電池発電設備
Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん ファシリティ・マネジメント担当
設備診断
設備改善提案
リニューアル・メンテナンス
きんでんがお手伝いできることは結構多い。
私たちの事業分野にご注目ください。すでにご存じの人もいらっしゃるでしょうが
おや、こんなこともやっていたのかという人もいらっしゃるはずです。
きんでんは、「情報」「エネルギー」「環境」をテーマに技術領域を拡げ
それらの技術を有機的に結合させることで新たなる価値を創造する
総合設備エンジニアリング事業を展開しています。
そのなかで生まれたのがこれらの事業です。その多彩さは
きんでんが現代の都市や社会が求めるニーズにフレキシブルにお応えしている証と言えるでしょう。
今日の都市をより豊かにするために、明日の社会をさらに創造的にするために。
私たち きんでんが、いろいろとお手伝いしていきたいと思います。
いろんな技術が集まって、きんでんです。
株式会社 きんでん
本　店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141
国内事業所185ヵ所／海外事務所12ヵ所／国内関係会社19社／海外関係会社4社／海外合弁会社6社

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話:03-5561-2111(代)
振替:00160-2-180883

年間定期購読料
25,000円（特別定価号＋送料込み）

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学
理工学部　関東学院大学

9411　シティ・ターミナルの空港建築　3500円
世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルの技術的、デザイン的可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文:ディヤン・スジック、他

9412　SDレビュー1994　1950円
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J.ビザル＋P.ルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀＋田堀繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。[国際競作プロジェクト／オシヴィエンチム孤児院]

9501　山本理顕　3000円
作品：緑園都市、岩出山町立統合中学校、痴呆性老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真：北嶋俊治、大野繁。論文：山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。鼎談：槇文彦＋植田実＋山本理顕

9502　南イタリアのバロック建築　1950円
地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッチェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市:パレルモ、シクリ、他。写真:小野一郎。文：竹山博英、長谷川正允、岡田哲史

9503　集合住宅の現風景　1950円
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文・作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永讓、松永安光、元倉眞琴。座談会：植田実＋室伏次郎＋松隈洋

9504　テクノスケープ　3000円
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文：宇野求、岡河貢、永瀬唯、A.ロジェ、他。座談会：中村良夫＋三谷徹＋宇野求。東京湾岸マップ

9505　メガ・アーキテクチュア　1950円
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-RER駅、他。対談：安藤忠雄＋P.アンドルー。[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成：坂本勝比古

9506　デジタル・アーキテクチュアの可能性　1950円
インタビュー：原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性：笹田研究室、両角・位寄研究室、他。[自然と共存する家具] 写真：淺川敏

9507　柳澤孝彦／美術館の空間とディテール　2700円
作品：東京都現代美術館、富岡市立美術博物館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会：宇佐美圭司＋柏木博＋柳澤孝彦。写真：村井修

9508　まちのパブリックスペース　1950円
人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文：中川理、仙田満。オンライン座談会：青木淳＋中川理＋花田佳明

9509 丹下健三　3800円
最新作シンガポールの超高層ビル（UOBプラザ）、新宿の新たなスカイラインを構成する（新宿パークタワー）を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。

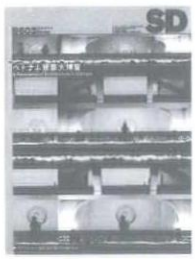
9510 環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作　1950円
近年、海外での活躍が注目されるペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ――「タワーアート in 通天閣：ヴァナキュラーな電脳都市展」より]

9511
長谷川逸子：1985－95
過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品：山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文：ピーター・クック、他。対談：多木浩二×長谷川逸子
3000円

9512
SDレビュー1995
第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美樹、季鏡男、トム・ヘネガン+アーキテクチュア・ファクトリー [Villa Romana: ローマのヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポーテーション・デザイン]
1950円

9601
都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス
2800円

9602
建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ
イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネスティローリ、フランコ・ステラ、他。
1950円



9603
アジア同時代シリーズ2 ベトナム建築大博覧
ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文＝重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他
2500円

9604
大地と光の変様 オーストラリア建築1788-
1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジェネレーション in New York: スミス=ミラー＋ホーキンソンとジョエル・サンダース]
1950円

9605
多様性と調和の建築 ゲルカン＋マルクの最新作
コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。[海と建築――鈴木了二の最新作]
物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅
1950円

9606
建築家の椅子111
19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R.マッキントッシュ、A.ガウディ、O.ワーグナー、ル・コルビュジエ、M.van D.ローエ、C.イームズ、A.ロッシ、他
3000円

9607
再考 建築家土浦亀城
戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸（第1、2）[スタジオ建築計画の集住考] 最新作 FH・HOYA-IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介
1950円

9608
マイケル・ホプキンス
「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他 [光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア] 文：南條史生
2400円

9609
デンマーク・モダンハウスの最盛期
デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他 [山上の都市と塔の家――イエメン：都市と住居の形態学] 文＋写真：芦川研究室
1950円

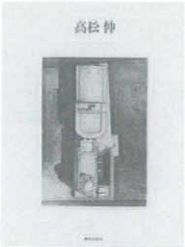
9610
中世の光と空間：フランス中南部のロマネスク建築
ル・トロネ修道院、他。写真：堀内広治、文：羽生修二、他 [ふたつの都市考（近代都市と芸術展）（未来都市の考古学展）] [97の椅子プロジェクト]
1950円

SD 現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、研ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円

槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円

菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円

早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円

磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円

白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敞一郎、白井昱磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円

ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円

磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム ディズニー ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円

象設計集団

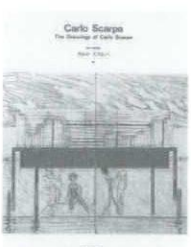
独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円

続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円

槇 文彦 ❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円

ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円

安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

'70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠⅡ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円

伊東豊雄

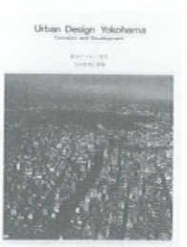
風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円

ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×義原敬×小澤恵一、他。

5000円

9611 space Design

スペースデザイン 第386号
1996年11月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

特集

栗生明

5		環境のトータリティ	栗生 明
40		インタビュー：ガラス箱の中の非日常性	槇 文彦
	9	岡崎市美術博物館（マインドスケープミュージアム） ●プロセス●ランドスケープ●展示	
	25	コア山国 ●構想メモ●シーンの展開	
	43	チューリップ四季彩館 ●イメージの源泉●ダイアグラム	
	57	パトリ十清里フォトアートミュージアム ●コラボレーション●18の庭●家具	藤江和子
	73	植村直己冒険館 ●コンセプト●ランドスケープ	宮城俊作
89		時間のない世界	飯島洋一
	93	神慈秀明会黄島神殿	
	96	神慈秀明会黄島道場	
	97	鳩山ニュータウン・タウンセンター	
	98	セキショウつくばアネックス	
	99	セキショウHFランド	
	100	カーニバル・ショーケース	
	102	伊丹市地下めいそう空間	
	103	井上誠昌堂富山オフィス	
	104	井上誠昌堂金沢オフィス	
	105	群馬県営相生住宅団地	
	106	新湊市営本江住宅	
	108	信州博覧会：コンストラクション・アート・ミュージアム・CAM	
	109	国際花と緑の博覧会：フローリアム109	
	110	世界都市博覧会：青海2地区会場計画	
	112	香港ピーク設計競技案	
	113	都幾川村文化体育施設設計競技案	
	114	大分県アグリカルチャーパーク「楽市楽座館」設計競技案	
	115	埼玉県環境科学国際センター設計競技案	
116		コラボレーションとコンティニュアンス	南條道昌
117		栗生さんとコラボレーションと僕	蓑原 敬
	118	アンビルト・プロジェクト ディスク・シティ／オクタビオ／Y市中心街再整備計画／ブルースカイパーク／I 百貨店	
	120	グリーン・ライフ・ミュージアム	
	122	栗生 明の作品　1984-1996	
133		田窪恭治　サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3	
	137	完成、そして新たな始まり	ジャン-マルク・ユイトレル　訳＝三宅京子
	126	連載：apple tomology トムの時空形象学 14　MAGIC CUBE	戸村 浩
	129	ニュース： 岡山県「都市景観・建築文化の10年」オープンニング・シンポジウム	前田 敦
	130	照明探偵団： 連続実践講座レポート 8　誘う光・誘われる光――ホイホイとフラフラ	葛西玲子/LPA
	141	展覧会レポート： 「オリジナリティ」への問い　「日本の建築家による椅子展」より	河合俊和
	142	書評	
	144	新刊紹介	
	145	お知らせ	
	149	海外建築情報リミックス：機能　その3 「建築と自然」	

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
山田良　大野由美
飯塚りえ
アドバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：2,500円
[本体2,427円]

年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み

表紙：植村直己冒険館
表紙写真：
Nacasa & Partners Inc.
表紙デザイン：
小泉均

9611 space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No.386
November 1996

SD

Special Feature:

Akira Kuryu

5		Environment——Totality of Constitution	Akira Kuryu
40		Interview: Extraordinariness in a Glass Box	Fumihiko Maki
	9	Okazaki Art and Historical Museum: Mindscape Museum ●Process●Landscape●Installation	
	25	Core Yamakuni ●Planning Memo●Unfolding Scenes	
	43	Tonami Tulip Gallery ●The Source of the Image●Diagram	
	57	Patrie + Kiyosato Museum of Photographic Art ●Collaboration●18 Gardens●Furniture	Kazuko Fujie
	73	Uemura Naomi Memorial Museum ●Concept●Landscape	Shunsaku Miyagi
89		Timeless World	Yoichi Iijima
	93	Shinjishyumeikai Kishima Shrine	
	96	Shinjishumeikai Kishima Hall	
	97	Town Center in Hatoyama New Town	
	98	Sekisho Tsukuba Annex	
	99	Sekisho HF Land	
	100	Carnival Showcase	
	102	An Itami Underground Meditative Space	
	103	Inoue Toyama Office	
	104	Inoue Kanazawa Office	
	105	Gunma Prefectural Housing, Aioi	
	106	Shinminato Municipal Housing, Hongo	
	108	Japan Expo in Shinshu: Construction Art Museum	
	109	The International Garden and Greenery Expo: Florium 109	
	110	World City Expo Tokyo: North Intercity District Exhibition Plan	
	112	Competition Design for the "Peak," Hong Kong	
	113	Competition Design for the Tokigawa Cultural and Sports Facilities, Saitama	
	114	Competition Design for the Oita Prefectural Agriculture Park "Rakuichi-Rakuza Hall"	
	115	Competition Design for the Saitama Prefectural International Center for Environment Science	
116		Collaboration and Continuance	Michimasa Nanjo
117		Mr. Kuryu, Collaboration, and I	Kei Minohara
	118	Unbuilt Projects Disk City / Octavio / Y-City Central Section Redevelopment Plan / Blue Sky Park / I Department Store	
	120	Green Life Museum	
	122	Works of Akira Kuryu	
133		Project pour La Chapell de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3	
	137	Completion and a New Beginning	Jean-Marc Huitorel
	126	Series: **MAGIC CUBE** apple tomology 14	Hiroshi Tomura
	129	News: Okayama Prefecture's "A Decade of Cityscapes and Architectural Culture" Opening Symposium	Atsushi Maeda
	130	Symposia on Illumination: 8. **Inducing Illuminations**	Reiko Kasai, LPA
	141	From the Exhibition: Quest for Originality	Toshikazu Kawai
	142	Book Review	
	144	Book Information	
	145	Announcements	
	149	Eminent Works Abroad: Function 3 Architecture and Ecology	

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Managemen
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Managemen
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥2,500
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 164

Cover:
Uemura Naomi Memorial
Photo:
Nacasa and Partners Inc
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

栗生明

Special Feature

Akira Kuryu

環境はすべての要素が連続することによって構成されている。ひとつの要素は常に他の複数の要素から影響を受け、同時に影響を与える。近代以降の科学偏重の時代は、この直感的な事実を証明するために、全体を要素に分割して分析することに血道を上げてきたといってよい。その結果環境は、それぞれに孤立した要素の単なる集合としてのみ解釈され、建築もまた環境から孤立し、消費の対象となった。こうした、環境が本来備えているトータリティ（全体性）の解体は、人間という生命体のもつトータリティとは共鳴しえない。重要なことは全体を生命体のごとく成り立たせている「関係」である。

これまでの作品はすべて、自らを含むトータルな環境の中に潜んでいる「かかわり」や「つながり」、すなわち「関係」を発見し、ひとつのビジョンのもとにそれらを「再構成」することによって、新たな「全体」を紡ぎだすことを意図したものである。（栗生明）

環境のトータリティ(全体性)

栗生 明

今年は世界的冒険家、植村直己の13回忌にあたる。世界中で植村の業績を讃えるイベントが行われている。今なおこうした催しが行われ、植村の記憶が風化しないどころか、むしろその鮮度が増しているように思われるのはなぜだろうか。

もちろん植村の謙虚で、人をそらさぬ人間性が基盤になっていることは間違いない。しかし私は、それ以上に植村の冒険の「方法」に対する共感が大きいのではないかと考えている。

植村の冒険の記録を読むと気付くのだが、厳しい高山や極地の冒険において、一貫して読み取れることは、自然に対する揺るぎない畏敬の念である。そこでは近代装備で自然に対峙し、自然を征服するといった方法は採られていない。あくまで自らが自然に順応、馴化する方法が選択されている。

エスキモーの部落に入り、長期にわたって一緒に生活をしたのも、こうした方法のひとつであった。エスキモーと同じものを食べ、同じものを着て、同じことをする。極地での生活を自らの体の中に刻み込んで、自らをエスキモーと化していく方法である。

いうなれば、未知なる環境にアクティブに関わるというより、パッシブに対応しようとする意図が見えてくる。そしてそこには、本来の意味での自然との共生が実践されていることを発見できる。

それは、自然環境を外部のものとして相対化するのではなく、人間の肉体そのものも自然の一部であると考えるトータリティ（全体性）への洞察によるものであった。

西欧近代が生み出したアトミズム（要素還元主義）は、全体を細かく基本的要素に分けて、その性質を解明する。そしてそれを集合させ、重ね合わせることで全体が構成される。個の法則性が、全体の法則性に重なっているという考え方である。

ニュートン力学以来、物理学は一貫して、全体は常に均質な個に分解できるというこのアトミズムに立脚してきた。そしてこれが近代科学の基軸となり、技術文明を発展させ、社会の近代化を推し進めてきたことは確かである。

当然のことながら、建築や都市の計画もこうした西欧近代の世界観に立脚した考え方が主流であった。そこでは様々な「境界」が設定され、空間は様々な機能空間として分断、孤立させられた。さらに、効率の名の下に「分業」が宿命づけられた。

しかしこうした計画手法は、人間という生命体の仕組みとズレを起こし、フリクションを起こすことが明白となってきた。なぜなら、生命の仕組みの原理はアトミズムではないし、一元的、二者択一的でもない。生命の秘密は、多様性、さらには矛盾さえ内包しながらも、それをプラスに転化するしなやかさにあり、個と全体、多様性と全体の調和という矛盾の、高次の総合性にあるからである。

今日、あらゆる分野で「生命」への関心が高まっているのも、この生命の持つトータリティ（全体性）への共感にほかならない。

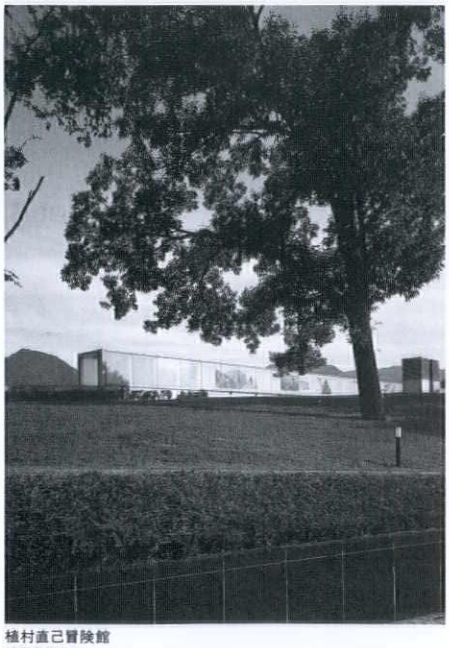
生命体はそれぞれの細胞、それぞれの器官が自律しながらも全体を形作り、フィードバックし合いながら見事に調和を示している。だからこそ生きているといえるのだ。

例えば細胞から分子を取り出して、生命をバラバラに分解すると生命らしさがなくなってしまう。それは生命体を生命体たらしめている「関係」が毀されたからである。逆に言うと、「生きている」ことの鍵はこの「関係」にある。

「関係」とはすなわち、生命を司るソフトウェアであり、情報である。

西欧科学は、極小の要素を解明するために分解、分析を重ねた。そしてその結果、生命体を生命体たらしめている「関係＝ソフトウェア」をズタズタに切り刻んで、逆に生命の把握を不可能にしてしまった。

このように、分断された個は一種の記号として消費される。ヴァルター・ベンヤミンが、「空間の商品化」という概念を持ち出したように、建築もまた分断された個として、大地



植村直己冒険館

からも、歴史からも切り離され、ポータブルで頼りない存在として消費の対象となった。それはもはや、人間の身体性、つまりトータリティには共鳴し得ない存在と考えて良い。

我々はもう一度、空間を大地につなげ、歴史と接続させる必要に迫られている。

環境を定義して、バックミンスター・フラーは次のように述べた。

"All that except me(私以外のすべてのもの)"

服も、家具も、家族も、自分の周りのものすべてを「環境」と呼ぶ。確かにその通りだ。しかし、環境をデザインする立場に立つとそれだけでは不十分である。デザインとは自分と自分以外のすべてのものの「かかわり」や「つながり」、つまり「関係」を発見し、新たな「全体」を表現することである。自分が自分以外のすべてをどう見るのか、どうしたいのか。そうしたヴィジョンが問われている。

最近、「スケープ」という言葉がよく使われる。タウンスケープは街の景、ランドスケープは大地の景、サウンドスケープは音の景といったように、名詞の後につなげて、……の景と訳される。このスケープという言葉には、「見えないものが現れてくる形」という意味がある。見ていても見えていないもの。つまり、意識化されていないものが意識化され、見えてくる時「スケープ」という言葉が使われる。

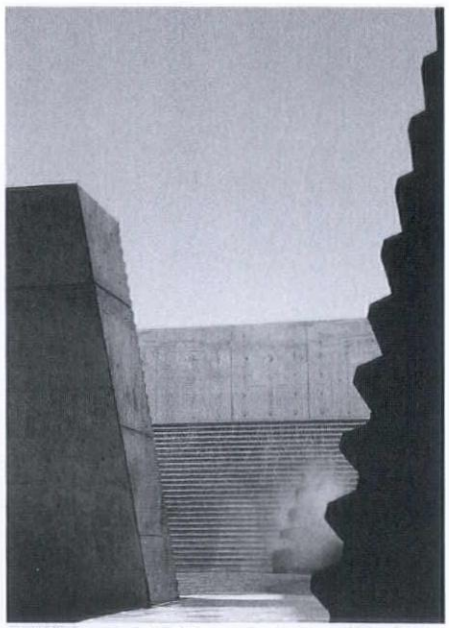
例えば、「昔は風景がなかった」という言い方ができる。松尾芭蕉が「荒海や　佐渡に横たふ　天の川」と詠んで初めて、日本海の壮大な風景が立ち現れ、意識化される。芭蕉の目を通したスケープ、ヴィジョンが人々の感動を引き起こす。こう考えると、芭蕉は一級のデザイナーだったといえよう。デザイナーとは、「環境」という森羅万象にひとつの「関係」を見出し、スケープを生み出す、あるいはヴィジョンを与える人間を指すのだ。

横総合計画事務所在籍時に〈沖縄海洋博覧会〉に参加した。その後〈国際花と緑の博覧会〉、〈信州博覧会〉、〈世界都市博覧会〉と、様々な博覧会に参加してきた。そもそも博覧会は、疑似都市づくりだといってよい。既存の都市の混乱、近代都市計画の行き詰まりを打ち破る「もうひとつの都市」の提案こそが求められている。あえて違法をなす実験装置である。しかし、大阪万国博覧会以来の博覧会システムは、新しい都市像を描くにはあまりにも制度化されすぎ、現実の都市に追い越され、すでに破綻している。

中止となった〈世界都市博覧会〉には、地区環境ディレクターという役割で参加した。狭い敷地に閉じこめられ、敷地境界の内側だけを見るような建築から、視野を広げ、環境全体に提案の網をかけることができる機会であった。環境のディレクションにとって重要なのは、個々の施設のデザインではなく、建築、ランドスケープ、家具、照明、サインといったハードな環境から、目に見えない企画、営業、運営、催事などのソフトウェアに至るまでのすべてを視野に入れ、トータルなヴィジョンを示すことである。それはすなわち、それぞれの要素の「かかわり」と「つながり」をコントロールすることにほかならない。

近代社会は目的追求の社会であった。そのために最も効率の良い機能空間が求められた。そしてこれらの空間は、効率を追求しすぎたために急速に現実感を失い、バーチャルでフィクショナルな空間になってきた。人間の身体性や感性を含んだ全体性に共鳴しない空間が、周辺に拡大している。しかし、現代はもはや目的追求の社会ではなく、自己充足的な社会である。身の回りで体感するすべての空間が美しく、楽しく、豊かで人間の身体性や感性を揺さぶるものであることが要求される時代となった。都市とは、デジタルで目的性のある情報の集積ではない。人々は無駄な情報や意外な情報を交換するために都市に集まる。文化は感動や共感という構造を持たない情報の集合であり、都市は文化を生産するための装置なのだ。

こうした多様性を持った環境を組み上げてい



信州博覧会：コンストラクション・アート・ミュージアム・CAM

くには、多くの専門家とのコラボレーションが必要になってくる。ひとりの孤独な作業に終始する画家や彫刻家と異なり、建築(環境)のデザインとはつまるところ、コラボレーションの積み上げと考えて良い。

まず第一に、オーナーとのコラボレーションに始まる。どこに何を、どうつくるのか。建築のプログラムに関わる多くの部分は、オーナーとのコラボレーションによってまとめられる。次に地域住民や行政とのコラボレーション。近隣の同意や法規との整合、特に前例のない提案の場合、行政との協議は欠かせない。ここでは制度そのものの見直しも含まれる。これらは協議という言葉からさらに踏み込んだコラボレートする意志によってなされるべきであろう。構造、設備の設計者、さらには家具、展示、ランドスケープなどのデザイナーとのコラボレーションへと続き、施工者とのコラボレーションによって完成する。完成後も運営、管理者をはじめ、建築を利用するすべての人々とのコラボレーションが、その建築の消滅まで続けられる。

コラボレーションとは、それぞれの専門分野の「分業」を意味するものではない。各々の専門領域を越えて、相手の領域に踏み込んで新しい価値を生み出すことこそが、その最大の目的である。当然この作業はインタラクティヴなものとなる。様々な人々が互いの意図や感情に反応しあうことによって構想はまとめられていく。そういった意味で、建築は「応答する芸術」であり、もっとも社会性が要求されるものと言えるだろう。そこでは独りよがりや押しつけは通用しない。

アメリカの経済学者、メアリ・フォレッドは対立する人間の関係を次の3つに分類した。

1. ドミネーション(抑圧)
2. コンプロミス(妥協)
3. インテグレーション(統合)

抑圧や妥協といった一方通行でなく、創造的統合といったインタラクティヴなやりとりが新たな「関係」を創造する。

立場の異なる多くの人々の意志をともに満たしながら、望ましい形でひとつの結果を発見すること。デザインとはまさにそのことであると考えたい。その作業に関わるすべての人間は、ゲームを構成するプレーヤーのように自在に動きながらひとつのゲームをメーキングするのだ。こうしたコラボレーションは実は、専門家であればあるほど難しい。専門家というのは明確な専門領域の境界設定によって成り立っているからである。エドワード・W.サイードはアマチュアリズムの重要性を「より大きな俯瞰図を手に入れ、境界や障害を乗り越えて様々なつながりをつけたり、特定の専門分野に縛られず専門職という制限から自由になって観念や価値を追求すること」としている。

ハード、ソフトを問わず、専門領域の境界には未知なるアイデアや技術が眠っている。それぞれの専門領域の境界ゾーンにあえて踏み込むことによって、新たな「関係」を発見することを可能とするアマチュアの視点を忘れてはならない。

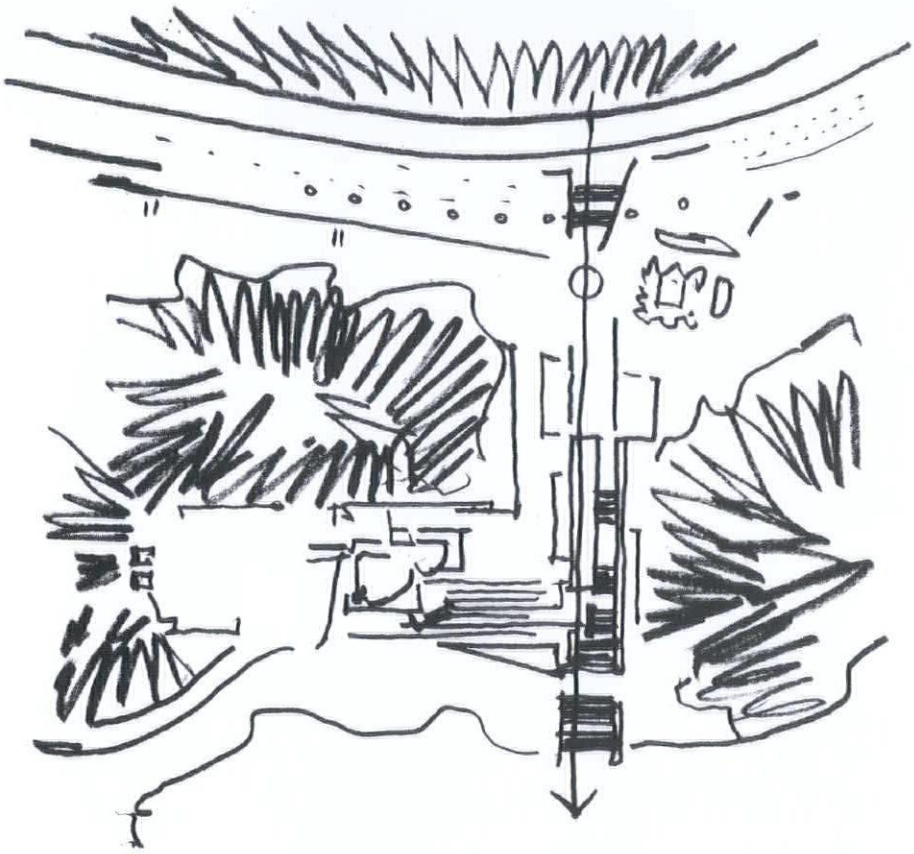
建築（環境）のデザインとは、自らを含むトータルな環境の中に、新たな「関係」、つまり「かかわり」や「つながり」を発見し、ひとつのヴィジョン、スケープ、ストーリーを組み立てながら、新たな「全体」を紡ぎだす作業である。こうしてみると、建築(環境)のデザインは、一種の編集作業であることに気付く。空間を編集し、関係する人々を編集し、自らもまた関係する人々によって編集されていく。この編集作業のプロセスには、汎用性をもった型（スタイル）など存在しない。常に提案とフィードバックを繰り返し、休むことなくダイナミックに変化しながら新しい環境を発見し、それを関わりを持ったすべての人々と共有していく。それは、時代や社会そのものを編集することへとつながっていく。

●くりゅう・あきら／建築家、千葉大学教授

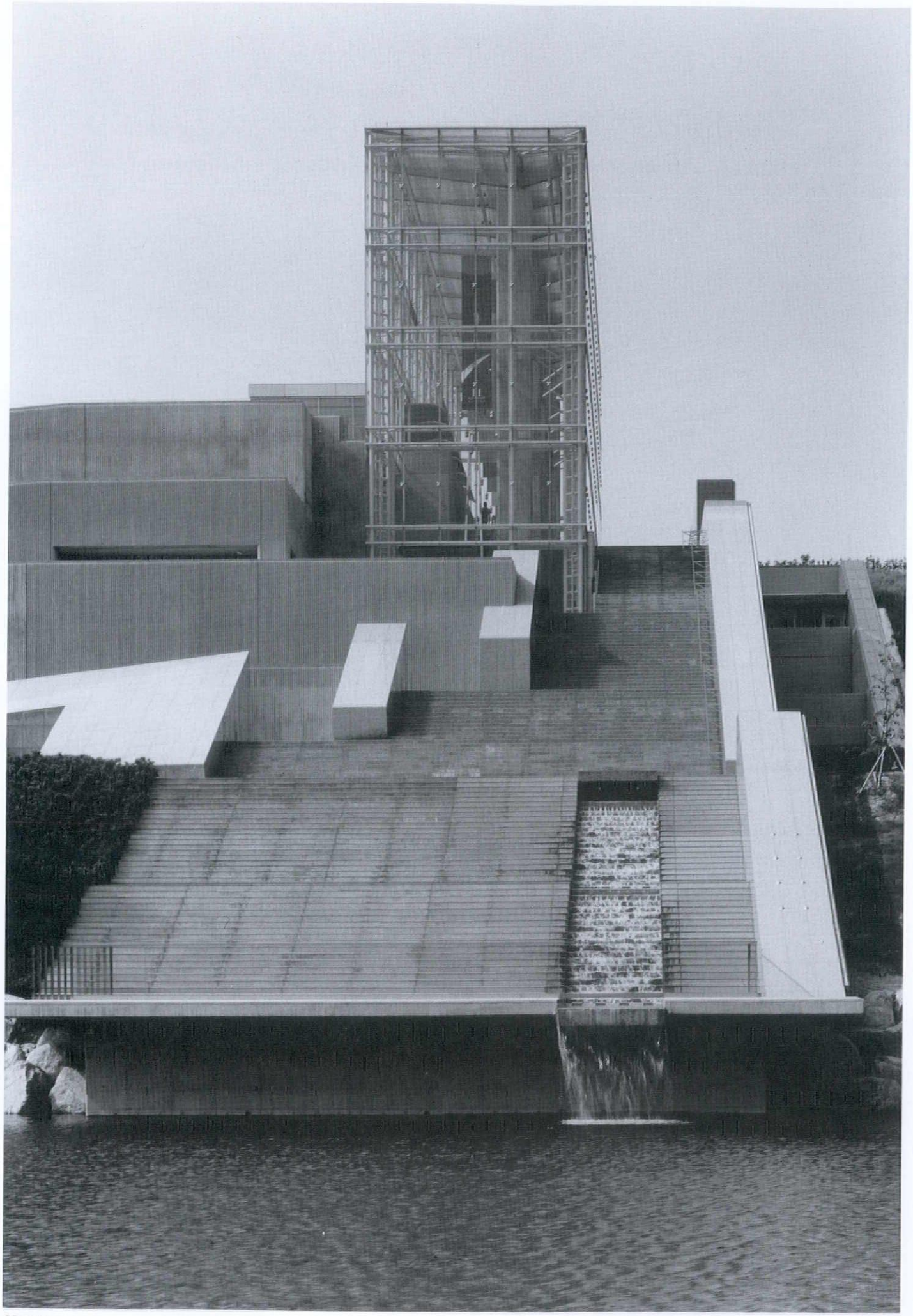
コア山国

岡崎市美術博物館（マインドスケープミュージアム）

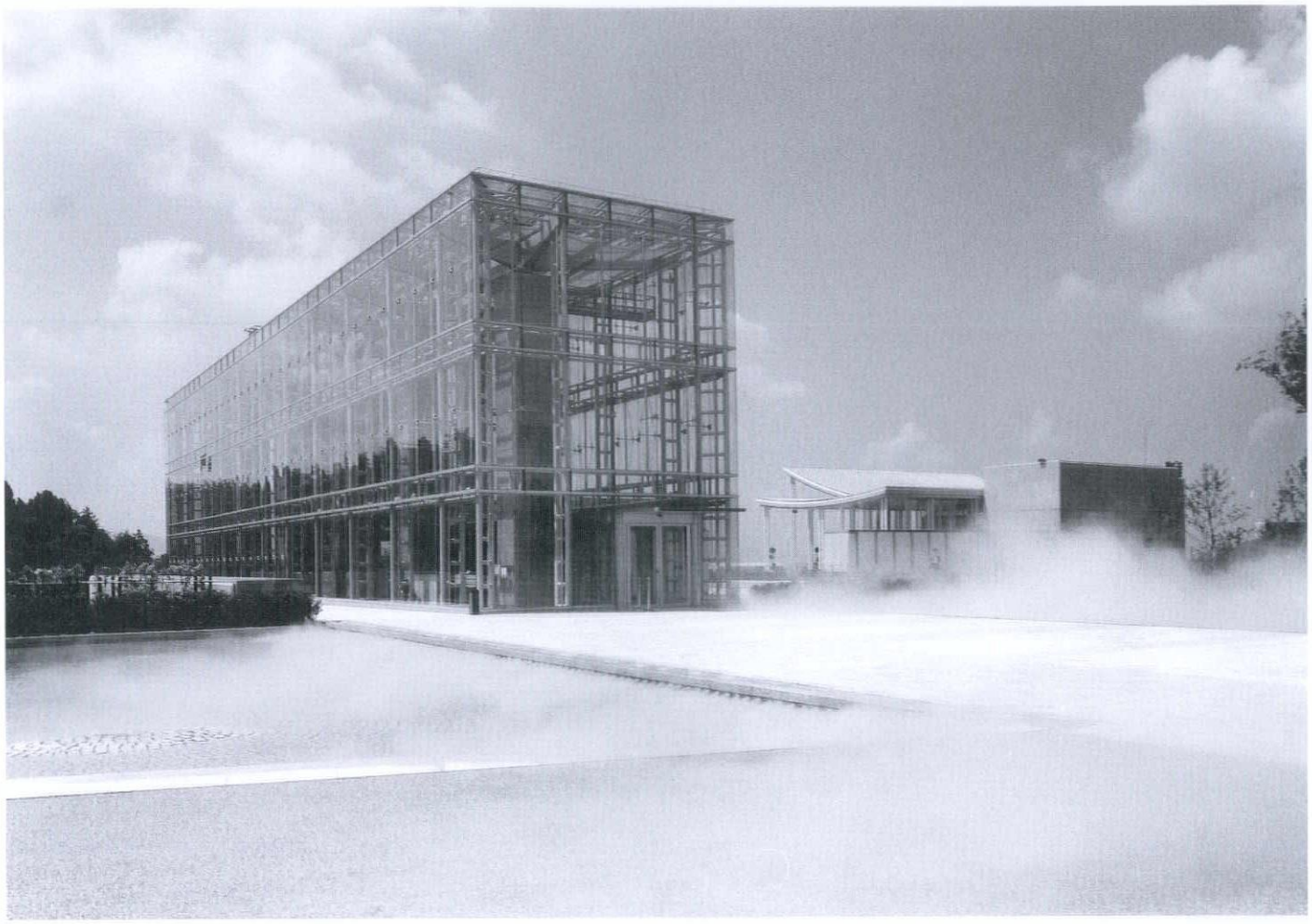
Okazaki Art and Historical Museum: Mindscape Museum

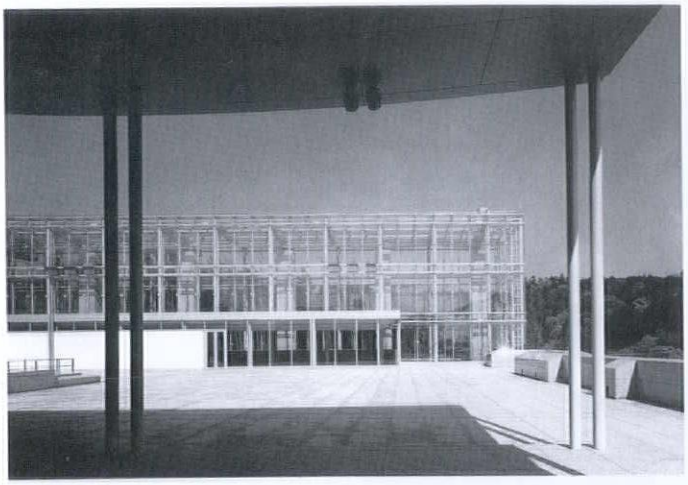


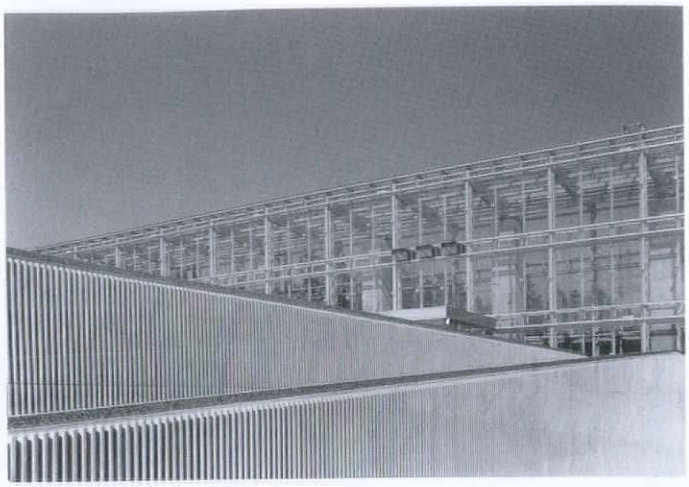
閉じた「箱」ではなく、外部環境へと積極的に拡張する運動体としてとらえなおされた実験的なミュージアム。自然環境に恵まれた公園内の敷地のコンテクストを読み込むことにより、池へと下る斜面になじむ形状が生まれた。

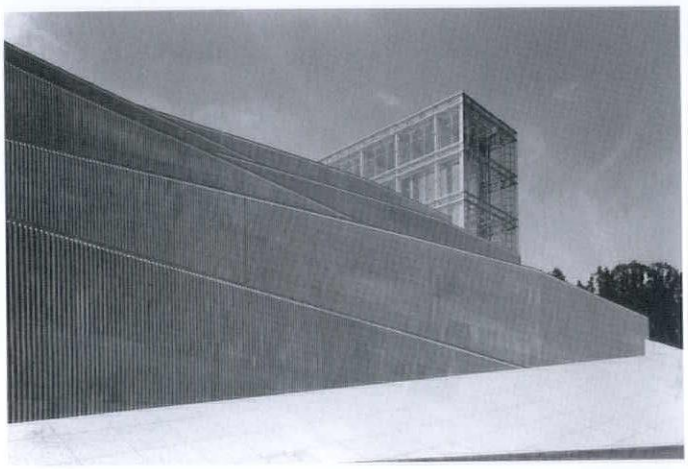


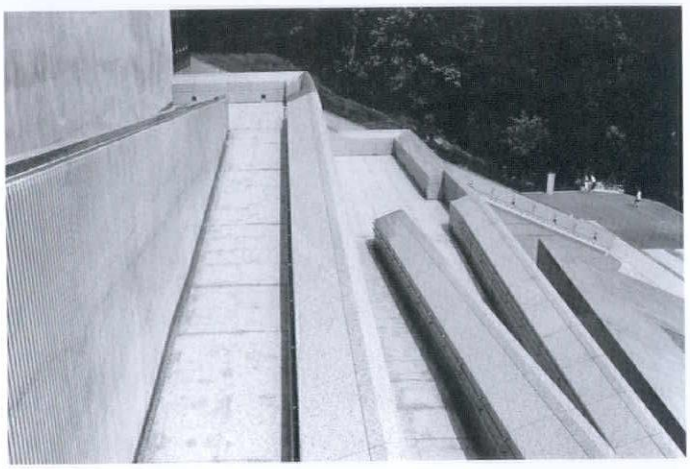
SD9611
10

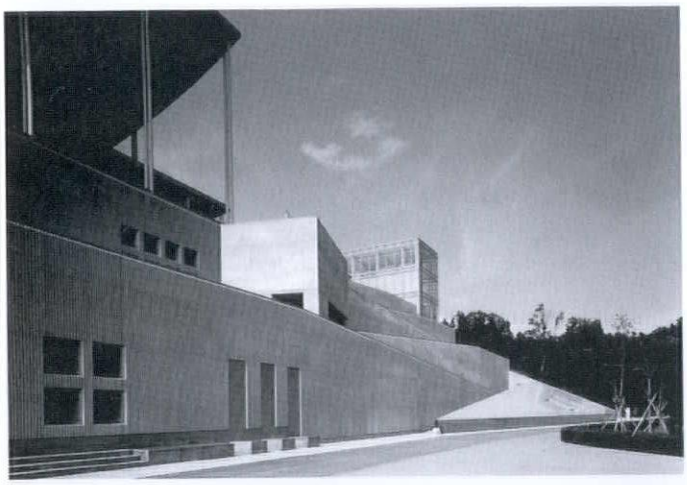


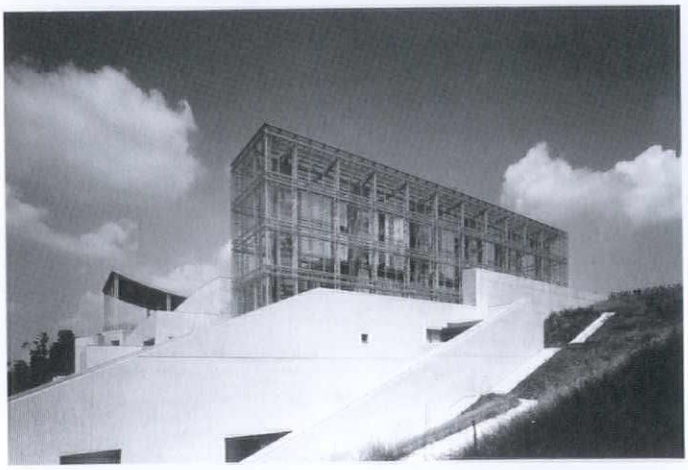


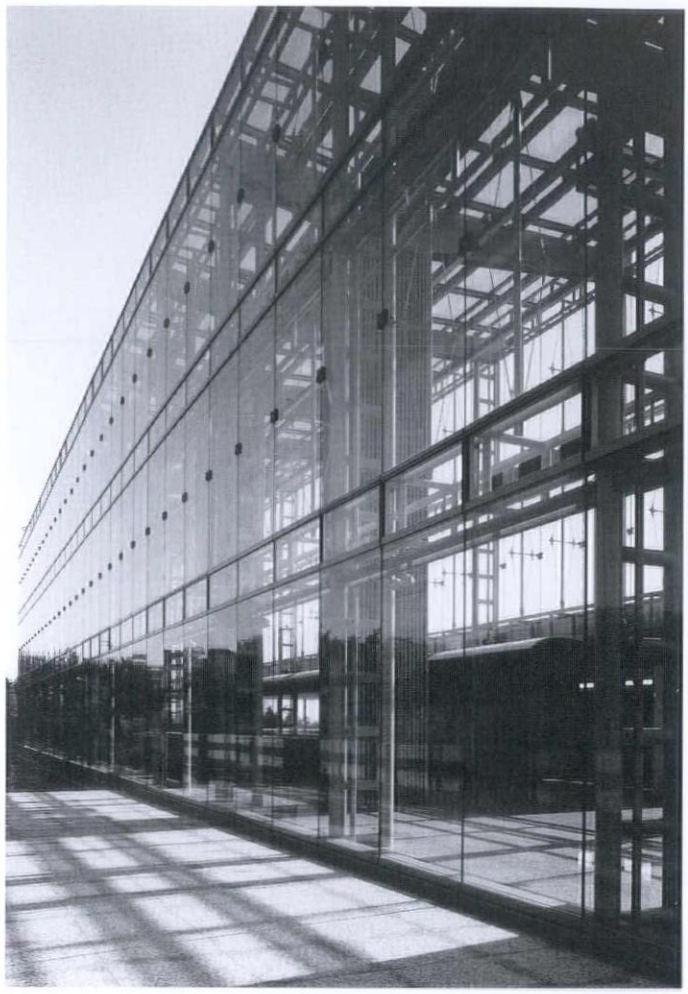


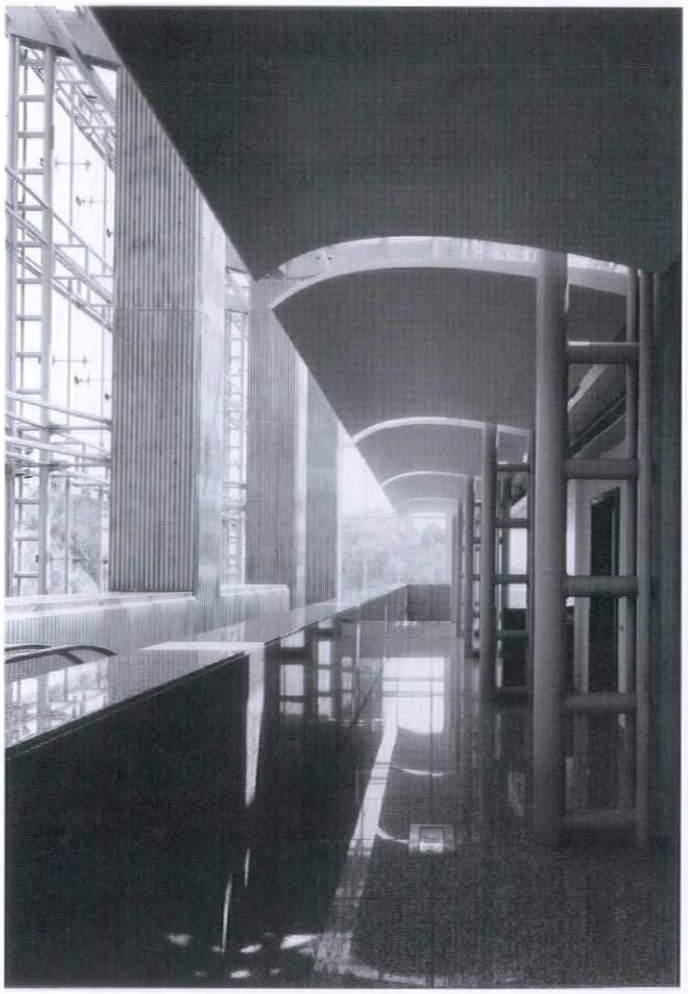






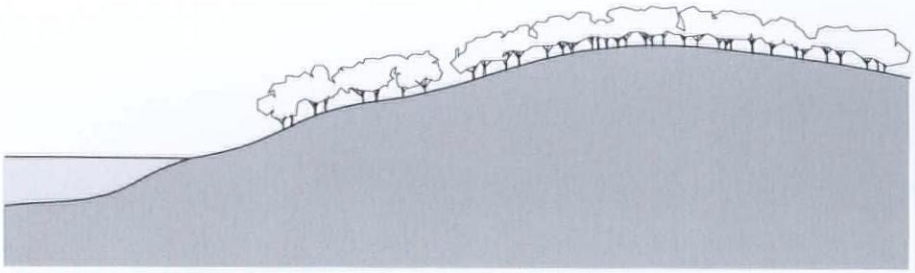




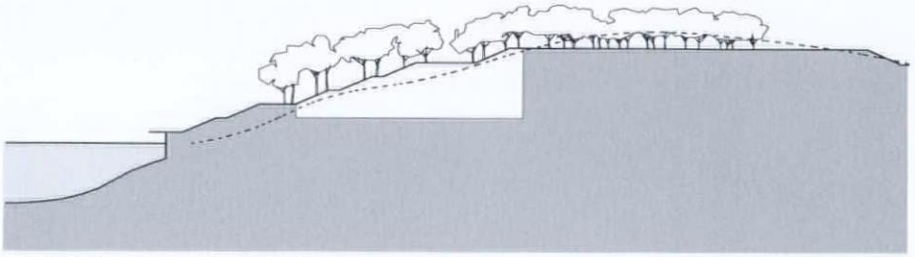


プロセス

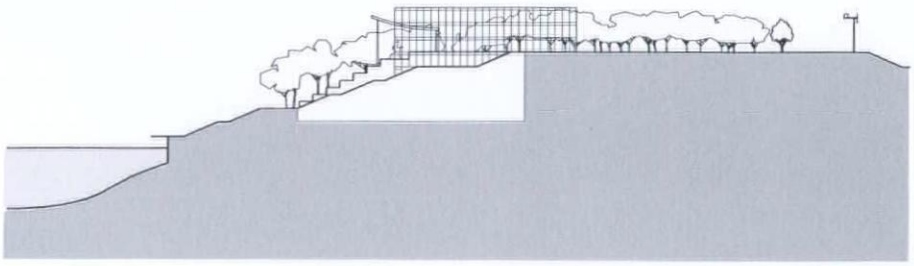
Process



敷地は、恩賜池へと下る緑豊かな傾斜地に位置する



この景観を妨げることのないよう、建築は斜面になじむように計画された



透明なアトリウムとレストランが、建築の存在を明らかにするサインとして立ち現れる

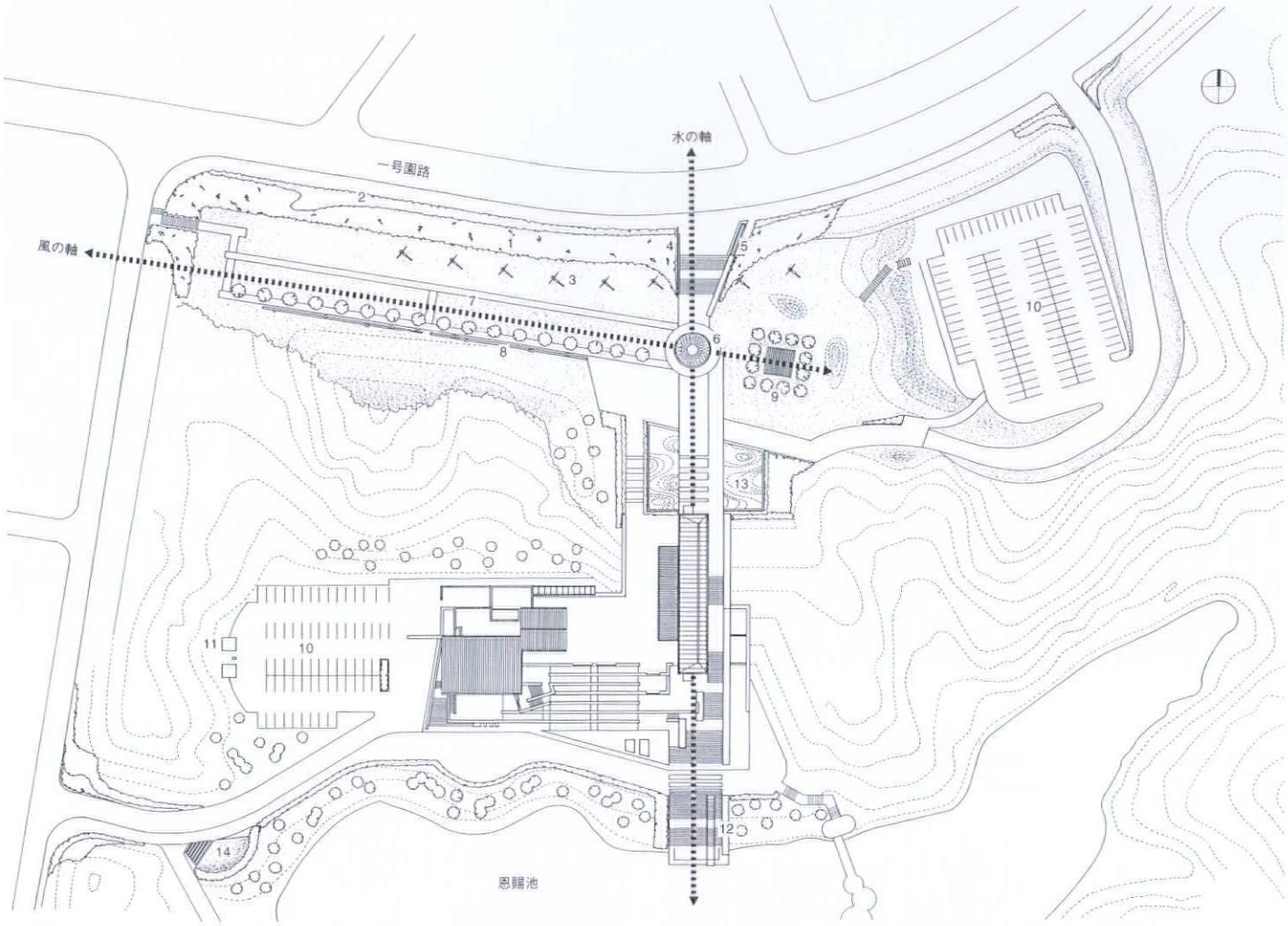
〈岡崎市美術博物館〉は、岡崎市中央総合公園の文化ゾーンの中核をなす施設として計画された。恩賜池へと下る傾斜地に位置する敷地の周辺は緑豊かな自然環境に恵まれ、市民の憩いの場として利用されている。このような場所に美術博物館を計画するにあたって、収蔵庫、展示室といった、景観を害しかねない大きなボリュームをどう扱うかが重要な問題となった。様々な検討を重ねた結果、内部空間を斜面の下に埋めこみ、建築が地形の一部となるような構成が採用された。地上に現れるのはエントランスホールでもあるアトリウムと、軽い屋根をまとったレストラン棟のみである。そこからは恩賜池の水面と周辺の緑の丘陵、さらには岡崎市街へと広がる眺望を楽しむことができる。

この美術博物館は、世界で初めての「心」をテーマにしたミュージアムである。余裕を持って計画された収蔵庫の一部が展示室へと転用され、このテーマに沿った企画展を繰り返しながら、徐々に収蔵品を集めていく。従来の公立の美術館、博物館にありがちな、ハードを先行させる方向を脱し、企画を先行させながらミュージアムを育てていく、「常に進行形のミュージアム」であり、「運動体としてのミュージアム」である。

美術、博物の展示は建築の内部だけに留まらず、周辺の自然のなかにも広がっていく。ミュージアムの公園化、もしくは公園のミュージアム化を目指して、ランドスケープを含めたトータルなデザインが指向された。アプローチから恩賜池へと抜ける「水の軸」と、風車が配されたプロムナードの「風の軸」の交点には中谷芙二子氏による霧の彫刻が配されている。自然の光や風、水をよりシンボリックに感じるための仕掛けである。美術博物園とも呼びうる「環境型ミュージアム」、さらにはミュージアムショップやレストランを充実させることによって、従来の特権的で啓蒙的な場としての美術館から、市民に自由に開かれた「楽しみの場」へと脱皮することが意図されている。

ランドケープ

Landcape



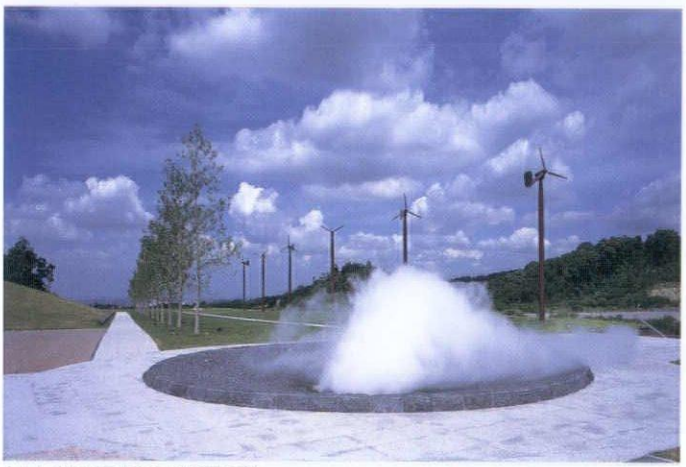
配置図　S＝1:2000

周辺整備においても、美術博物館の基本的なコンセプトのひとつである「ミュージアムの公園化」を強化するために、幾つかの手だてが講じられている。敷地の北側に続く尾根に沿っては、西側のスポーツゾーンから連続するように計画されているプロムナードの軸線を強化するべくユリノ木の並木を配し、そのアイストップとなる位置にクスのボスケを据えた。この空間は、将来にわたって石都・岡崎を表現する石像彫刻を展示するための「地」となるようにデザインされている。

ミュージアムへのメインアプローチとなる1号園路に沿っては、風車と共に風を受け止める媒体として、斜面を覆うクマザサが風にそよぎ、葉ずれの音を発する。斜面の上に連なる風車群と一体化し、風の軸を表現するのである。風を受けて回転する風車、そよぐ木々の葉と梢、千変万化の霧の造形、これらは周辺の緑がつくる「静」の背景に投入された「動」のアトラクションである。人々は、そこに動きを感じ、時間の流れを読みとりながら、ごく自然に、ためらうことなく「芸術」の世界へと誘い込まれる。

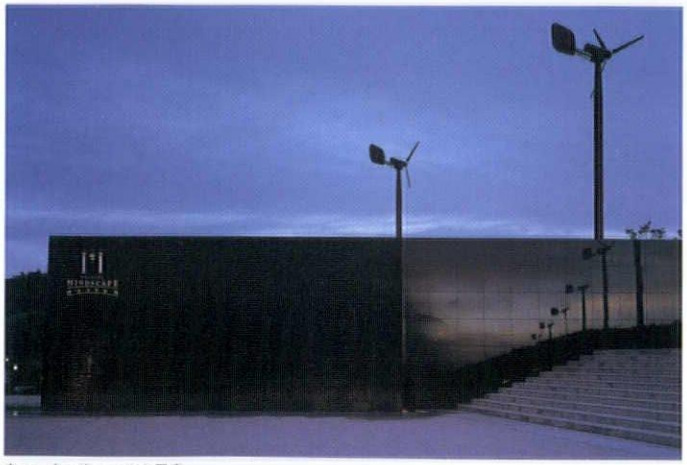
1：法面植栽クマザサ
2：〃ハイビャクシン
3：風車
4：サウンドウォール
5：ウォーター・ウォール
6：ミストボウル
7：プロムナード
8：ロングベンチ
9：ボスケ
10：駐車場
11：トイレ
12：カスケード
13：畔池
14：アイストップ・バンク

北側全景



ミストボウル(デザイン：中谷芙二子)

風車



ウォーターウォールと風車

一号園路より望む

展示

Installation

オープニング企画展「天使と天女」／展示デザイン：内田繁+スタジオ80

未使用の収蔵スペースの一部を、当面展示室として暫定的に利用することが考えられた。「心（マインド）」をテーマにした企画展を年間３、４回計画している。

展示室は、面積、空調システム、展示ケースの仕様、及び、使用している建築材料等、文化庁並びに東京国立文化財研究所の指導のもと、国指定文化財の公開展示が可能なものとし、また、様々な企画展示に対応できるよう、可動間仕切、電源、AV通信用配管及び取り出し口を通常より多く設けている。

アトリウム

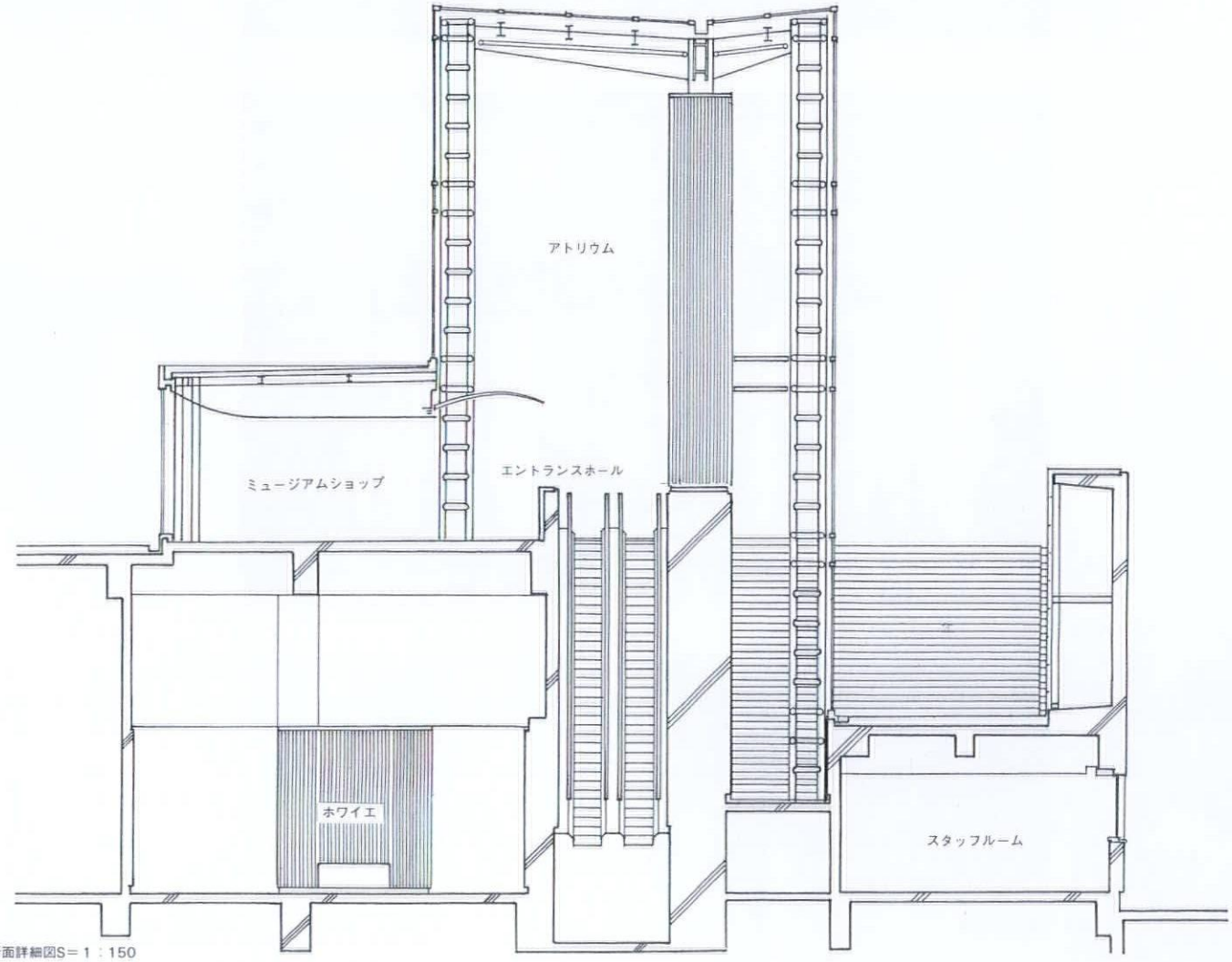
Atrium

将来の美術博物館本館建設を視野に入れたエントランス機能のほか、南北に高低差のある公園をつなぐ園路の一部にもなっているアトリウムは、短辺約8.5m、長辺約48m、最高高さ26.5mという気積を持つ。傾斜地ということもあり、風圧力の設定条件が建物南側にある恩賜池の水面を地盤面としているため、北側の公園レベルからの見えがかり高さ約12mに対して、計算上採用される最高の高さが30mを超え、構造上の実質負担値が大きくなっている。

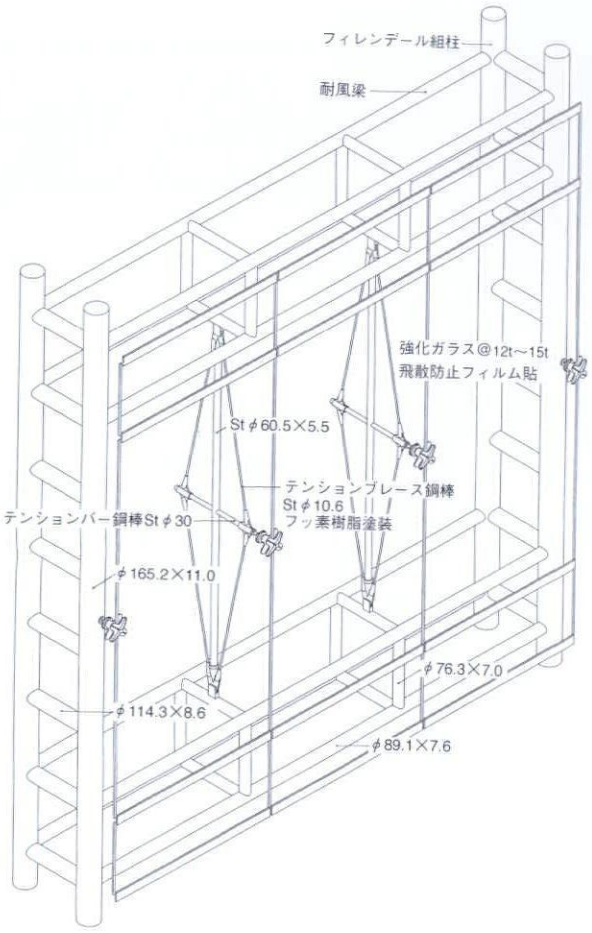
意匠上の理由から、内外境界面での視覚的軽量化が目指された。このため、外周面に断面の大きな構造体を配置しないことが前提条件となった。

短辺のほぼ中央に鉄筋コンクリートの大柱（1200×1200）による1列の柱列帯を設け、外周面には斜材のないフィーレンデール形式の厚肉鋼管柱を配置している。RC柱列帯は長辺方向には鉄骨BOX梁で剛に結び、短辺方向には鋼管組柱にピン接合させている。この鉄骨BOX梁を、屋根面において水平方向にも抵抗できるキャンティレバー状の梁としたため、ブレース材を排除することができた。これによって、外周面に位置する構造材の断面積を最小限に押さえつつ、メインフレーム全体では部材数をできる限り少なくし単純化することが可能となった。

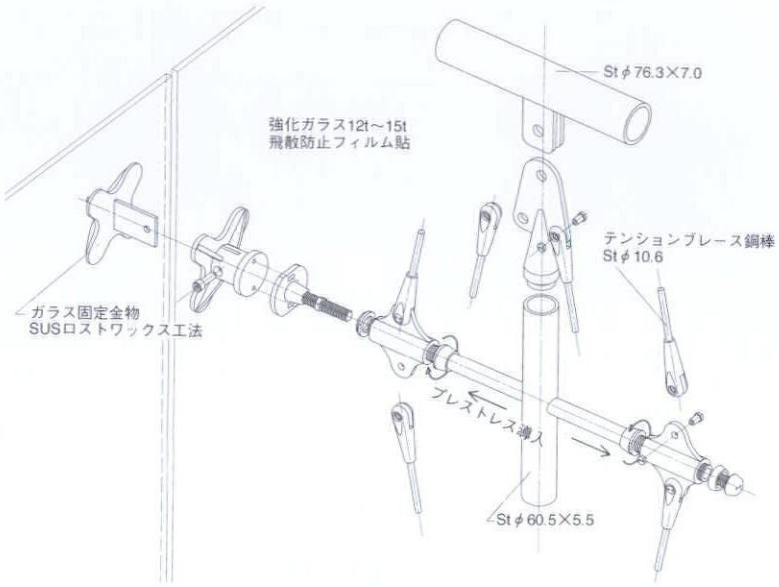
サッシュ材では、上下2辺で支持した上に中間支持点を設けて1枚のガラスの面積を大きくすることによって、ガラス面全体の透明性と平滑性を確保した。今日では、ガラスに穴をあけた点支持方法が日本でも数多く見られるようになったが、実施設計を行った1991年には非常に高価な工法であった。そこで今回は、穴開けを行わず、プレートによって挟み込む点支持を採用し、経済性、施工性、安全性等を勘案しながらオリジナルな工法を採用した。



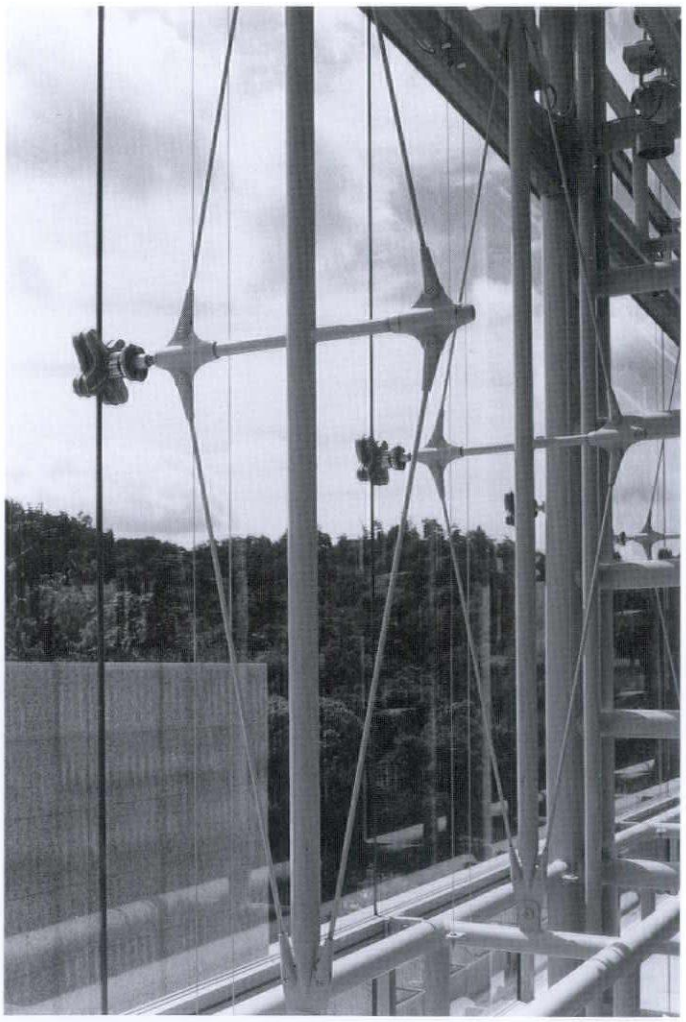
断面詳細図S＝1：150



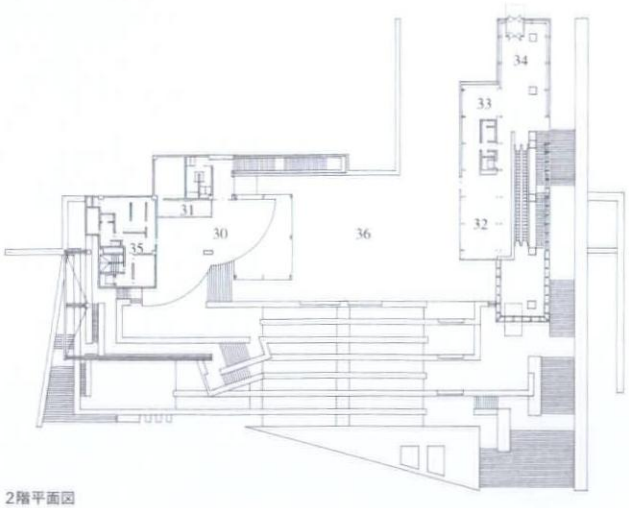
フレーム構成図



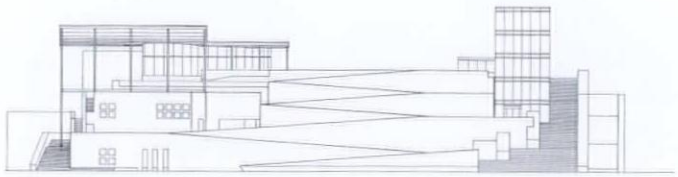
テンション材詳細図

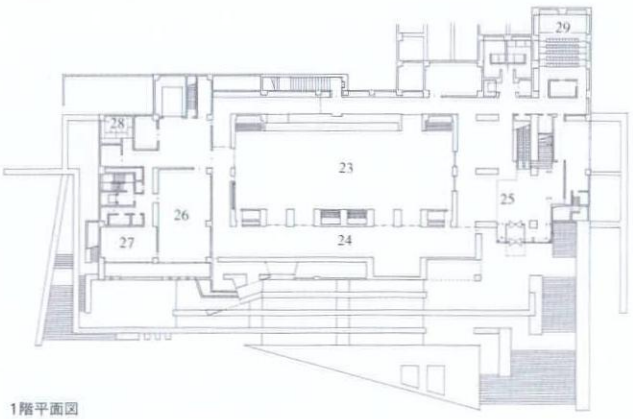


1: 収蔵庫1
2: 収蔵庫2
3: 収蔵庫前室
4: 特別収蔵庫
5: 作業室
6: 倉庫1
7: 搬入口1
8: 管理室
9: 搬入口2
10: 屋外機置場
11: 荷解室
12: 一時保管室
13: 燻蒸室
14: トレンチ
15: スタジオ
16: 工作室
17: 倉庫2
18: EVホール
19: 発電機室
20: 電気室
21: 機械室1
22: 中央監視室
23: 展示室
24: ギャラリー
25: ホワイエ
26: 学芸員室
27: 会議室
28: 研究室
29: セミナールーム
30: レストラン
31: 中庭
32: ミュージアムショップ
33: 図書コーナー
34: エントランスホール
35: 厨房
36: 屋上展示スペース

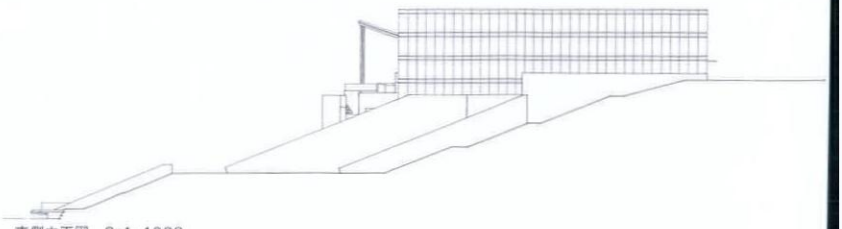


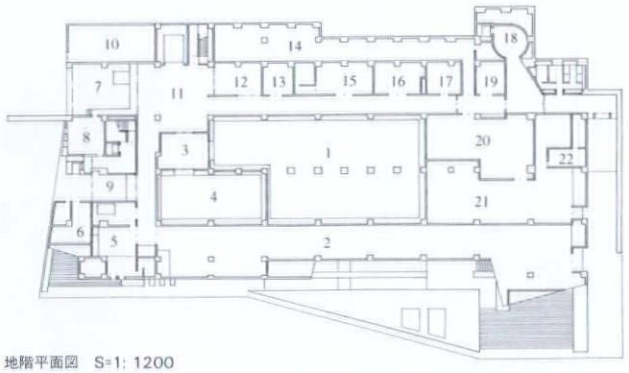
2階平面図


南側立面図

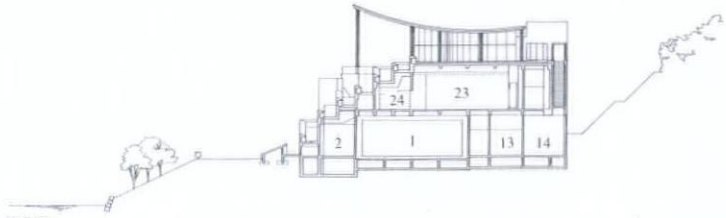


1階平面図

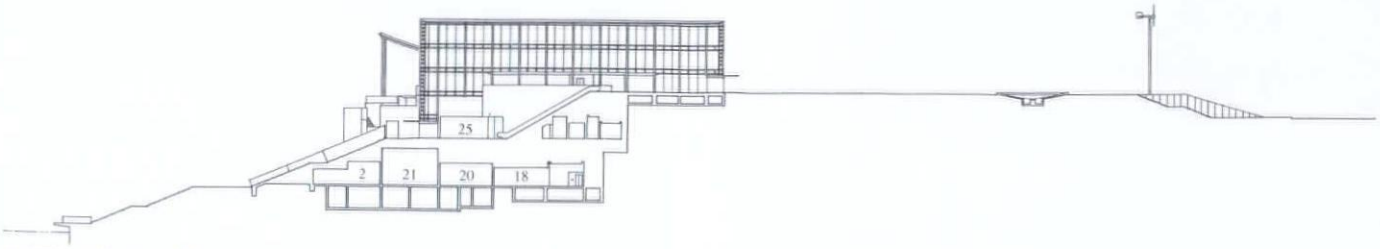

東側立面図　S=1: 1200



地階平面図　S=1: 1200



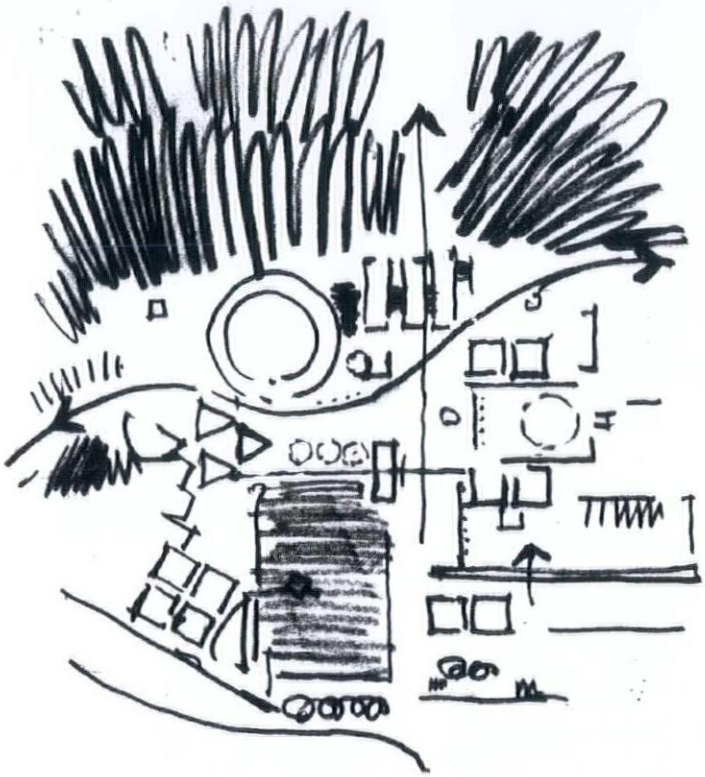
断面図



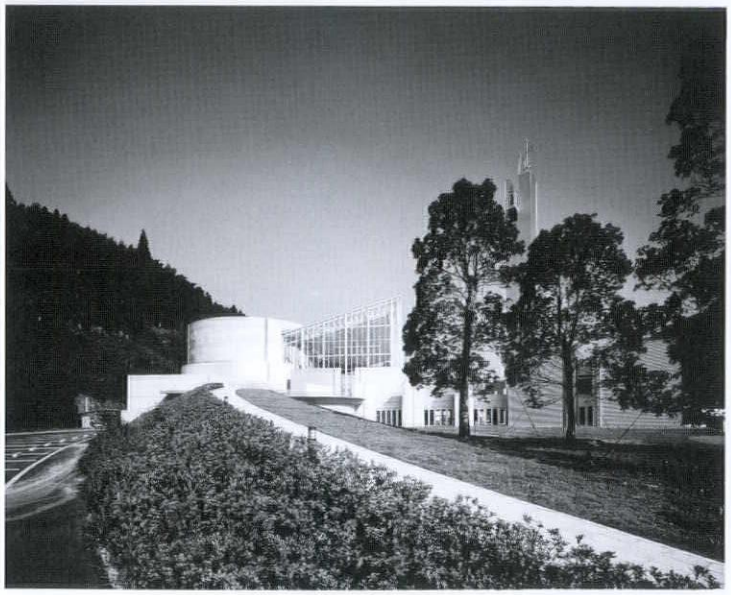
断面図(水の軸) S=1: 1200

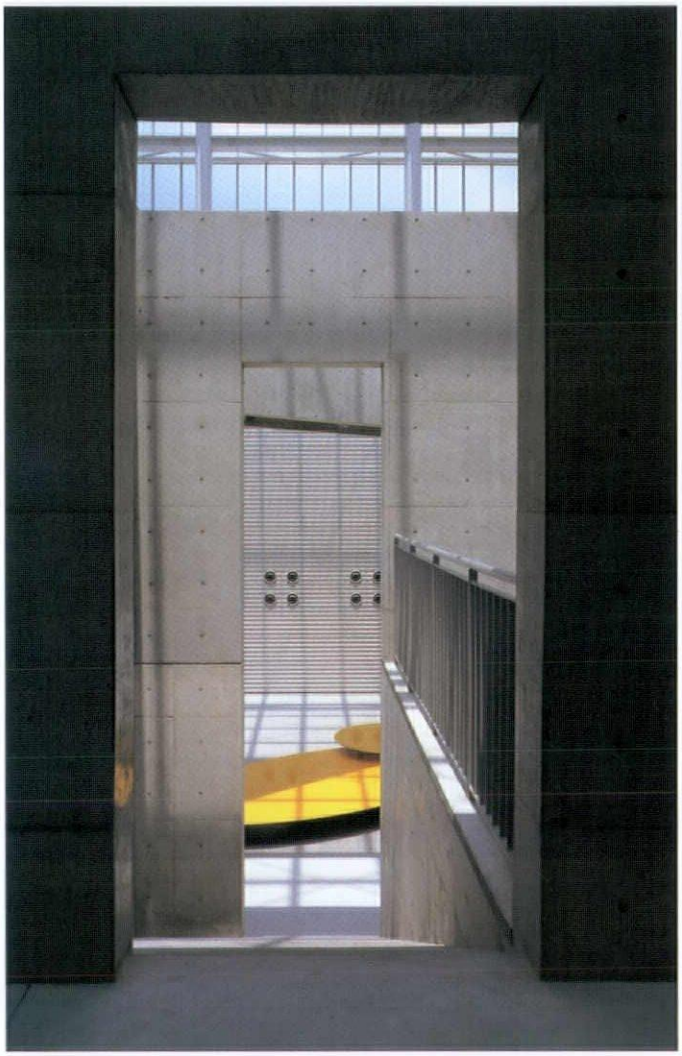
コア山国

Core Yamakuni

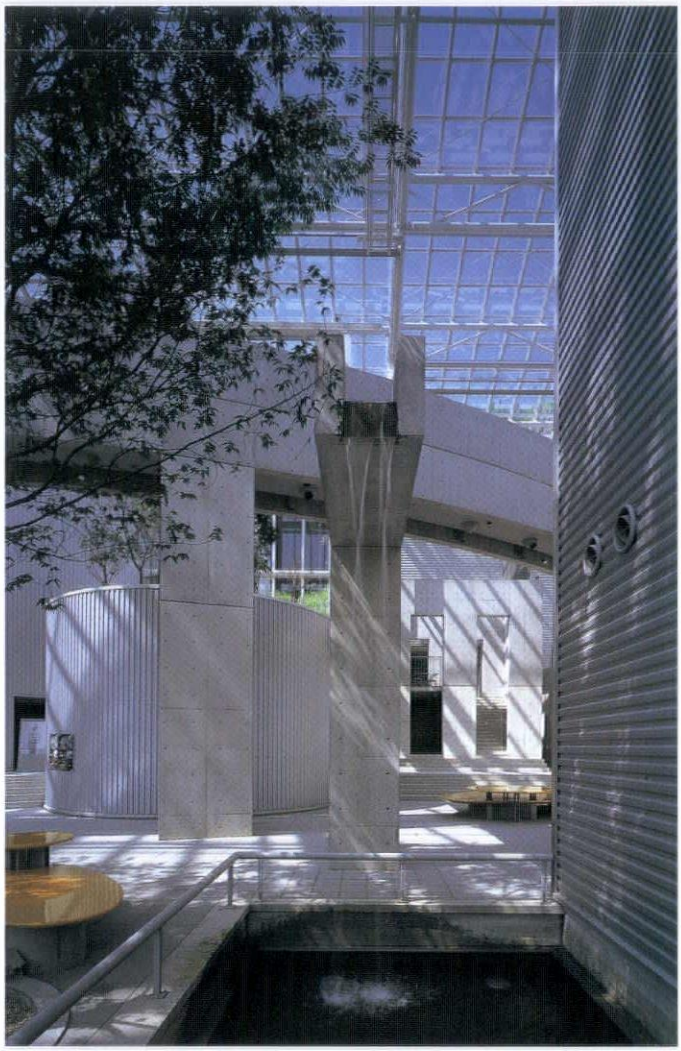


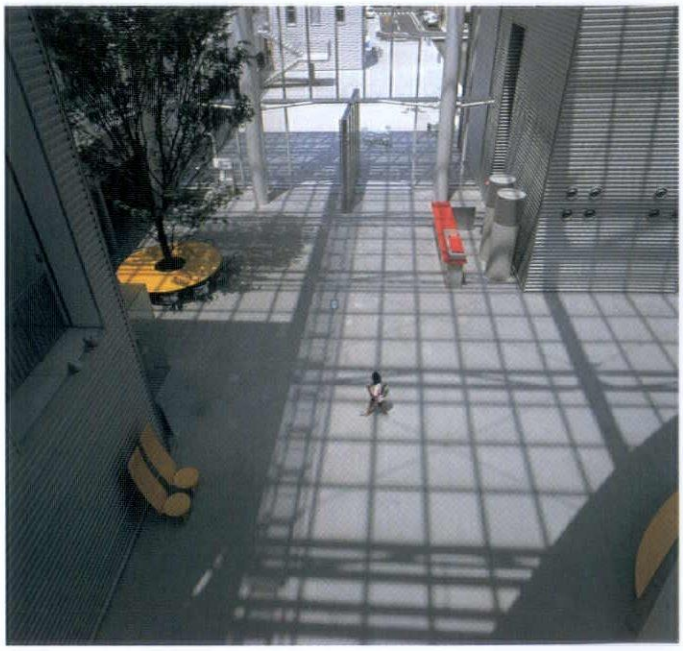
町の中心の広場ともなるアトリウム空間「タウンホール」を介して公共性の高い施設が集中、複合する。シンボル的な空間づくりを通して住民の心の焦点合わせを図り、過疎に歯止めをかけようとする試みである。



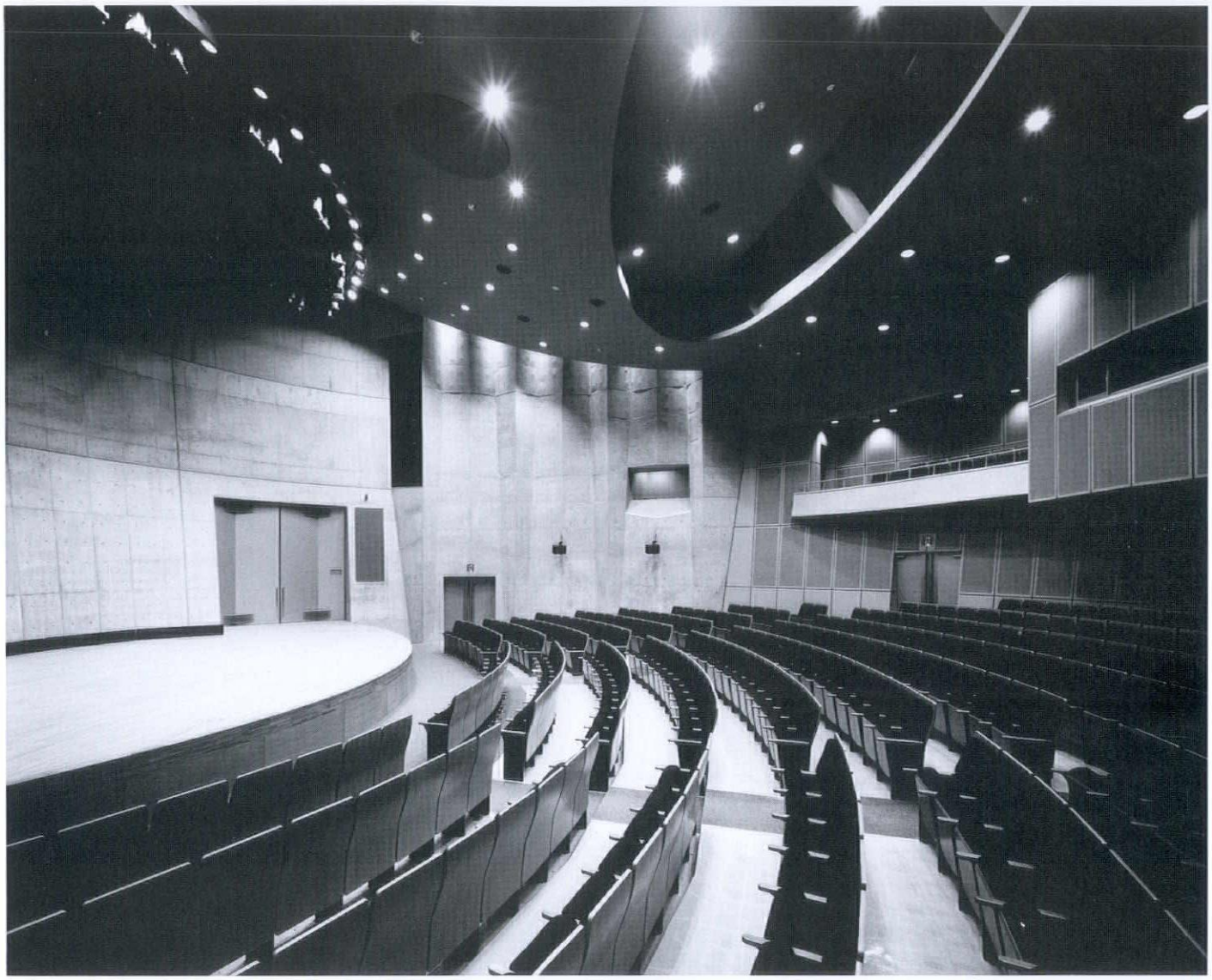


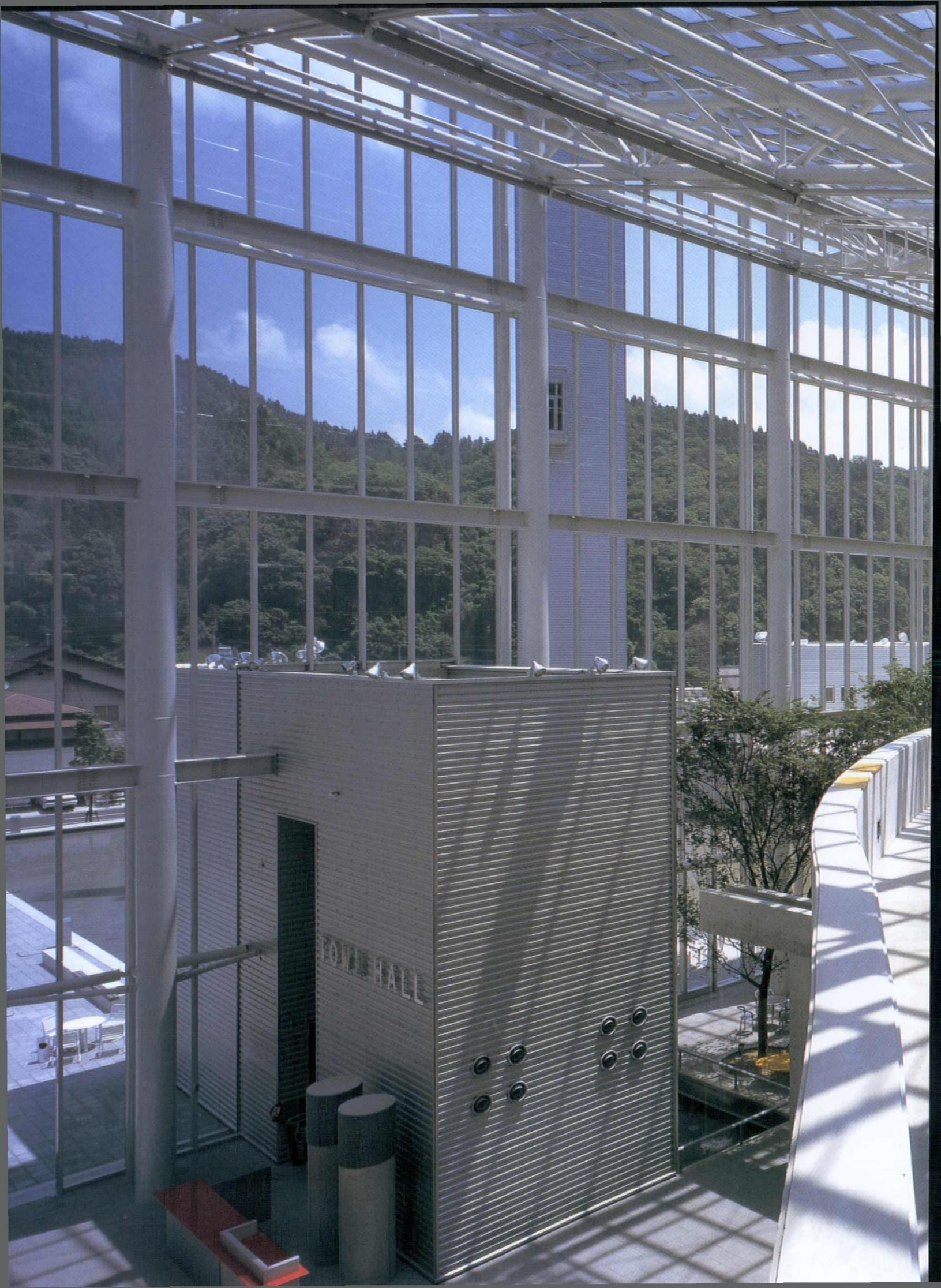
TOWN HALL





THEATER




TOWER HALL

構想メモ

Planning Memo

1. 地方からの発想
——平松知事の「適疎」の思想

過疎地域アメニティタウン構想

「確かに人口が減少している。だが、ただ人口を増やせばよいとは考えない。人々が快適に過ごし、その町に住みたいと思える豊かさをもつような、適正な人口をもつ環境にしたい。」——「適疎」の思想

この「適疎」の思想を実現するため、大分県は都市の都市計画に対して、過疎地域の活性化を目指す農山村の都市計画＝ルーラル・プランニングを提唱し、アドバイザー・グループに依頼。知事自らの陣頭指揮によって、アメニティタウン構想策定の仕組みであるコア会議がつくられた。この会議に、3人の建築家（新居千秋、岩村和夫、栗生明）がプランナーとして招かれた。

環境型、空間型の過疎対策

コア会議では、いわゆる過疎地域の振興のために、産業を誘致し人口を呼び戻すという考え方でも、リゾート開発による町おこしという考え方でもなく、新しい時代の潮流を踏まえた生活環境の全体的改善を行うことによって「豊かな空間」を整備し、過疎地域を活性化することがもっとも効果的な施策であると考えた。全国的な「過疎問題」への対応に新たな視点を加えていることが特徴的である。

この構想は、魅力ある就業の場の絶対的な不足に加えて、その地域で快適な暮らしをおくるための前提である生活基盤の整備に遅れが目立つこと、そして、そこにアメニティを生みだすことのできる都市的な、集積度の高い魅力ある施設や活動に欠けていることへの対応策である。それは、大分県が独自に進めている過疎対策である一村一品運動の延長線上として、一町一シンボルプロジェクトと位置づけられる。

2. モデル町の選定

大分県の過疎地域の中から、典型的な特徴を有する3つのモデル町が選ばれた。

山のまち——山国町（山間部）
里のまち——湯布院町（中間部）
海のまち——鶴見町（海岸部）

3人のプランナーが3町の調査、分析を共同で行い、共通する視点や課題を整理し、他町村にも応用できるような一般性のある手法の発見を目指した。

3. 構想の目的と手法

目的

それぞれの地域がもつ固有の気候・風土や、歴史・生活文化を初めとして、住み手の心理的な生活意識に踏み込み、自然に恵まれた過疎地域における優れた居住環境を生かし、さらに豊かさを享受できるアメニティに富んだ生活の場を創出することを目的とした。コア会議は、そこに住む人たちが地域の良さを発見し、いきいきとした生活が送れ、豊かさや地域の誇りを実感できるような、きめ細かいグランドデザインを描く前提条件として、以下の4点を掲げた。

1. 現在の住民が本音で望んでいることの実現をめざす
2. 子供たちが住み続けたいと思える
3. 外部からも移り住みたいと思える
4. その人たちが地域のルールに溶け込みやすくする

これらの目標を地域政策に明確に据え、地域におけるゆとりのある空間、プログラム、仕組みを具体的に提案し、その実践を図ることが目指された。

この構想から実現プロセスに一貫性を確保する上で、建築家という「豊かな空間をイメージできる人材」のプランナーとしての起用が意味をもつ。

構想策定会議

当事者である3町、住民の声を構想に反映させ、関係者間の一体化を図るため、コア会議メンバーと町、および策定委員を加えた構想策定会議が設置された。この構想会議にもプランナーは参加し、以下のような手法を用いて構想を具体化するのに中心的な役割を果たした。

a) フィールドワーク

(1) そこに暮らす人々の実像に迫るため、「グループ・インタビュー」によって生活意識の全体像と深層心理の読みとりを行う。

地域住民からの意外性もある様々な意見
「必要なところに緑がない」
「安心して子供を遊ばせる場所がない」
「生活意識は都会と変わらない」
「文化的、情報的施設が極端に少ない」
「若い人たちの日々の身の置き場がない」
など

(2) 実踏調査による物理的環境の読みとり、それら恵まれた資源を生かすため住民の客観的評価を加え再認識を促す基礎的な資料づくり。加えて都市部との施設やサービスの充実度の比較検討を行う。

b) キーワードからコンセプトへ

(1) 3町を分析した上での基本認識

- 住民世代間の価値観の大きな違い
- 町としてよりむしろ旧村単位の集まり
- 今日のライフスタイルにあった生活利便施設の乏しさと町民の集まれる中心性の欠如
- 大都市住民と同じ価値観と行動様式の若い人たち
- 自然や風景への関心の薄さ

(2) 必要な中心課題

この基本認識に基づき、構想策定会議では「分断・解体されつつある地域への関心を取り戻し、豊かな自然・人文景観を守り育て、地域ならではの自然に囲まれた新しい空間を創造すること」が、今後必要とされる課題であるという結論に至った。

7つのキーワード

構想から実現へと移行するためのキーワードとして、以下の7つ言葉が抽出された。

1. 集中とネットワーク
   施設や人の集中を促進。情報等のネットワーク化
2. 空間的象徴の創出
   地域への心の焦点合わせ
3. 景観の保全と創造
4. 地域教育プログラムの再構築
5. 生活基盤の整備
6. 外部との交流
7. 環境と共生する町の創造

c) シンボルプロジェクトの提案

以上のようなプロセスを経て、3町それぞれにシンボル・プロジェクトの策定が目指された。

我々が担当した山国町の場合、空間化、建築化へ向けたキーワードとして

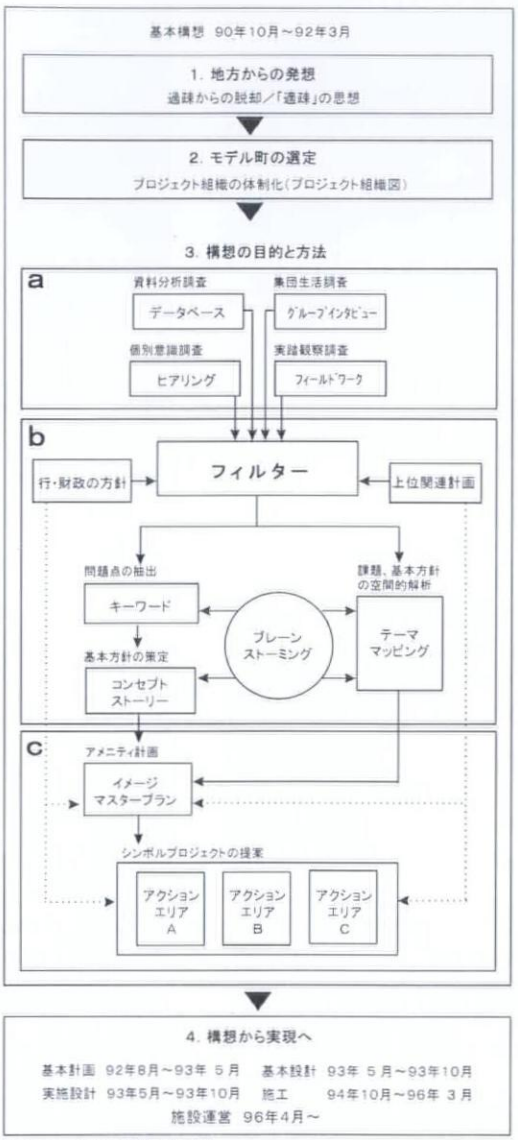
・町民の心の焦点合わせとしての中心性と象徴性
・日々自由に集うことができる場づくり
・雨雪天のときも快適な利用が可能な社交空間
・立て替え予定の役場の取り込み
・建設予定（今後）の諸施設の複合集合化

をあげ、都市的快適性の創出と相互利用効果による利便性確保をめざした。

この提案は、構想策定会議を経て、大分県アメニティタウン整備事業の実施プロジェクトとして承認された。

4. プロジェクトから実現へ

○基本計画により規模設定
○県による予算化作業
　国の若者定住緊急プロジェクトとして指定され、地域総合事業債、過疎債の適用を受けることが可能となり、国、県の支援体制と町財政を圧迫しない予算措置の構築が可能となった。
○町内に企画課と連動した整備事業推進室の設置
・敷地の交渉、運営体制の検討などを行う
○基本設計～実施設計～施工
○運営会議体の発足
・町内青年代表約10名によるボランティアのワークショップ活動により運営、催事計画準備等の推進組織を設立（指導者：植田正則氏）
・コアやまくに(公募名)の財団化にともない、バックアップ体制をとっている。
・地域に根ざした企画を立案
○県や周辺都市からの様々なソフト事業の応援を受けながら、自主企画運営の進行中



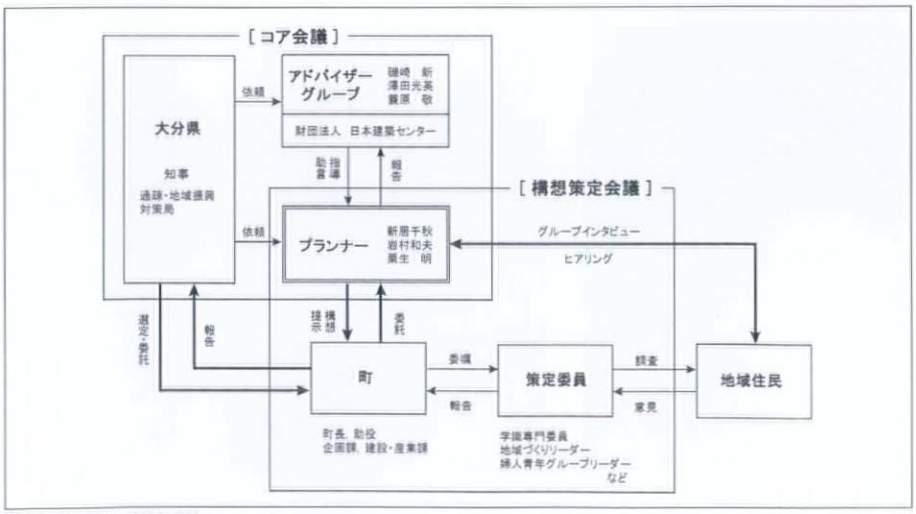
アメニティタウン構想フロー図

結婚式（タウンホール）

水遊びする子供（池）

RVショー（タウンホール）

イベント風景（広場）



アメニティタウン構想組織図

シーンの展開

Unfolding Scenes

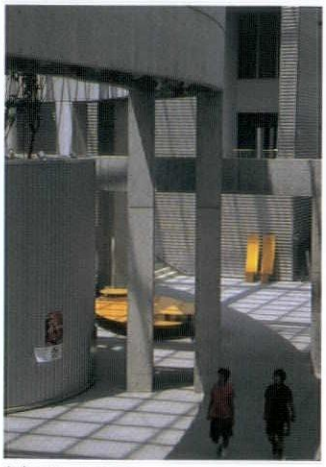
遊ぶ子供たち（池、広場）

タウンホールの風景

勉強する子供たち（タウンホール）

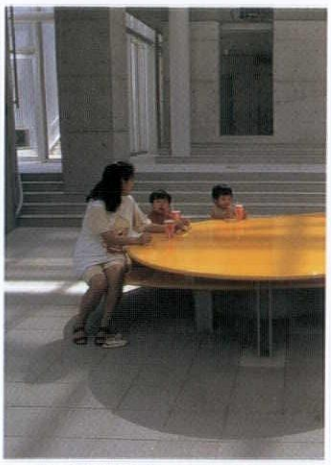
タウンホールを貫く山の辺の道

隙間から見るタウンホール



タウンホールの風景

ベンチに腰掛ける子供（タウンホール）

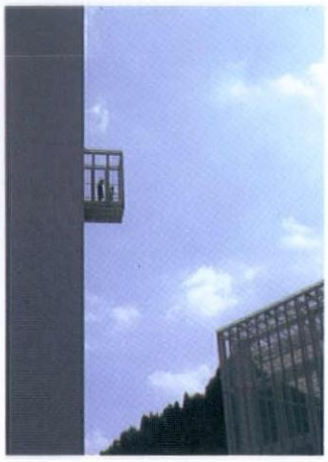


テーブルで憩う親子（タウンホール）

大階段とベンチ（タウンホール）

山の辺の道（タウンホール内）

円形回廊（イベントホール）


タウン・ウォッチングする人々（塔）

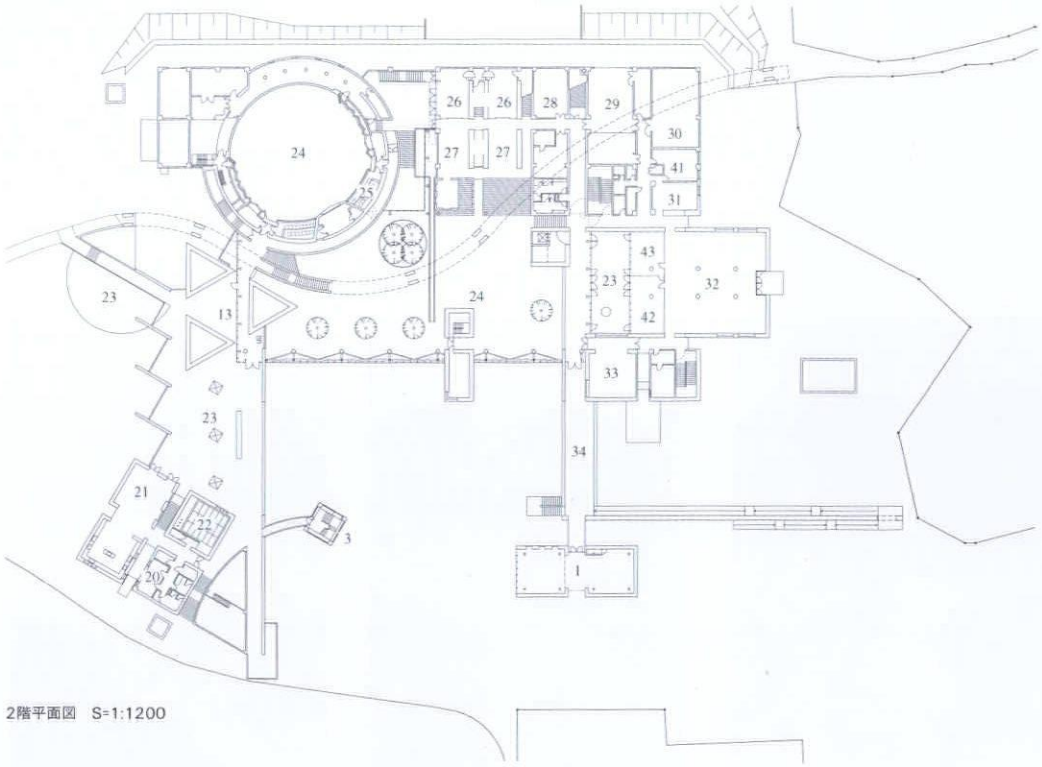
タウンホールに向かう子供（山の辺の道）

「コア山国」をコロナ運動公園から望む

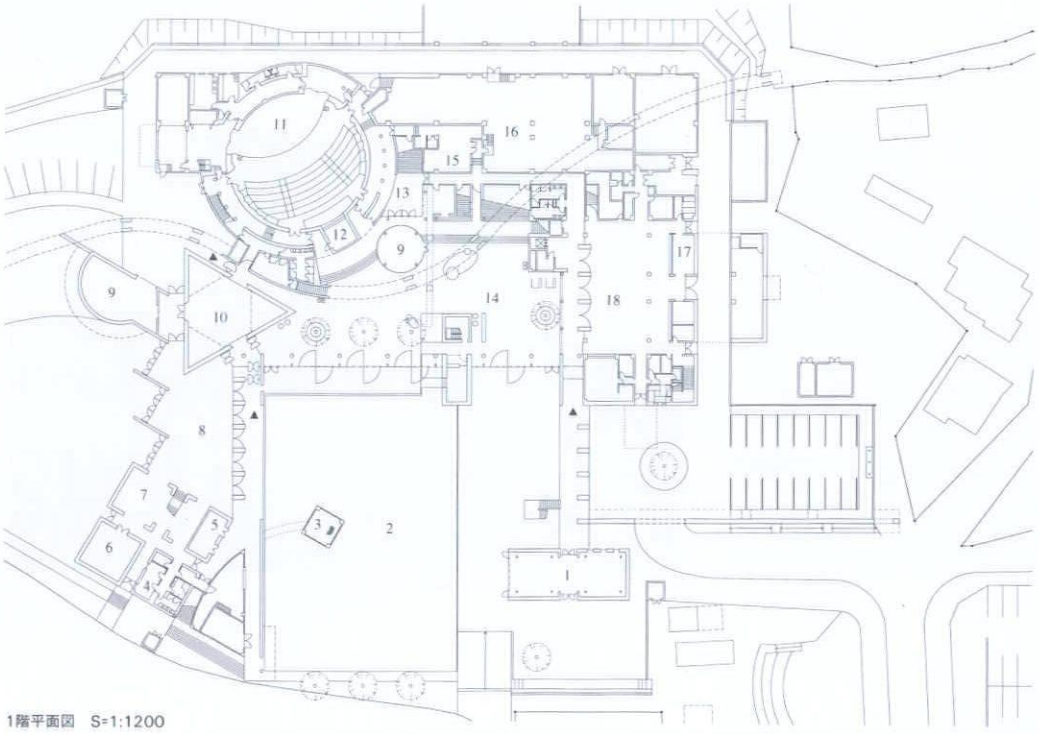
シンボル的な空間づくりによって住民の心の焦点合わせを図り、過疎の進行に歯止めをかける。〈コア山国〉は、大分県の過疎対策である「一村一品運動」の環境版ともいうべき「アメニティタウン構想」の第1号モデルとして実現した。

住民が愛着を感じ、心から住み続けたい、外部からも移り住みたいと感じさせる地域とするためにどのような空間が必要とされているのか、調査と議論に2年間が費やされた。この調査の中で明らかとなったことは、情報化が進む今日、どこに住んでいようとも人々の意識は都市的だという事実であった。こうした住民の意識に応えるため、「集中とネットワーク」というキーワードが生まれた。そこでこの町で必要とされている機能を可能な限り集中させ、町の中心を形成する都市的な空間をつくりだすことが目指された。豊かな自然の中での都市的利便性は、そのまま生活の快適性へと直結する。ここでは、ちょうど建て替えの計画が持ち上がっていた町役場をはじめ、アンケートやグループインタビューによって住民が欲しいと考えていることが明らかとなった諸施設——図書館、イベントホール、地域教育施設、歴史民俗資料館、ギャラリー——に加え、集落のどこからでも見える高さ50mの塔、冬季にはアイススケート場になる池などが計画に盛り込まれた。

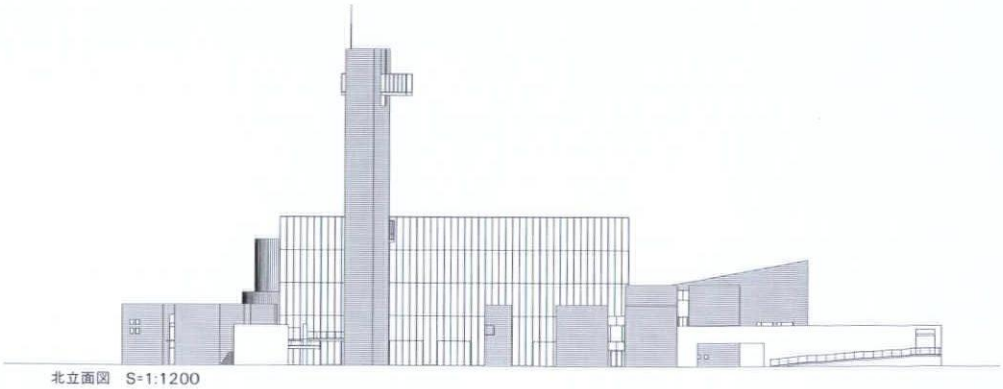
これらの諸施設は「タウンホール」と呼ばれるアトリウムを介して緩やかな集合体を形成している。このタウンホールには、「山辺の道」と名付けられた町道や、背後の山への登山道が貫通し、直接この施設に用のない住民を施設に導き入れる役割を果たしている。ここはすべての住民が気軽に立ち寄ることのできる街の中心的な広場であり、住民共有の居間であると同時に、外部の人々を招き入れる客間でもある。



2階平面図　S=1:1200

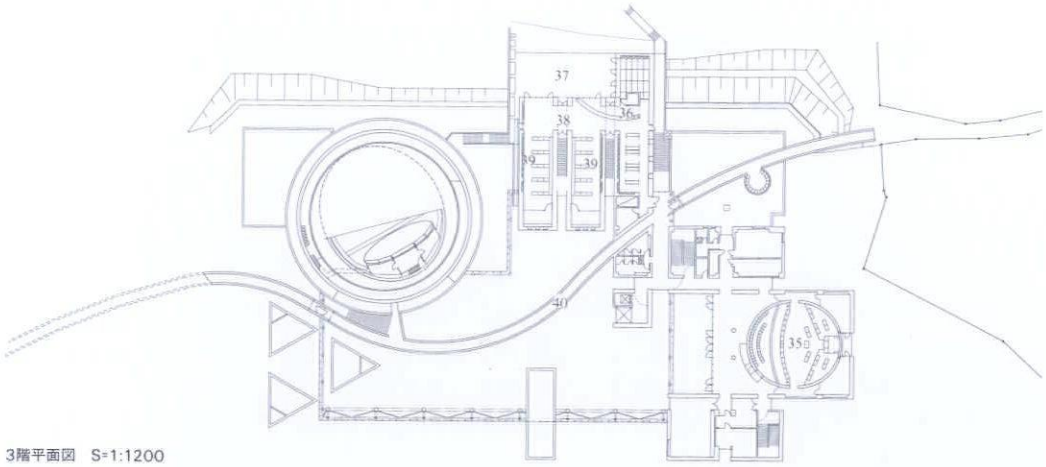


1階平面図　S=1:1200

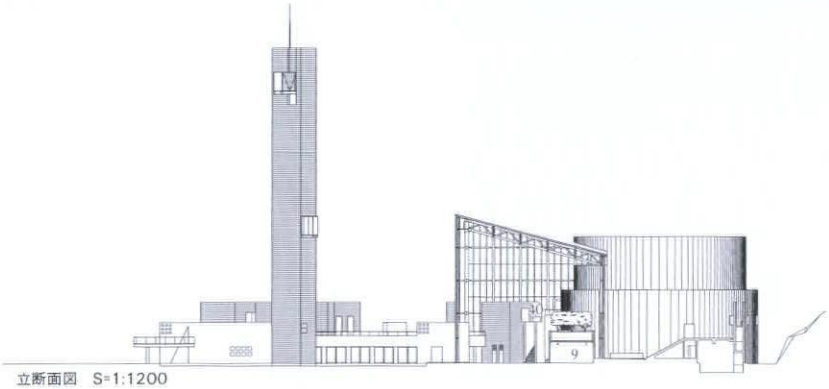


北立面図　S=1:1200

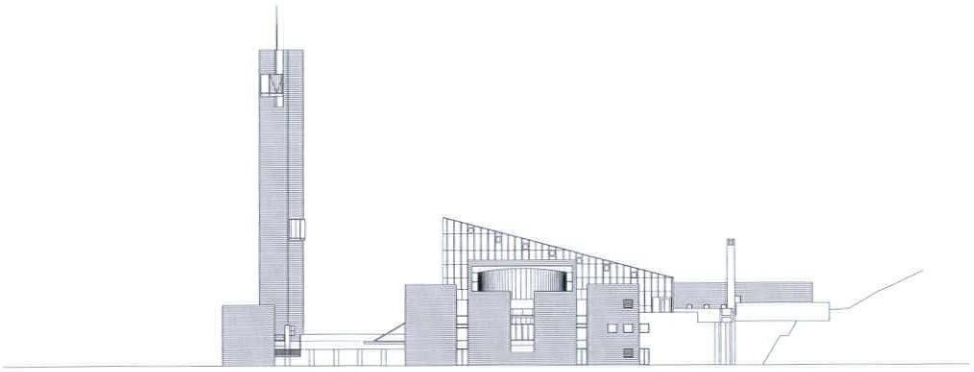
1: 物産展示室
2: 池（冬季スケートリンク）
3: 塔
4: 事務室
5: ロッカー室
6: AV視聴覚室
7: パソコンコーナー
8: 子供アトリエ
9: 倉庫
10: ミュージアム
11: 舞台
12: 音響調整・調光室
13: 中庭
14: タウンホール
15: 中央事務室
16: 空調機械室
17: ミーティングコーナー
18: 町役場1階事務室
19: 階段
20: 集会室
21: 主婦アトリエ
22: 和室
23: 屋外テラス
24: 吹抜
25: 2階席
26: 小会議室
27: ギャラリー
28: 閉架書庫
29: 大会議室
30: 集密書庫
31: 教育委員会室
32: 町役場2階事務室
33: 応接室
34: 外部通路
35: 議場
36: レファレンスカウンター
37: 池
38: 閲覧コーナー
39: 開架書庫
40: 山辺の道
41: 教育長室
42: 町長室
43: 助役室



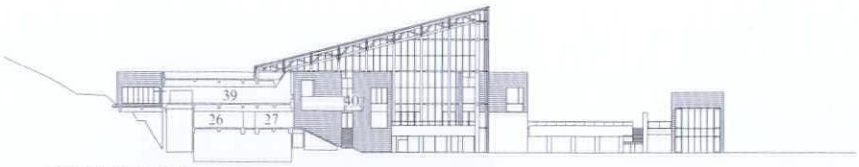
3階平面図　S=1:1200



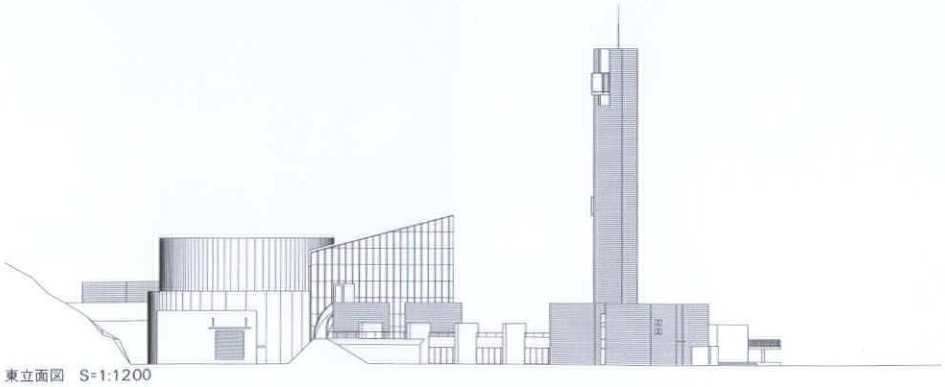
立断面図　S=1:1200



西立面図　S=1:1200



立断面図　S=1:1200



東立面図　S=1:1200

インタビュー

ガラス箱の中の非日常性

槇文彦

——今号は栗生明さんの特集です。栗生さんは、1973～79年まで槇事務所のスタッフとして、また1979～83年には東大槇研究室の助手を勤められました。そこで今日は、そうした関係から、一時期比較的近い距離から栗生さんの仕事を見ておられた槇先生にお話しを伺いたいと思います。栗生さんの槇事務所での最初の仕事が〈沖縄海洋博水族館〉であり、その時から栗生さんが現在唱えてらっしゃる「コラボレーション」での仕事の始まりだったとお聞きしましたが。

槇　そうですね。あの仕事は、非常に短期間で新しい水族館とは何かというソフトとハードを同時に考え出さなくてはならなかったのです。このように今ますますソフトとハードの両面で建築家に様々なチャレンジを与える今日的状況が存在すると思います。栗生さんも言っていますように、ソフトを考えていく時、建築外の多くの専門家と議論したり考えたりすることができると同時に、その様々な議論をどこかで空間あるいは形態として見せてあげることによって、皆の考え方が更に発展することがありますね。そうした意味で〈沖縄海洋博水族館〉は、彼にも我々にも貴重な体験だったかもしれませんね。

この30年、我々の事務所に様々な人が入所してそして独立して行きました。その中でもリーダーに向いている人、女房役に向いている人、或いはティームというより個人ベースでやりたいタイプ、これらは意外と早い時期にわかるんですね。彼の場合は、爽やかな性格も相俟って、その後の活躍を見ていますと、他のジャンルの人と付き合っていく、あるいはコーディネイトしながらリーダーシップをとっていくのに、真にうってつけなタイプではなかったかと思います。

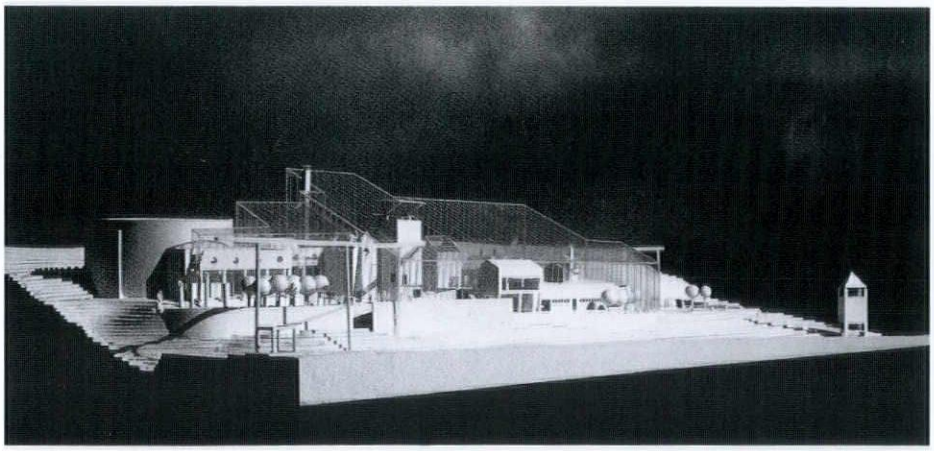
また僕自身1970年の終わり頃東京大学に来てくれということになった時、普通は同じ大学の後輩が助手になる事が多いのですが、あえて早大穂積研卒の栗生さんにお願いしたのも彼の人柄、能力を買っていたからです。助手時代は、学生達の兄貴的な形で大学での設計、研究をよく手伝ってくれましたし、コンペも学生達と幾かやっていたようです。〈香港ピーク〉のコンペもそのひとつですが、短期間で瞬発力のある設計だったと記憶しています。

——栗生さんは、槇事務所での仕事を通して速い判断力を身につけることを学んだとおっしゃっていましたが。

槇　設計というのは、プロジェクトごとにプログラムも違うわけで、建築の場合は正解という言葉はあり得ないのですが、的を外さないデザインのストーリーを組み立てていかなければいけない。それに対する判断力が大事だし、もちろん軌道修正をしなければいけない時の柔軟性も問われると思います。このように、建築は同じサイクルの作業を繰り返しながら次第に最終のデザインに接近していくことなんですね。仕事のプロセスの中での判断力のほかに、設計のワンサイクルをいかに速くこなせるかも大切なことで、この速さということが今度は判断力の内容とともに必要条件として入ってくる。ワンサイクルを速くやれるということは、次の段階で密度を高めることも、軌道修正することも可能になる。彼もそうした判断力という意味を指していると思いますが。

——栗生さんの作品を通して見ると、徹底して自己のスタイルを通すというのではなくて、むしろ個々に柔軟に対応しているというタイプに思えますが。

槇　建築家の中にもいろいろなタイプがありますね。ひとつは、建築の中におけるミクロな部分、例えばジョイントをどうしようかとか、どういう材料を使い、その中に自分の世界観をどう表出していくかとか。つまり、割と自分でつくった閉じた世界の中から外に発言していこうとするタイプがあると思います。一方、彼の場合は、もう少し広い世界というか、様々な人のアイデアや、あるいは場所の持つ性格を通して、その中からひとつのイメージに凝縮化していこうとする、どちらかといえば前者の対極にあるタイプかもしれません。それも彼のジェネレーションのひとつの特質ともいえるかもしれませんが。かつて僕もSDレビューの審査に関わっていた一人です



SD Review 1987入選展での〈カーニバル・ショーケース〉模型とドローイング

が、確か1987年に彼は〈カーニバル・ショーケース〉で鹿島賞を受賞しましたね。あの作品で非常にユニークだったのは、カーニバルという言葉が示すように、ある種の幻想性があることです。あの時のドローイング等も、ポール・クレーの絵のような雰囲気を持っていた。丹波篠山の山中に、ある企業の組合員のための保養施設だったと思います。

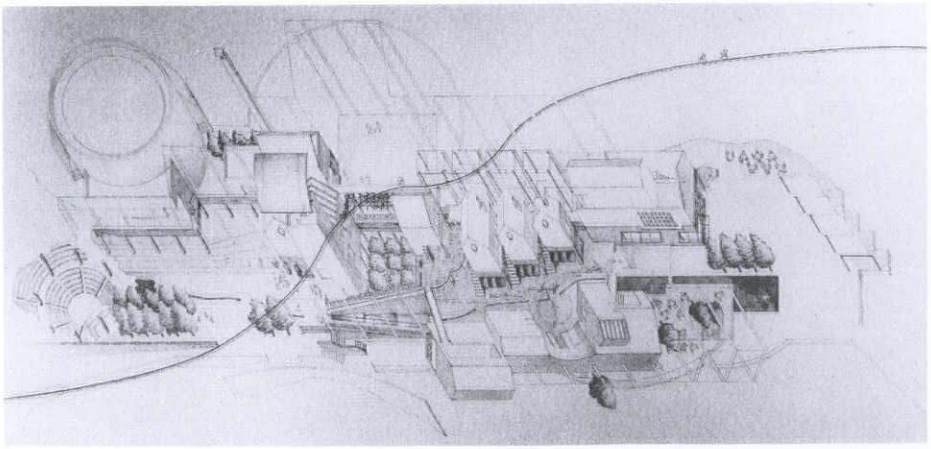
普通、風景の楽しみ方というのは、建物の中に入って窓とか屋上から周辺を見るわけですが、あそこではカーニバル・ショーケースと呼ぶように、主体である来訪者が風景の中で客体化される。つまり自転車路が空中化され、建物を貫通しレール上の人の姿も客体化されるという形は、それまで見たことのない新鮮さを持っていたわけす。こうした思いついたアイデアがアイデアで終わらせず実現したという背後にはかなりの施主に対する説得力が必要な筈です。彼は、構想し、説得するという、ふたつの力を充分に持っている建築家だと思います。さらに、彼自身が生活そのものに対して持っているある種のオプティミズムみたいなものが現れていますね。

ある心理学者の分析によると精神のノーマルな状態とは3つアブノーマルな点によって構成された三角形の中央近くにあるということです。3点のひとつは分裂症、もうひとつは癲癇質で非常に几帳面なタイプ、もうひとつは躁鬱なんですね。この3つのバランスが崩れると精神異常になるのですが、正常な人はその3つの拠点の真ん中あたりにいるらしいんですね。誰でもその3つの傾向を持っているわけです。ところが社会的に成功している建築家のタイプを調べると、その3つの極の中でまん真ん中という人は少なく、若干、躁に近いところにいる人が多いと言われています。彼は正にそのタイプに思えます。説得の段階で性格的に躁であり、かつ施主を躁の状態に持っていかないと成立しない建築があるわけです。ランドスケープの宮城俊作さんとの協力による〈植村直己冒険館〉もそうした良い例でしょうね。

――〈カーニバル・ショーケース〉のお話しが出ましたが、あそこでの空間構成の手法は、最新作の〈岡崎市美術博物館〉や〈コア山国〉にも共通するものがあるように思えますが。

槇　そうですね。空間の考え方には共通したものがあると思います。〈コア山国〉では確かに、〈カーニバル・ショーケース〉の延長線上にあるような新しい非日常的な空間、つまり来訪者達の気持ちを高揚させる空間的なしつらいがあると思います。人口４千人の地によくこんなすごいものが完成したなと思うと同時、役場、ライブラリー、オーディトリウム、物産展場、福祉施設などに加えて、冬にはスケートリンクにもなる池をもった複合施設とすることによって、この地域の拠点としてそのエネルギーを高めようという構想は非常にユニークだし素晴らしいと思いました。過疎対策が出発点であり、財政的にも苦労は多かったと推測されますが、ルーティーンの日常生活の中に浸りがちな地域の人々にとってこうした生活空間を通して、精神の高揚を実感してもらえるならば大変やり甲斐のある仕事だったと思います。そしてこのような施設をつくることがいいという、自己確信が背後にあったのでしょう。

また、〈岡崎市美術博物館〉も〈コア山国〉も、戦後、我々の意識の中でも実際の生活の中でも、ある種のステレオタイプとして定着してきたものに対して、それまでになかった非日常性をもった空間を演出してますが、それが社会的に説得性を持ったのは、建築を孤立させずに、人が魅力を感じて集まるものを作ろうという思いが常にベースにあったからではないでしょうか。そしてその非日常性を実際に経験させるために何をしたかというと、不思議な形態を作るということではなく、むしろ空間的な働きに着目したんですね。その空間に対し一番頻繁に使われている手法として、思い切ったディメンションのガラスの箱がある。そうした透明な空間を媒体として外部の風景と内部の風景の一体化を試みた。そういう意味では、栗生さんの建築は都会の真ん中というよりは自然に囲まれた場所が多いというせいもあると思いますが、ドラマをうまく作っているわけです。そうした手法が、



人を集めるというパブリック性をつくり出しているという気がします。

しかしまた、建築空間と道という視点から見れば、栗生さんの「道」と、山本理顕さんの〈緑園都市〉や我々の〈ヒルサイドテラス〉の道と概念が少し違います。後者は、既存の街並みの中に存在する「道」をどう考えるかから出発しています。当然両者は、違ったコンテクストの中にあり同時に比較は出来ないのですが〈緑園都市〉の場合は、もう少しインティメイトな形で、既存の都市の中での道から決して離れてはいけないという姿勢があります。一方、栗生さんの場合は、そうした都会的コンテクストではないから、先ず自分で道を作る。それはそれまでなかった道であり、場所、空間をむしろ切り裂いていくというような操作性の方が強いですね。〈植村直己冒険館〉でも、空間をふたつの直線で折り返しながら切り裂くという手法です。それはかつてなかったわけではないのですが、現代においてそういうふるくからあった日本的手法を改めて新しい思い切ったかたちで見せてくれたというところがあります。両者における「道」のとらえ方は本質的に違うのですが、そうしたものをいくつか作っていくうちにそれがその人のスタイルになってゆくし、その建築家のアンディティティーにもなるわけです。また、次の仕事の展開のきっかけにもなるのです。

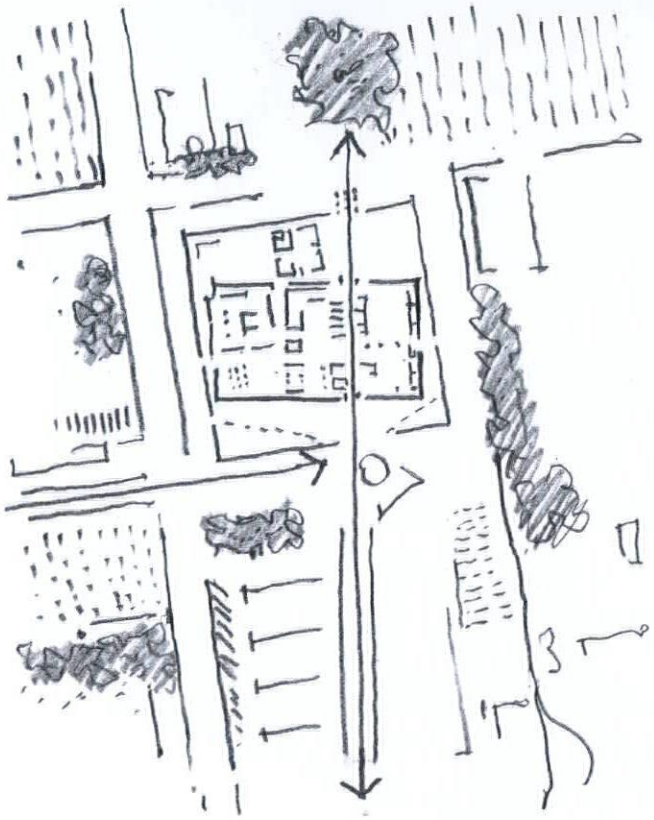
——栗生さんは、先のお話しにもあったように、他分野の人との共同に積極的に取り組んでいらっしゃいます。そうした「コラボレーション」についてはいかがでしょうか。

槇　それは、実際に建築が完成するまでには様々な人達の協力があるのは当然です。ただ、その協力の深度とかプロセスがどうであるかということは、それは、ケース・バイ・ケースで何とも申し上げられません。確かに各々の専門部門を非常に頑なに守っていくタイプもあります。しかし、現実には建築家だけが統合者である時代ではなくなっていることも事実です。建築家もランドスケープ・アーキテクトもインテリア・デザイナーも、こうでなくてはいけないということはなくなっている。むしろ、ある仕事を通して、誰がリーダー・シップをとっていくか、どういう形でコラボレーションが行われるかは、僕の経験だと、まったくその人の能力次第なんですね。その人自身に能力があれば、何をやってもうまくいくでしょうし、逆であればおのずとうまくいかないのは明白です。我々も色々な人達とのお付き合いがありますが、そのジャンルのプロというのはこういうものなんだなということを学ぶことが多々あります。しかし逆に自分達でやった方が結果としてよかったのではないかと思うこともあるわけです。僕としては、確固たるコラボレーション論を持ち合わせているわけではありません。人間は機械ではありませんし、生まれ持った性格や才能があるわけでケース・バイ・ケースという気はします。

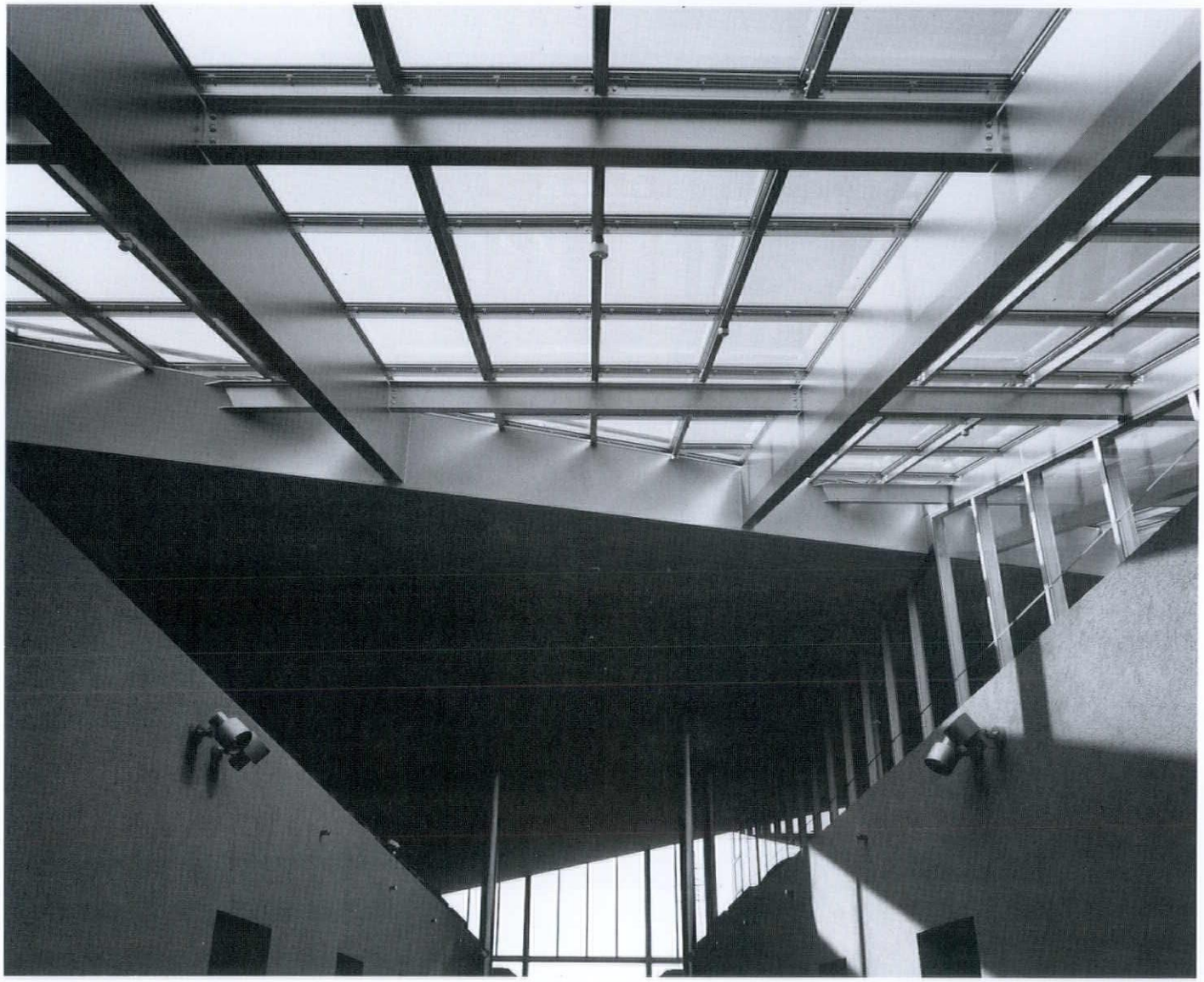
最後に、栗生さんの建築全般から感じたことを加えておきたいと思います。彼自身は、形態に関しては幾何学というものに対して非常に強い信頼を持っている。そういった意味ではモダニストだと思います。と同時に空間を非常に大事にする建築家でしょう。よく見ていると、空間の中にはひとつはいままで言ってきた新しい経験を与えるような空間を作る。一方において、その中に入れ子構造的にしつらえていく空間はどちらかというと反対にインティメートなスケールのものが多い。つまり、通常の日常的な生活経験の中で好ましいと望まれる空間はきちっとおさえ、そのふたつを巧みに演出していくところがありますね。そして大胆な空間の演出にかかるコストに対しては仕上材とかディテールの数を限定し、できるだけ繰り返し合理性を追及すると同時に、全体に緊張感のある建築を作っている。つまり無駄なことはやらないという、合理的な精神が随所に出てきています。もっとも彼がかつて槇事務所の所員であったせいか、そこいらへんが僕にもよくわかるところなのかもしれませんが。

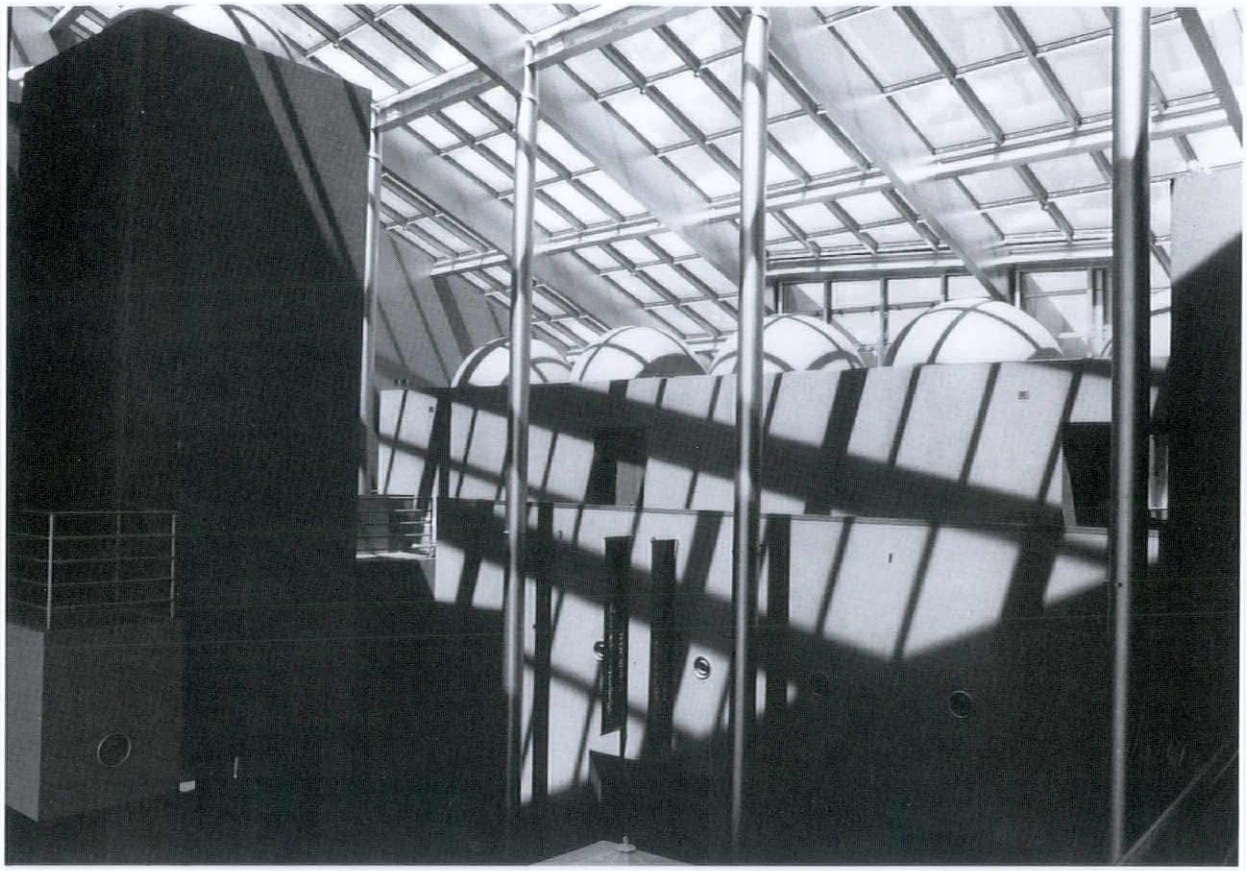
（1996年9月11日　於：槇総合計画事務所）

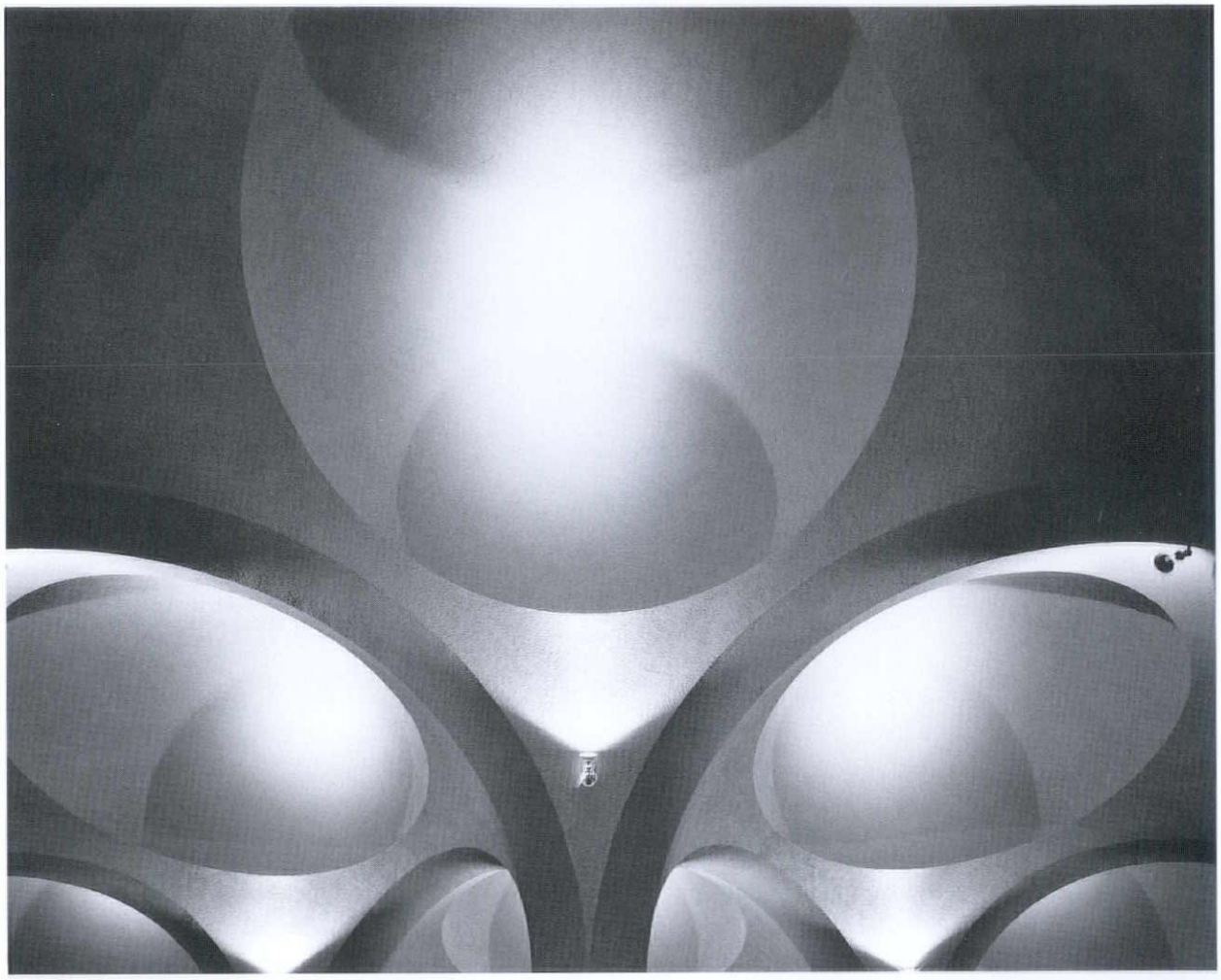
チューリップ四季彩館
Tonami Tulip Gallery

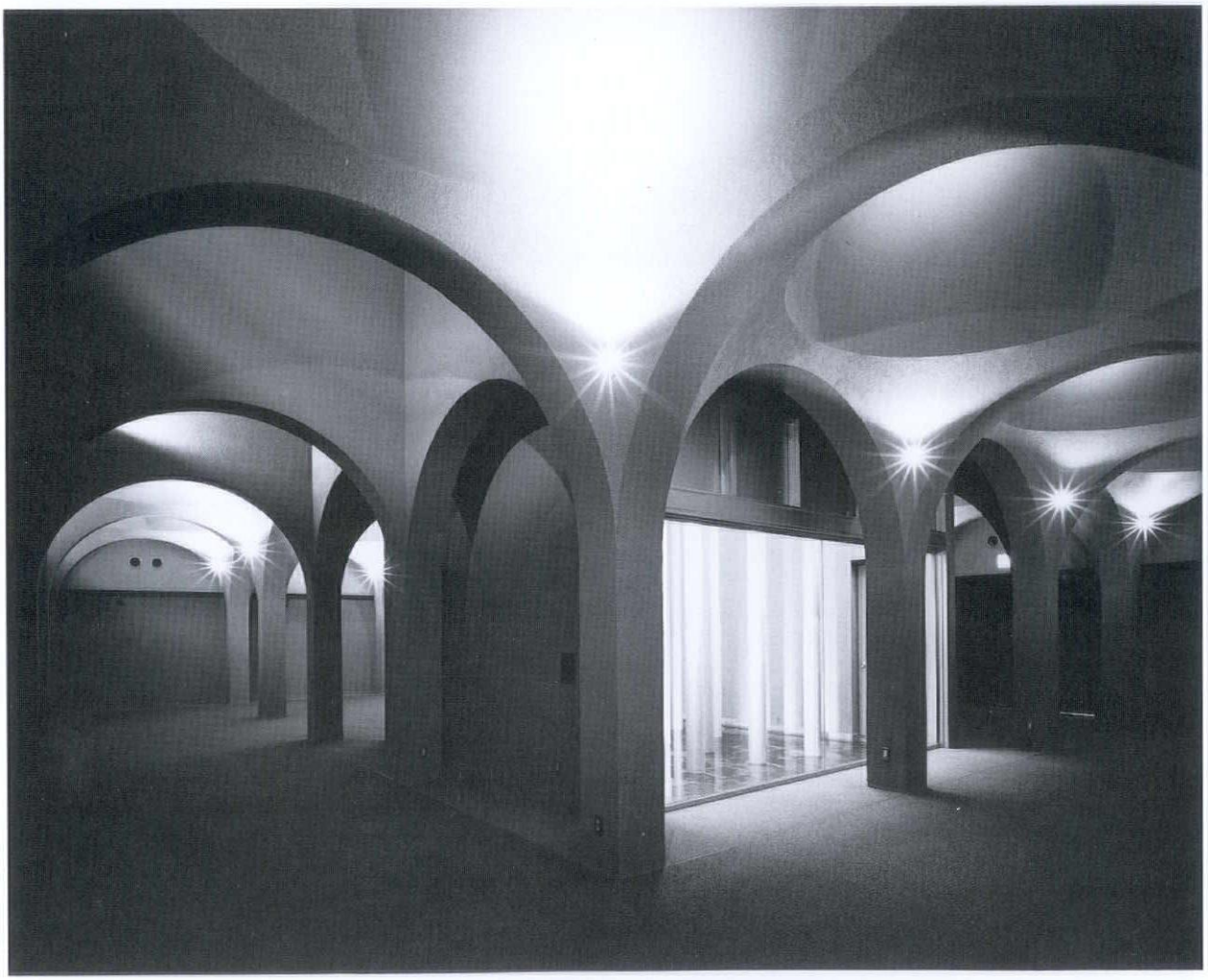


まったく異なるふたつの風土と文化を結ぶ植物としてのチューリップを、原産国であるトルコの大地のイメージを砺波平野の特徴的な集落形態である「散居村」のなかに封入することによって表現したミュージアム。









イメージの源泉

The Source of the Image

富山県砺波市は日本を代表するチューリップの産地として知られ、毎年ゴールデンウィークの前後2週間にわたって開催されるチューリップフェアは40万人を超える人出で賑わう。〈チューリップ四季彩館〉は、このフェアのメイン会場として、また一年を通してチューリップに親しむことができる施設として計画された。

トルコを原産とするチューリップは、近代にオランダを経由して日本へと移入された。各国で改良を重ねられ、遠く日本へとやってきたチューリップは、雪深い砺波の風土に定着した。そういった意味で、まったく異なる風土と文化をつなぐ植物だと言ってよい。

建築もまたこのふたつの風土を結ぶものとして構想された。中央アジアの大地に花開いたイスラムのイメージと、砺波平野に特徴的な集落形態である「散居村」のイメージ。このふたつのイメージを重ね合わせることが意図された。

水田に点在する屋敷林のイメージは、水盤に浮かぶアトリウムへと翻案され、その「屋敷林によって守られるお屋敷」という関係が、「アトリウムに包み込まれるイスラミックな内部空間」という関係に変換された。

イスラムの空間を構成する幾何学的なヴォキャブラリーとして、ドームや林立する列柱、傘状テントが抽出され、また壁面には中央アジアの風土を最も端的に表現する「土」のイメージが与えられた。こうして構成された諸施設（資料展示室、植物展示室、喫茶・販売スペース、事務スペース）は、イスラムの街並み、路地、広場へと展開され、バザールのもつ猥雑さや賑わいを再現する。

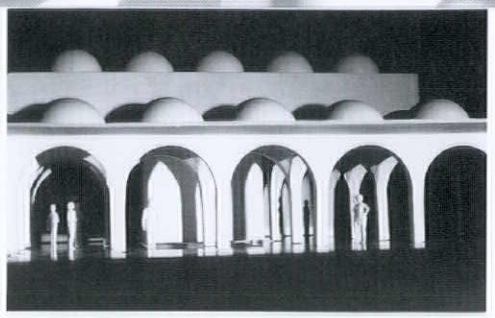
水田に屋敷林が点在する「散居村」

左、右：屋敷林とお屋敷（写真提供：安ヵ川仁省）

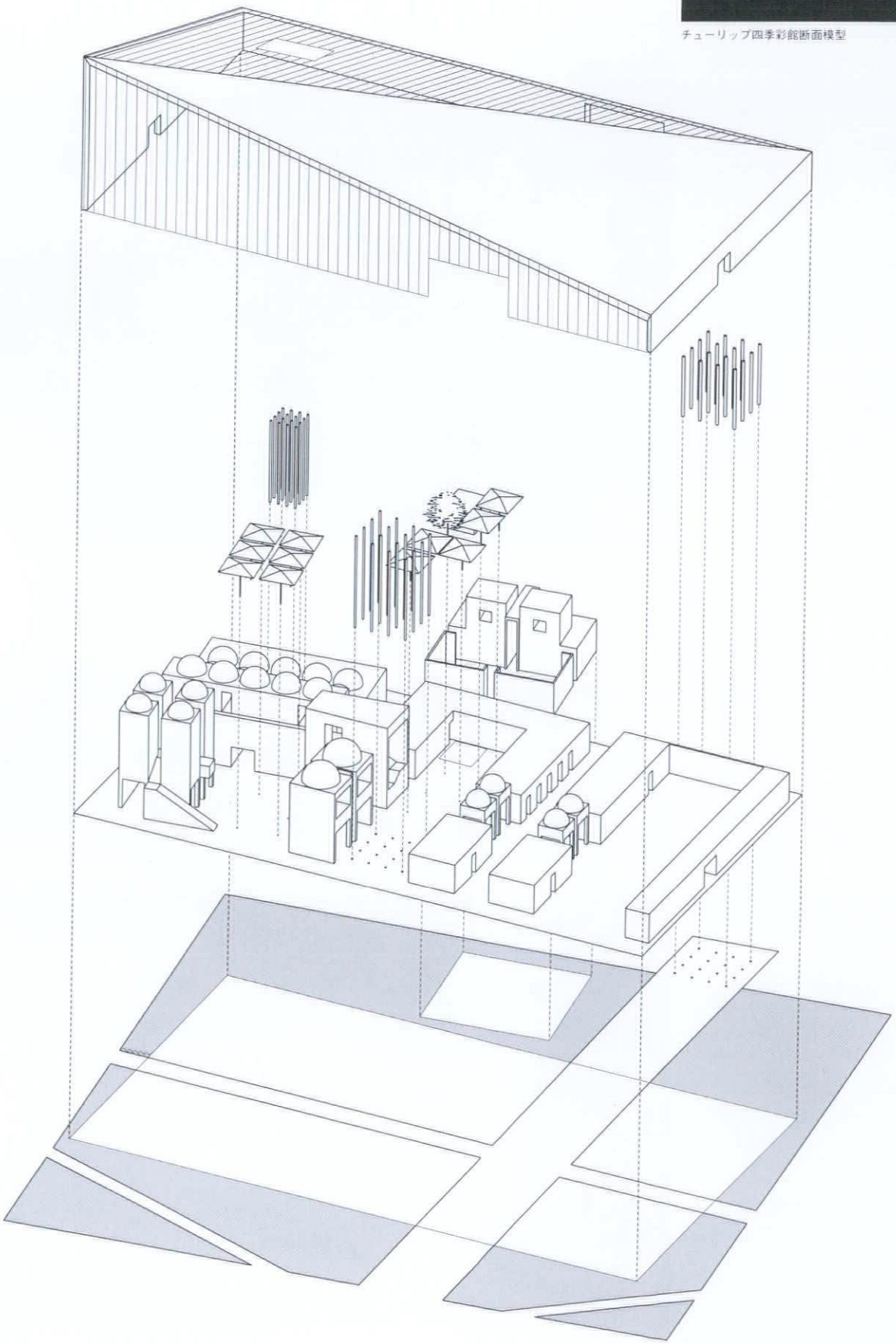
ドームが連続するイスタンブールのグランバザール。手前はヌルオスマニエ・モスク

ダイアグラム

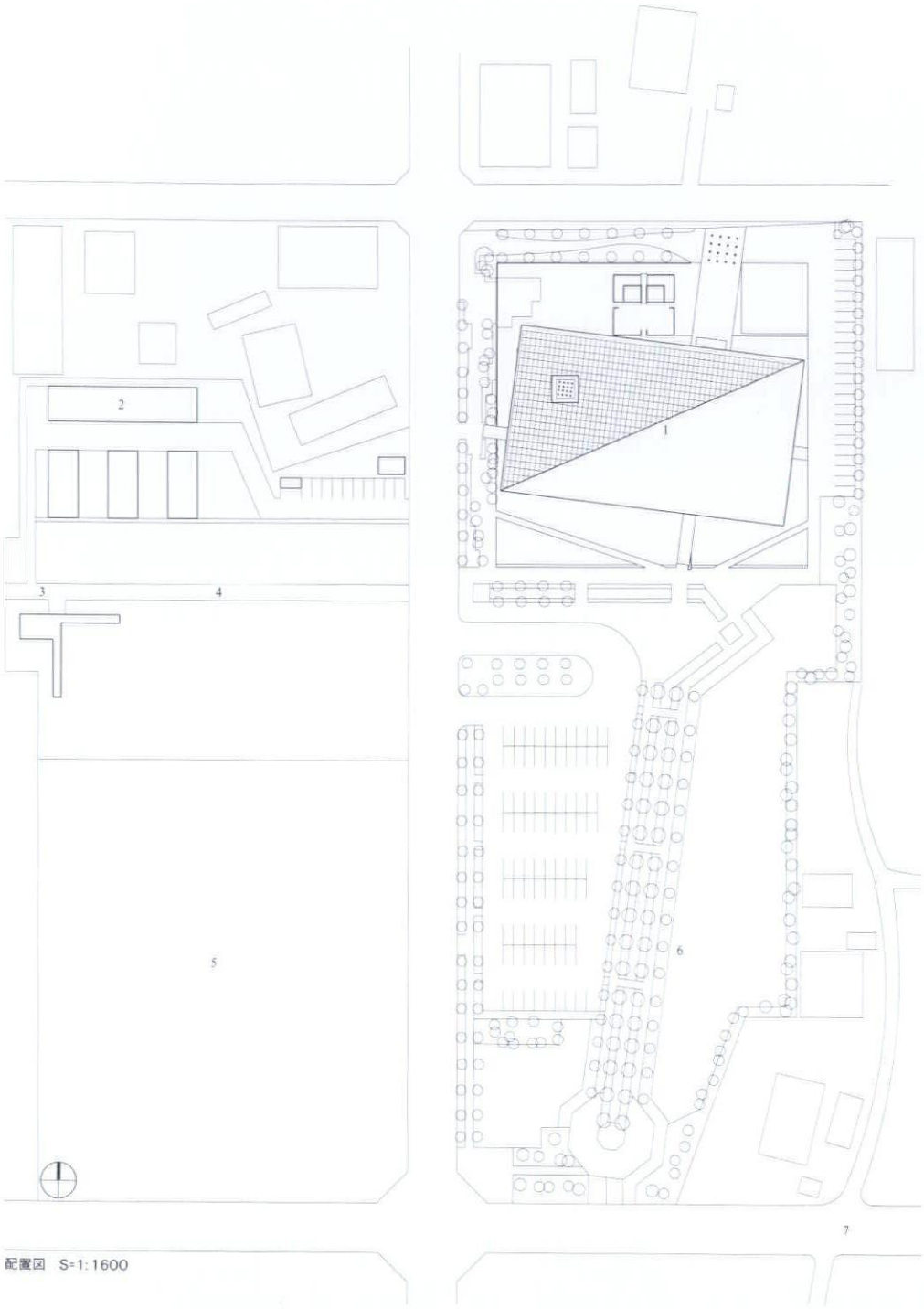
Diagram



チューリップ四季彩館断面模型

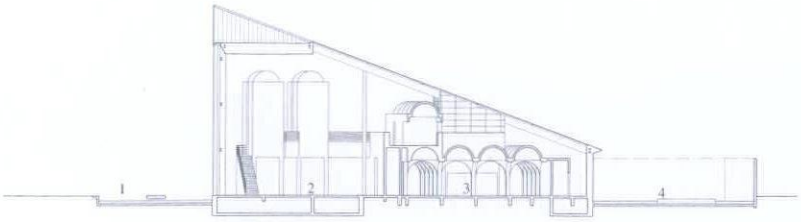


1: チューリップ四季彩館
2: 管理棟
3: 至チューリップ公園
4: 東西プロムナード
5: 美術館予定地（建設中）
6: 南北プロムナード
7: 富山県花総合センター



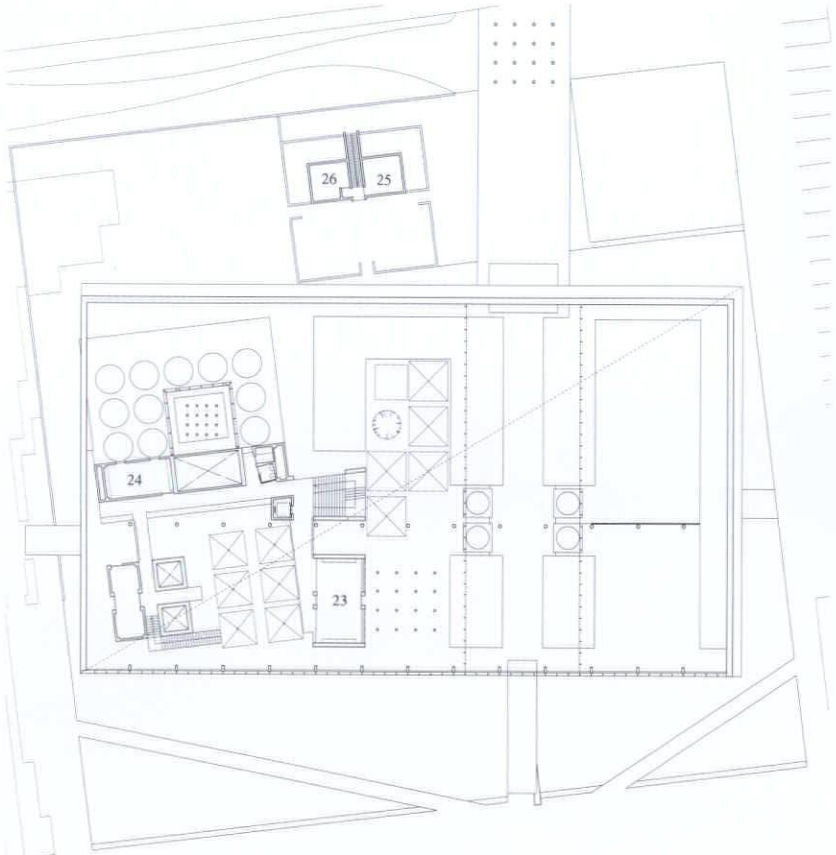
配置図　S=1:1600

1: 池
2: チューリップテラス
3: チューリップミュージアム
4: 屋外展示スペース（冬季融雪池）



断面図　S=1:800

南立面図　S=1:800



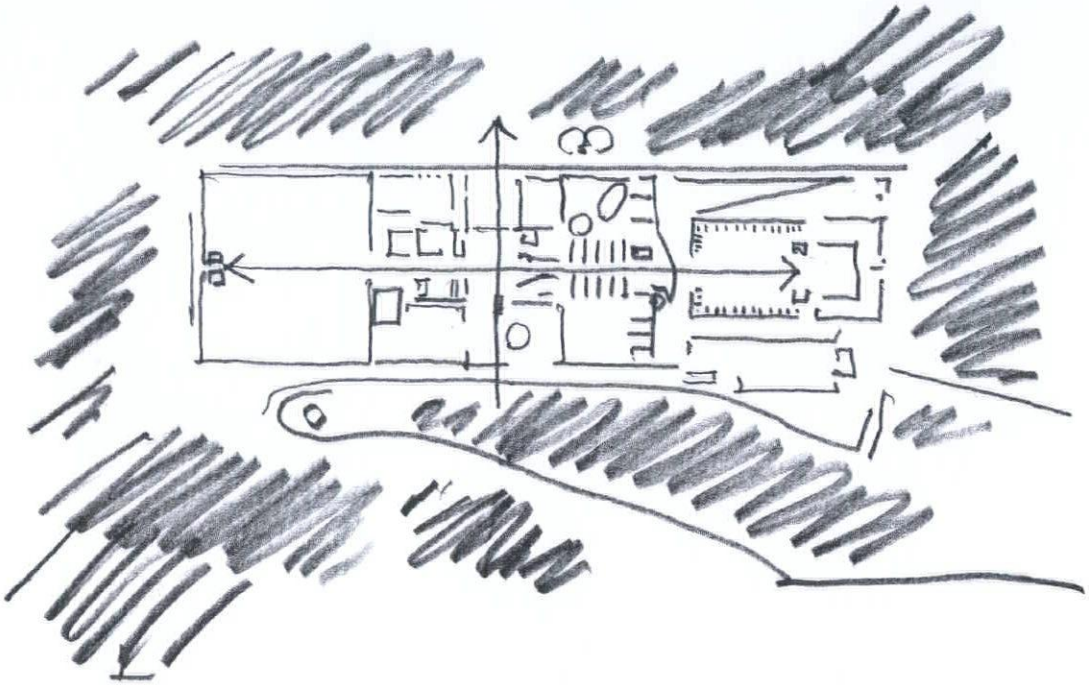
2階平面図

1: アプローチ通路
2: プロムナード
3: チューリップホール1
4: チューリップホール2
5: カフェ
6: ミュージアムショップ
7: 館長室
8: 事務室
9: 会議室
10: 収蔵庫
11: 屋外展示スペース
12: 倉庫
13: チューリップミュージアム
14: 倉庫
15: 倉庫
16: チューリップスクエア
17: チューリップテラス
18: ブリッジ
19: 池
20: ブリッジ
21: ブリッジ
22: 電気室
23: セミナールーム
24: 応接室
25: 水槽置き場
26: 作業員室

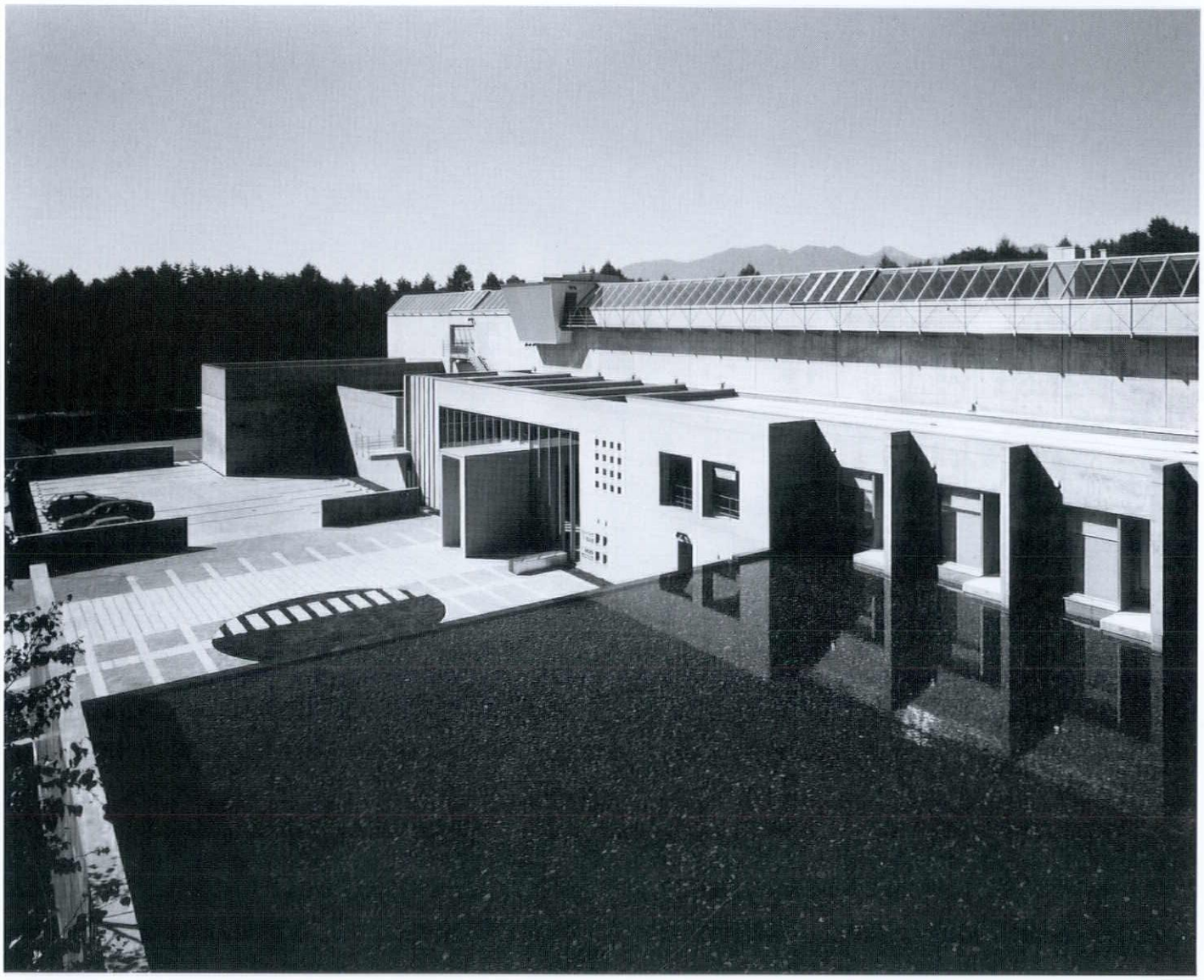
1階平面図　S＝1：800

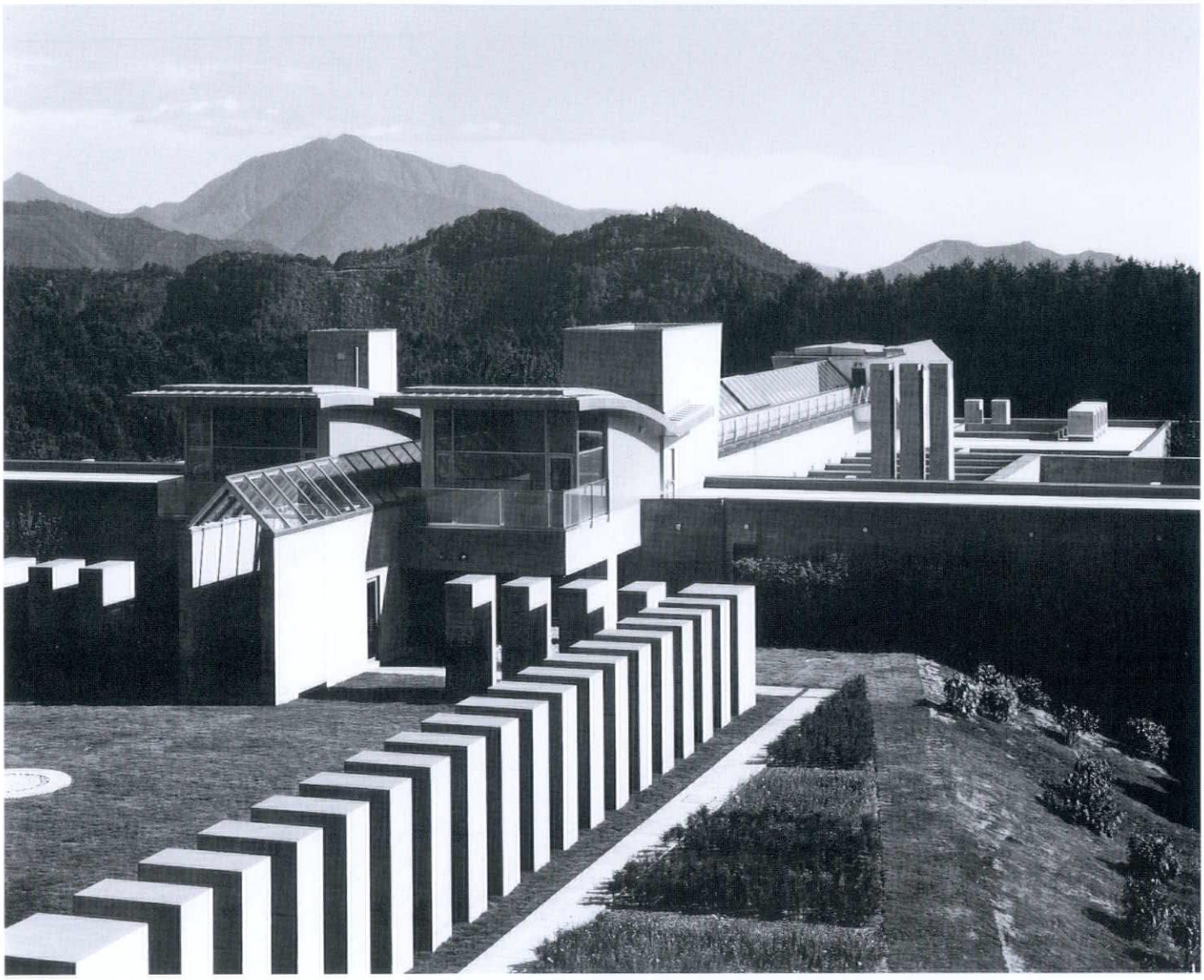
パトリ+清里フォトアート・ミュージアム

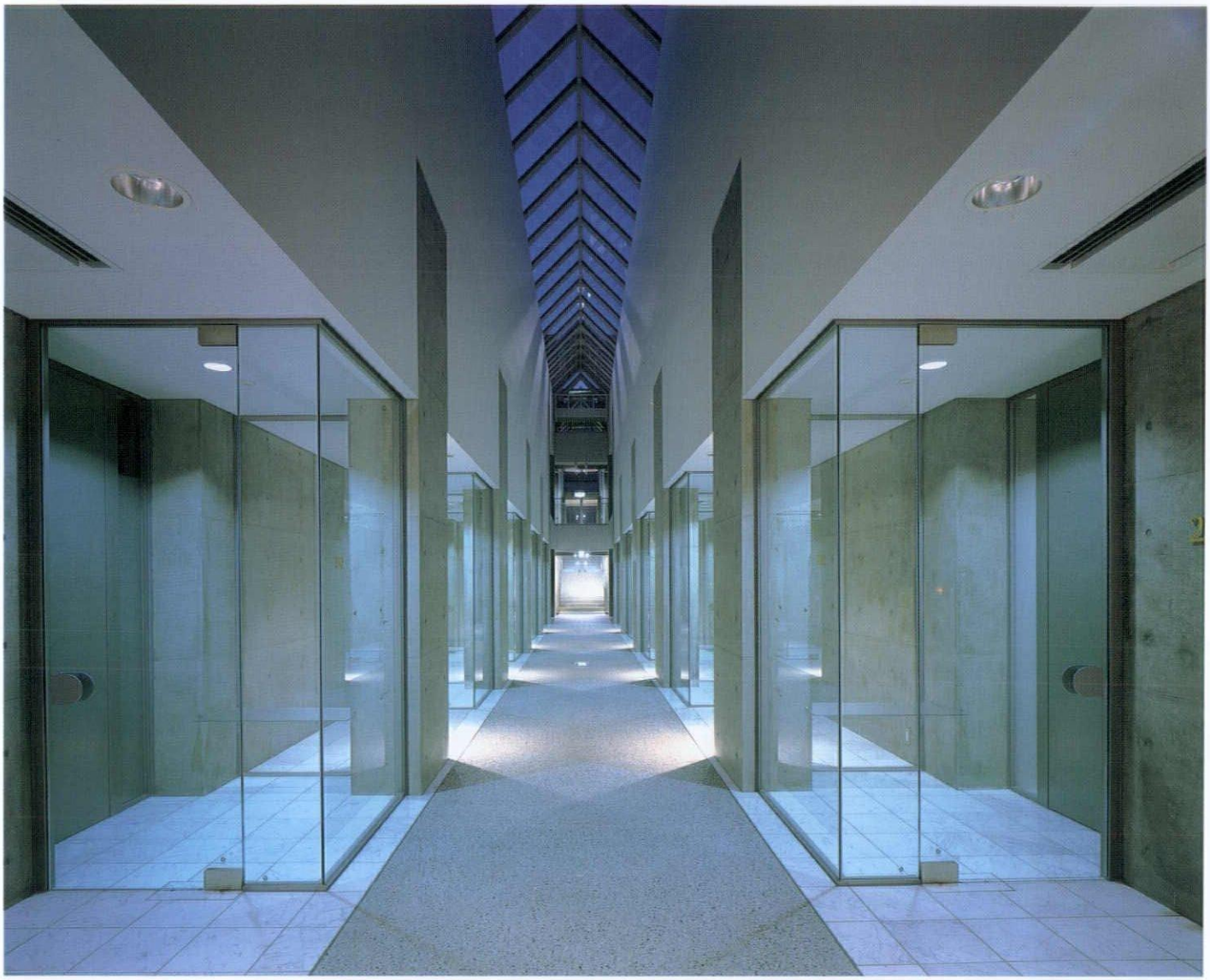
Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art

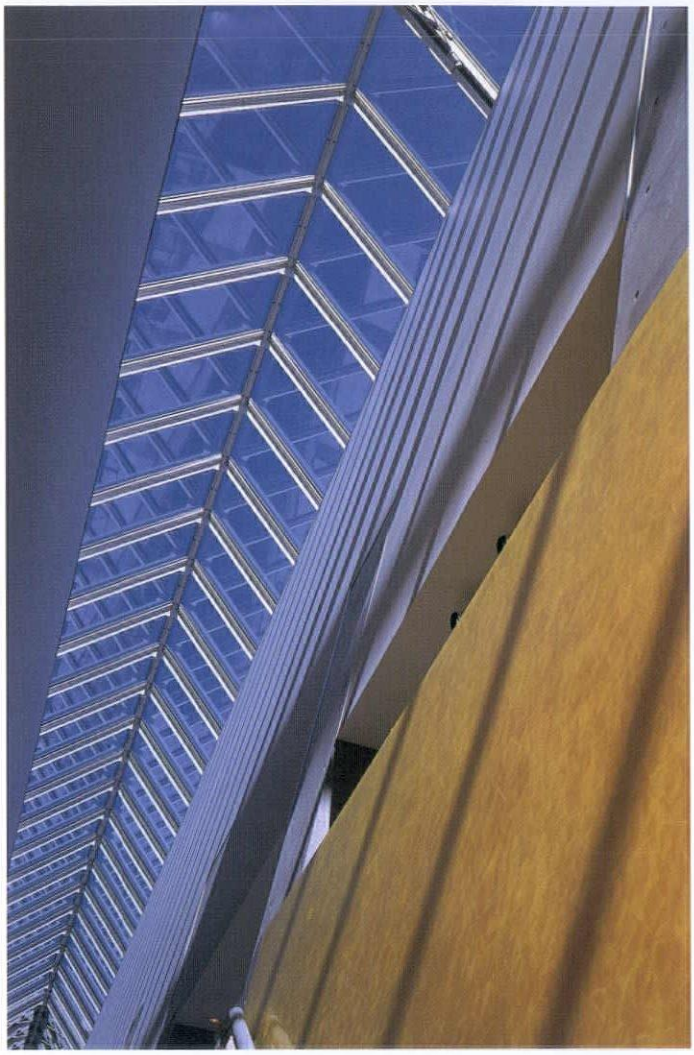


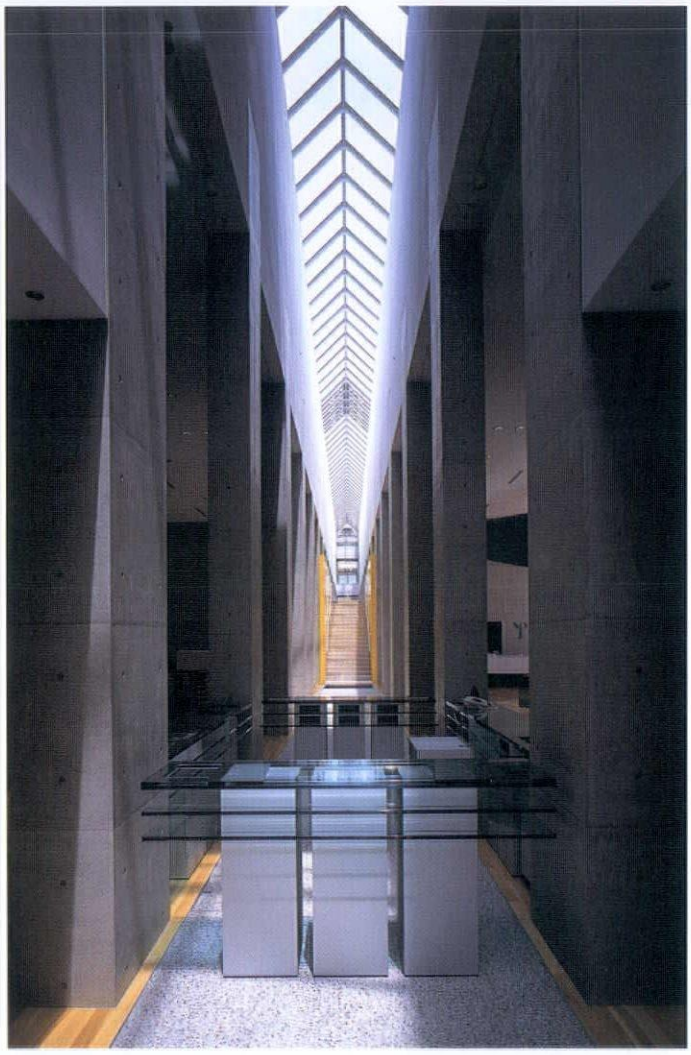
外部と内部、家具と建築とランドスケープをそれぞれ一体のものとして、積極的に融合を図った、写真美術と宿泊研修の複合施設。あらゆる要素が相互干渉し、融合することによってトータリティを獲得することが目指された。

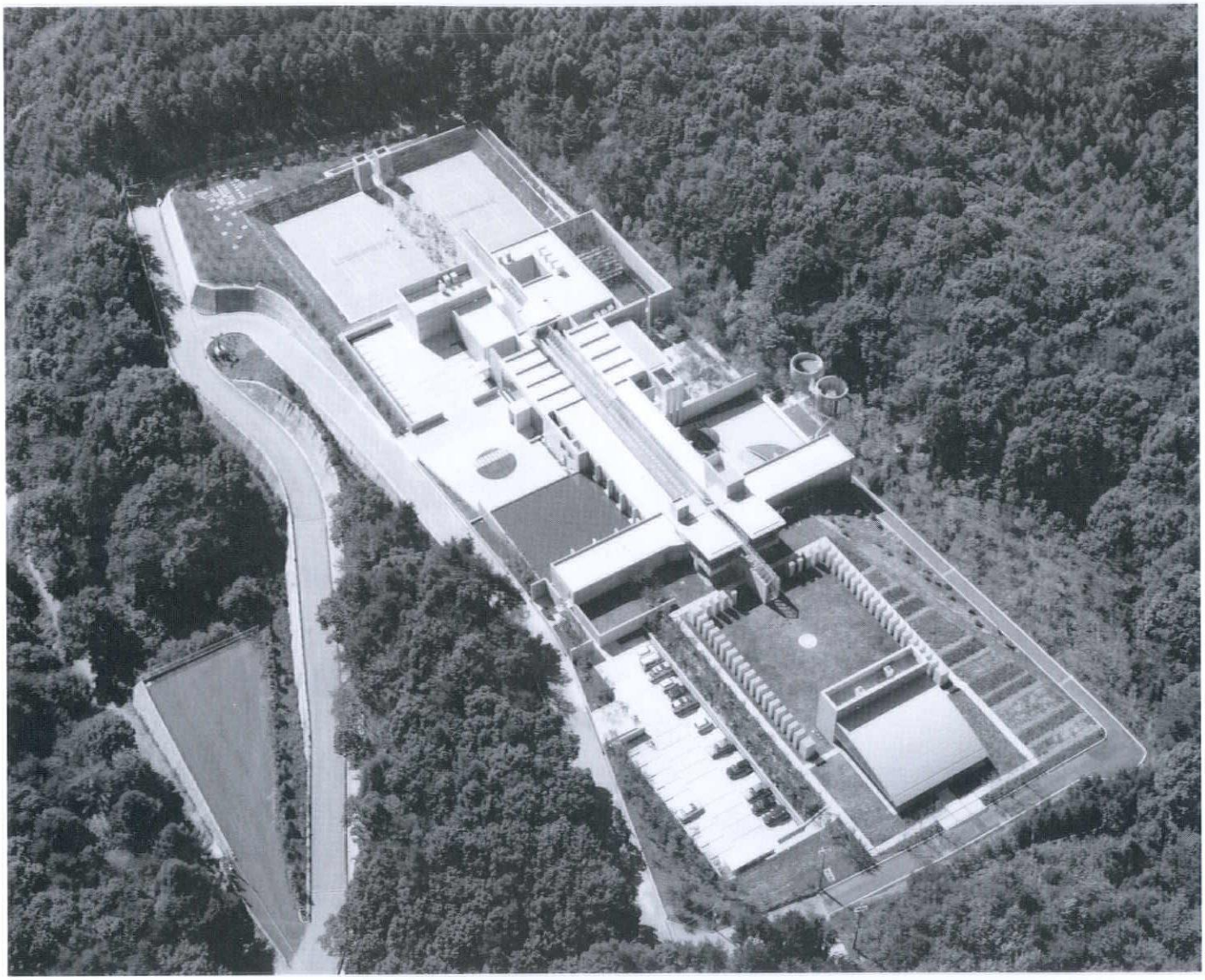






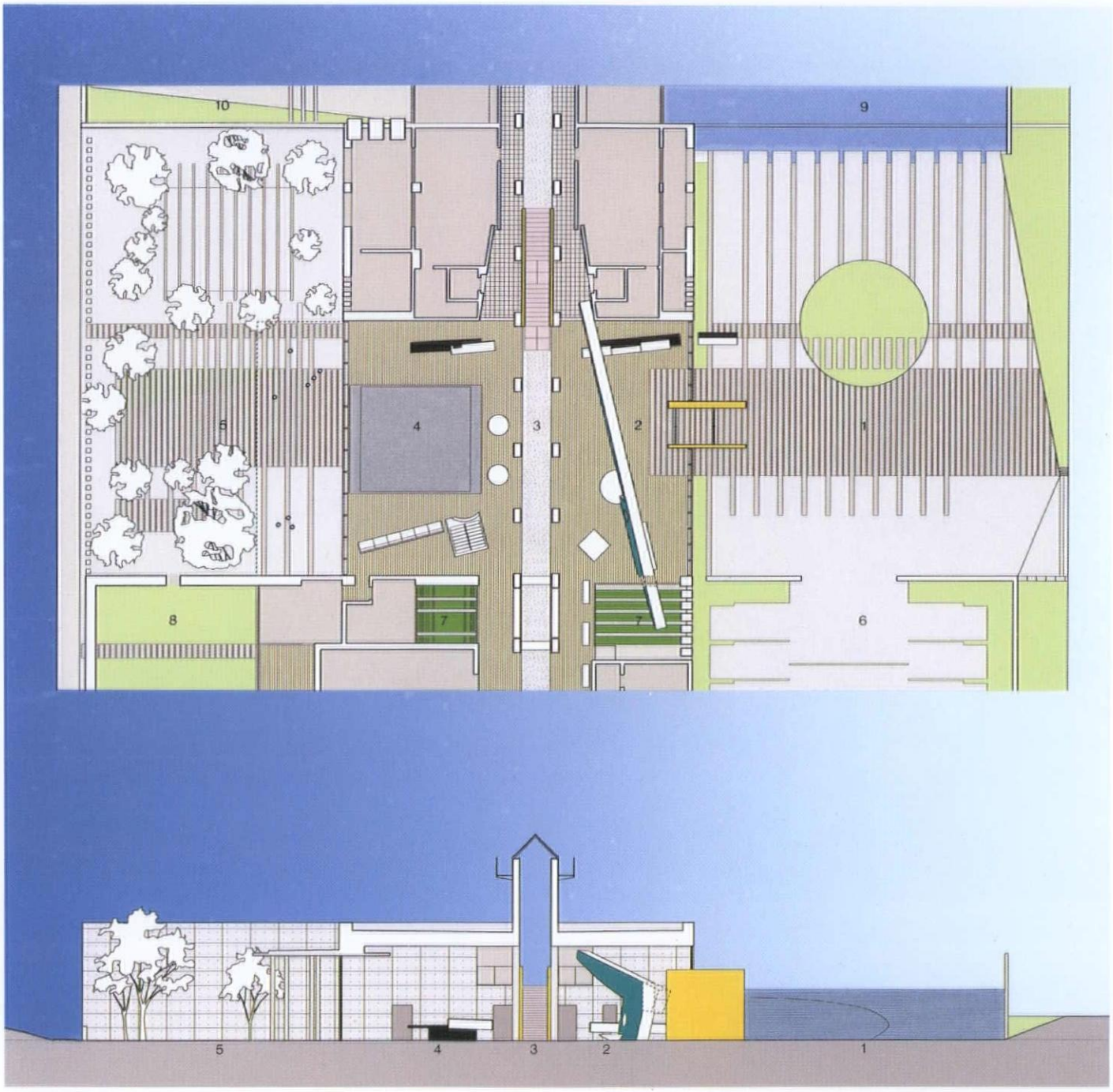






コラボレーション

Colaboration



エントランス周辺図　外構、建築、家具の関係

1: エントランス・コート
2: エントランス・ホール
3: ガレリア
4: レストラン
5: レストラン・コート
6: パーキング・コート
7: 中庭
8: ミュージアム・コート
9: 水の庭
10: 草の庭

パトリ＋清里フォトアートミュージアムは、宿泊研修施設と写真美術館の複合施設である。その敷地は、北に勇壮な八ヶ岳、遠く南に富士山を望むことができ、緑豊かで自然環境に恵まれている。

我々が計画に参加した時点で、敷地の樹木はすでに伐採され、一次造成が終了し整地された状態であった。そこで、植村直己冒険館で試みたような既存の自然に建築を埋め込むという手法をとらず、敷地全体を建築の内部空間と、領域感のある人工的外部空間（庭）のパッチワークとして組み立てることが意図された。すべての内部空間は、18ヶ所に散在する庭と緊密な関係を持ってデザインされ、緩やかに周辺の自然に連続することが意図されている。家具についても、従来の機能を越えてホールを横断し、1階から2階につながり、建築の外皮を突き破って外部に突き抜けるなど、空間の主要な構成に関わるよう意図されている。

機能としての宿泊施設とミュージアムは、単に併設されたものではない。ミュージアムに宿泊する、あるいは宿泊施設のミュージアム化といった積極的機能融合による新しい機能の発見が目指されている。

錯綜する機能を中継し、秩序を与える「ガレリア」には、重層する内外部空間を体験する立体回遊路が付加されている。これは、周辺景観を享受するだけではなく、施設の部分と全体の再認識を可能にする。

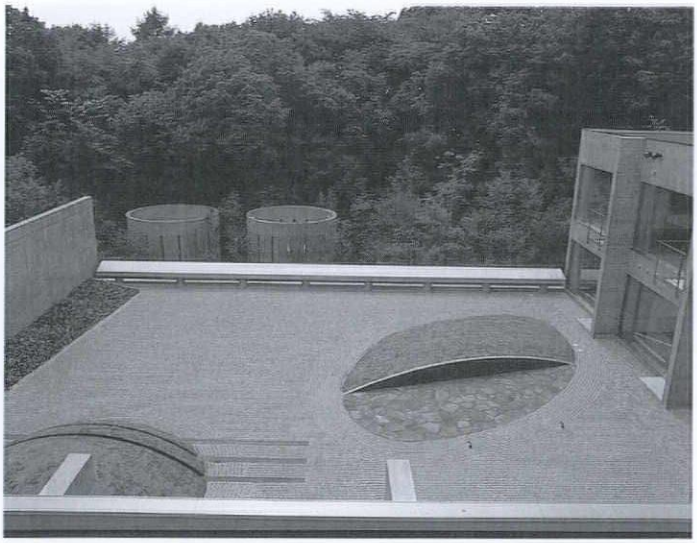
ランドスケープ、家具、建築、それぞれが相互干渉し合うことにより、場所の力が増幅される。環境のトータリティ（全体性）の獲得こそが目標であった。

ガレリア。エントランスホールの家具が外部へと突き抜ける

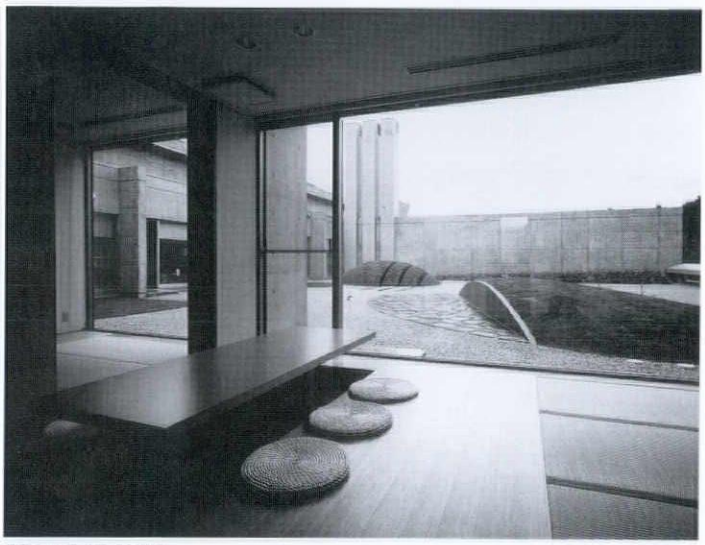
上：エントランス・コートからエントランスを見る　下：レストラン・コートからレストランを見る

18の庭

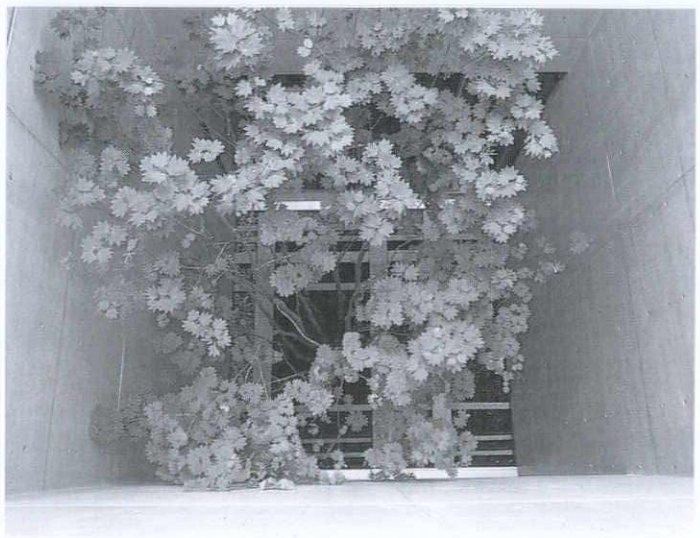
18 Gardens



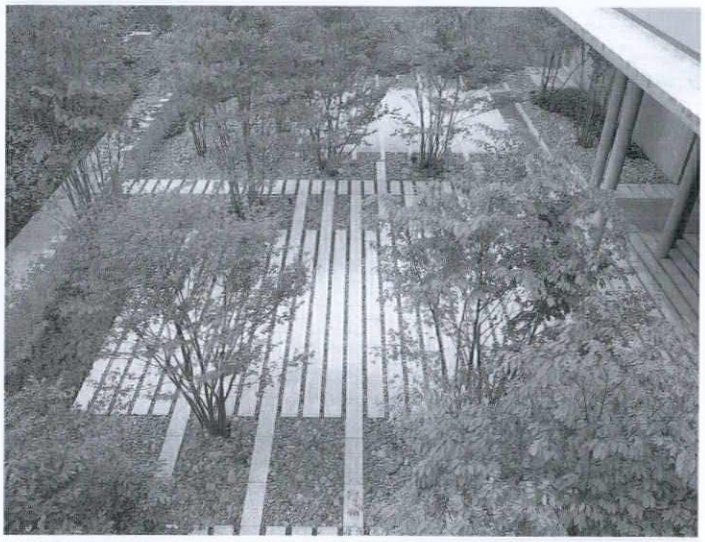
水の庭:10



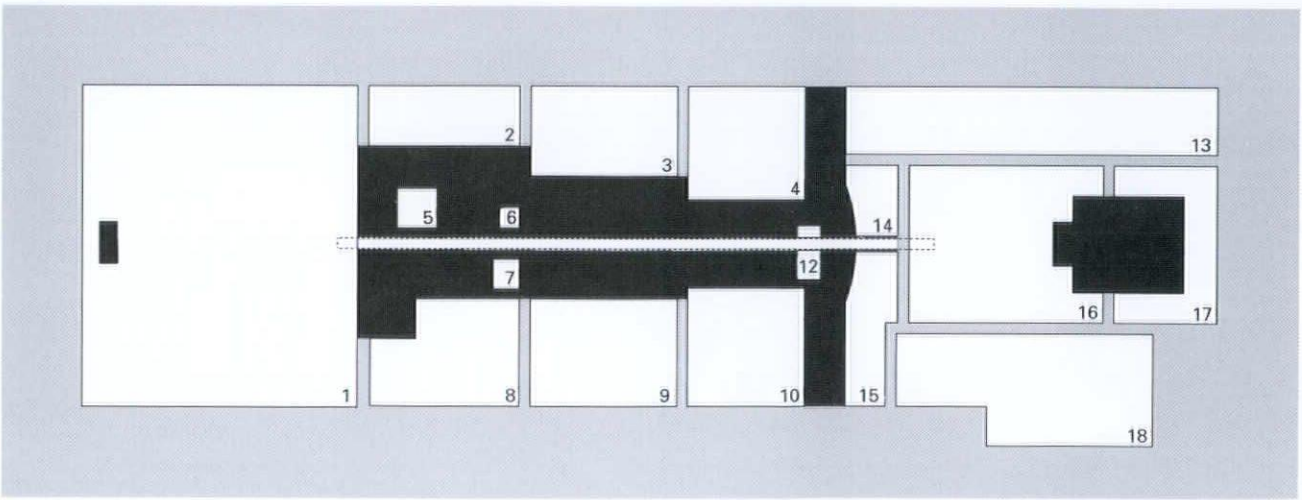
客室から草の庭:4を見る



中庭:6



レストラン・コート:3



18の庭

外気のうつろいを人肌に引き寄せる家具

藤江和子

特定の建築空間に置かれるものをデザインするということは、そのものの機能やフォルムという具体形だけが問われているのではなく、デザインされたものが人々にとってどのような意味を持ってそこに置かれ、置かれたことによって何が変わり、私たちがそれを介して何を享受できるかを考えることだろう。当然周囲の空間のありようとの関係は密接で重要だ。

空間体験あるいは生活体験とは、肌に近いミクロな感覚の集積ではないかと考える。環境や建築をめぐる散り散り雑多な情報や時間が、折り重なって見えてくる様々な建築的ディテールやシーンや身体スケールの感覚、特に皮膚感覚から知る直接的でリアルな事象から成る膨大な部分の集積によって、体験というストーリーがかたちづくられてゆく。それが、建築の全体像を知ることにつながるのではないだろうか。家具は人々のしぐさや生活を支える道具としてだけでなく、そうした環境という全体系を構成する中での小さな、最も具体的で肌に近い構成要素といえる。

栗生氏のいうトータリティ（全体性）とは、風景 庭 建築 家具 人を通しての一連のコンテクストが確立されてはじめて獲得できることである。これは、単に配列としての意味ではなく、またパッチワークという平面的な関係だけでもない、それでは十分とはいえない。むしろそれぞれの構成要素が立体格子のように、キュービックパズルのごとく交錯した関係としてあるほうがいいのではないか。明快かつ複雑に絡み合っているほうが美しい。何より面白いし不思議で魅力的なものになるはずだ。

絡み合っているときに重要なのは、先の「一連のコンテクスト」というところにあり、小さなキュービックという構成要素を繋げるのは全体を括るマクロなネット、しかもかなり柔軟なネットでなければ繋ぎあい関係づけておくことはできない。変幻自在な組み合わせに対応できるネットとは、一人の建築家の手によるものというよりも、建築をめぐる様々な構成要素をデザインするデザイナー達の、いわば共通のデザインマインドによって練上げられ、編み込まれたネットであるほうが柔軟で強靭なものになるのだろうと思う。

それにしても、それぞれの構成要素は総じて具体的で客観的な説明が可能であるのに比べて、マクロなネットは共通のマインドという非常に主観的で実体のない曖昧なものである。この具体性にかけるところが、なんともやっかいだ。

それぞれの分野において、具体的な作業上の最終守備範囲というものは当然あるが、全体として目指すものはただひとつ、建築をつくることであり環境をつくることという、輪郭の見えないことでしかないのである。

パトリ＋清里フォトアートミュージアムの設計に際して、栗生氏から「敷地が清里という自然あふれる固有の風景の中にありながら、既に整地されていることから、敷地全体を建築の内部空間と外部空間のパッチワークをはめ込んだものにしたい」というコンセプトの説明を受けた。この時即座にイメージしたのは、建築、ランドスケープ、インテリア、家具、それぞれが分野を超えて、独自に編んだレース状のストーリーを持ち寄り重ね合わせることになるだろうということだった。そして、そこには無数に隣接する点や辺がでてくることになるから、これを整理する何らかの解法をもたなくてはならないと直感した。随所に生ずる隣接する点や辺は、いってみれば、それぞれの専門分野の境界をあらわすものである。そこでまずは、双方に貫入し刺激し境界部を浮き立たせる大胆な提案をすること、そして同時に、隣接する構成要素を逐一確認し、注意深く解きほぐすことにより境界部を薄らぎ融合させていく。相反するかのように見えるこの作業によって、幾つものレース状のストーリーが整理され、織りなされてゆけば、やがていい形になっていくだろうと確信できた。

空間をよぎり2階にまで伸び、壁を突き抜け中庭へ干渉するエントランスホールの赤いフォルムは、様々な機能を持った家具ではあるが、とてつもなく大きな赤い看板でもある。家具とも建築ともつかず、内とも外とも規制しないスケールと貫入の形は、建築の骨格と共振を試みるかのように強靭な存在だ。そして一連の家具は、この力に同調してどれも傾き、建築の軸とは大きくずれている。しかし室内から見るこれらのフォルムは、緑色に彩色してありガラスのかなたの自然の風景の中に融けて、その存在は薄れてしまう。トップライトからの外光を受けるガレリアの家具は、すべて透明の素材で成り立ち、陽光を受け止め浸透させ透過させて、外気のうつろいを人肌に引き寄せるプリズムのような役割を持たせて整然と在る。また絨毯や壁クロスやカーテン、家具什器のレイアウトやコーディネイトによって、建築の空間構成をより明確に認識できるように、そして幾つもの庭を介し、外部環境を内部に引き込み積極的に融合し体感できるように計画している。

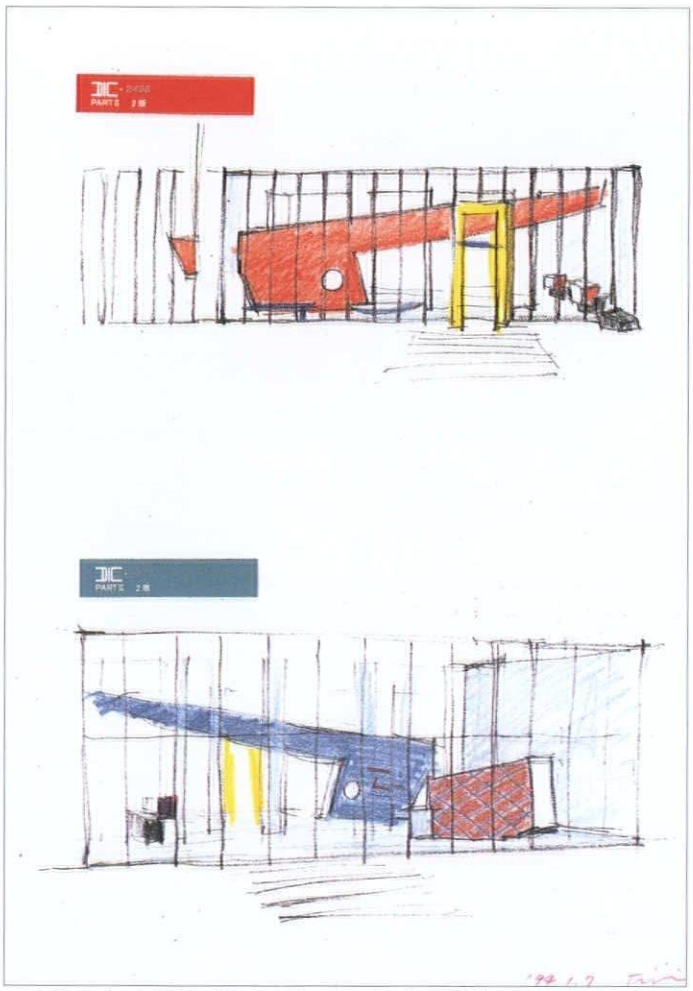
これらの様々なもくろみは、インテリアからだけの一方的な提案では成り立たないのは勿論だ。それぞれの役割において、建築のコンテクストに則った共通のデザインマインドにより織りなされる相乗効果、まさにコラボレーションの成果といえる。それぞれの分野や役割に対する、節度ある干渉と融合の調整がとれた時にはじめて成立するのだといえる。

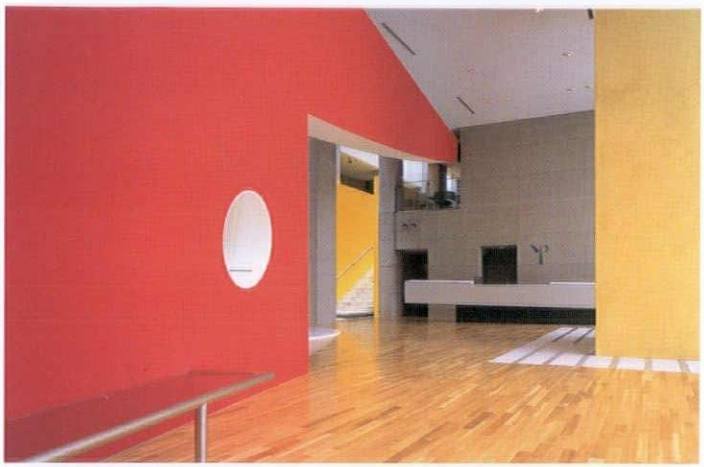
相互の間にはいつも緊張した関係があることは確かだ。この緊張が解けるのは、相互に調整を繰返すうちに共鳴し、美しく不思議な形を成した瞬間である。コラボレーションとはこの瞬間を具現化することではなかろうか。「自分の設計した空間の中に、極めて危険でありながら、魅力的な動物を放つのに似た体験をする」と、私とのコラボレーションについての、7年前の栗生氏の言葉を思い出した。

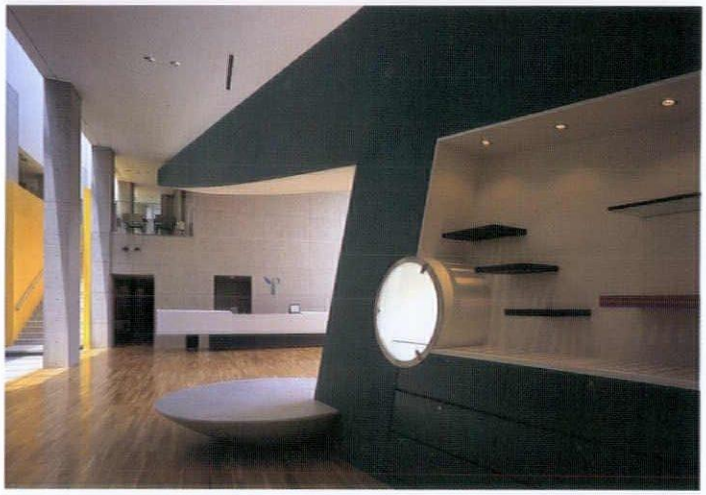
●ふじえ・かずこ／インテリア・デザイナー

家具

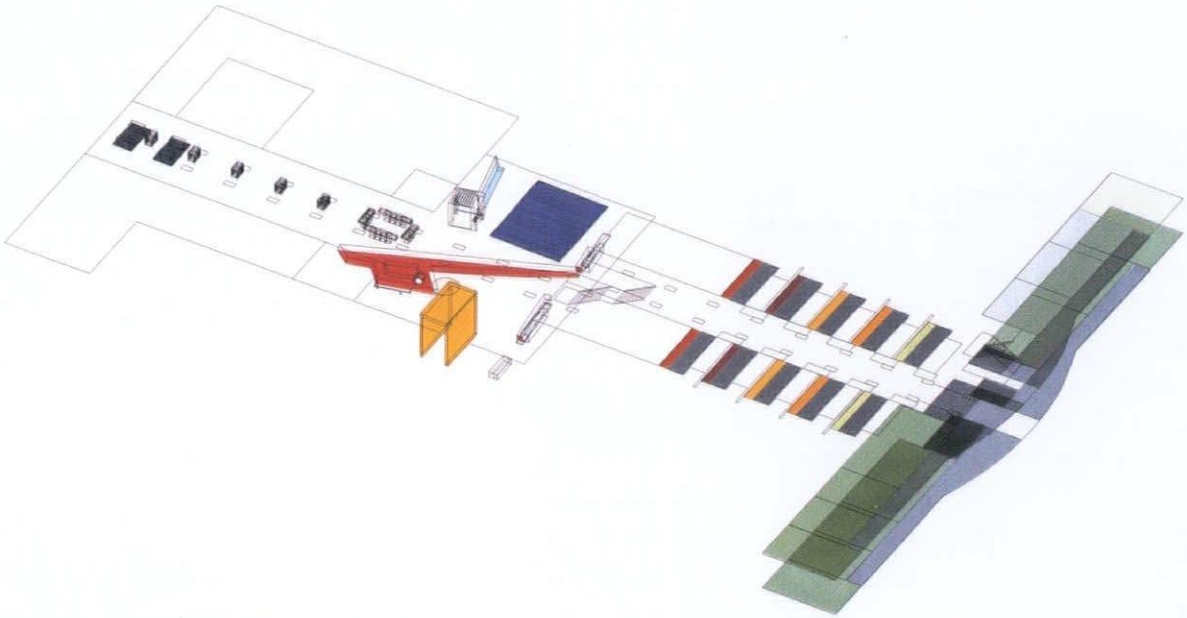
Furniture







エントランス・ホールの家具　色調のスタディ　ドローイング：藤江和子アトリエ

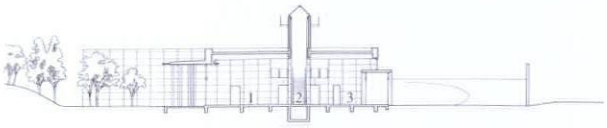


カラー・コーディネイトのスタディ　ドローイング：藤江和子アトリエ

配置図　S=1:1000

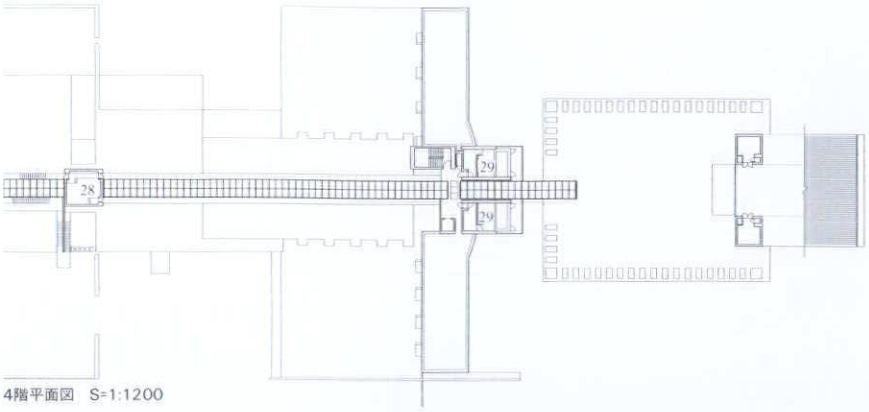
東立面図　S=1:1000

1: レストラン
2: ガレリア
3: エントランスホール

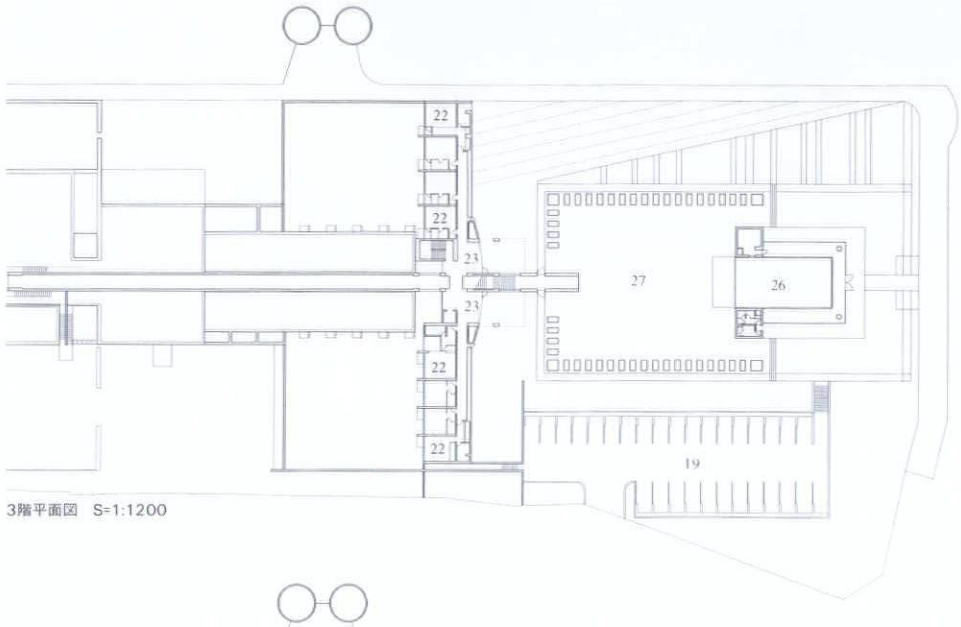


断面図　S=1:1000

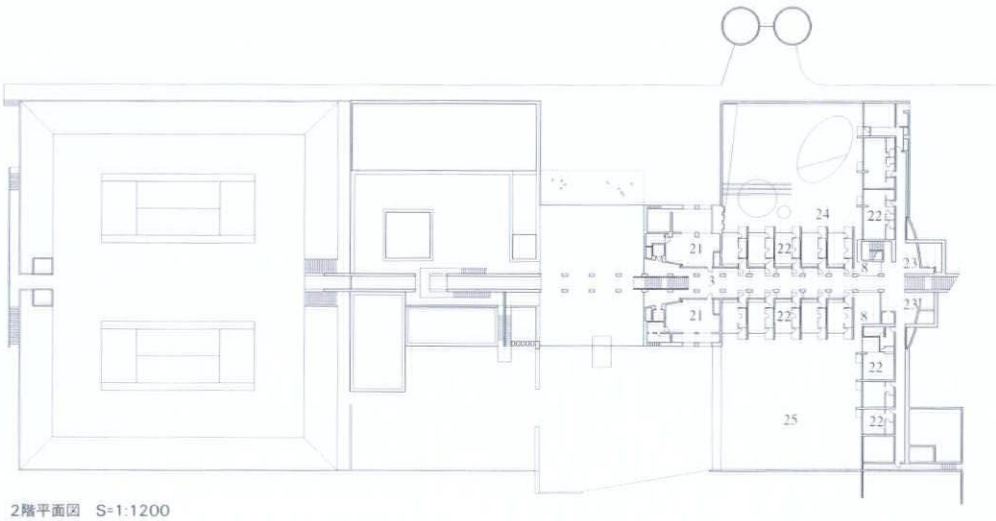
1: エントランスホール
2: レストラン
3: ガレリア
4: 展示室
5: ラウンジ
6: 美術館館長室
7: 美術館事務室
8: 中庭
9: スタジオ
10: 収蔵庫
11: 厨房
12: 便所
13: 事務室
14: 機械室
15: 電気室
16: エントランスコート
17: レンストランコート
18: ミュージアムコート
19: パーキングコート
20: テニスコート
21: 中会議室
22: 宿泊室
23: 談話コーナー
24: 草の庭
25: 水の庭
26: 音楽室
27: 列柱の庭
28: 天文室
29: 共同浴室



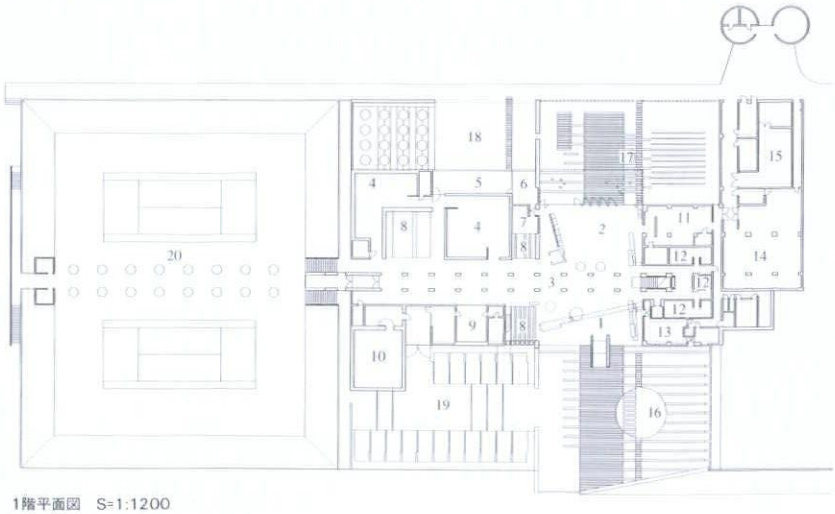
4階平面図　S=1:1200



3階平面図　S=1:1200



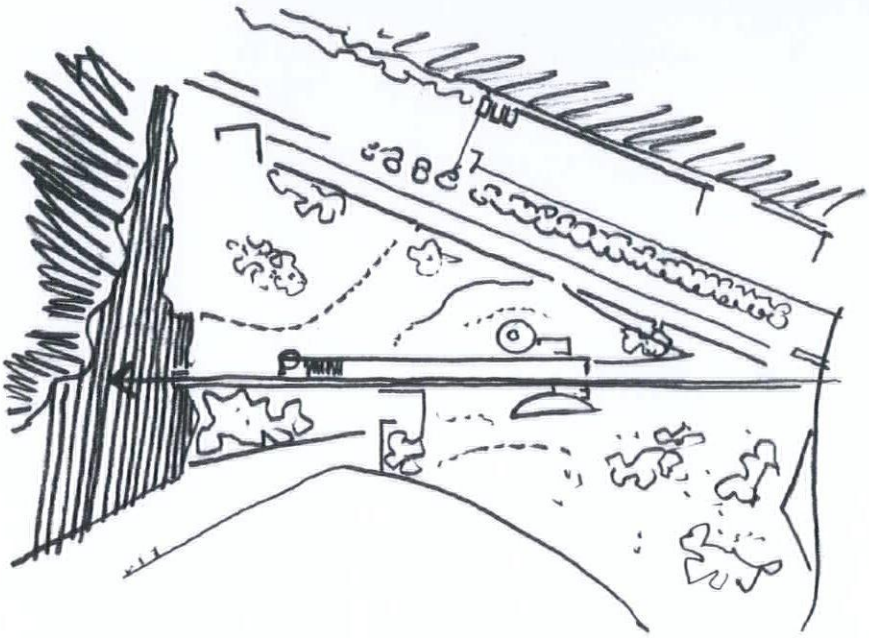
2階平面図　S=1:1200



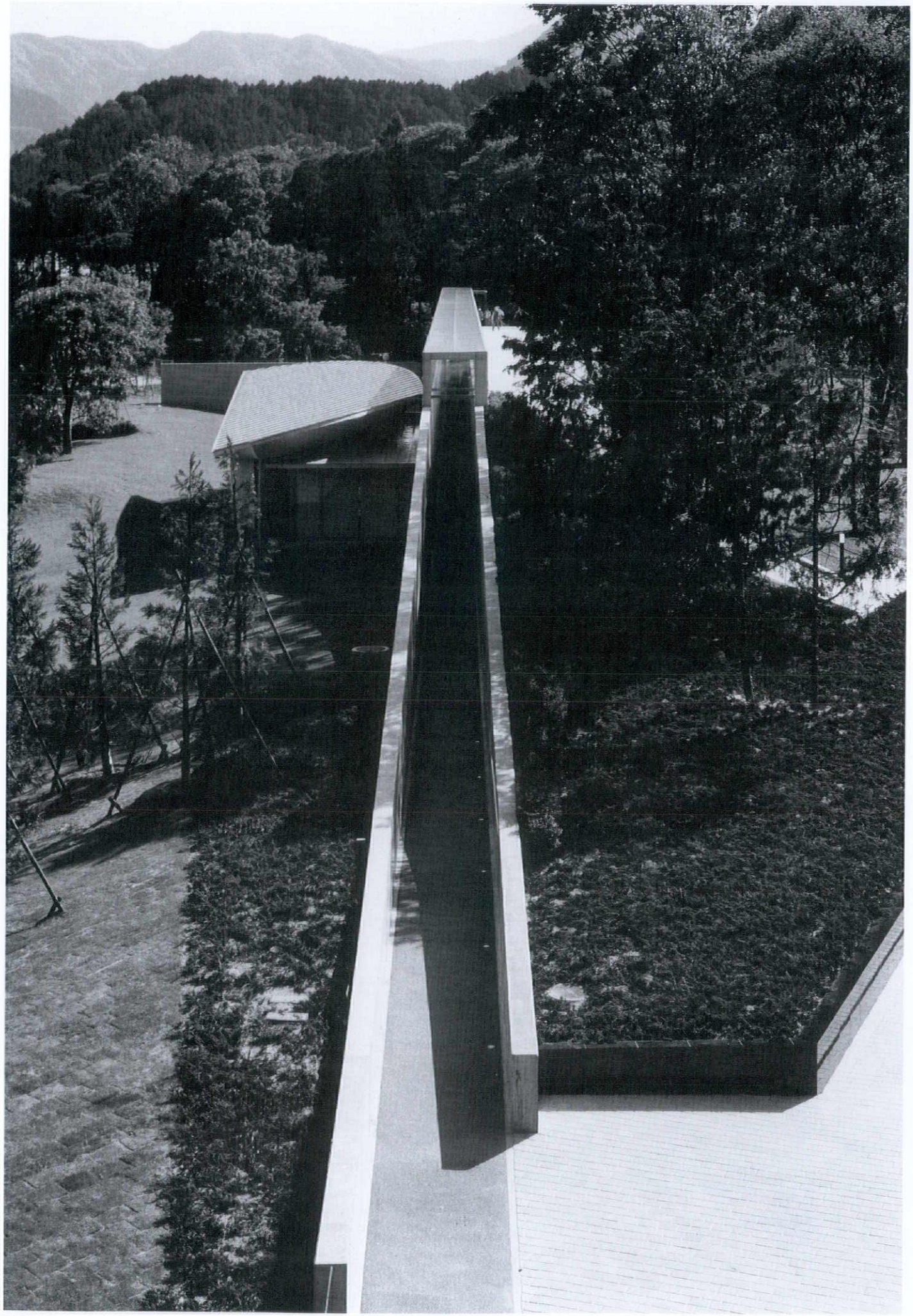
1階平面図　S=1:1200

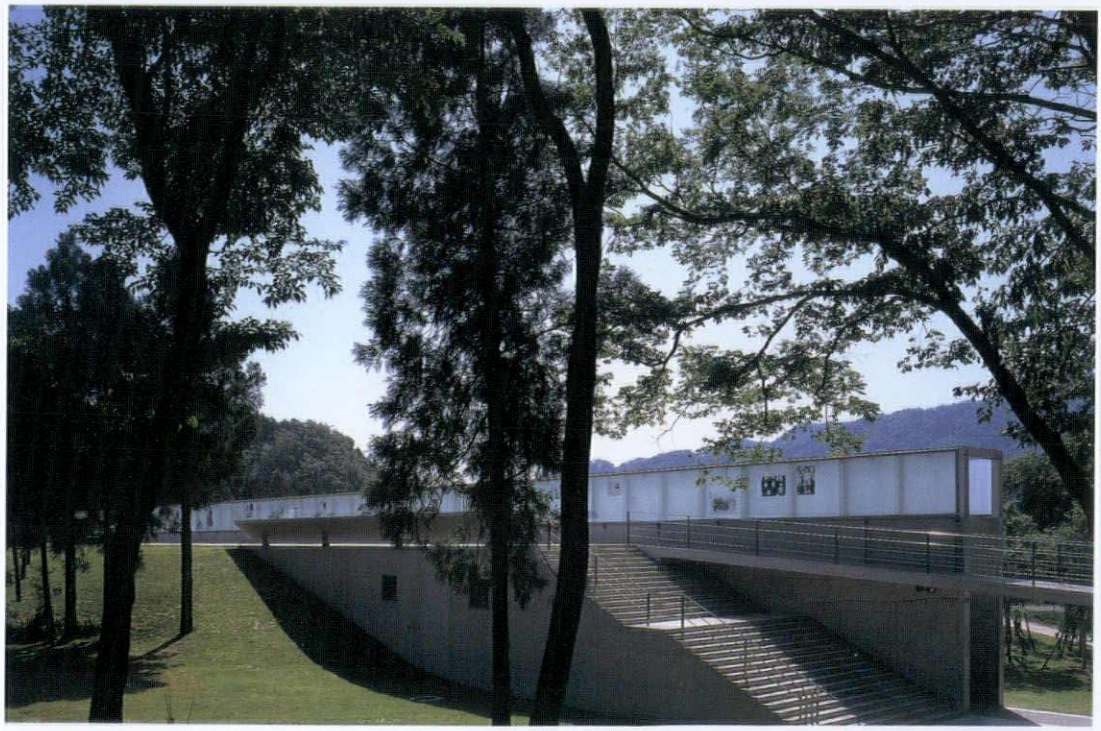
植村直己冒険館

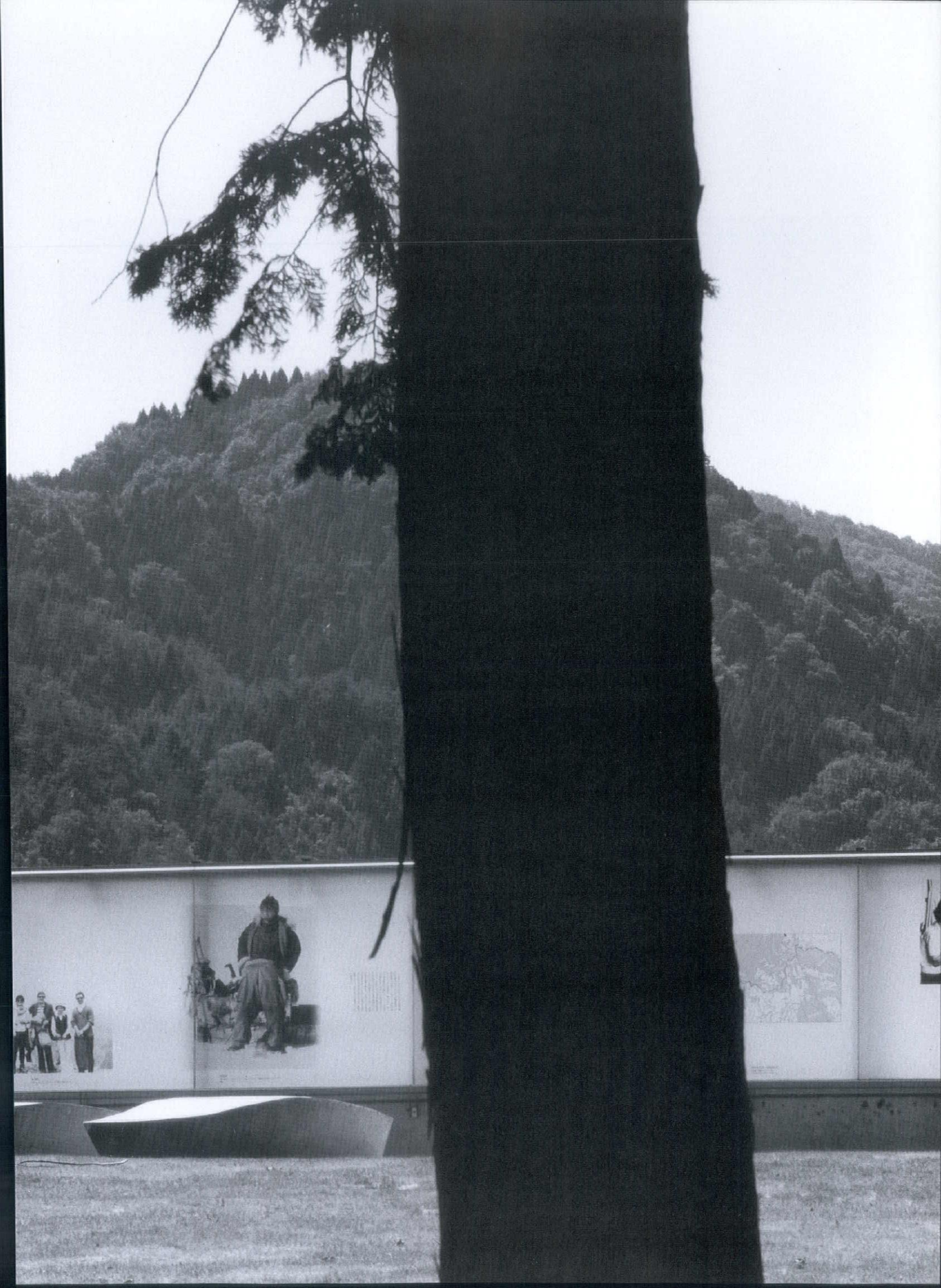
Uemura Naomi Memorial Museum



植村直己の生地に建てられた、氏の業績を顕彰する記念館。植村直己の原風景であるふるさとの豊かな環境を保存しながらも、彼の距離への挑戦を象徴的に表現した建築が、大地を切り裂くクレバスのように貫入する。



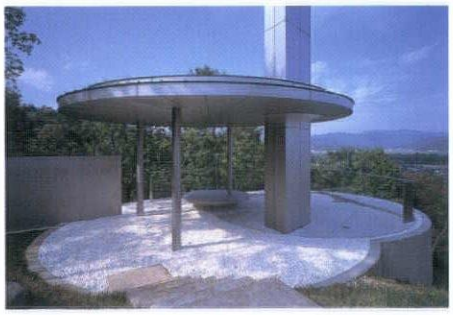




植村直己の墓碑のある〈植村直己ふるさと公園〉に建つモニュメントである。

〈植村直己冒険館〉が、彼の数々の偉業のうち「距離への挑戦」を象徴した建築であるのに対し、このモニュメントでは、大地をイメージする円盤（眺望テラス）と雲をイメージする円盤(屋根)、そしてそれらを突き破って屹立する塔によって、「高さへの挑戦」を象徴している。この円盤と塔の仕上げには、植村が極地で使用した特製カメラに使われていたチタンが用いられている。植村直己が生まれた2月12日の南中時、屋根の円盤のつくる影が床の円盤に重なる。

夜になると、あたかも塔を無限に延長するかのように、塔の真下から一条の光が放たれ、植村が生涯抱き続けた「高さ」への夢が、ひとすじの光の柱として立ち現れる。



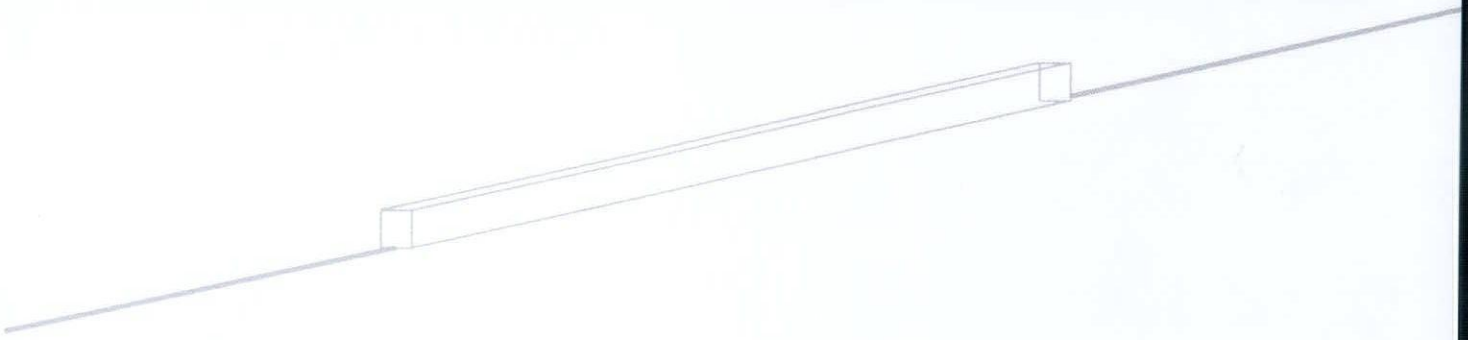
コンセプト

Concept

〈植村直己冒険館〉は植村直己の生地、兵庫県日高町に建てられた。そこでは、樹木が繁茂する老年期の山々がなだらかな稜線で地域を取り囲み、微地形に沿って丁寧に棚田が築かれ、円山川のゆったりとした流れが落ち着いた時間を刻んでいる。それは、穏やかでナイーブな植村の性格そのままの風景であり、柳田国男のいう典型的な日本人の原風景でもある。

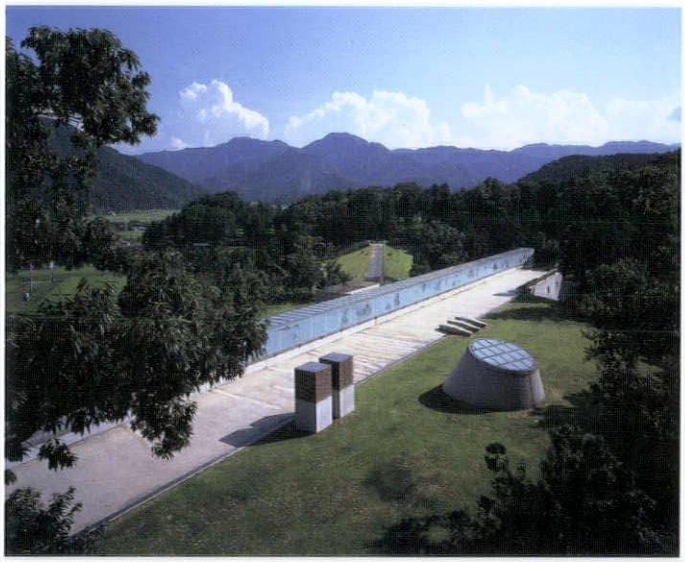
冒険に際し、自然を征服しようとするのではなく、自らが自然に馴化、順応する方法をとり続けた植村に倣い、〈植村直己冒険館〉の計画は、自然と対話することから始まった。そこで目指されたことは、可能な限り植村直己の原風景を保存すること。建築を存在させることで自然環境の美しさを際立たせること。自然に対する畏敬の念をもちながらも、人間の存在、意志の力、尊厳を表現するものであることであった。自然、建築、展示を一体化させた環境のトータリティ(全体性)こそ、植村直己のスピリット(精神)を表現するにふさわしいと考えた。

無限に続くかのような一本の通路は、植村直己の「距離への挑戦」をシンボライズするとともに、大地を切り裂くクレバスをイメージしている。スロープダウンするアプローチに始まるこの通路を軸に、展示室、ライブラリー、映像ホールなどが接続される。さらに通路は建築を突き抜け、池の上に張り出す眺望テラスまで延びていく。氷壁をイメージしたガラスのトップライトは地上に現れ、地下通路への自然採光の機能を持つと同時に植村直己の生涯と行動を刻印する「メモリアルウォール」として機能させている。来訪者は、彼が生まれ育った豊かな自然風景のなかで、冒険家の偉業を確認し、記憶する。そして彼の生涯に思いを馳せる。夜、闇の中に一条の光の帯として「メモリアルウォール」が浮かび上がり、強靭な意志が消えることなく自然と向き合っていることを象徴する。

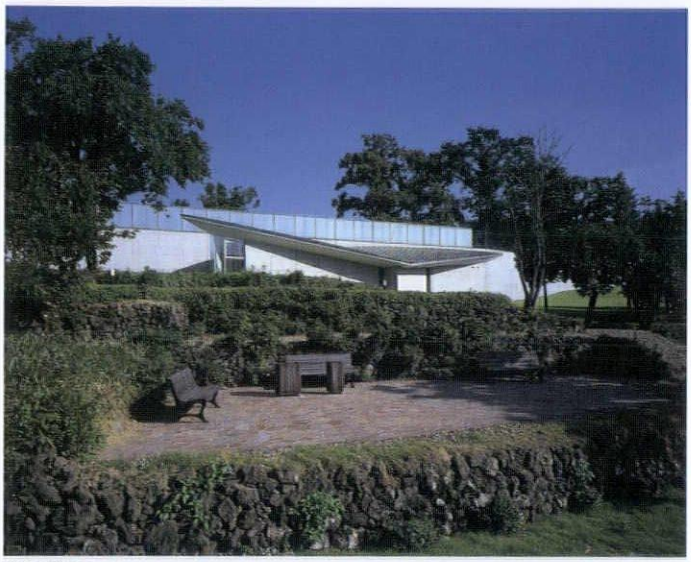


ランドスケープ

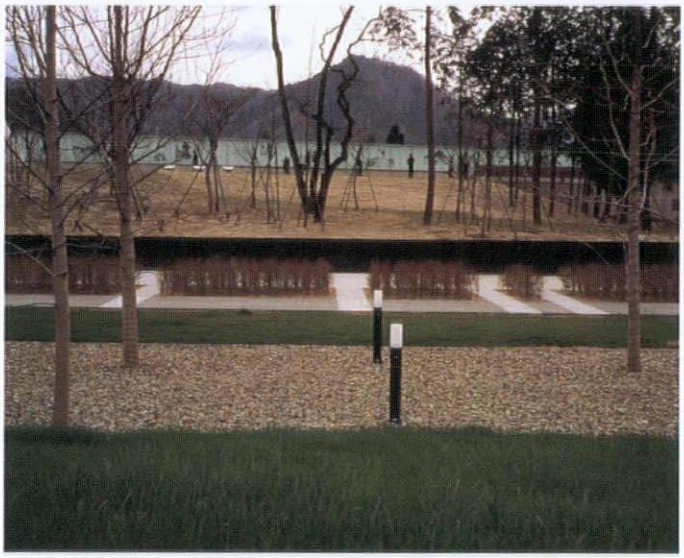
Landscape



メモリアルウォールと屋上広場

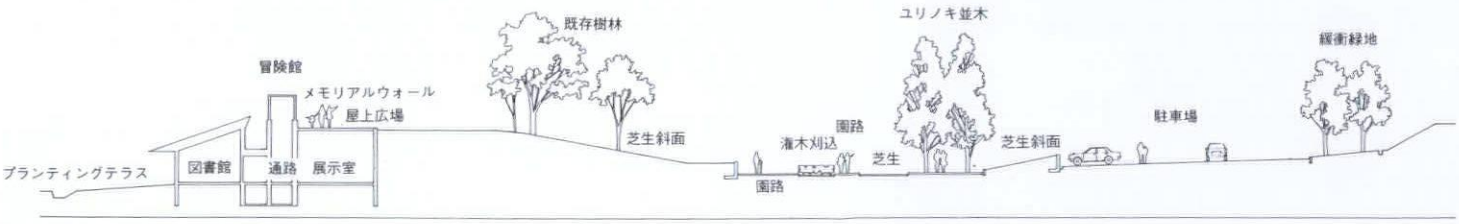


棚田と図書コーナー

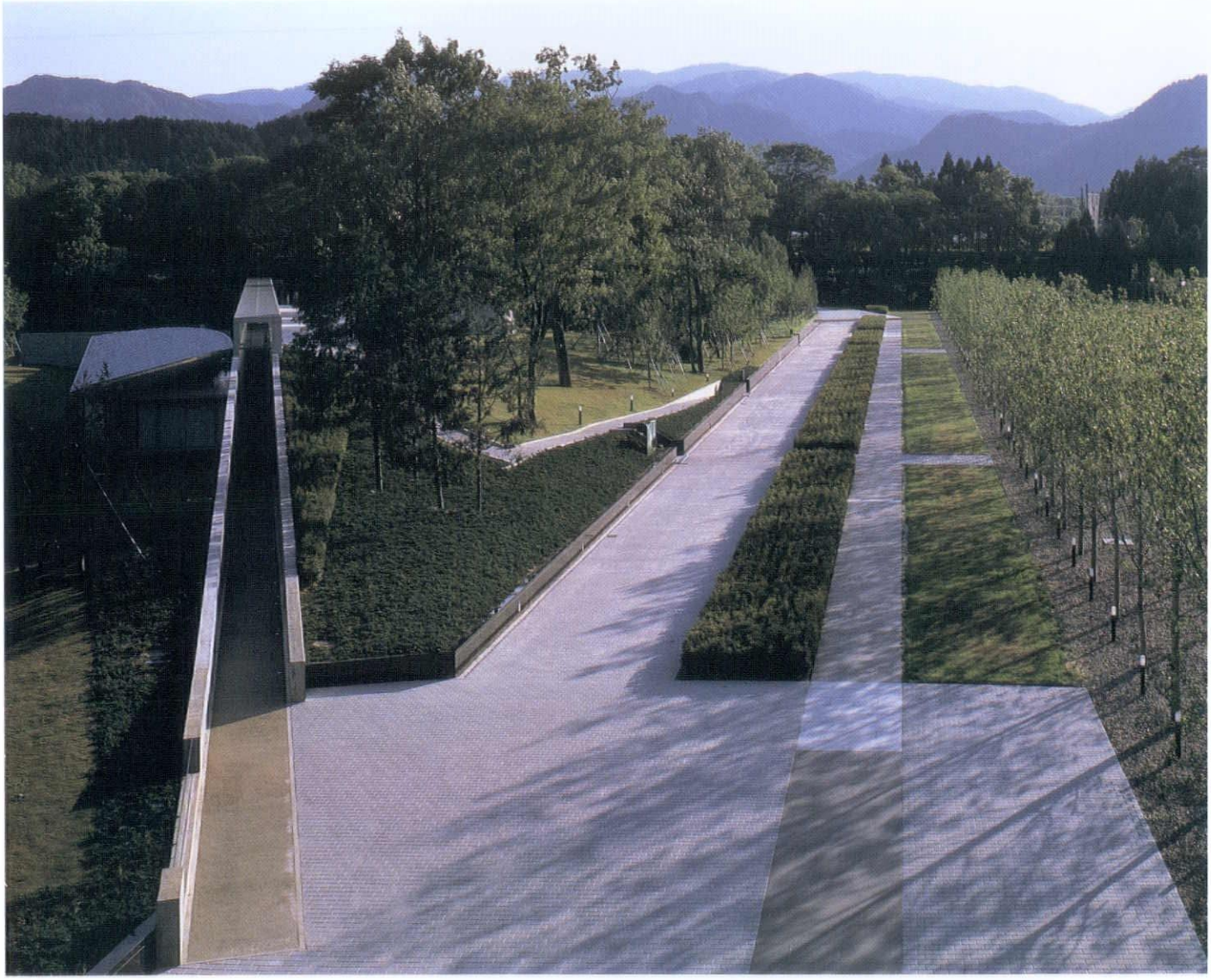


レイヤー状のランドスケープとメモリアルウォール

スロープエンド



断面図S＝1：600



風景を誘う建築

宮城俊作

幾重にも重なる但馬山地の稜線に囲まれた小さな盆地に、神鍋高原から続く緩やかな斜面がなだれ込み、その上に農地や樹林や集落のモザイクが織りなす田園風景が広がる。世界に名を馳せた冒険家植村直己の故郷の風景は、意外なほどに穏やかだ。しかし、この穏やかさに秘められたものが、氏の冒険家としての出自を意味するということ、そのことは、おそらくこの地に足を運ばずして感じることではできない。

植村直己にとって冒険という行為は、自然に対峙し、自然を征服することによって自己実現を果たすという一種のヒロイズムを追及したものではなかったはずだ。そのことは、様々な冒険の記録を綴った文章や写真、フィルムなどを通じて氏の足跡を辿ることによっても伺い知ることができる。そこには、生身の身体ひとつで自然に立ち向かい、人間の限界に挑むといった状況につきものの悲愴感はない。なぜなら、氏の行為は常に、自然に自らを馴化させることから始まり、自然に同化することによって、目的を達成するというプロセスを経ているからである。だから、文章や映像に現れる氏のイメージは決してそれだけが目立つことなく、ごくあたりまえのように穏やかな表情を見せて存在している。冒険というアクティブ（能動的）な行為であるにもかかわらず、その全体像はきわめてパッシブ（受動的）な方法によって表現されているのである。

自然に同化することによって透徹する人間の意志や尊厳は、自然を征服するヒロイックな行為に捧げられた賞讃よりも、はるかに力強く骨太である。〈植村直己冒険館〉は、自然に対してパッシブな存在表明を目指した故人の感性を育んだ原風景と、ここを訪れる人々の位置を繋ぐことを意図したコラボレーションの結果であった。

栗生明と共に初めてこの地を訪れたのは1992年の春。背景となる山々の稜線には残雪が光り、木々の芽ぶきが淡い緑のベールをかけていた。敷地は南下がりの緩やかな斜面に小さな沢が入り込む微地形に縁どられた優しい地形地である。そこには、連綿とつづられてきた人の営為と自然との相互干渉のありさまが、様々なかたちで既に存在していた。なだらかな斜面に石、それも人ひとりの力で動かせるくらいの大きさの石を積み上げてつくった棚田の跡、植林されたスギ林と雑木林、柿や栗の果樹など、これらは全て、人が自然に動きかけ、長い時間の流れの中でつくりあげてきたものである。それは、自然に同化しつつ人間の意志の存在を表現するという、ここでのテーマそのものの出自を象徴するものでもあった。

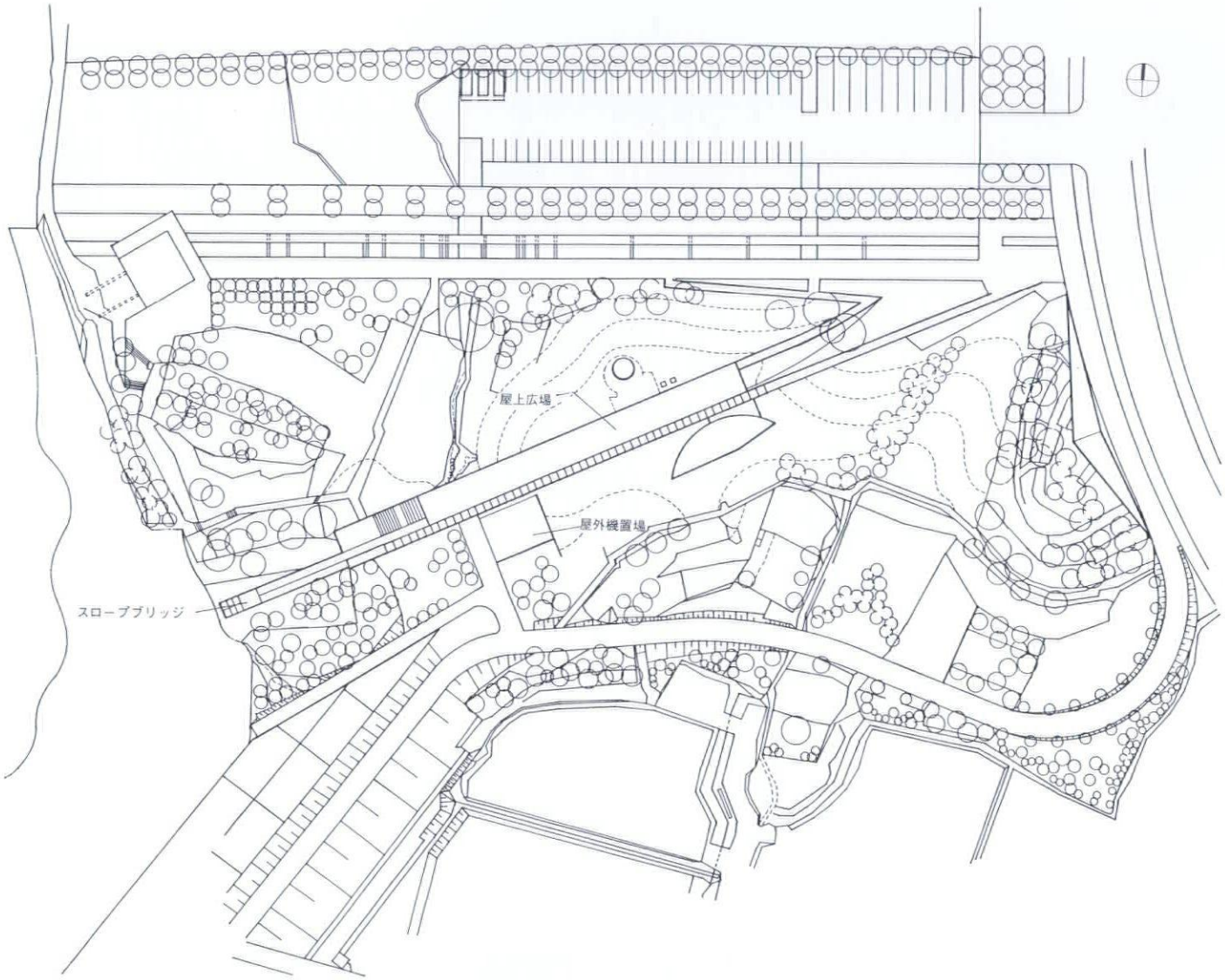
故にこの建築は、冒険という行為を刻印できるだけの剛直さを内包しつつも、この土地に同化する形態を指向している。建築の主軸となるラインが敷地に貫入する角度は、良好な既存樹林を避けつつ、棚田によって形成された微地形の変化が、最も顕在化するであろう位置に定められた。これによって、微細なランドフォームの変化が増幅されて知覚されるという効果を生み出した。北極圏を単独で横断する過程で植村が見たであろう氷原のクレバスを思わせる造形は、敷地を貫通する直線的な形態と内部空間のプロポーションによって、人間の強靱な意志の存在を表現する。来館者は、この細く長く深さのある空間を通り抜けることによって、冒険という行為のイメージを抽象的に追体験するのである。一方では、建築の大半が地中化され、通路の上部に架けられた長さ100mに及ぶトップライトだけが地上に顔を見せている。北側から見ると、このトップライトが直線的な見切りとなって、背景に連なる山の稜線の形が明確に捉えられ、その距離感が意識される。そして、山裾の好ましからざる景観要素は、視界から消去されている。あるいは、周辺に保全された樹木のシルエットが、ことのほか強調されるという効果もみられるであろう。さらには、トップライトのガラス面にプリントされた展示情報に対して自然に視線が導かれるよう前面の芝生のマウンドが整形されており、ランドフォーム、建築、緑、背景の山々が、ひとつの風景の総体として認識されるような場面設定がなされている。

この建築形態は、敷地のもつポテンシャルを最大限に顕在化させつつ、ここでの主題を体現し、それでいて建築としての強烈な存在感を主張するという、一見矛盾する課題に対する、おそらくは数少ない解のひとつであったろう。冒険館は、既存の風景の中で我々が気付かなかった部分を発見させる媒体として機能している。建築形態が投入されることによって、新たに見えてくるものがあったのだ。風景が建築に誘われるかのように現象するのである。

いつの頃からか、ランドスケープ・デザインを「造園」あるいは「造景」と解釈することに抵抗を感じていた。風景は造るものではないのであろうということを意識し始めていたのである。それに代わるパラダイムを見出せないまま、しばらく時間が過ぎていったのだが、〈植村直己冒険館〉におけるコラボレーションを通じて、何らかの手掛かりが得られたようにも思える。すなわち、風景は誘われるものであるということ。これは、ある意味で極めて受動的なインセンティブに基づく行為だ。しかし、物質的な環境を「造る」という行為が唯一クリエイティブなものを生み出す手段であった近代という時代背景を離れようとする現在、そこには必然的に意味の転換が求められることになろう。受け身であってもクリエイティブであることが発生する土壌は、少しずつ熟成し始めているはずである。

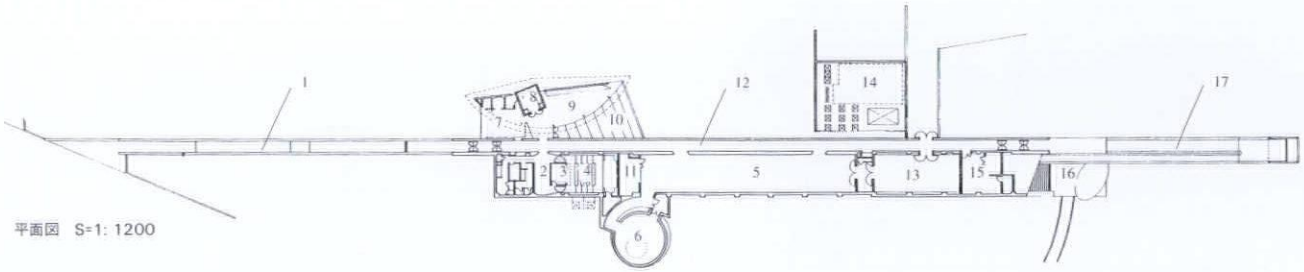
栗生明とのコラボレーションは、この仕事を皮切りに〈パトリ＋清里フォト・アートミュージアム〉、〈岡崎マインドスケープ・ミュージアム〉へと続いた。いずれの場合も、それぞれ固有の環境の中に置かれた建築によって、風景が立ち現れるべき場の素形が提示されていた。我々の仕事は、そこに初期値を与えることによって、風景を現象させる状況設定を行うことであったように思う。ただ、いつの時も、そこに想い描かれる風景に向けられた彼のしなやかな感性と柔らかな眼差しを意識しないことはなかった。

●みやぎ・しゅんさく／ランドスケープ・アーキテクト、千葉大学助教授

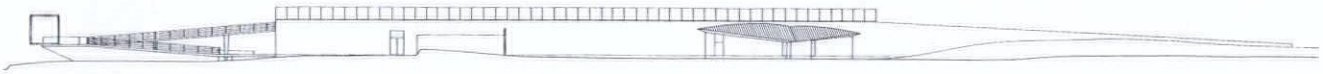


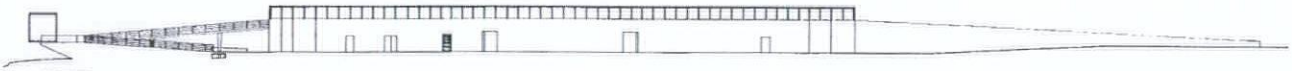
配置図　S=1: 2500

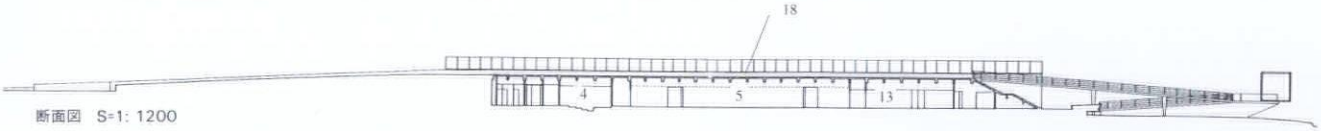
1: スロープ
2: ホール
3: 調整室
4: 視聴覚室1
5: 展示室1
6: 展示室2
7: 事務室
8: 書庫
9: 図書室
10: テラス1
11: 機械室1
12: 通路（上部トップライト）
13: 収蔵庫
14: 屋外機置場
15: 機械室2
16: テラス2
17: スロープ・ブリッジ
18: 屋上広場



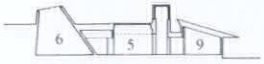
平面図　S=1: 1200


南側立面図


断面図



断面図　S=1: 1200



断面図

時間のない世界

飯島洋一

1．潜在的欲望

栗生明は、その作品において、必ずしも方法論やスタイルを明確なものとしない作家のように評されることがある。彼の建築には、取り立てて強い個性を感じない、というわけだ。なるほど、たしかに彼は、打ち放しなら打ち放しを毎回繰り返すようなことはなく、一貫して装飾的、あるいは彫刻的な作風によっているわけでもない。むしろ、彼はその都度その都度、与えられたプログラムや敷地にもっともふさわしい回答を、積極的に提示してゆこうとするタイプの建築家だといえるかもしれない。

一般に栗生明に投げ掛けられる個性的とは言えないという評価も、彼が作品の中に、まず自身の強い内的欲求を露呈することをしない特性から来ていると思われる。その結果、これまでの彼の作品をみると、そこにメタリックで軽快なもの、ガラスの透明感あるもの、石張りの荘重なもの、さらには有機的な、あるいは彫刻的な造形というように、一作ごとに異なる建築のありようを見出す結果となってしまうのわけだ。

いま述べたことをより具体的に確認したければ、実際に彼の最近作を眺めてみればいい。たとえば一本の強い軸線に、多様な形態が絡み付く〈植村直己冒険館〉(1994年)、中央の長い動線を基軸に、左右対象の風景が展開する〈パトリ＋清里フォトアートミュージアム〉(1995年)、温室をイメージしたような巨大な箱型にイスラム的な造形が織り込まれた〈チューリップ四季彩館〉(1996年)、実現はしなかったが、どこかしらヴァナキュラーなイメージの屋根が連なる〈世界都市博覧会：青海2地区会場計画〉(1995年)、ガラスの箱の中に、さまざまな機能が入れ子式に挿入された〈コア山国〉(1996年)、遺跡のような基壇部の上に、反りあがる屋根を持つ棟と、ハイテックなガラスの棟が対峙的に並ぶ〈岡崎市美術博物館〉(1996年)といった作品がそれらである。そこにはここ数年間に思考された、彼の秀作ばかりが並んでいるにもかかわらず、繰り返すように何らかの、明晰な作品相互の共通項目を見出すことがたしかに容易ではない。

もちろん、〈植村直己冒険館〉と〈パトリ＋清里フォトアートミュージアム〉のように一本の軸線という共通性があったり、また〈チューリップ四季彩館〉や〈コア山国〉のガラスという共通性が発見できるという人もいるだろう。後に述べるように、それはある部分では正しいのだが、それにしても全体として眺めた時、栗生がそうした作品群を相互に結びつけながら意図的につくっているとは言えないとする評価も、一面を突いていると思えるのである。そしてそこからみても、彼はその時々に提示された条件に対し、それに答えるかたちで建築をつくってきたのだと言われてしまうと、それを即座に否定することができなくなるのだ。

さらにいま述べたことを、初期の作品から概観するとどうなるだろうか。大屋根が特徴的な処女作である〈高島邸〉(1980年)、色彩を華やかに演出した〈群馬県営相生住宅団地〉(1995年)、貝殻のような有機的感覚を造形に取り入れた〈神慈秀明会黄島神殿〉(1989年)、浮遊する、軽快なイメージの〈井上誠昌堂金沢オフィス〉(1988年)、それにガラスの温室の中に都市を封じ込めたような〈カーニバル・ショーケース〉(1988年)という具合に、そこでもやはりひとつの方向性よりも、むしろそれぞれがバラバラな印象を強く感じざるを得ない。もちろん、これら過去の作品にも、何らかの相互につながるべき特性は見て取れるのだろうが、やはり全体として眺めると、それぞれのケースによって栗生が個々の回答を出してきたと考えた方がまずは理解しやすいのだ。

ともあれ、以上のことからも、栗生明という建築家は、何かひとつの強い思想やスタイルに基づいて作品を練り上げるタイプではなく、その都度もっとも洗練された解答を提出する作家であり、したがって栗生は、必ずしも強い個性を持った建築家とはいえないという先の評価は、とりあえずの見方として、この建築家のありようをうまく説明するもののように思えてしまう。

しかし本当にそうなのだろうか。たしかに、いま述べたような、栗生のスタイルのないスタイルを、私自身も一応は認めざるを得ないのだが、しかしそうした一連の彼の作品の内部は、単にバラバラなものの集まりだけにも思えないのである。そこには、何か見えない、単なる表向きのことに留らない共通項が潜んでいるという観点は果たしてあり得ないのか。そのことを、ここで私は考えてみたいのだが、それは言ってみれば、栗生の建築における「潜在的欲望」というか、その根元に隠れたある種の「水脈」のようなものを抽出する作業と

植村直己冒険館

なるはずである。

2．標本都市

ではその「潜在的欲望」あるいは「水脈」とは何か。それは具体的にいうと、一体どのようなものなのか。それを見付け出すためには、私達はまず、栗生の建築に、大きくふたつの特性があること発見しなくてはならない。そしてそのふたつの特性が実は根のところで、あるひとつのものとして接合されていると推測したいのだが、ここでは結論を急がずに、まずそのふたつの傾向のうち最初のものの検討をはじめよう。最初に指摘したいのは、先にも触れたが、入れ子というか、ガラスによってある空間を包み込んでゆく彼の手法である。

この手法は、最初期では〈人形町佐七ビル〉(1982年)や〈サンスクエア・ヤマノタ〉(1981年) などにその痕跡を発見できるが、明確なものとなって私達の前に姿を現したのは、先にも触れた〈カーニバル・ショーケース〉においてだ。〈カーニバル・ショーケース〉は兵庫県の丹波篠山につくられたもので、ここではひとつの都市というか、ひとつの町並みが人工的に設置され、それが大きな温室めいたガラスのパッケージに、すっぽりと包み込まれた格好をなしている。こうした空間は、ひとつにはこの地方に雨が多く、また雪が降る時の対応という地域性から生み出されたアイディアなのだが、そのため来訪者は町の中の「もうひとつの町」とでもいうべき空間を、季節や天候の如何に関わりなく、いつも同じような感覚で歩き廻れるわけだ。

しかし逆にいえば、そのことはガラスのショーケースの中では、通常の季節感は感じられないし、天候もあまり関係してこないことを意味している。ある意味で徹底した人工性を持つ都市、たとえば「都市そのものを展示してしまう」ような冷ややかな遊戯性が、ここで示されているのだといっていい（遊戯性といま書いたが、それはこの施設には空中自転車が設置されていて、それに実際に乗ってみた時の感覚というのが、まるで遊園地のようなものだったということからも言っておきたい点である)。

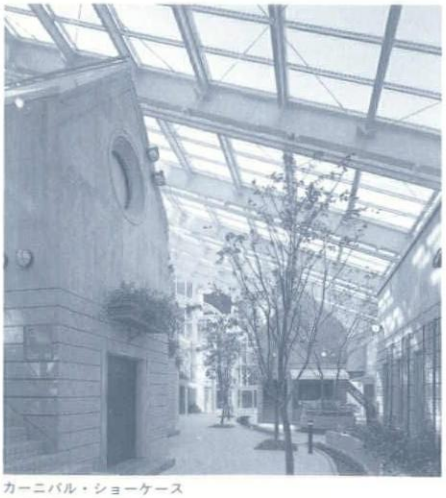
そうしたこの〈カーニバル・ショーケース〉で試みられた温室と入れ子の手法は、その後も最近作の〈チューリップ四季彩館〉や〈コア山国〉で、より明晰に繰り広げられることになるのだが、ここで注目したいのは〈コア山国〉のほうだ。私はとても暑い夏の一日、大分県の山国町にあるこの作品を見に出掛けたのだが、建物の第一印象は、これが以前に見たことがある彼の〈カーニバル・ショーケース〉と、どこかしらで密接に結ばれている建築だということであった。

〈コア山国〉は、大分の日田市から車で40分ほどいった、人口4千人ほどの小さな町にある。あたりには民家などがいくつかまばらに建っているだけで、娯楽施設などもほとんど見当らない。〈コア山国〉は、そうした山間の小さな町の施設であり、過疎化へと向かう中につくられた町お越しの一環として、位置付けていいものなのである。

施設は機能的には町役場やギャラリーや図書館、シアター、塔などの諸施設からなっている。そしてそうした諸施設が、ここではあたかも西欧の山間の町のように、塔を中心として、いくつかの集合体となって表現されている。そのためこれを全体として眺めると、集落のような、どこかノスタルジックな感覚を見ることができる。ただその一方で、いま述べたそれぞれの棟の多くは銀色の外装をまとっているため、大変モダンな印象も見る者に与えずにいない。さらにそのある部分が、先にもいったように巨大な温室めいた、ガラスのパッケージで包み込まれているから、余計そうしたモダンなデザインという印象がいよいよ強まってゆく。

モダンであり、かつ〈カーニバル・ショーケース〉がそうであったように、ガラスに囲まれた内部は、人工的な、冷ややかな都市というイメージを強く感じさせる。もちろんガラスの中ではタウンホールと呼ばれる広場が展開したり、いくつもの路地が設けられたり、「山辺の道」と名付けられた空中の歩廊がつくられているため、それらが複雑に折り重なると視覚的に多層な、実に豊かな空間を体験することができるし、また光が極端に強く射し込む場所と、裏路地のように暗い場所との明と暗とがうまく演出されていて、全体は単純な構成でありながら、内部を歩くと意外で錯綜した表情に数多く出会うことが可能だ。

またガラスの箱の前には池が張られ、その池の中に1本の高い塔が建っているため、それがとかく硬質なこの施設全体のデザインを、逆に柔らかで優しげなものに見せる効果を見



カーニバル・ショーケース

せていることも指摘しておく必要があろう。そうした工夫はいろいろと感じられ、それらが先にも言った硬質で冷ややかな、この作品の人工性を随分と和らげてはいるのだが、しかし全体としてみれば、やはり何もない山間の町に、いささか環境と異質ともいえる銀色とガラスの建物が強引に置かれているといった感をどうしても拭うことはできないのである。

加えていえば、〈コア山国〉はいま述べた施設のデザインだけでなく、施設に盛り込まれた機能や諸施設の内容までがあまりに「都市的」なため、都会のミニチュアがこうした山間の町の中に、それこそ入れ子状につくられているといった印象も人々に与えてしまう。結果として、過疎化へと進む中での町越しにしては、あまり地域性を考慮していないのではないかとさえ言わざるを得なくなる。

いずれにせよ、〈コア山国〉の冷ややかな人工性と都市性は否定できないものなのだが、ここではそれを顕著なものとする、ガラスの箱で「都市」を包み込む栗生の設計手法が、一体、どのような欲望の表明なのかという点に関心を移してゆきたい。その際に私は、そのような、ガラスの箱に都市を封じ込めたいとする彼の欲望に、いささか唐突なのだが「標本」という言葉を思い浮かべたのである。

「標本」とはいうまでもなく、昆虫標本のように、「生」あるものの、その生きられた時間をある地点で人工的に凍結してしまい、いわば永遠の時間の中にそれらを封じ込めてしまう行為である。そしてそれらの静止した時間の中に封じ込められたものたちは、整然と並べられ、ガラスの箱で押し殺され、封印をされる。結果としてその内部には、当然のように未来もなければ過去もない。季節も、時間の移ろいも何もかもが、そこではピタリと止まってしまっている。それは言うなれば「死の空間」である。

誤解を恐れずにいえば、私は栗生の建築の、整然と並べられたもうひとつの都市風景がガラスで包まれたさま（それは「ショーケース」という命名からも、「陳列されたさま」と言い換えてもいいのだが）に、ガラスの「標本箱」と同じような、人工化と、時間のない世界、生きられた時間から引き離されたようなイメージを強く感じたのである。

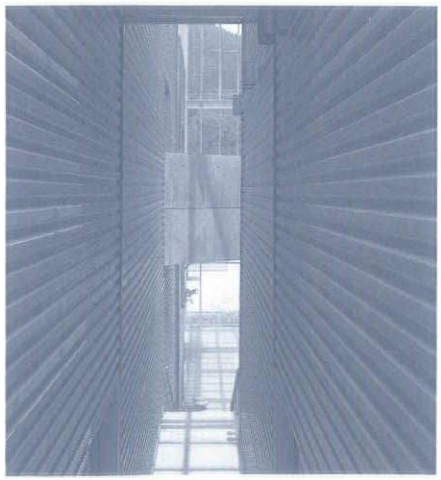
そして実は、その時間の喪失の感覚こそが、ここで私が言いたい栗生の建築の根元にある「潜在的欲望」であり、「水脈」にほかならないのだ。栗生の建築の内部にいると、多層な空間をいろいろと動いているのに、一方でどうしてもリアリティというものを感じることができない。彼の建築には、人工性の方を強く感じてしまう。そこからは、生きられた、全体の見えない持続性よりも、むしろ予定調和的なイメージがつねに漂う。しかし私はそうしたイメージを、何も否定的にのみ語りたいわけではない。むしろそれこそが、栗生明の建築の魅力なのだとここで言ってみたいのである。

3．廃墟への志向

いま述べてきた事柄は、栗生の建築に見られるもうひとつの特性を論じてみれば、より鮮明になる問題なのだが、私がそのもうひとつの特性について論じる際、どうしても触れておきたい彼のプロジェクトがある。それは彼の〈香港ピーク国際設計競技案〉の応募案だ。ビトクリア・ピークと呼ばれる絶好のロケーションを持つ丘の上につくられる予定だったコンペへのこの応募案は、他の何人かのメンバーと共に栗生が提出したものだが、それは傾斜を持つ敷地の上に、何本もの巨大な円筒形を立ち並べるというアイディアであった。

栗生の建築は、これまでにも述べてきたものも、きわめてシンプルな構成をなすものが多いのだが、これはその中でも、もっとも明快で直接的な作品であるということができるだろう。丘の上に、ただ円筒だけが立ち並ぶ風景……。それは明らかに、私達にあのギリシアのパルテノン神殿などの、古代の遺跡や遺構のことを思い出させる。つまり栗生は、ここで丘の上に立ち並ぶ、というよりは崩壊し、残存している廃墟としての柱の風景の、イメージの転移を計ろうと試みたのではないだろうか。

そしてこの遺跡、もっといえば「廃墟」というテーマは、不思議に栗生の、その後の作品にも投影され続けているように見える。たとえば他の例として、先にも述べた〈植村直己冒険館〉をあげることができよう。というのもこの作品は、自然の中に埋められたコンクリートの真直ぐな壁や、散乱するいくつかの形態によって構成されたものであり、そのイメージは、新しくそれらの破片を敷地の中



コア山国

に埋めて見せたというよりも、何かずっと以前から、それらがそこに存在していたというような、考古学的感覚を喚起させる。いわばそれは、巨大な建築物の、埋もれていた一部を発掘した痕跡のようにも見えなくないのである。

似たようなことは、〈パトリ＋清里フォトアートミュージアム〉についてもいえる。たとえば、建物中央を突き抜ける柱と階段の通路には、遺跡や廃墟にありがちな、列柱が延々と続く光景とどこかダブっては見えるが、遺跡のイメージということでいうならば、私達は何よりも、彼のもっとも新しい作品である〈岡崎市美術博物館〉についてより詳しく語らねばならない。

愛知県の岡崎市に出来たばかりのこの建築は、名鉄の東岡崎駅から車で15分ほどの、町の中心部から外れた広大な岡崎中央総合公園の一角にある。敷地はかなり高低差のある傾斜地だが、私達はここでまず、北側の、傾斜地の敷地の一番高い場所につくられたメインエントランスから、ゆるやかな階段を使ってゆっくりと施設へアプローチする。まず目の前には、広場が設けられている。広場の上には、ふたつの建築があたかも対峙するかのように展開しているが、その一方はガラスの箱であり、もうひとつは反りのある屋根を持つ、柔らかな感覚のデザインの棟となっている。また敷地に高低差があるから、平らな広場をその先端まで歩いてゆくと目の前がいきなり開放され、池と樹木の広がる雄大な自然が姿を現す。

広場からガラスの棟の内部に入ると、そこはミュージアム・ショップなどの機能で成り立っている。この吹き抜けのガラスの空間では、コンクリートの四角い柱が連なる風景や、ハイテックな感覚の構造体を見付け出すこともできる。また入ってすぐに、下降してゆく長いエスカレーターがあって、そのエスカレーターで階下へと下りると、そこには美術館の入り口が待ち受けている。ここではじめて、先に見た広場の真下が美術館となっていることに気付かされる。さらにもうひとつの、反りのある柔らかな屋根を持つ棟はレストランなどを内包するもので、いわば美術館は、このふたつの特徴的な対峙する棟の間に挟まれたかたちで広場の下に埋もれているのである。

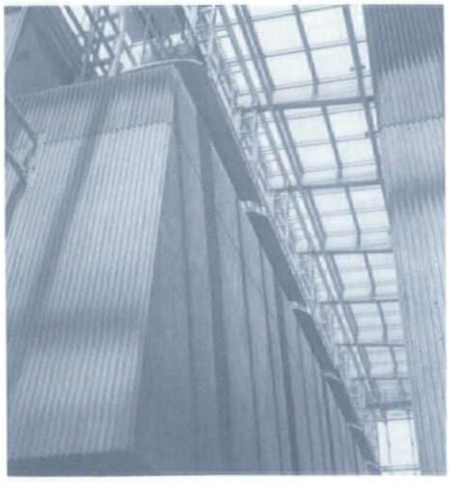
美術館から外に出ると、大きな劇場的な階段があって、それを使って南側の、敷地のもっとも低い部分へと下りて行くことができる。この階段と並行して、広場から下へと下りることのできるスロープもつくられており、階段とスロープは機能的にも視覚的にも一体化している。さらに階段の一部はずっと池の中に突き出すように延びており、その階段の一部は滝になっていて、滝の水は池に落ちてゆく。この階段、滝、スロープの仕掛けによって、施設全体が周囲の自然環境と途切れることなく、ひとつながりとなったものとして感じ取れるわけだ。

ところで階段を降り立った場所から、つまりメイン・エントランスと全く逆の南側からこの建築を見上げると、それはまるで古代の遺跡や遺構のようなイメージにデザインされていることに気が付く。巨大な、劇的ともいえる階段、それにスロープの側壁が幾重にも折り重なる光景……。その重厚さは、これもまた、先の〈香港ピーク国際設計競技案〉などとは別のかたちで、どこか古代の遺蹟や廃墟を連想させずにはいない。

しかしなぜここにおいて、私は遺跡や廃墟のイメージを繰り返し強調しているのだろうか。それは遺跡や廃墟もまた、先にも触れた「標本」と同じように、生きられたこの現実の時間に存在しながら、しかしその生きられた現実の世界を「生きている」ものではないからである。つまりそれらは日常に埋もれた非日常であり、私達の生の営みの向こう側、言ってみれば永遠とか、無時間とか、さらには「死」とさえいえるものに大変近い世界なのだ。その意味において、建築の標本化も、遺跡や廃墟への志向も、ともに同じ「時間のない世界」を生きているものの隠喩であることが理解できるのである。

本論の冒頭で私が述べた、栗生の中のふたつの特性とは、繰り返すがそうしたガラスのパッケージ化による標本的欲求と、遺跡や廃墟への志向性であり、そこにはどちらも、時間を喪失した、この日常とは別の世界への欲求の表れが強く見える。栗生は、そのひとつひとつが一見するとバラバラに思考されたような建築の中で、しかし一個の水脈として、そのような「時間のない世界」を希求しているのである。そしてその問題こそが、この論で私が指摘したかった、栗生明の建築的表明の所在にほかならない。

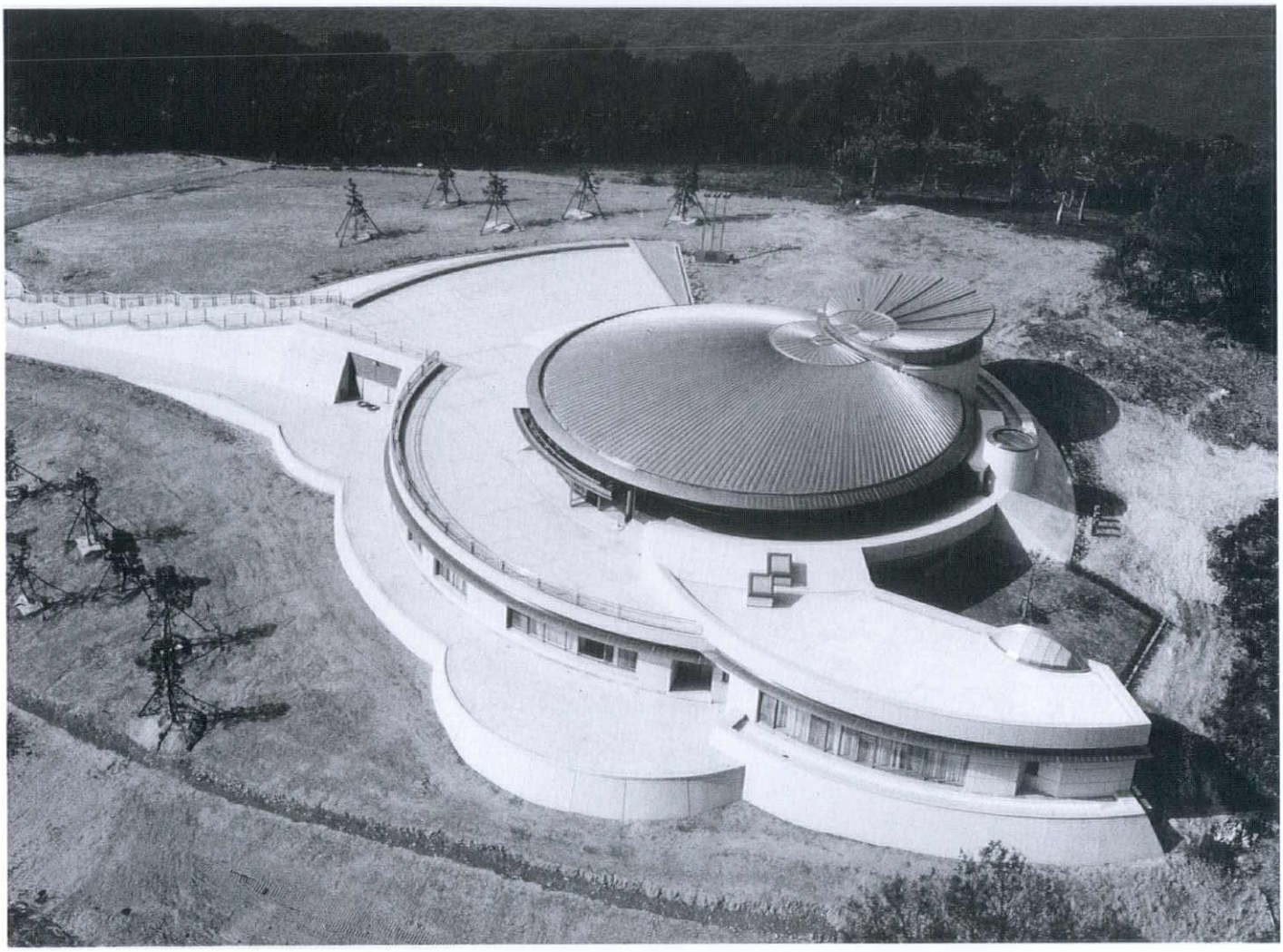
●いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授

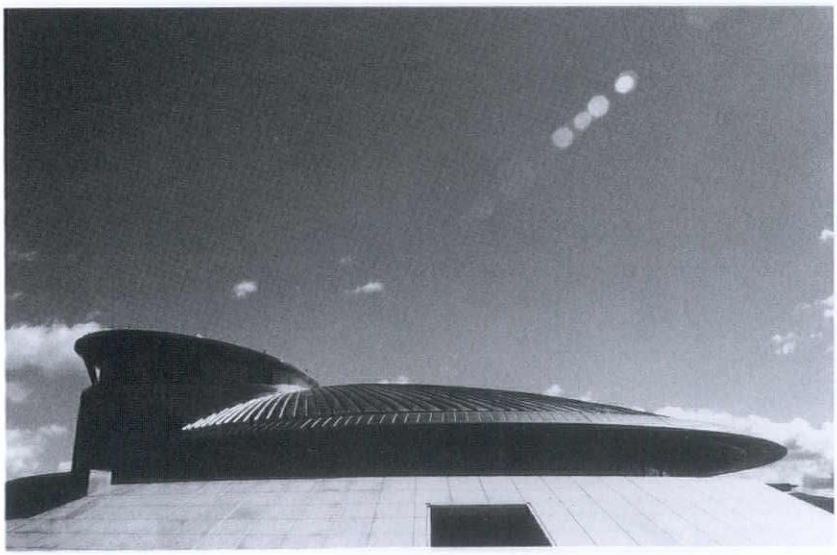


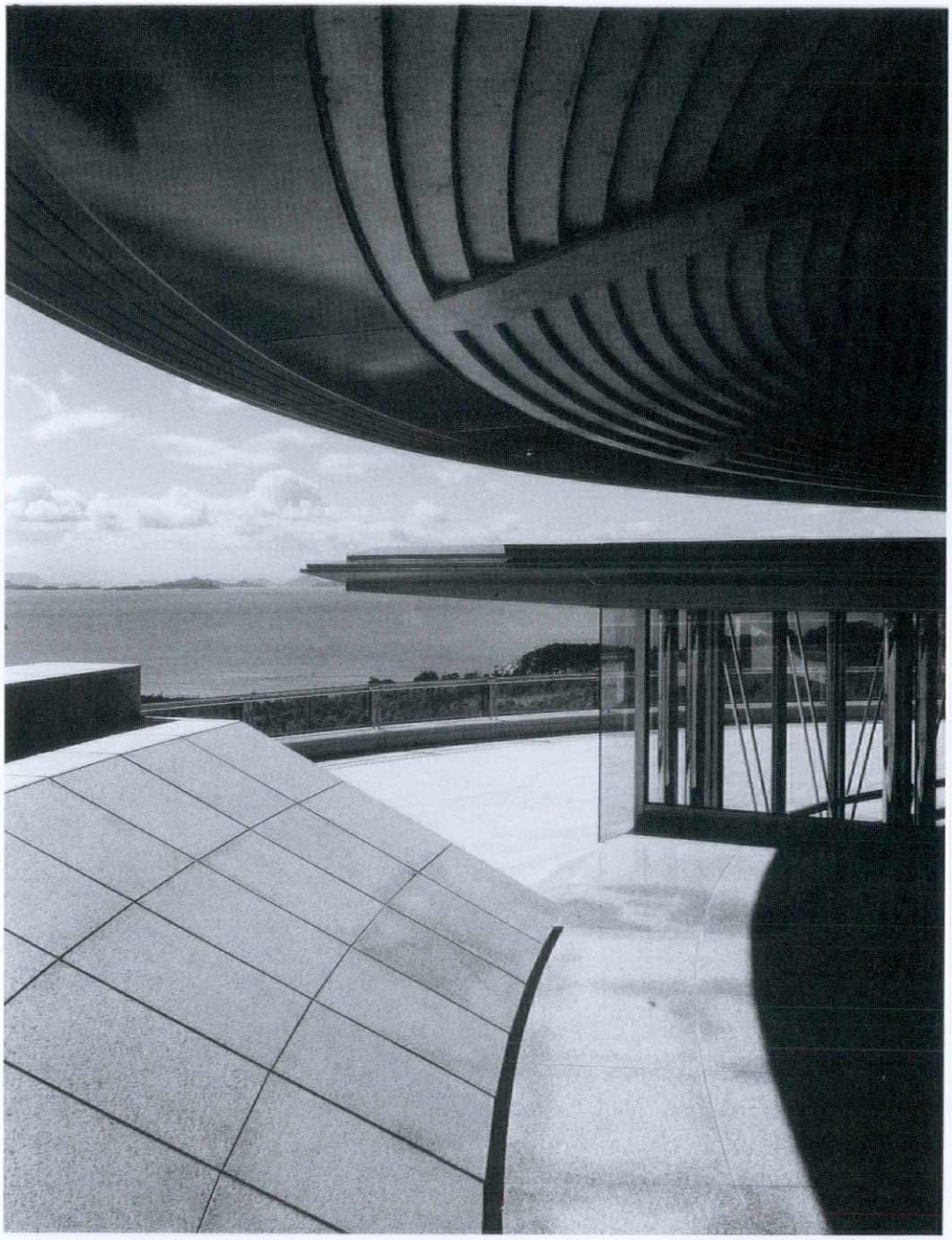
岡崎市美術博物館

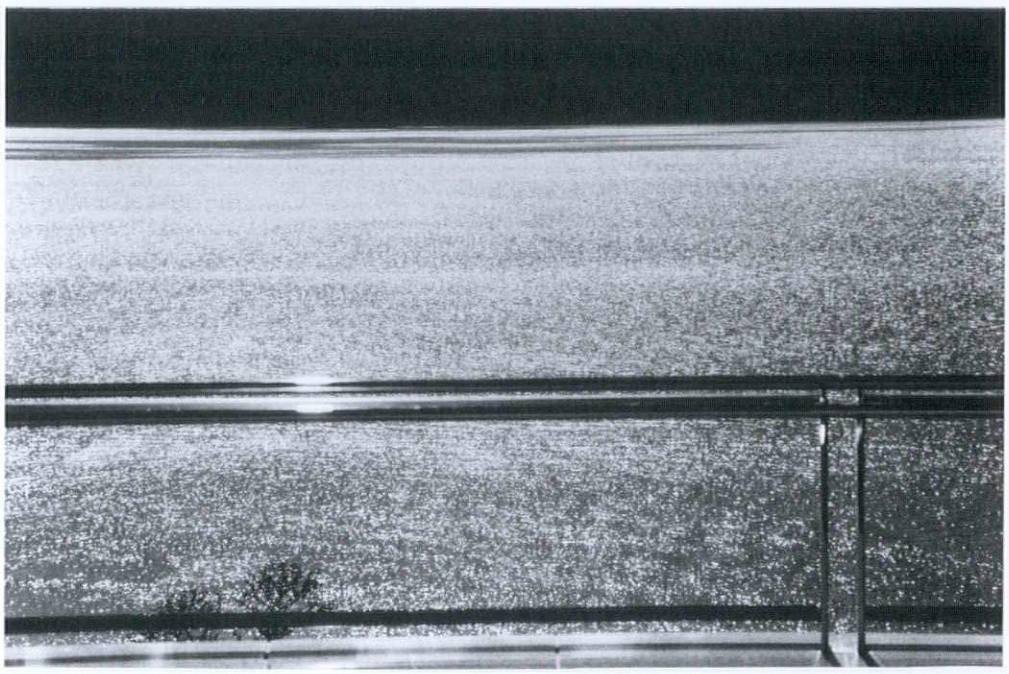
神慈秀明会黄島神殿

Shinjishyumeikai the Kishima Shrine





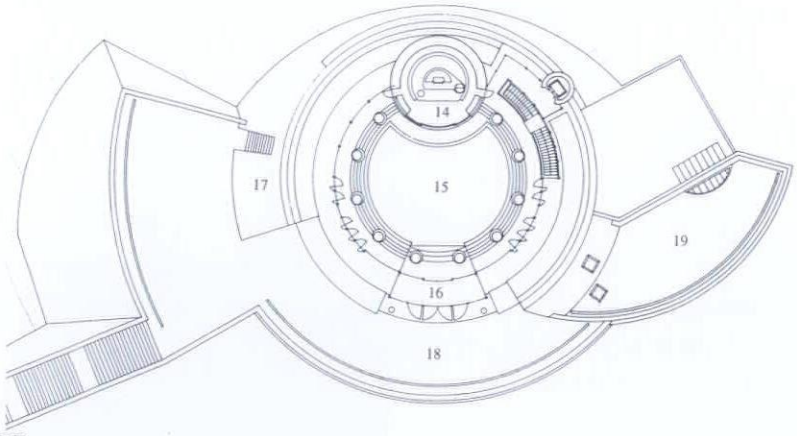




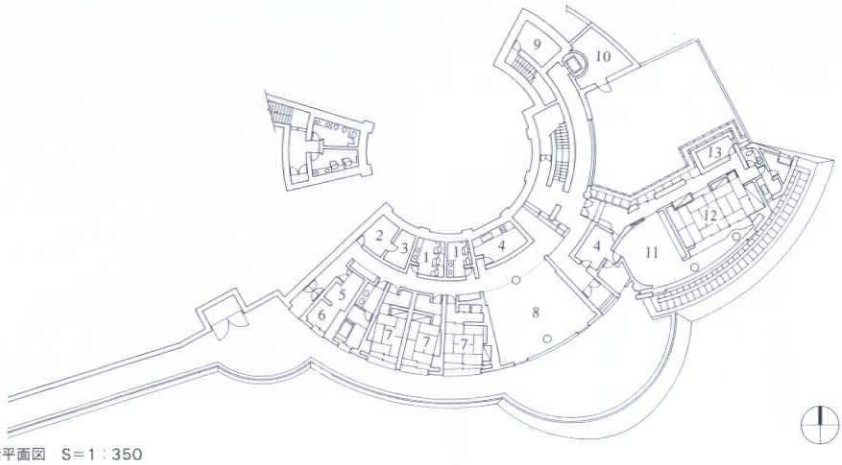
瀬戸内海に浮かぶ無人の小島・黄島の頂に神慈秀明会黄島神殿は建っている。

滋賀県にあるミノル・ヤマサキの手になる神慈秀明会の教祖殿が、富士山をイメージした「反(そり)」のかたちをしているのに対し、この黄島神殿は「起(むくり)」のかたちを採用した。それは、黄島のなだらかな稜線からイメージされたものであり、また古くから信仰の対象となってきた多くの山々の姿からイメージされたものであり、同時に「海の神殿」として貝殻をイメージしたものでもある。

この柔らかな曲線を描く屋根はコンクリートシェルによって成形され、島の姿に溶け込むようなシルエットを持っている。その深い庇の懐に入ると、瀬戸内海の美しい風景がパノラミックに展開する。この黄島神殿では、屋根の形状によって自然の景観に馴化させ、またその屋根を介して自然環境を内部空間に取り込むことが意図されている。

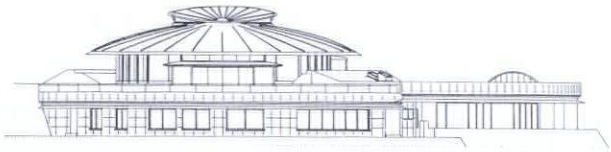


2階平面図

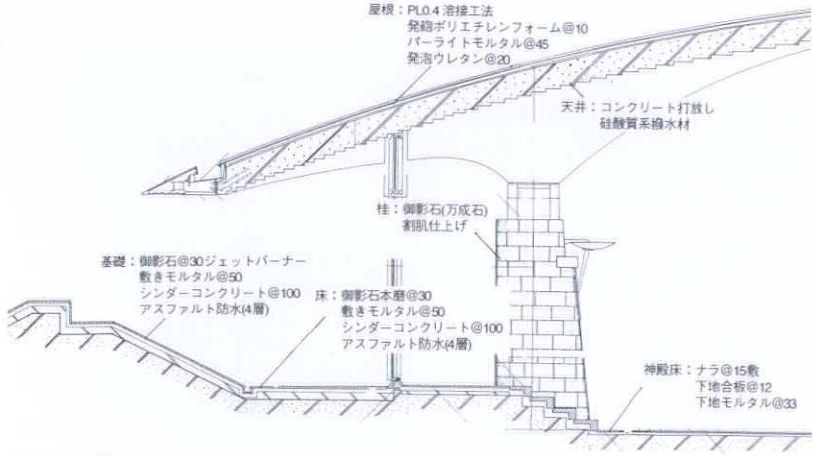


1階平面図　S=1：350

1：便所
2：倉庫
3：機械室
4：厨房
5：管理者
6：奉仕者室
7：宿泊室
8：会議室
9：献饌
10：エレベーター機械室
11：会主室居間
12：会主室和室
13：納戸
14：拝殿
15：神殿
16：風除室
17：フロントプラザ
18：眺望テラス
19：会主室屋根



立面図　S=1：350



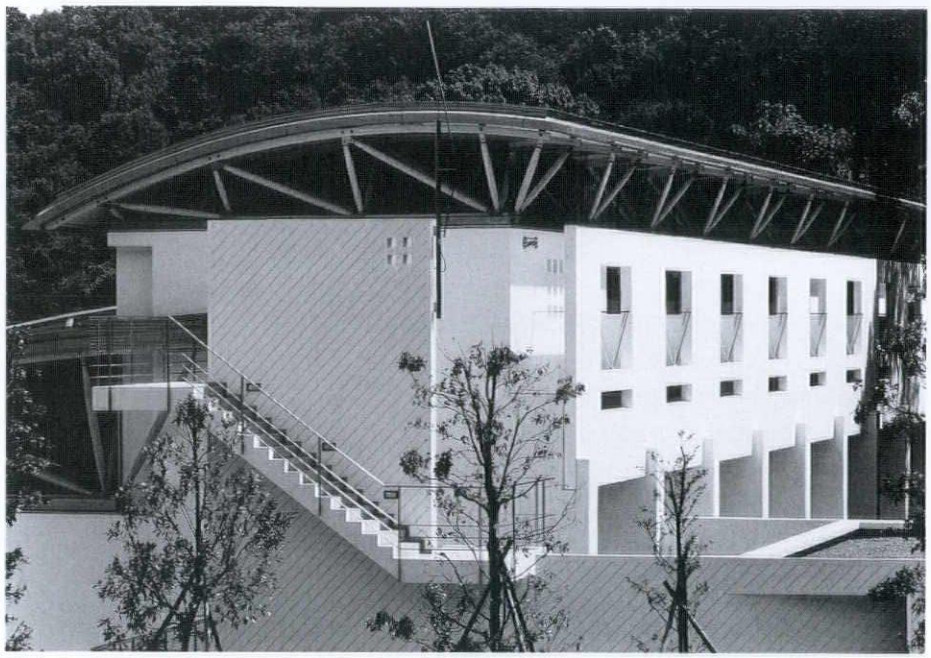
断面詳細図　S=1：50

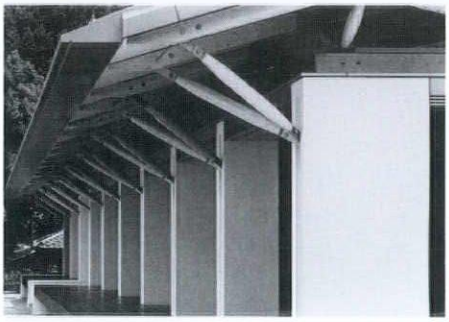
神慈秀明会黄島道場
Shinjisyumeikai the Kishima Hall

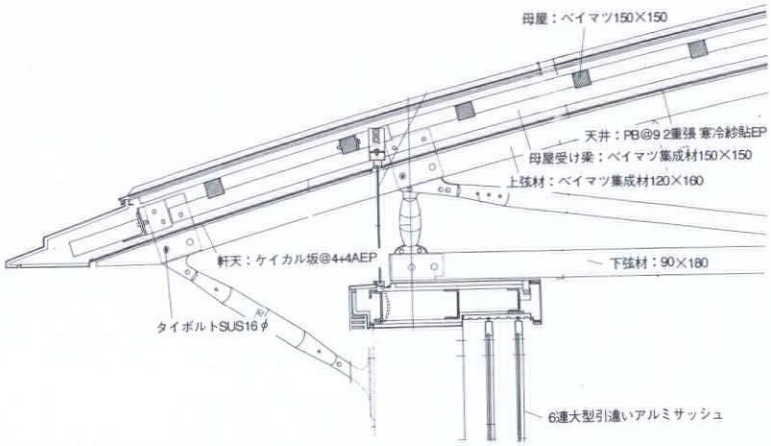
黄島神殿への参道の入口に建つこの建築は、信者の宿泊研修道場である。

前面の海からの波形をイメージさせる柔らかな曲面の屋根は、鉛筆を削り出したような集成材の立体トラスによって軽々と支えられ、膨らみのある内部空間を抱えている。

建築を瀬戸内の自然の景観に馴化させるとともに、自然そのものを建築内部に取り込むことが意図されている。

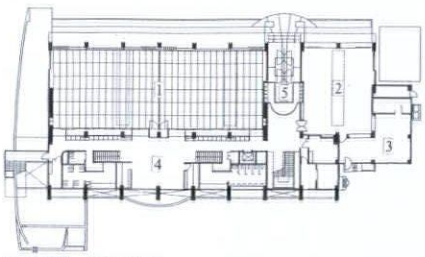




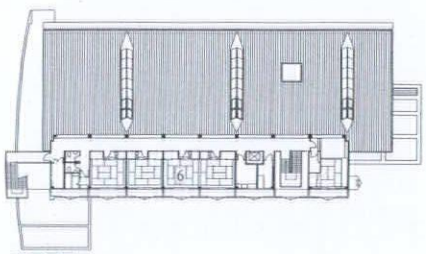


断面詳細図　S＝1：50

1：大広間
2：食堂
3：厨房
4：ラウンジ
5：エントランスホール
6：和室



1階平面図　S=1：1000

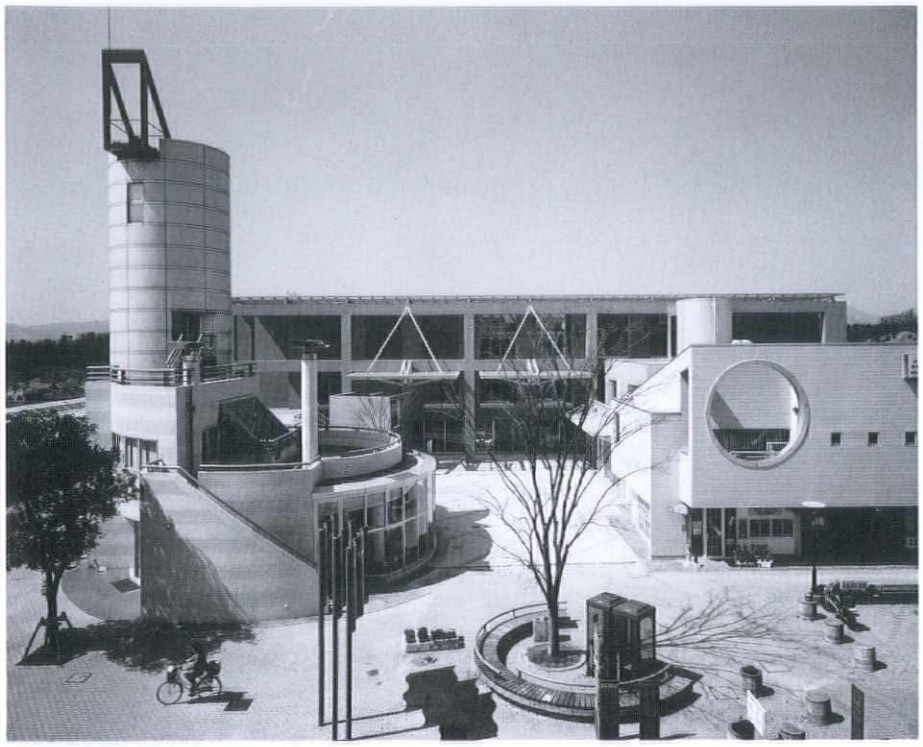


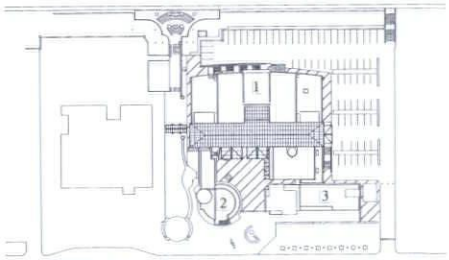
2階平面図

鳩山ニュータウン・タウンセンター
TownCenter in HatoyamaNewTown

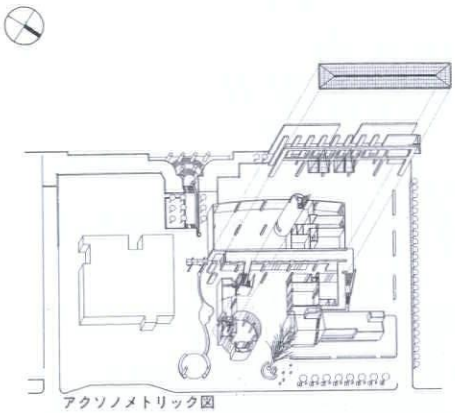
都市は本来ノイズに満たされた場である。様々な意図とそれに伴う多様なアクティビティが多様な形態を持って立ち現れ、それぞれの自己主張が衝突することによって「都市的なもの」が形成されていく。

鳩山ニュータウン・タウンセンターは、この均質な新しい街にノイズを発する異物（オブジェ）として計画された。複合された諸施設の接続部分に生まれる余剰の空間が都市的な機能を引き出し、無目的に集まる人々を飲み込んで、都市の楽しさを増幅する。





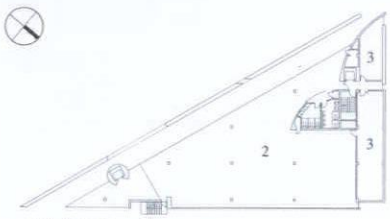
配置図　S=1：3000


アクソノメトリック図

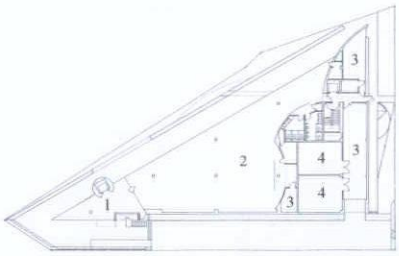
1：タウンセンター(III期)
2：インフォメーション・センター(I期)
3：飲食棟(II期)

セキショウつくばアネックス
Sekisho Tsukuba Annex

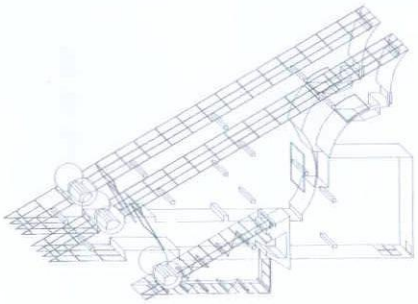
全体の枠組みを構成するフレームと、自立したスクリーン、それに様々な形態を持つマッスとの組み合わせの残余空間として、オフィス空間は捉えられた。南側のスクリーンは視線を制御しつつ、自然環境を内部に導入する光庭を形成し、孤を描いたスクリーンは便所や倉庫、更衣室を覆い、エレベーター・シャフトやラウンジがマッスとして貫入している。こうした諸要素が優先的に独自の性格を持って配置され、その結果生まれる未完結なネガティヴ・スペースは、様々な場とシーンを獲得する。

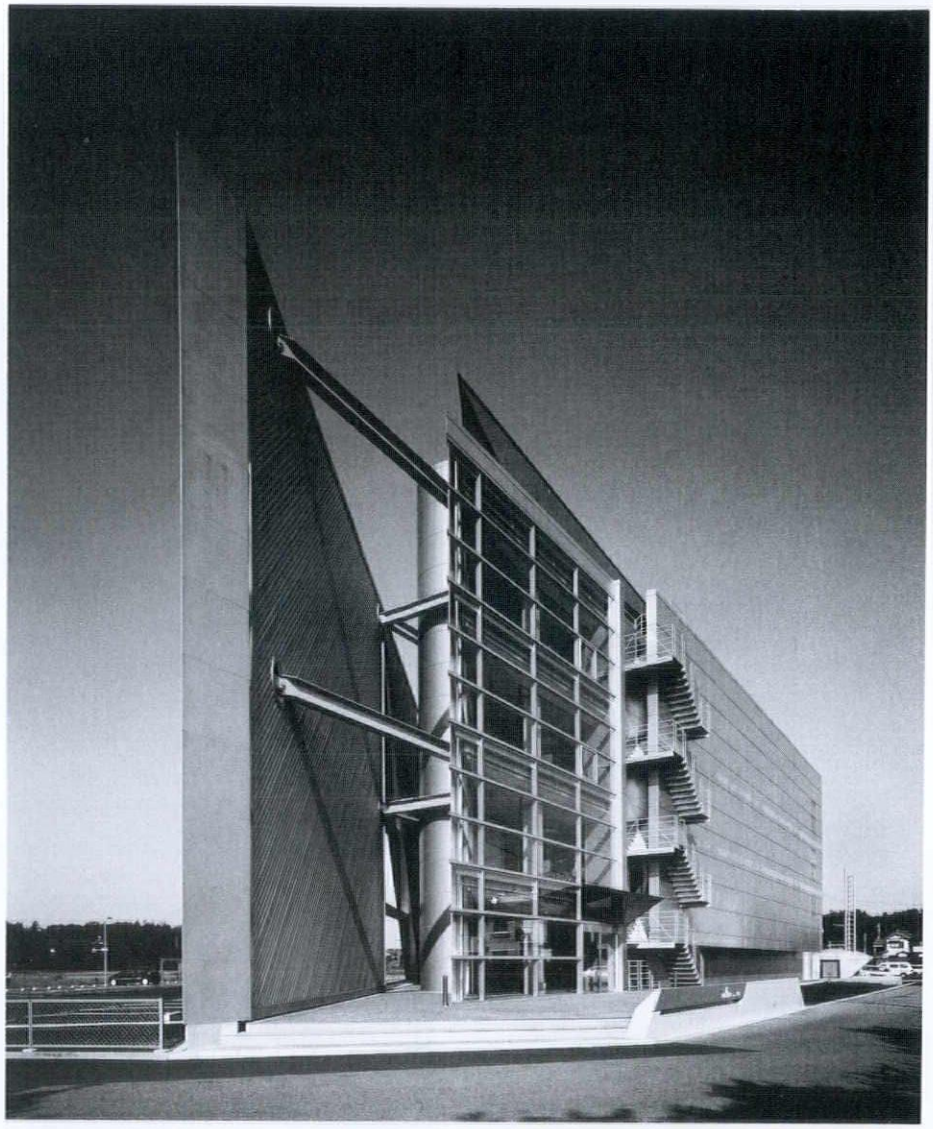


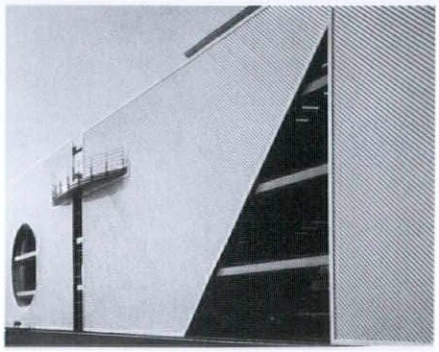
基準階平面図

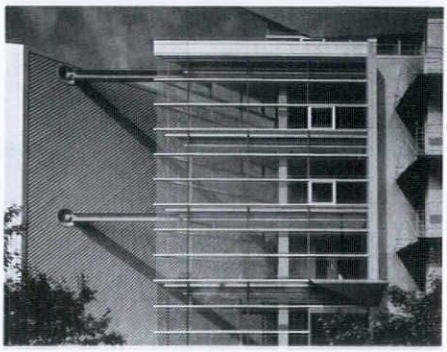


1階平面図　S=1：1200



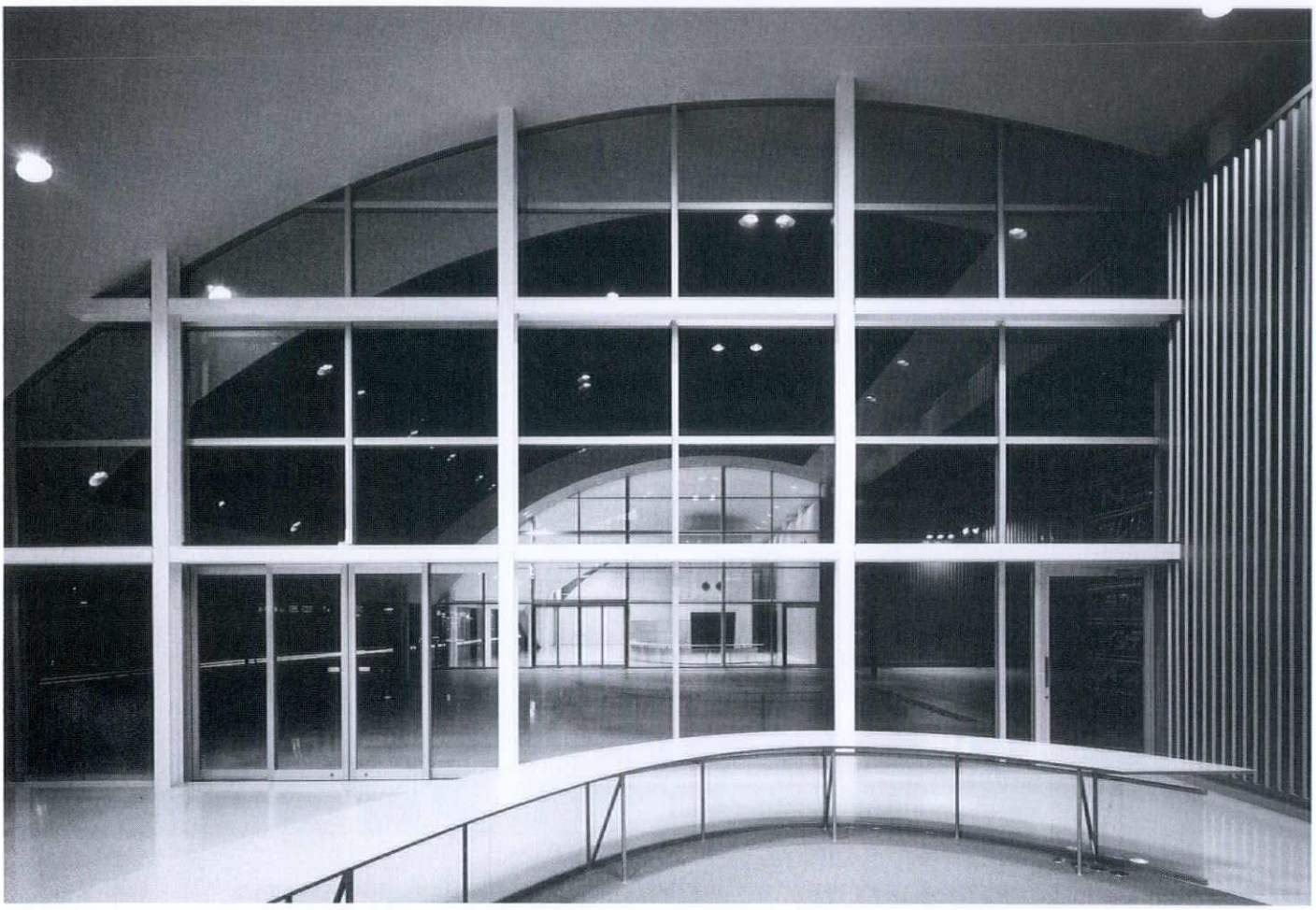


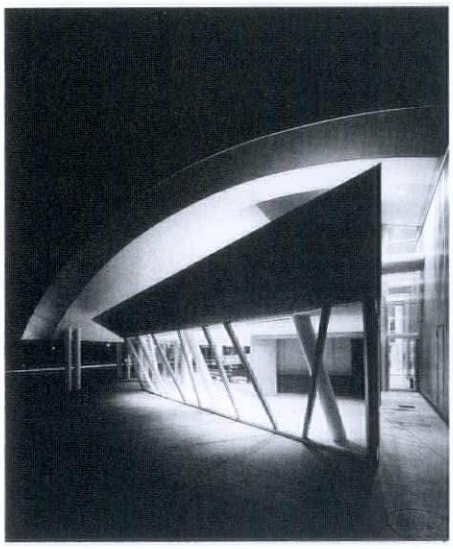




1：エントランスホール
2：事務室
3：倉庫
4：機械室

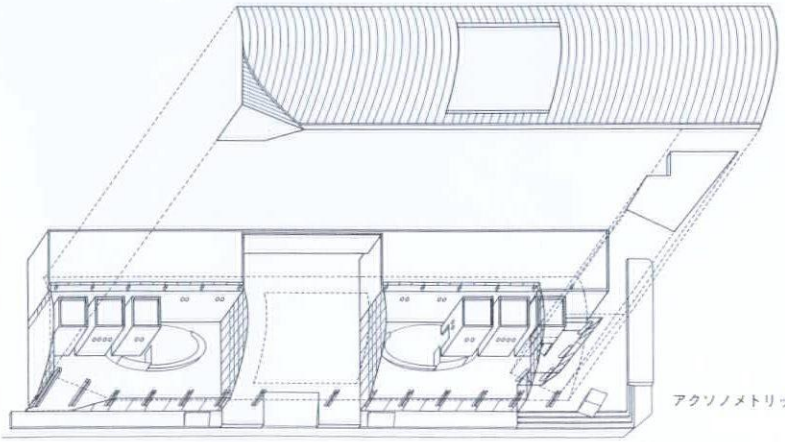
セキショウHFランド
Sekisyo HF Land





住宅都市整備公団によって開発された常総ニュータウンに建てられた、ふたつのカー・ディーラーのショールームと、物販、飲食の複合施設である。

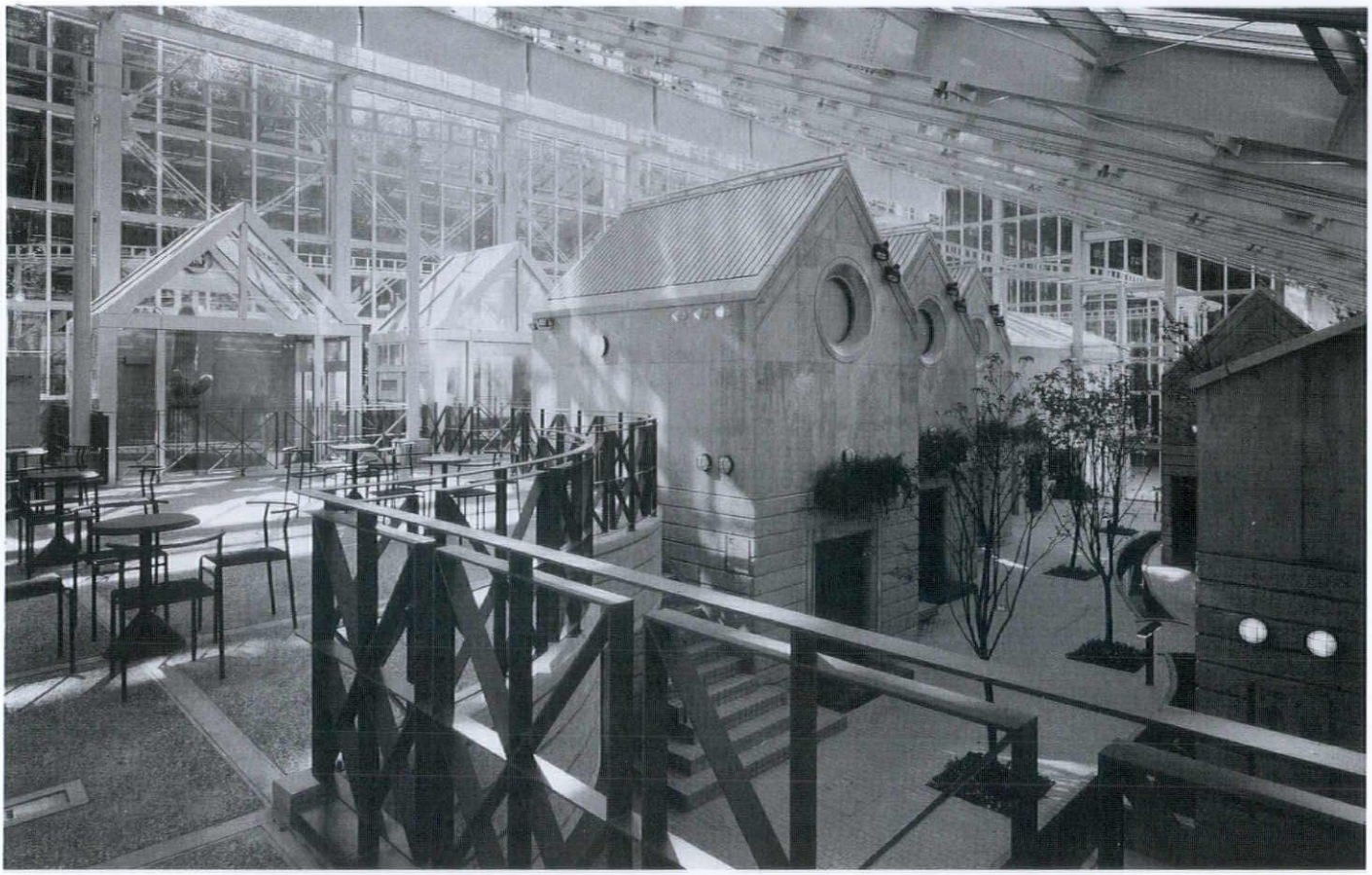
ニュータウンが宿命的に背負う均質的な退屈さを打破する異物（オブジェ）としての建築が目指された。軒高を最小限にまで下げた横長の大屋根はすべての機能を包み込み、沿道性の強い建物自身の存在感でシンボル性を高めている。同時にこの大屋根は、内外が連続した透明感の高い開放的な内部空間を覆う、深い庇としても機能する。

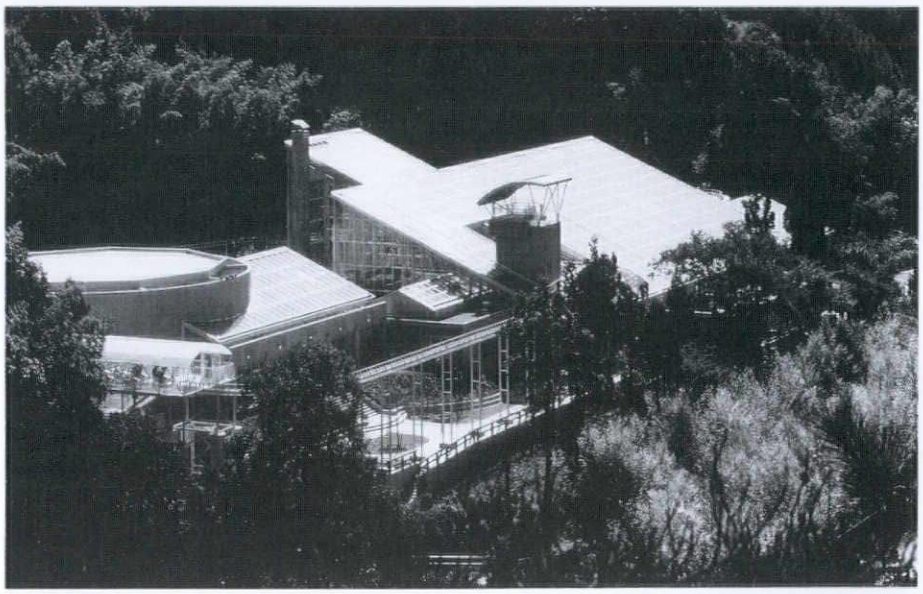


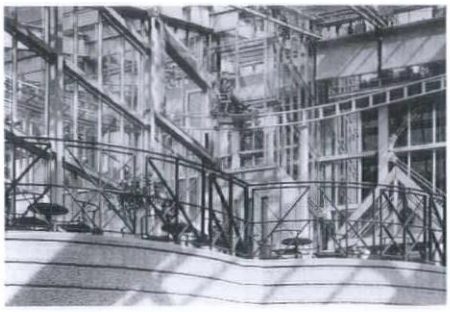
アクソノメトリック図

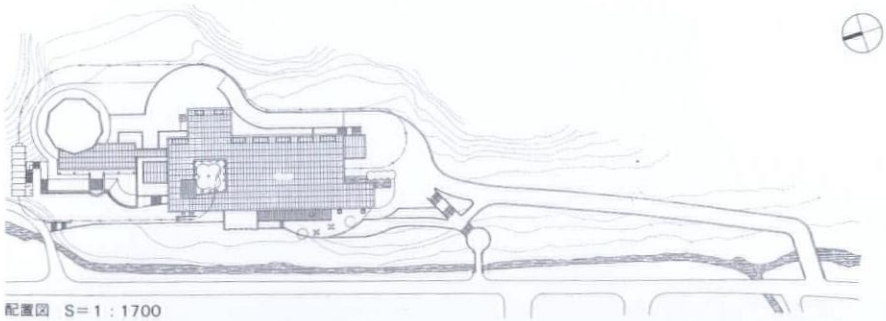
カーニバル・ショーケース

Carnival Showcase

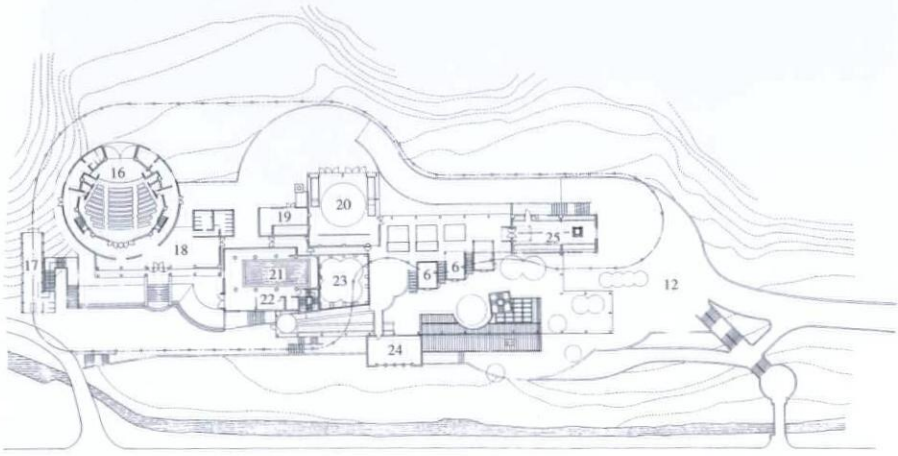




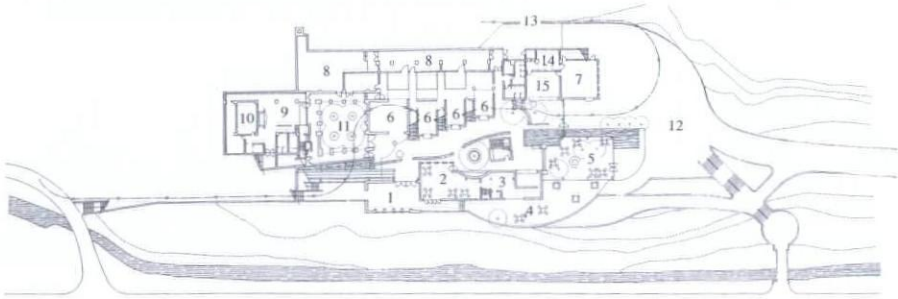




配置図　S＝1：1700

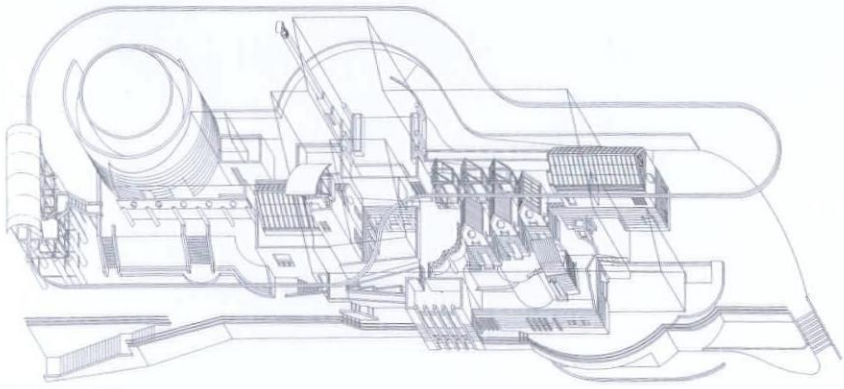


2階平面図



1階平面図　S＝1：1000

立面図　S＝1：1000



アクソノメトリック図

1：ピロティ
2：レストラン
3：厨房
4：テラス
5：カフェ
6：展示
7：事務室
8：機械室
9：ラウンジ
10：ロッカー
11：中庭
12：フロントプラザ
13：空中自転車
14：倉庫
15：ショップ
16：AVホール
17：空中自転車ステーション
18：ホワイエ
19：配膳室
20：花の円舞台
21：プール
22：スチームルーム
23：吹抜
24：バルコニー
25：トロピカル・ルーム

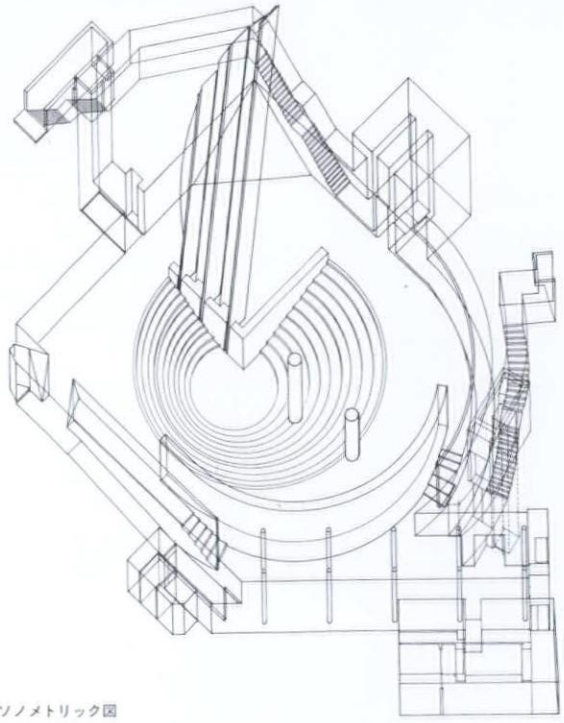
大手電機メーカーの労働組合がもつ、保養施設のセンターとなる複合施設である。アトリウムの内部には中世の街並みが展開され、カフェ、ショップ、AVシアター、ジャグジーなどの施設が配されている。そこは同時に植物の展示スペースであり、来館者は緑あふれるこの虚構の街を、歩いて、あるいは空中自転車に乗って巡り、体験することができる。

単に植物を展示するにとどまらず、緑に囲まれたライフスタイルそのものを提案しようとするこの植物館は、植物展示の新たな手法を提案するものであるのと同時に、クライアントや専門家とのコラボレーションによって、まったく新しい建築のプログラムを構築し得ることの証明となった。

伊丹市地下めいそう空間

An Itami Underground Meditative Space

井上武吉氏の作品が貫入するこの空間を訪れた人々は、一切の情報から遮断され、自らの内面と向き合う静謐な時間を過ごすことができる。地上では軽やかに天へと伸びていた彫刻は、地下空間では量感にあふれる柱となり、長く、狭く、湾曲して下降する通路や、一気に視界が広がる地下広場といった建築の要素と共に、人々の感性にダイレクトに作用し、様々なイメージを喚起する装置となる。



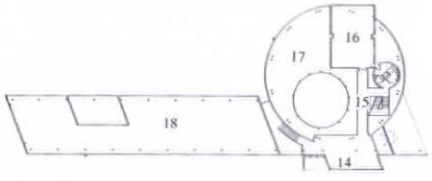
アクソノメトリック図

井上誠昌堂富山オフィス
Inoue Toyama Office

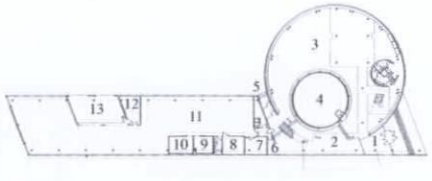
様々な色や形にあふれる周辺の街並みの賑やかさとは対照的に、富山と金沢の市街地に位置するふたつのオフィスはあくまでも寡黙な外観を装っている。内部空間を包み込み、安定したオフィス空間をつくりだす器であり、外部に対しては、建築自身を単純な量塊として印象づけようとした。

「器」の内部は気積の大きなオフィス空間となっている。これに、中庭、眺望テラス、ラウンジ、カフェといった様々な機能をもった立方体、直方体、円筒、円錐、四角錐が貫入し、空間に変化をもたらす。開放的でありながら変化に富んだ内部空間は、合理性、効率、生産性を第一義として計画されてきた従来のオフィス空間を脱し、都市の持つ多様性と選択性の高さのアナロジーとなっている。

大きな気積を持つ円形のこのオフィスは、あえて閉鎖的な空間となっており、これに円筒形の中庭と直方体のラウンジが貫入することによって、光や風といった外部の環境を効果的に取り入れることを意図した。



2階平面図

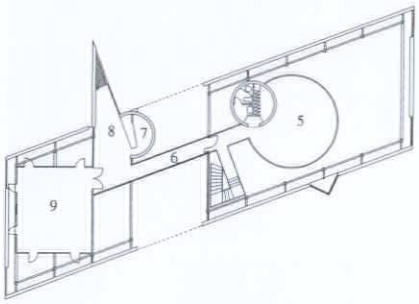


1階平面図　S＝1：1500

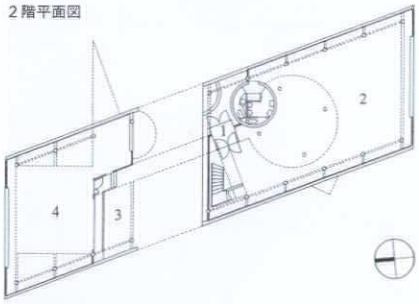
1：エントランス
2：ミーティングコーナー
3：オフィスルーム
4：中庭
5：サブエントランス
6：更衣室
7：機械室
8：電気室
9：保冷室
10：常温室
11：倉庫
12：事務室
13：搬出入口
14：ラウンジ
15：ブリッジ
16：会議室
17：吹抜
18：倉庫上部吹抜

井上誠昌堂金沢オフィス
Inoue Kanazawa Office

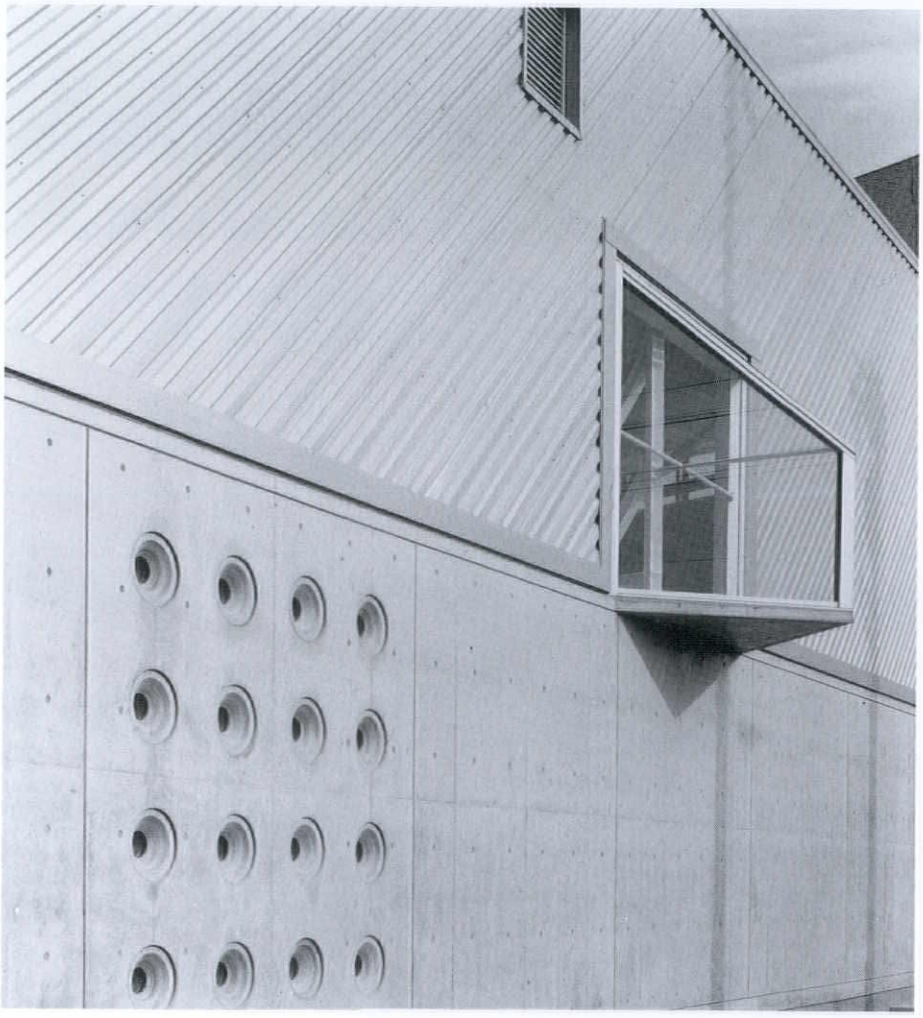
車路によってふたつに分断されたヴォリュームをブリッジが結ぶ構成を持つ。単純な平行四辺形の平面に、円筒形のミーティング・スペース、直方体の会議室、三角錐のラウンジがはめ込まれ、豊かな表情を持つ内部空間を形成する。

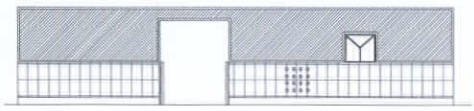


2階平面図

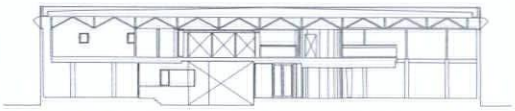


1階平面図　S＝1：1000





立面図　S＝1：1000



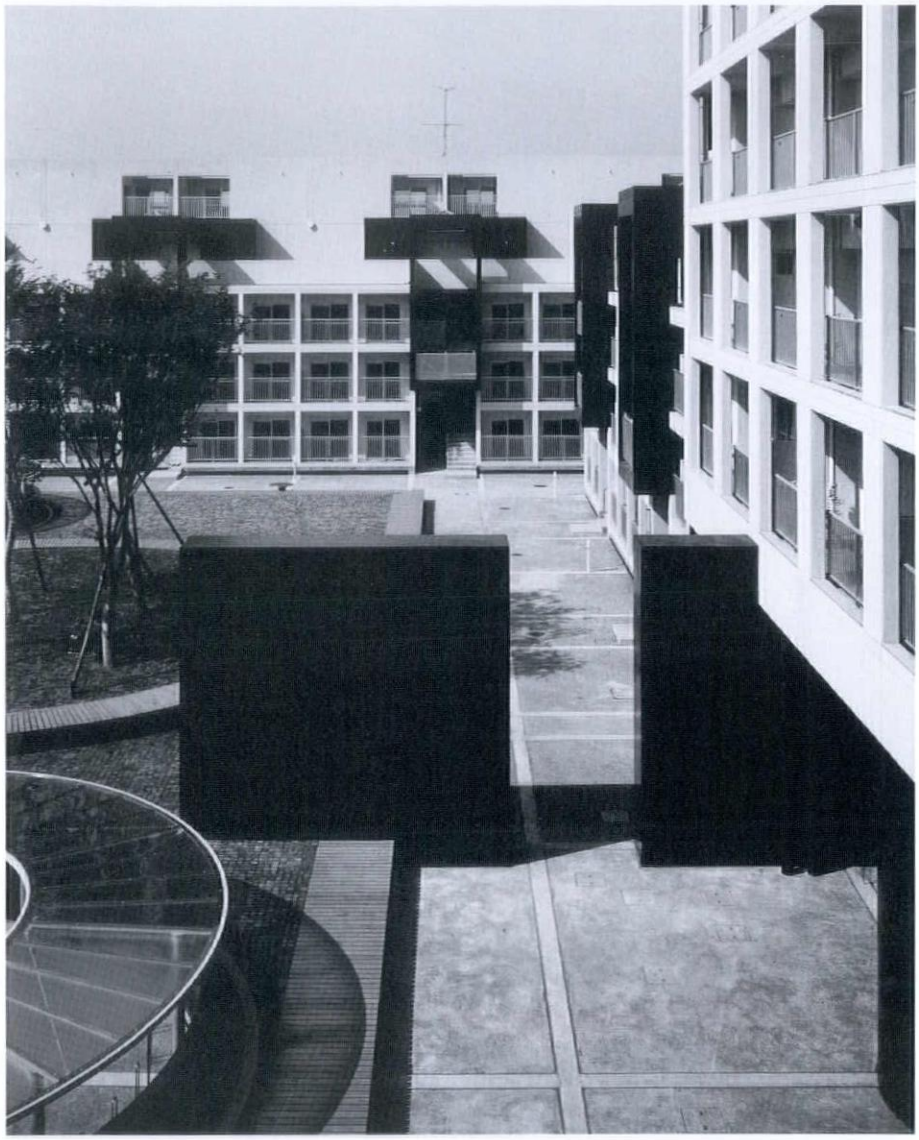
断面図　S＝1：1000

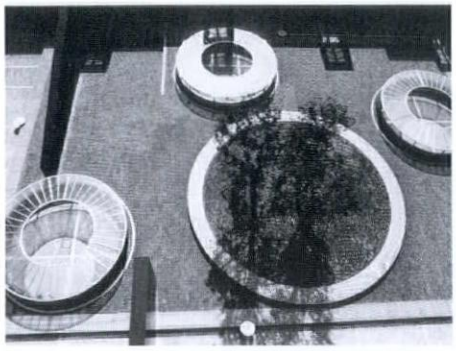
1：エントランス
2：オフィスルーム
3：搬出入口
4：倉庫
5：ミーティングルーム
6：ブリッジ
7：バー・カウンター
8：ラウンジ
9：会議室

群馬県営相生住宅団地

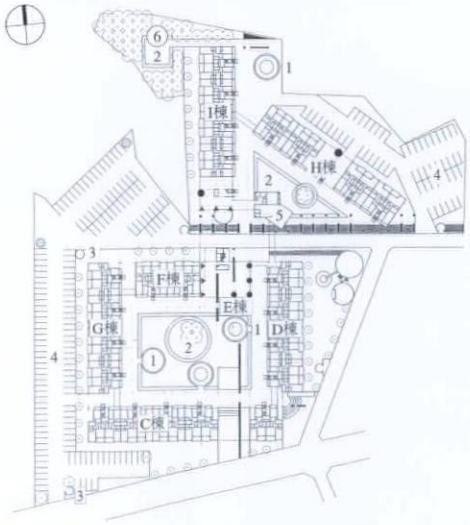
Gunma Prefectural Housing,Aioi

車を侵入させない中庭を中心とする、立体回遊性を持った中高層の住棟配置を採用した。中庭、ピロティ、階段室、ブリッジを住民の交流の場として位置づけ、3階屋上レベルを全住棟を結ぶ回遊路とする。それにより、都市の街路のような選択性の高い動線を提供している。様々なスケールで住民にとっての外部の居間とも呼べる空間を随所に配し、住民同士が集まって住む意識を持つための、交流の機会を増やすことを意図している。また、駐輪場、ゴミ置き場、電気室、ポンプ室等、集合住宅の裏方と考えられている施設をあえて表に出し、環境装置、あるいは遊具として空間構成に参加させている。

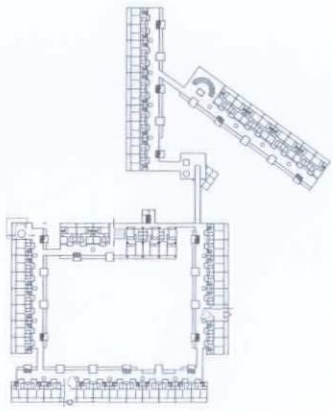




1：自転車置場
2：幼児遊園
3：ゴミ置場
4：駐車場
5：集会室
6：ポンプ室



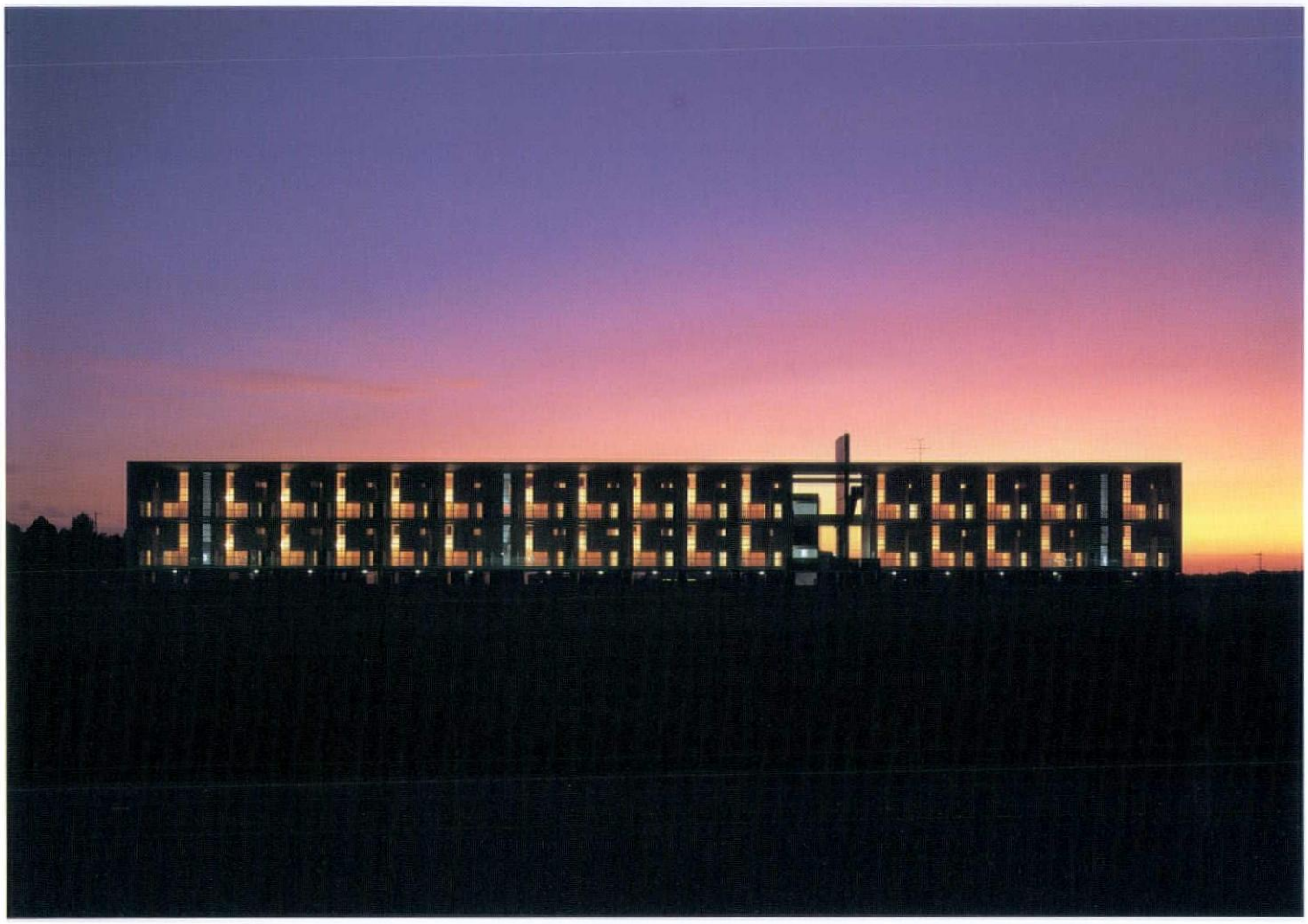
配置図及び1階平面図　S＝1：3000



屋上通路レベル平面図

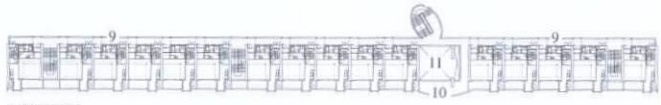
新湊市営本江住宅
Shinminato Municipal Housing, Hongo

1：あんずの林(将来工事)
2：幼児遊園
3：スロープ
4：敷地内道路
5：駐車場
6：ゴミ置場
7：水路
8：受水槽ポンプ室
9：外部廊下
10：空中庭園
11：吹抜

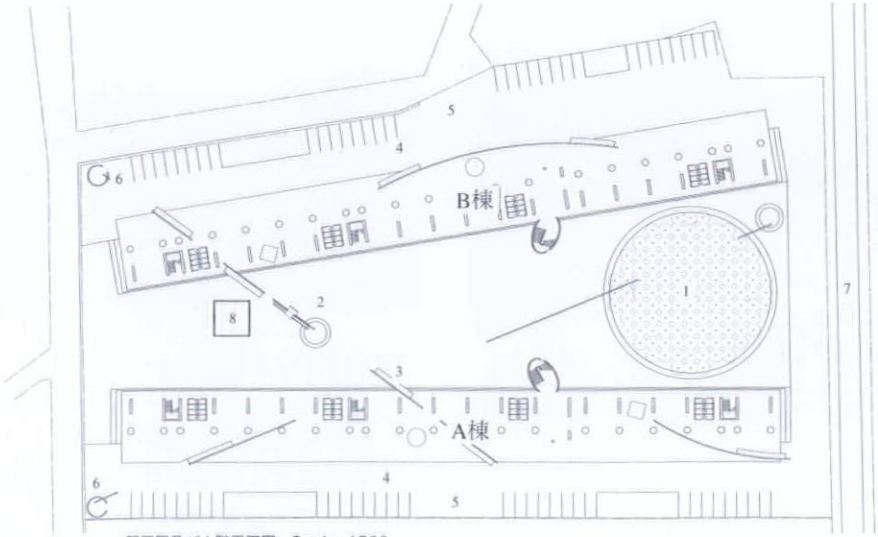


豪雪地帯に位置するこの集合住宅の計画では、雪に閉ざされる冬をいかに快適に過ごせるようにするかが最も重要な課題であった。そのため、1階をピロティとして全面的に開放し、あたかも深い庇に覆われた住民共有の縁側のような空間としている。ここは雪かきを必要としないアプローチ路であり、子供の遊び場であり、主婦の井戸端会議の場であり、時には老人の憩いの場となる。さらに2期工事に予定されているB棟との間に設けられる広場は、受水槽やポンプ室を利用した遊具、〈あんずの森〉が設けられた、近隣の人々も自由に利用できる交流の場として計画されている。

全戸に採用したメゾネットタイプの住戸は、陰鬱な曇天の続く冬にも明るく開放的で、ボリュームの大きな空間を提供するだけでなく、全室に外部テラスを設けることを可能にしている。吹き抜け部分の縦長の開口部を通して、足許に広がる豊かな田園風景から、遠くそびえる立山連峰までが一望できる。



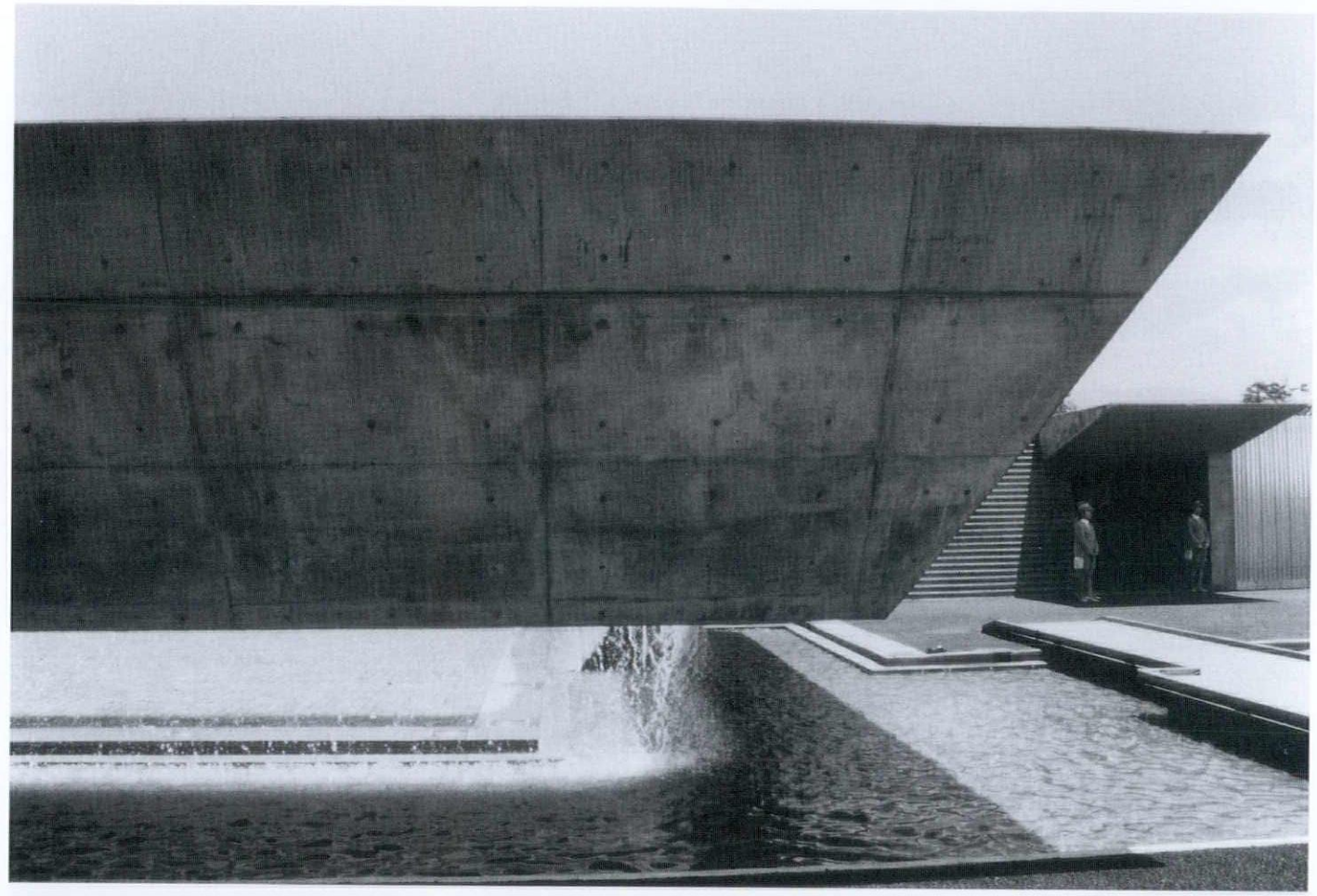
2階平面図

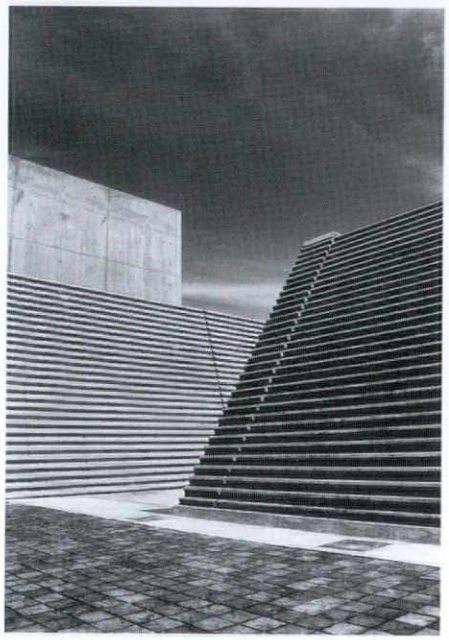


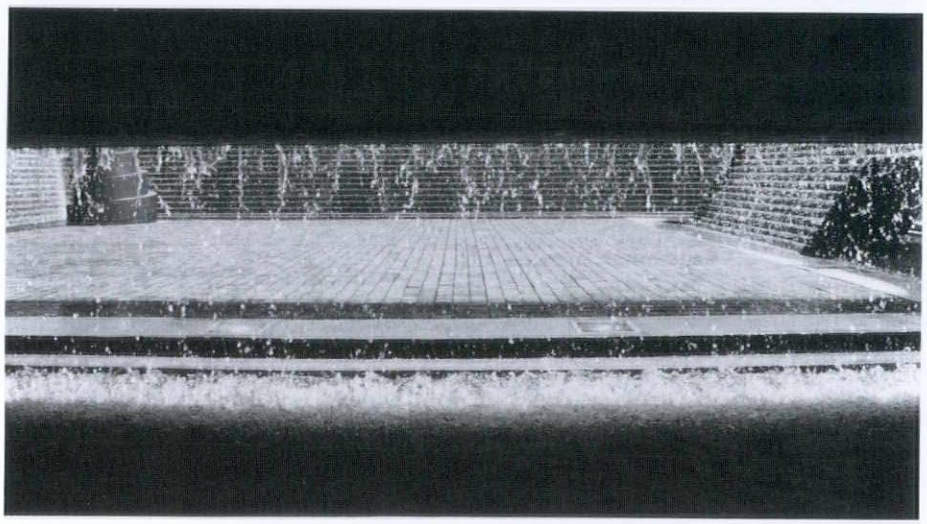
配置図及び1階平面図　S＝1：1500

信州博覧会：コンストラクション・アート・ミュージアム・CAM

Japan Expo in Shinsyu:Construction Art Museum







建設省が関わる事業のPRを目的としたパビリオンであり、土木施設のもつ豪快なスケール感、シンプルで力強い空間構成が意図された。

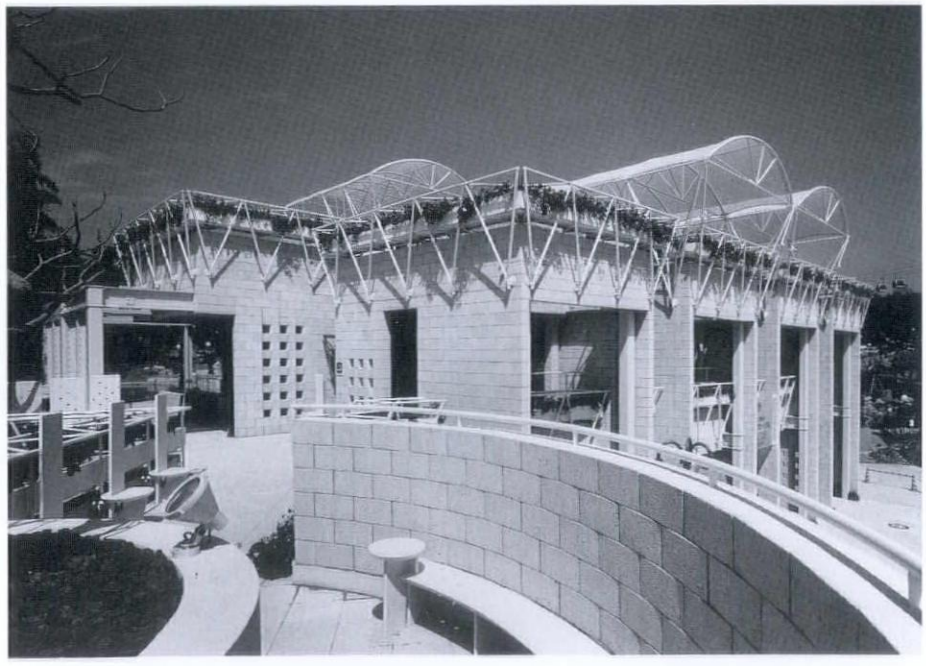
3mの高さから水が流れ落ちる四面の傾斜壁によって囲まれた中庭空間は、四角い空を切り取り、博覧会場の喧噪を忘れさせる。従来の単に情報を発信するだけのパビリオンから脱却し、人々の発信能力を引き出す空間が目指された。

国際花と緑の博物会：フローリアム109

The International Garden and Greenery Expo:Florium 109

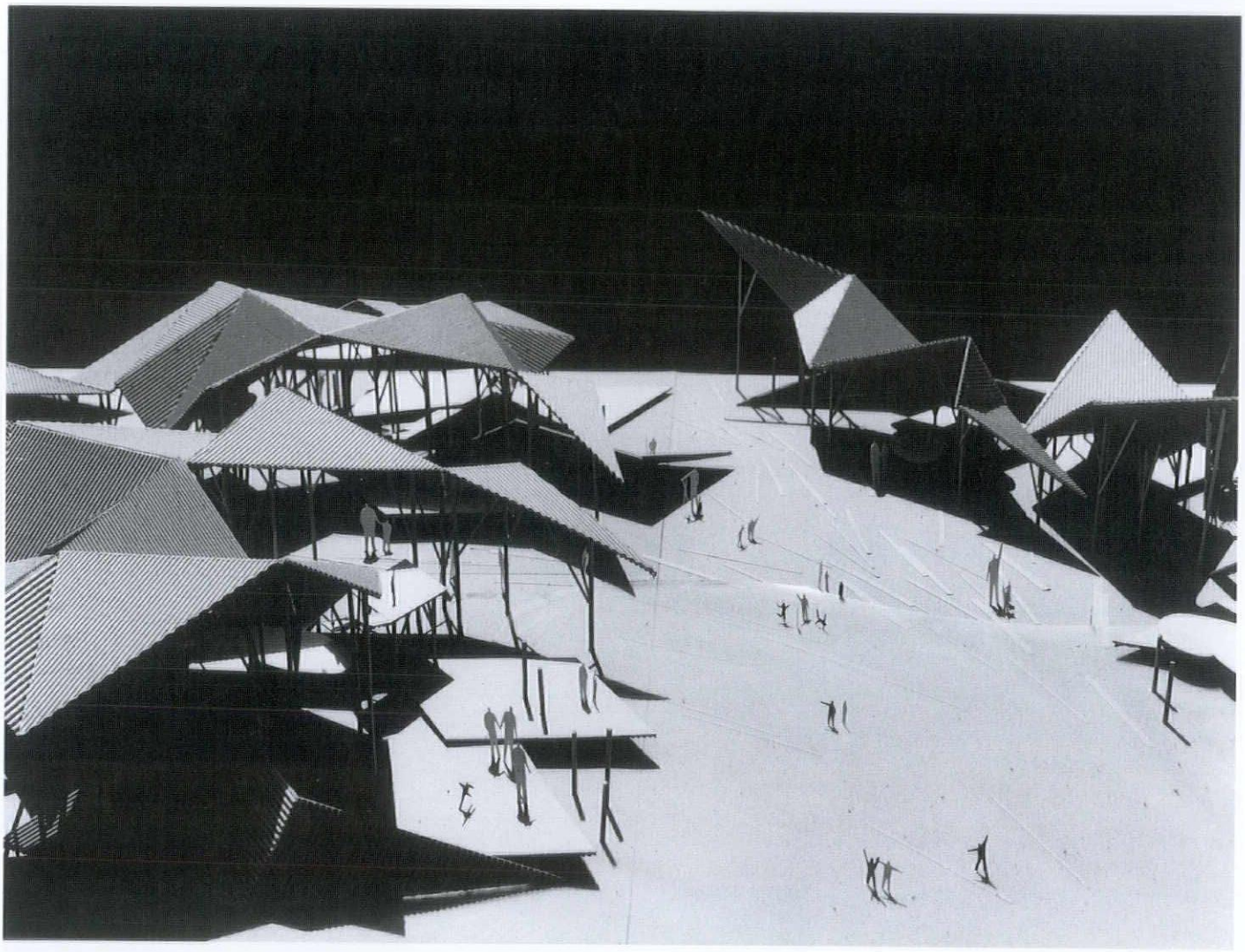
野原のエリアから山のエリアへと続く道の上に計画されたこのパビリオンは、山のエリアへのゲート(山門)としての機能を持っている。同時に人々が滞留できる都市的な立体庭園であり、会場を見渡すベルベデーレ（望楼）としても機能する。

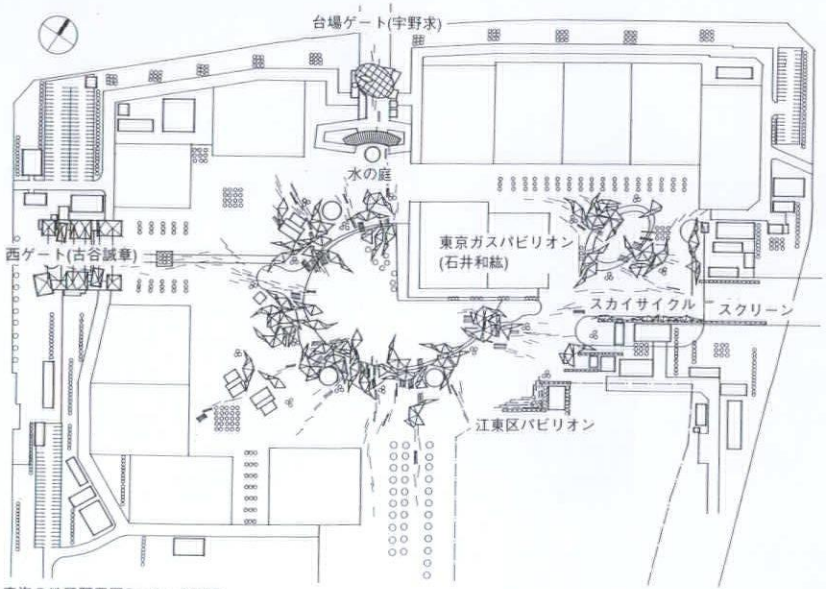
自然と人工物、パブリックとプライベート、外部と内部といった対立項として捉えられてきた要素を融合し、人間が本来持っている全体性に裏付けられた、豊かな環境を発見することが意図された。



世界都市博覧会：青海2地区会場計画

World City Expo Tokyo: North Inter city District Exhibition Plan

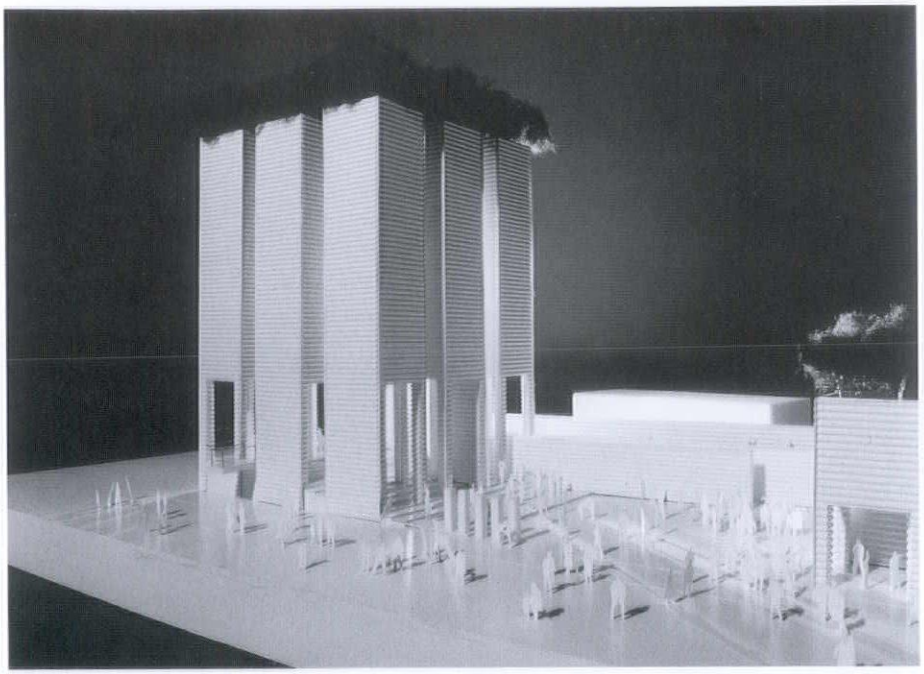




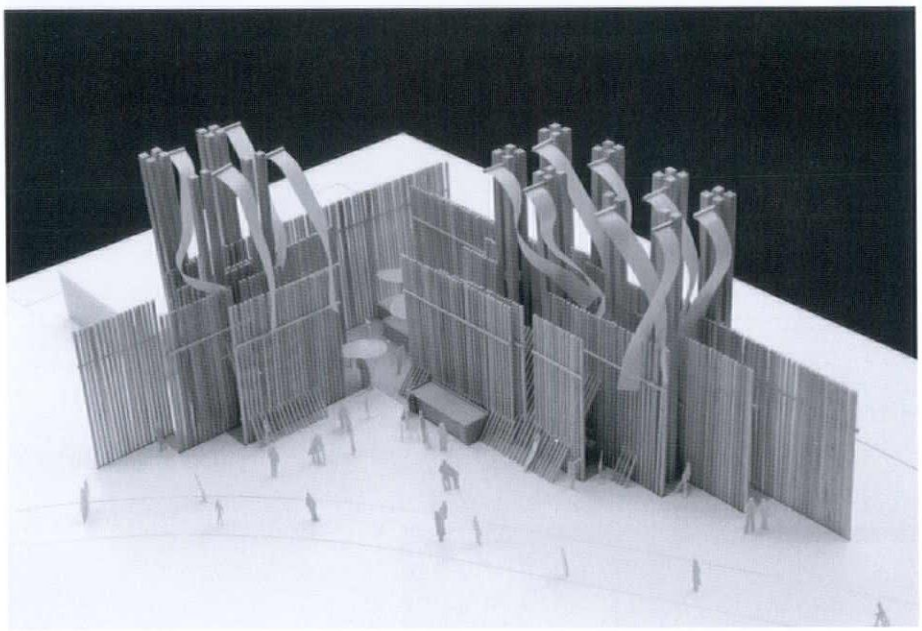
青海２地区配置図S＝１：5000

博覧会はあえて違法をなす実験装置だといえる。現実の都市では制度や習慣に阻まれて、なかなか出来ないことを実験する機会として博覧会は機能する。「環境という森羅万象に対し、その中に潜む不可視な構造を顕在化し、トータルなビジョンを提示する」建築の枠をこえた環境づくりが目指された。

西欧近代の予定調和的都市計画手法によって形成される、硬質でスタティックな環境に対し、すべてのものがダイナミックに変転しつつ混在し、ある範囲の自由度をもってすりあっていくアジア的生活風景がイメージされた。雨水を利用した干満する池や、コンテナ化され自在に移動可能な樹木群、それに光の変化にあわせその表情を多様に変化させるシェルターの群が、ダイナミックに会場に展開され、都市的環境を変化させていく。パビリオンのデザインから、飲食営業、イベント、さらには運営に到るまで、博覧会に関わるすべての人々とコラボレートすることによって、専門領域間の境界線が消去され、トータルな環境が形成されることを意図している。

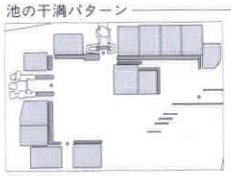


建設パビリオン

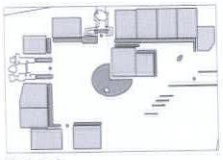


江東区パビリオン

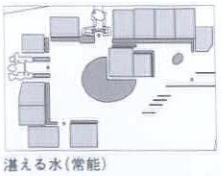
池の干満パターン



干上がる水

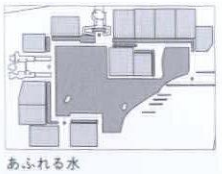


遠くの水



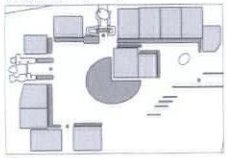
湛える水(常能)

うるおす水

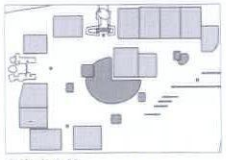


あふれる水

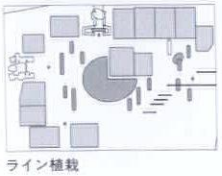
植栽配置パターン



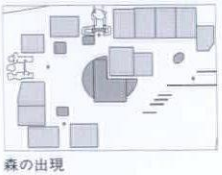
緑のバッファー



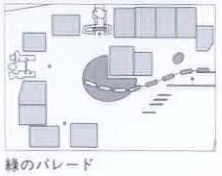
点在する林



ライン植栽



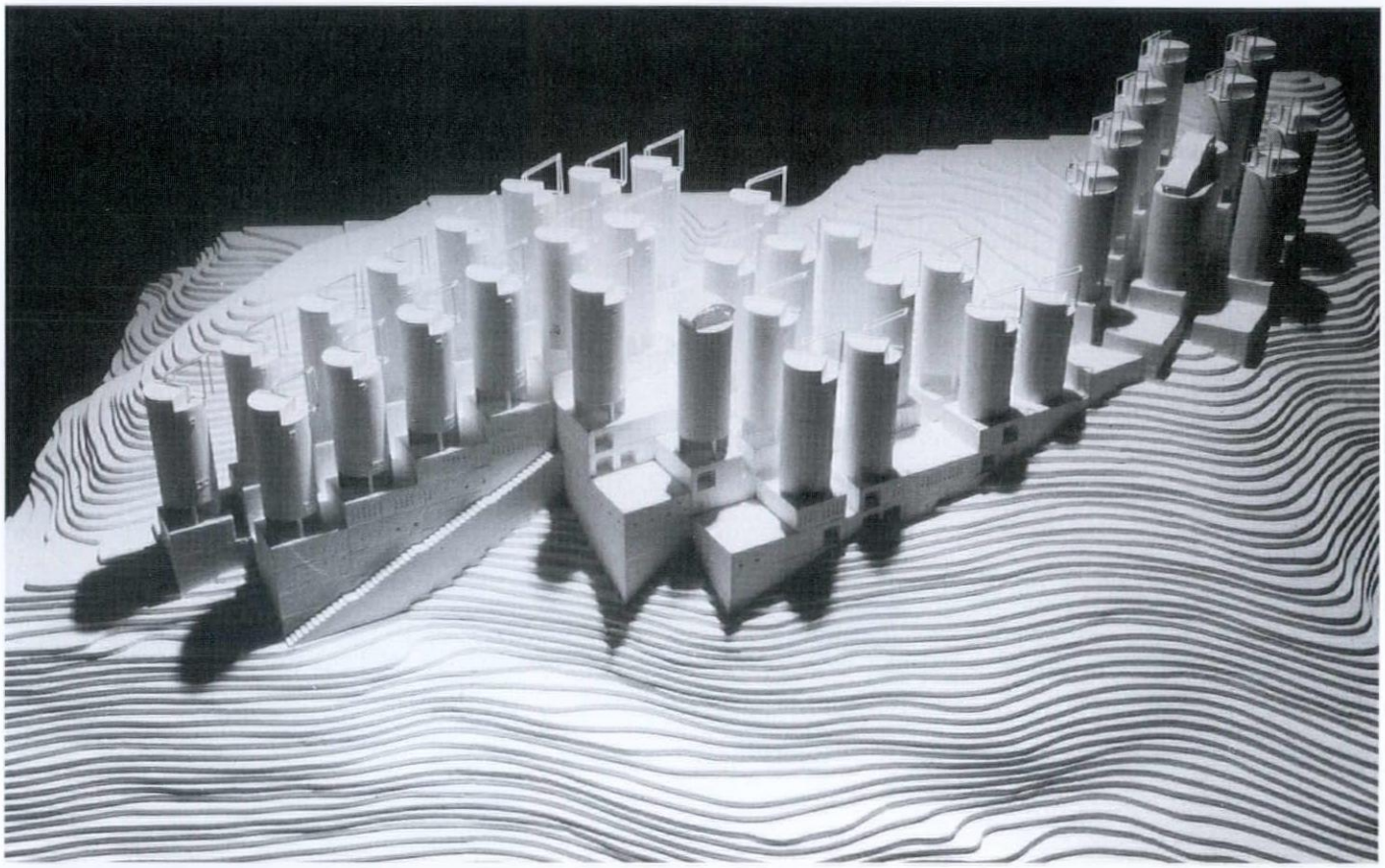
森の出現

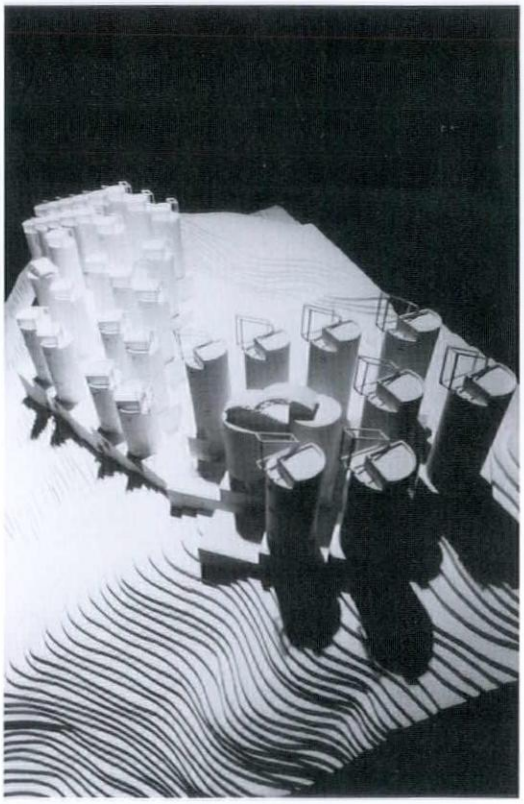


緑のパレード

香港ピーク設計競技案

Competition Design for the "Peak", Hong Kong





ヴィクトリアピークに立ち並んだ38本のシリンダーは、見る者の視点の移動にともなって、列柱、壁、量塊と、その表情を多様に変化させる。単純なボリュームが微妙なズレを生じながら組合わさることで、環境と建築の接点は無限の多様性をもち、この建築を体験する人々の多様なイメージを誘発する。

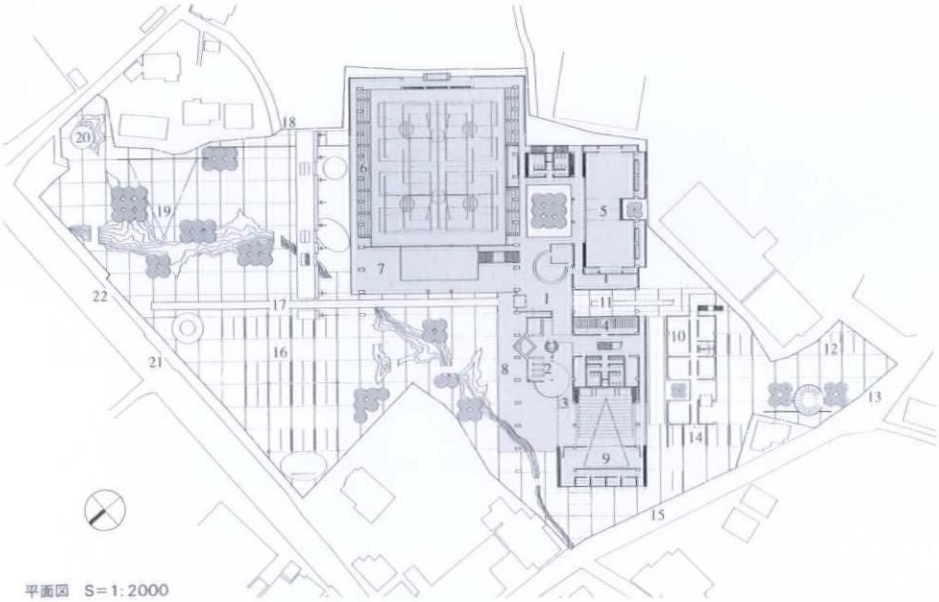
この建築は、環境の変化をより直感的に体感するための媒介として機能する。

埼玉県都幾川村文化体育施設設計競技案

Competition Design for the Tokigawa Cultural and Sports Facilities, Saitama

埼玉県北部の山間の里、都幾川村にある体育館と図書館の複合施設である。建物を含む敷地全体を緩やかに起伏する地形と見立て、敷地内外、建築内外、さらには屋根までも、住民が自由に集える立体庭園空間として計画している。そのため、この地の主要産業である建具を積極的に使い、フレキシブルな空間構成を目指している。

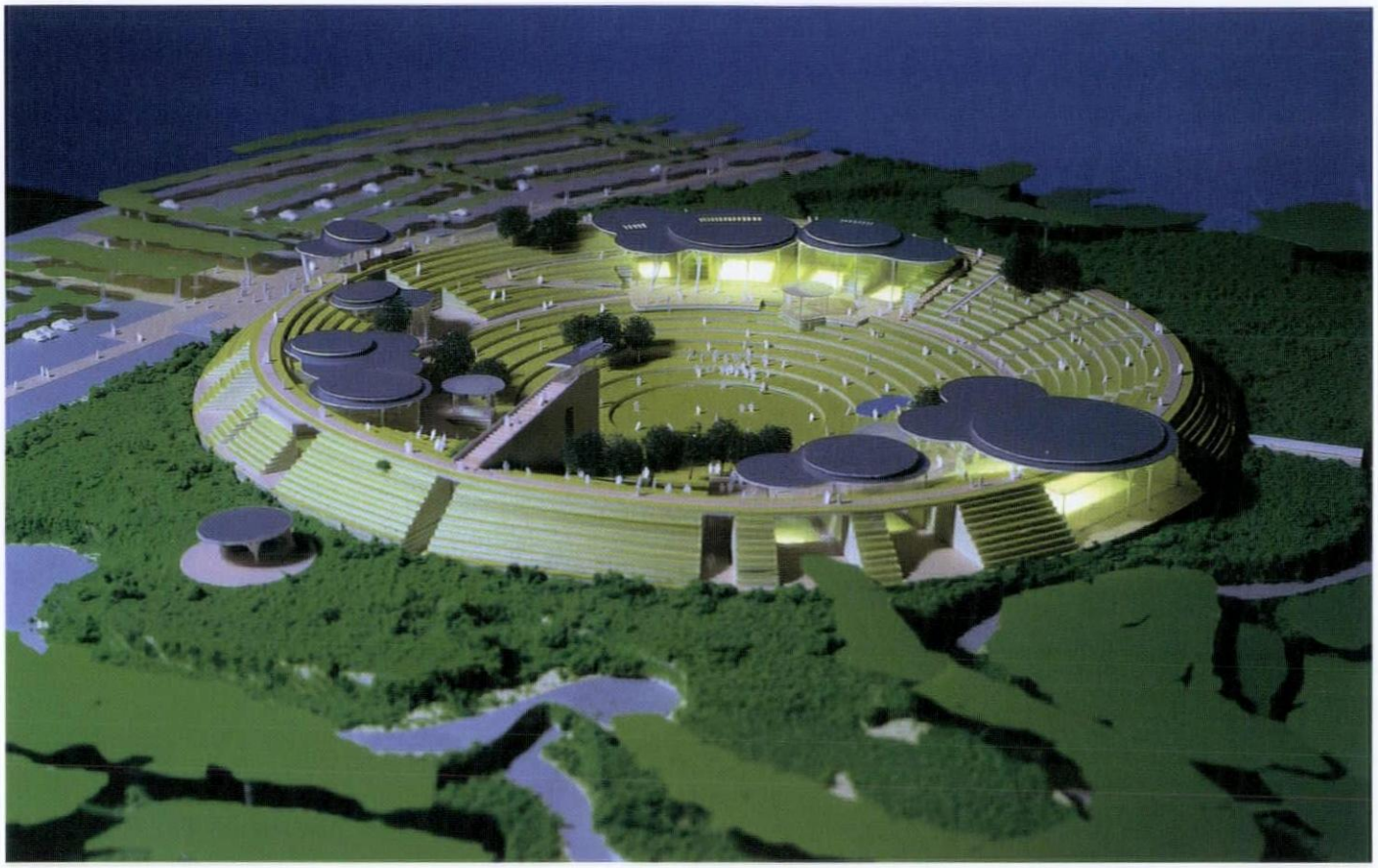
1: 玄関ホール
2: 開架室
3: ホワイエ
4: 閉架室
5: 柔道場・剣道場
6: 観覧席
7: ギャラリー
8: 縁側テラス
9: 舞台
10: 浴室
11: スロープ
12: 駐車場
13: 車出入口
14: 駐車場
15: 車出入口
16: イベント広場
17: スロープ
18: 東ゲート
19: 水辺の公園
20: ホタル育成館
21: 車出入口
22: 北ゲート
23: 閲覧室
24: 開架室

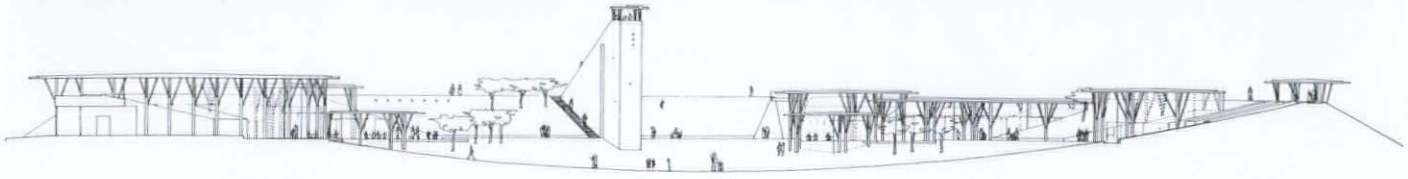


平面図 S=1:2000

大分県アグリカルチャーパーク「楽市楽座館」設計競技案

Competition Design for the Oita Prefectural Agriculture Park "Rakuichi-Rakuza Hall"



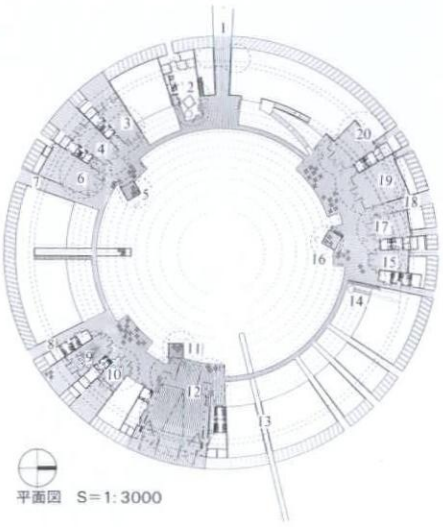


断面図

多目的ホール：研修室、会議室としても機能する、オープンな板の間の桟敷

ベルベデーレ(望楼)：公園の全体を見渡すことのできるベルベデーレは、日時計や、イベント時の調整室としても機能する

緑の大地：すり鉢状の芝生広場は太陽の受け皿であるとともに、様々なアクティビティを誘発し、興奮の坩堝ともなる



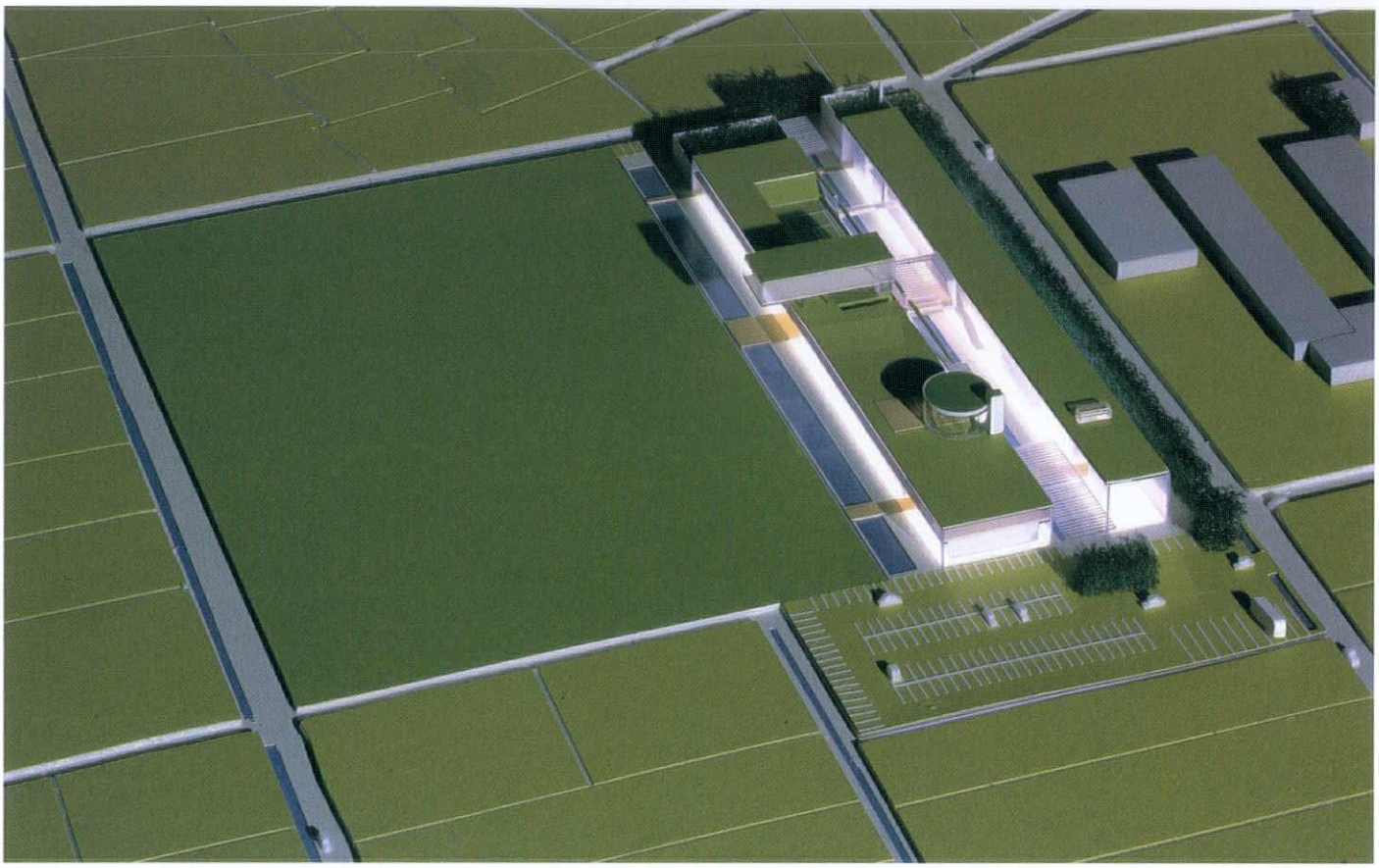
平面図　S=1:3000

1: メインゲート
2: 公園管理事務所
3: 手作り工房
4: 地域食材利用室
5: 大地のパビリオン
6: 農業農村紹介室
7: スパゲート
8: 食のゲート
9: 研修室
10: 会議室
11: 光のパビリオン
12: 多目的ホール
13: 湖のゲート
14: スベリ台
15: 健康食品加工展示
16: 風のパビリオン
17: ワイン等加工展示
18: 花のゲート
19: 乳製品加工展示
20: 菓子類加工展示

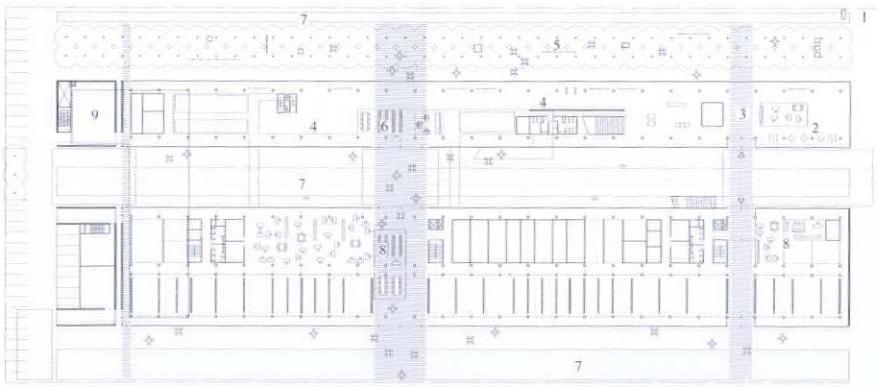
湖畔に展開する農業公園の中核施設である。円形の平面によって中心施設としての求心力を持つと同時に、園内各施設へと放射状に伸びる通路の起点としても機能する。この円盤をすり鉢状にすることによって明確な領域をつくりだし、「場」を形成する。それは、時に悠久の時間を体感する静謐な場として、時に祭りの熱狂をはらむ賑わいの場として機能し、様々なアクティビティを誘発する。

埼玉県環境科学国際センター設計競技案

Competition Design for the Saitama Prefectural International Center for Environment Science

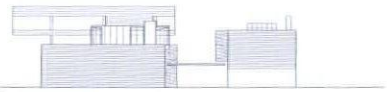


環境に関する研究機関と研修施設、それに一般に開放される展示スペースが要求された。これに対し、あたかも周辺環境の中に建築が織り込まれたかのような空間構成を目指して「畝織(うねお)りの建築」というキーワードが生まれた。要求された機能を層状に配置し、前面道路と後背の「生態園」と名付けられた実験用の庭園を結ぶ動線がこれを貫く。与えられた敷地を超えて、周辺の環境と積極的に関わることが意図された。

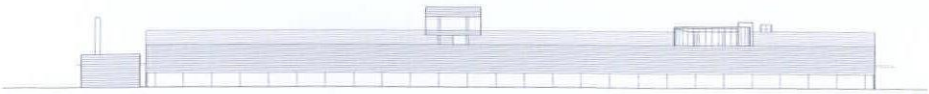


平面図　S=1:1600

1: メインアプローチ
2: ミュージアムショップ
3: エントランスホール
4: 展示室
5: 屋外展示テラス
6: 図書室
7: 水路
8: 事務室
9: 倉庫



西立面図　S=1:1600



北立面図　S=1:1600

コラボレーションとコンティニュアンス

南條道昌

私が「コラボレーション」という言葉に初めて接したのは、モダン・ジャズ・クァルテット（M.J.Q.）と、ソロ・ギタリストとしてのローリンド・アルメイダが演奏するアルバムのタイトルだったと記憶している。[*1] 確かにそのアルバムが聴かせてくれる音楽は、M.J.Q.のジョン・ルイス（ピアノ）が持つ叙情表現と自由表現との主張と、アルメイダのそれとが表になり裏になりして絡む場面が美しい。個別のアーティストの主張の共鳴が織りなす時間の素晴らしさを感じさせてくれるものだった。和音の形成と連続、そしてリズムの流れの一致と微妙なずれ、あるいは思いがけない展開発生のスリルとが「コラボレーション」の神髄だと思った。決して一人の人間のパフォーマンス表現ではなし得ない、相互に瞬時に呼応する意志と技との表現を感じて受ける感銘がその時のこころの高揚の源泉であろう。

しかし考えてみれば、時間芸術とりわけ音楽の世界では、このような共時的な多重の奏者による表現は当たり前、むしろ必須の事柄である。それならば、なぜクァルテットがクィンテットになるのではなく「コラボレーション」なのか？M.J.Q.を結成、活動を始めたころのジョン・ルイスは、いかに良き伴奏者に撤するかを心掛けていたと語られている。他の抜きん出た才能の場に寄り添い、引きたて、聴衆の感動を高めることに撤する。これが普通のアンサンブルあるいは協奏の原理であろう。しかし「コラボレーション」と敢えて言う時は、そのような協奏のあり方のレベルを超えていなければならないのであろう。少なくとも根本的な価値観において共通の基盤をもつ複数の才能が、同等の技量と格を前提として、創造の場で相まみえ相互に新しい発見を与えながら、それぞれの限界を超える表現を紡ぎ出してゆく。それが「コラボレーション」なのではあるまいか。その成立には、したがって、相互の尊敬の念、あるいは一目置くという関係が必要である。決して一方的であってはならない。

建築は、空間構築である。時間は音楽にとってのそれとはまったく別の価値をなす基軸となる。しかし構築のための構成要素、働きの要素は多い。単に物的な要素だけではなく、光、風などの自然の要素、使われ方、人の雰囲気の伝わり方、固定的な要素、随意的な要素などが、構築後の用の美に総合される。したがって、「コラボレーション」の効用が大いに発揮されてよい対象である。これまでの建築界においての協働の概念は、意匠、構造、設備という内部ジャンルの協働が主流であったように思う。これに照明、外構造園、陶芸彫刻、家具調度などの要素が加わって、協働の総合性が考えられてきた。マイスターとしてのアーキテクト像は、これらのすべてにわたって、統合された空間の提示を実現することが理想とされている。この実現の結果に出会うことも少ないが、その結晶があったとしても、どちらかと言えば人を寄せつけないような静謐さに傾くのはなぜだろう。それは、空間における「コラボレーション」が成立していないことによる部分があるためではないだろうか？主要な諸要素が、基調の前提のもとに丁丁発止と打ちあいせめぎ合う昇華のさまが、多様さの豊かさを高度なレベルで見せてくれていない所似ではあるまいか？

栗生さんと信州博の建設省出展を計画し、設計した時、単なる要素の統合を超えて、計画と建築と展示と運営の「コラボレーション」が、時々垣間見えたように思えた。主従ではない展示と空間の協調と、はずしの主張のさまが活きた暖かさとして現れた部分があったと思う。その結果が生れたのは、たまたま設計という共時体験の中での丁丁発止の主張のぶつかり合いがあったからだと考える。

ところでわが国の都市計画と建築基準の制度の中では、良好な都市環境を保つという思想はあっても、素晴らしい都市空間を新しく実体化する方法に関する思想は全く無い。都市空間にあっては建築は他の要素と同じように要素であり、部品である。結果としての豊饒な都市空間は、多くの抜きん出た才能がコラボレーション型で呼応する時に生まれるだろう。設計の時を同じくすることの稀な状況において豊かな都市空間をいかに形成するかが日本の課題と思えるが、それは単なる「コラボレーション」というより、コラボレーション意識をいかに時を超えて持続するかということだろうか。

●なんじょう・みちまさ／都市計画設計研究所代表

＊1:フィリップスSFL—7282アトランティック原盤

栗生さんとコラボレーションと僕

蓑原 敬

栗生さんが優れた建築家であることは、今更いうまでもないであろう。

また、栗生さんの優れた作品が、ランドスケープアーキテクトやグラフィックデザイナーなど、他のデザイン分野の優れたエキスパートとのコラボレーションによって、よりスケールの大きい、より豊かなものになっていることを指摘するのも、今更という感じがする。

しかし彼の「コラボレーション」は、このような、彼を中心とする他のデザイナー達との協力作業という枠組みをはるかに越えたところでも成立していることを報告することが、僕の役割らしいということに気付いた。

僕は都市プランナーと僭称し、大小様々な都市開発、地域開発プロジェクトのデザインの質を高めるため、プロジェクト・コンダクティングをすると自称している。僕はデザイナーではない。デザインが成立する場、公共的な事業、仕組みやルール、法規制、民間事業のクライアントの意志などを確認しながらデザイナー達がより優れた解決に到達できるように、建築設計の諸前提、諸条件を整理し、時には強引に組替えて、「場の構造」を変えてしまうことが僕の役割だと思っている。だから僕には常に優れたデザイナーと、そして、告白してしまえば優れた実務的プランナーの協力が不可欠となる。

僕が最初に栗生さんと仕事をしたのは、富山駅前のいわゆる「ステーション・フロント」事業に取組んだ時だった。富山の駅前は、戦後の闇市が残っているという状況で、そこに忽然と2棟の市街地再開発事業によるビルが建ち上るということになった時、建築や空間について高い見識をもつ中沖知事が、駅前景観の整備をきちんと考えるように指示を出した。この地区については、すでに早くからから、高山英華先生の空間コンセプトがあって、2棟の再開発ビルをゲートとして考える基本構想があった。しかしそれは例のごとく役所の中では既に忘れ去られていて、誰もフォローしようとはしていない。富山県庁の中に一人、知事の意向を受け発展させ、駅前の景観コントロールを真面目に展開しようとする人がいて相談を受けた。何しろお定まりの場の構造で、再開発事業の設計者は既に定まっており、大きな事業的な枠組みを動かすことができないことは勿論、デザイン調整の結果発生する事業費の増大を誰がどこでカバーするかという面倒な問題もある。偉い建築家はそのような面倒なことに関わることを嫌うし、第一作業の費用が正当に支払われるかどうかも保証できない。栗生さんは、実に丁寧に、労苦厭わずその調整作業に望んでくれた。もちろん行政、県と市の実質的なバックアップなしには成立しない作業であったが、この様な形のコラボレーションが実にうまく動いた珍しいケースだった。

同じ富山で、新しく駅北部に建った芸術文化ホールの調整も難事だった。日建設計名古屋と久米設計という二大巨人の実務家がうまい解決だとスッキリ呑み込める案を立派にひねり出し、現在の姿の都市デザイン的レベルでの格段の向上に寄与した。(建築デザイン調整には一切関わっていないので、念のため)

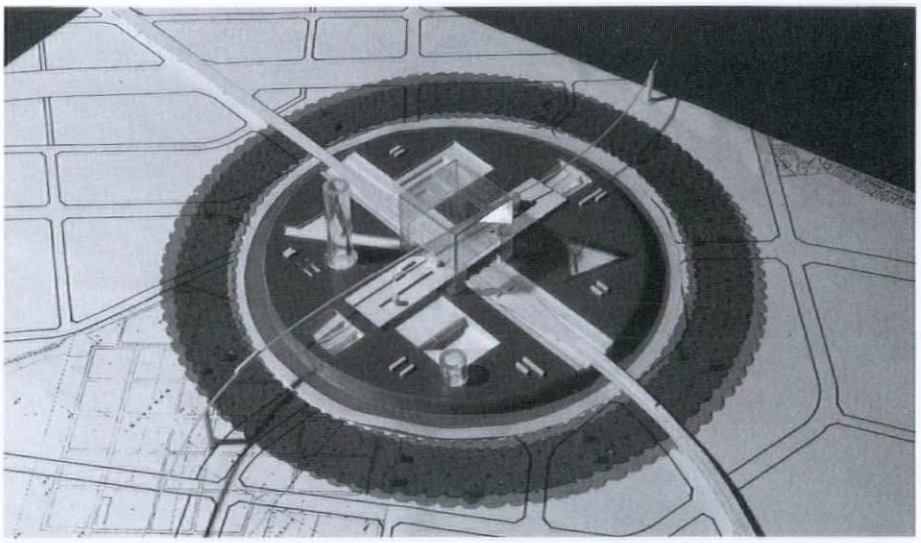
次に取り組んだのは、大分のアメニティ・タウン計画だった。岩村和夫、新居千秋、栗生明という3人の優れた建築家が協働し、ひとつのコンセプト、それは平松大分県知事によって、後に一村一風と名付けられたが、幸運にも恵まれて、〈コア山国〉として結晶したものだった。3人の個性豊かな建築家の対等なコラボレーションという次元は、栗生さんにとっても面白い経験だったと思うが、彼は、このレベルも軽やかにこなし、作品にしてしまった。

鉄道の新駅をどう開発するかという、通常なら全く建築家が介入できない場に彼を引き出した時、彼は苦もなく、スーパースケールの「ディスク・シティ」という空間コンセプトを提案し、私達を魅了した。

日本では、いかなる歴史的な歪みか、都市空間をつくる時最初に二次元の捌き屋(サバキヤ)がいて、その後に建築家が与えられた敷地で、ガンジガラメの条件の中で建築するという悪習が確立してしまっている。僕はこのような悪習を破るため、都市計画的なレベルの当初の作業から、できるだけ優れた建築家に参画してもらうようにしている。特に最近では都市計画設計研究所の河合良樹氏との共同作業で、このような仕組みをつくることが多い。〈ディスク・シティ〉の場合には、都市総合研究所の鳥栖那智夫氏とのコラボレーションだった。このようなレベルでの栗生さんの構想力もまた、大きなコラボレーションの土台をつくる。

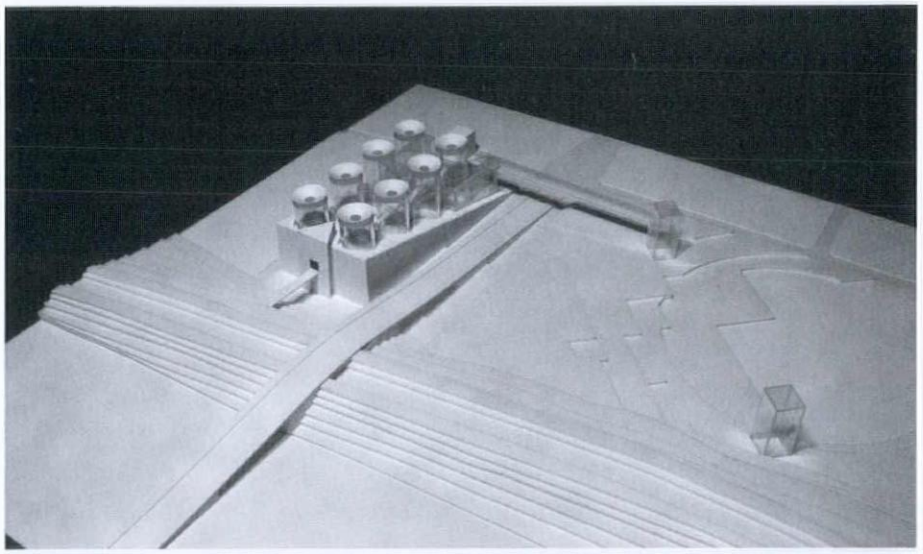
しかし、栗生さんと同じような人達が次々に現れ出し、私とコラボレートしていることを付け加えておきたい。日本の都市の風景を変えて行く上で不可欠な軍団の発生だと思えるから。

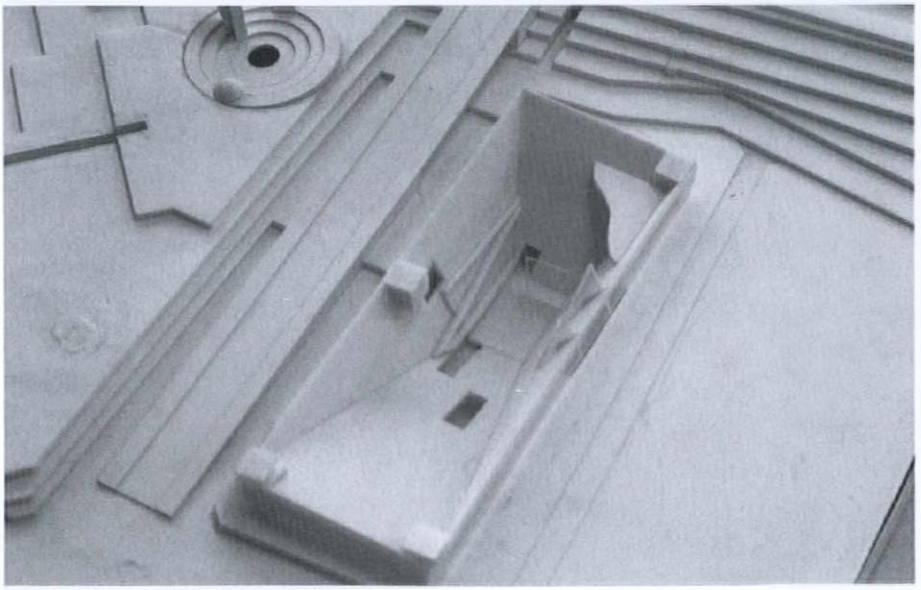
●みのはら・けい／都市プランナー



ディスク・シティ
DiskCity

新線の駅を中心とした、駅前開発に対する新たな提案。明確な領域感と中心性をもち、同時に周辺から自由にアクセスすることが可能な円形平面が立体的に展開し、都市を形成する。
歩車分離や屋上緑化等を通して、人のための都市空間が意図され、環境と共生する自律型の都市が目指された。



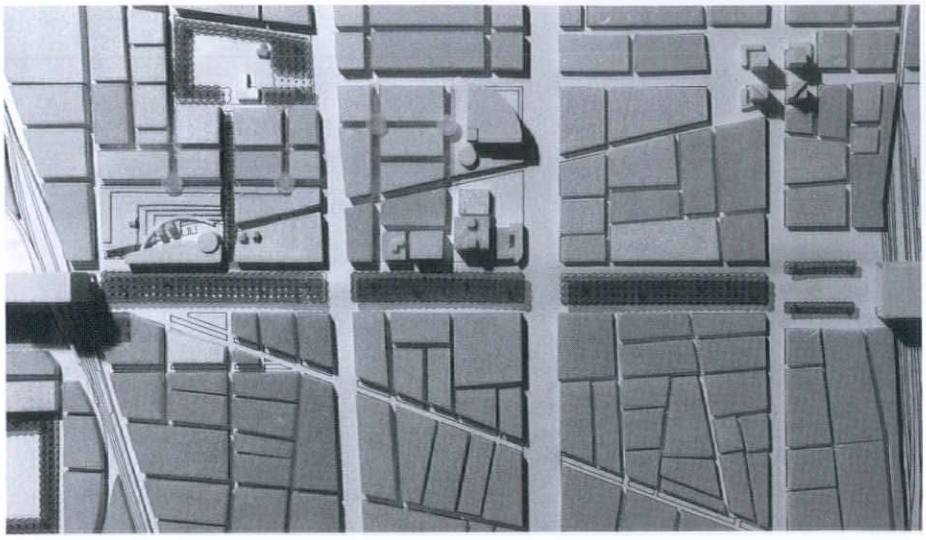


オクタビオ
Octavio

〈伊丹市地下めいそう空間〉のある荒牧バラ公園に隣接する敷地での2つの計画。それぞれに回遊性の高い動線を実現し、地下道とオーバーブリッジでバラ公園と結ぶことによって、施設を公園の一部として組み込むことが意図された。

オクタビオ1
階段状の基壇に、展示のショーケースでもある8本のガラスチューブが貫入する植物館。ガラスチューブは、夜間には巨大なイルミネーションとなり、公園の景観の一部となる。一般のための展示学習機能のほか、バイオテクノロジーを利用した研究機関も計画された。

オクタビオ2
〈地下めいそう空間〉と一体のものとして計画された平和資料館は、階段状のステップテラスによって囲まれた中庭に諸施設が面する構成をもつ。〈地下めいそう空間〉から地下通路を通ってこの中庭へアプローチすると、外界から隔離された独自の環境が展開される。

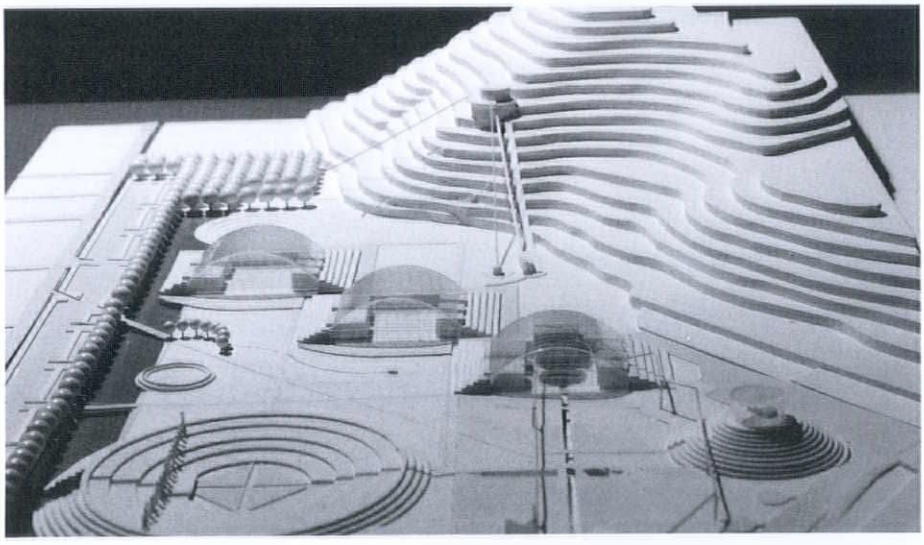


Y市中心街再整備計画

Y-City Central Section Redevelopment

JRと私鉄の駅に挟まれた市中心街の整備計画。両駅を結ぶ街路を「緑の軸」として整備する一方、それに斜めに走る「水の軸」、「アミューズメントの軸」を新たに計画し、街の骨格を形成した。

この斜めの街路は商業施設をも貫通する。都市の魅力的要素を建築に取り入れ、従来のパッケージ(箱)型の商業施設から「街」化した商業施設へと脱却することが目指された。

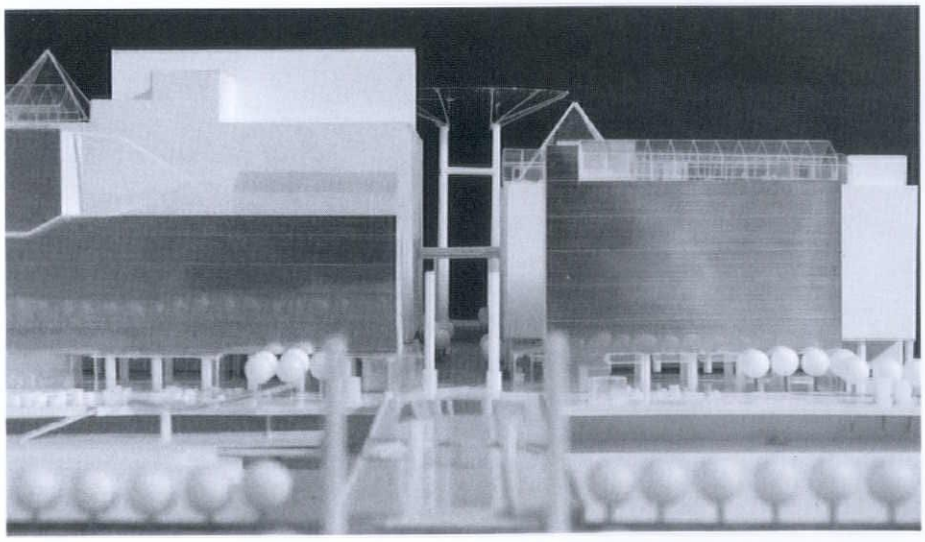


ブルースカイパーク

Blue-sky Park

航空・宇宙をテーマとしたミュージアムの構想。格納庫を模したアトリウムの展示空間が雁行配置され、高台に配されたレストランやアースワークと、多様な動線で結ばれることによって、全体としてミュージアム・パークを形成する。

単に地上におかれた飛行機を眺めるだけではなく、人類が常に追い求めてきた大空への夢を体感することのできる場が形成される。



I百貨店

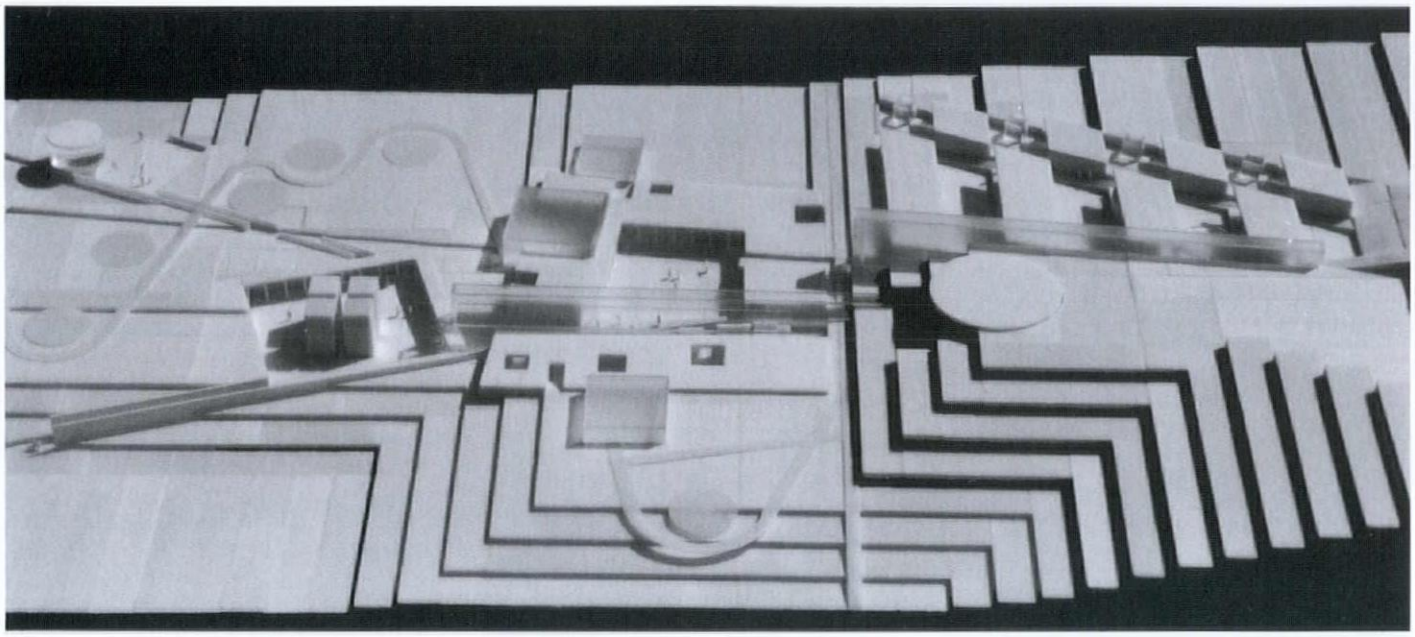
I Department Store

百貨店を、単にモノを売る場所ではなく、人々が生活や文化を楽しむための様々な仕掛けをもった都市的な空間として捉え直した計画である。

百貨店自身が船着き場やベルベデーレ(望楼)、屋上ガーデン温室といった仕掛けをもつだけでなく、周辺の街区にも様々な仕掛けを用意することによって、地域として多様なアクティビティを誘発することが意図された。

グリーン・ライフ・ミュージアム

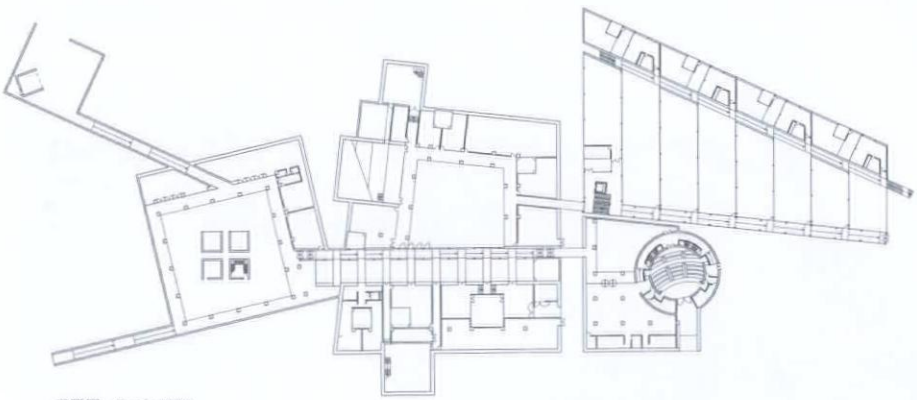
Green Life Museum



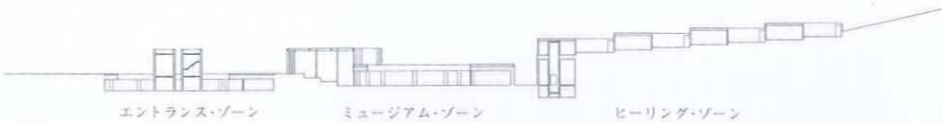
全景

社会全般に人間と自然の新たな関係が模索されはじめている。この施設は都市近郊の平野部から丘陵地にさしかかる境界に計画された。いわばグリーン・フロントに位置するこの建築は、雑木林を背景とした伸びやかな地形を生かすため、内部空間の多くが地下に埋設され、地表面には様々な花と緑によるガーデンが計画されている。ガーデンには数多くのスリットや穴が穿たれ、地中の人工空間に光や風を導入するとともに、立体的な回遊空間を構成している。このように花と緑をテーマにしたこの施設では、建築と自然の境界を取り去ることが目指され、人間と自然の新しい関係を発見する場をつくることが意図されている。

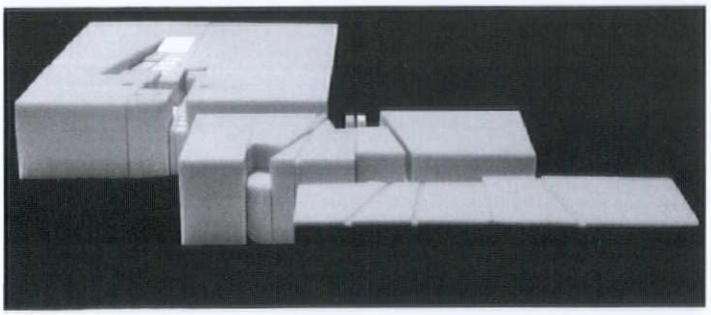
サービス施設をもつエントランス・ゾーン、展示・研究のミュージアム・ゾーン、それに癒しの体験を提供するヒーリング・ゾーンからなるこの施設の目的は多様であり、緑と自然を学び、新しいライフスタイルを提示する施設として、観光施設として、さらに市民参加を推進することで街づくりに生かされる施設として計画されている。



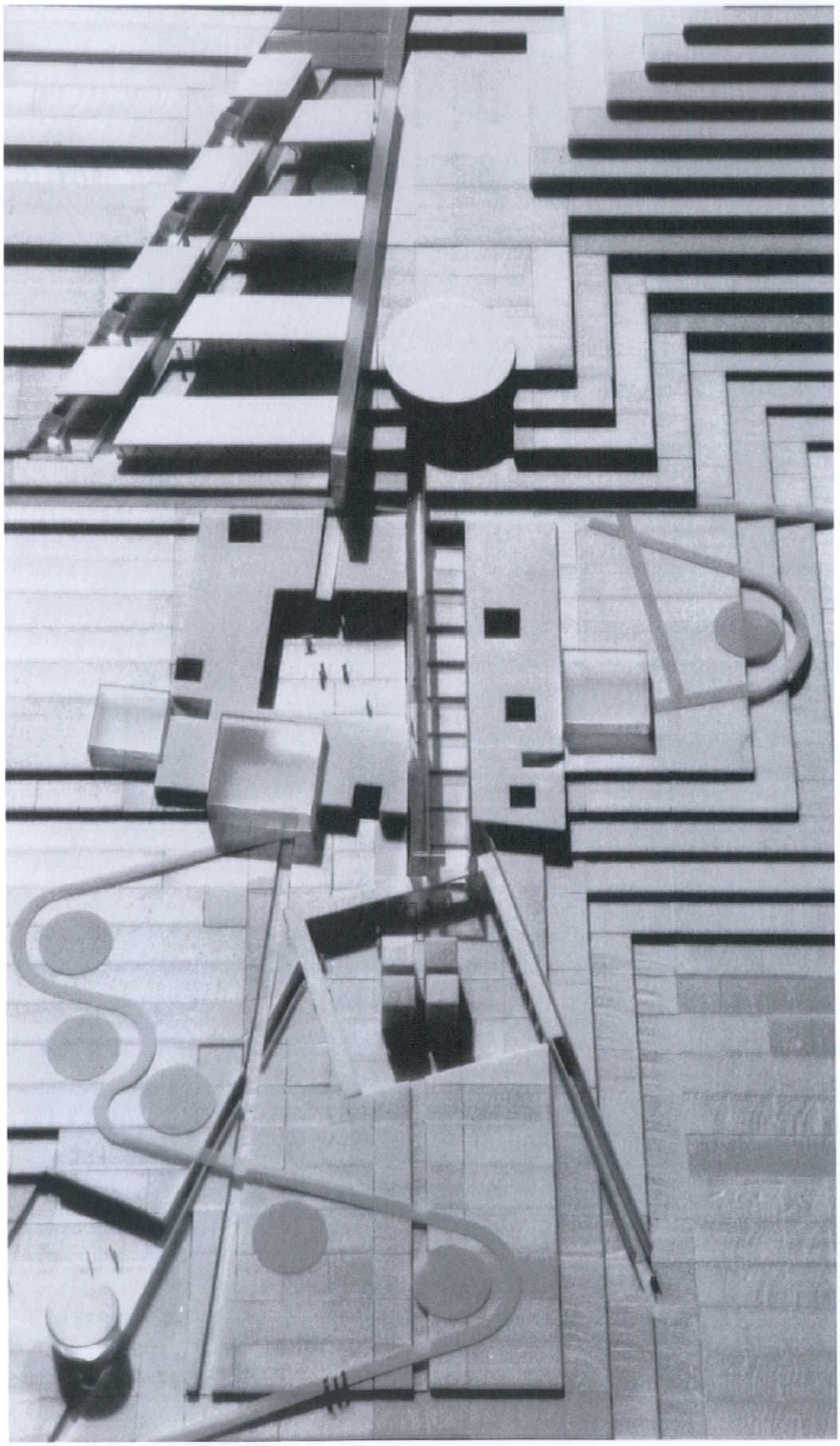
平面図　S=1:1800



断面図　S=1:1800



コンセプト模型



全景

栗生明の作品

1979—1996

■高嶋邸

所在地：千葉県木更津市真理谷
主要用途：専用住宅

施工：大沢+荒井建設

敷地面積：757.04㎡
建築面積：75.89㎡
延床面積：106.48㎡
建蔽率：10.02%
容積率：14.06%
構造：木造

設計期間：1978年6月～1979年3月
施工期間：1979年4月～1980年11月

■サンスクエア・ヤマノタ

所在地：山口県下関市
主要用途：店舗

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：共同設計事務所
施工：清水建設+日本グリーンハウス工業（現、松下精工エンジニアリング）

敷地面積：3,391.25㎡
建築面積：768.42㎡
延床面積：740.15㎡

施工期間：1981年6月～1981年11月

□香港ピーク設計競技案

主要用途：宿泊施設、高級クラブ

設計協力：田中耕一、中村研一、佐藤健司、上西明、上窪哲也

設計期間：1990年

■人形町佐七ビル

所在地：東京都中央区日本橋人形町
主要用途：店舗併用住宅

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：共同設計事務所
施工：タジマ建設

敷地面積：53.19㎡
建築面積：49.37㎡
延床面積：141.88㎡
構造：S造

設計期間：1981年11月3～1982年6月
施工期間：1982年7月～1982年10月

■グリーン・ベル

所在地：富山県高岡市鐘紡町
主要用途：複合商業施設

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：共同設計事務所
家具デザイン協力：藤江和子アトリエ
施工：塩谷建設

敷地面積：4,733.26㎡
建築面積：1,520.55㎡
延床面積：1,498.98㎡
建蔽率：32.12%
容積率：31.67%
構造：RC造、S造

設計期間：1984年1月～1984年8月
施工期間：1984年10月～1985年3月

□I百貨店

主要用途：店舗、複合商業施設
設計期間：1986年

■井上誠昌堂金沢オフィス

所在地：石川県金沢市直江町
主要用途：事務所　倉庫

構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
サイン：寺門デザイン事務所
施工：大成建設

敷地面積：1,681.73㎡
建築面積：424.76㎡
延床面積：579.79㎡
建蔽率：25.25%
容積率：34.47%
構造：S造

設計期間：1987年10月～1988年1月
施工期間：1988年2月～1988年9月

■カーニバル・ショーケース

所在地：兵庫県多紀郡篠山町
主要用途：展示場、劇場、店舗、スポーツ施設、遊戯施設

総合プロデュース：エー・エー・ビー
構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
照明演出：佐藤壽晃
カラーコーディネート：プランツデザイン事務所
サイン：エー・エー・ビー
外部植栽：緑地設計研究所
内部植栽：エー・エー・ビー、ユニトピアささ山G.C.デザインセンター
海外植物指導：小山鐵夫
一般植物指導：国重正昭
施工：竹中工務店・三井建設JV

敷地面積：148,208.00㎡
建築面積：2,502.76㎡
延床面積：3,514.05㎡
構造：RC造、S造

設計期間：1987年5月～1987年12月
施工期間：1988年2月～1988年10月

■ニヤクコーポレーション八幡平保養所：ルーエ・アスピーテ

所在地：岩手県岩手郡松尾村大字寄木
主要用途：保養所

構造設計：ステム構造設計
設備設計：総合設備計画
施工：鹿島建設

敷地面積：2,871.00㎡
建築面積：647.54㎡
延床面積：854.92㎡
建蔽率：22.55%
容積率：29.78%
構造：RC造、S造

設計期間：1987年10月～1988年1月
施工期間：1988年6月～1989年1月

■セキショウつくばオフィス

所在地：茨城県つくば市二ノ宮
主要用途：事務所、ショールーム、スタジオ

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
外部照明：佐藤寿晃

施工：清水建設

敷地面積：1,183㎡
建築面積：823㎡
延床面積：2,581㎡
建蔽率：69.57%
容積率：218.17%
構造：S造

設計期間：1987年4月～1987年12月
施工期間：1988年2月～1989年3月

■神慈秀明会黄島神殿

所在地：岡山県邑久郡牛窓町黄島
主要用途：神殿

構造設計：木村俊彦構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
家具（神殿椅子）：エンドウプランニング
施工：大林組

敷地面積：13,563.00㎡
建築面積：928.88㎡
延床面積：1,035.54㎡
建蔽率：6.80%
容積率：7.60%
構造：RC壁式構造、RCシェル構造（屋根）

設計期間：1987年3月～1988年3月
施工期間：1988年10月～1989年10月

■国際花と緑の博覧会：フローリアム109

主要用途：博覧会施設

総合プロデュース：都市計画設計研究所
構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
音響・展示：ケービー
施工：東急建設

建築面積：549.23㎡
延床面積：693.21㎡
構造：S造

設計期間：1989年3月～1989年6月
施工期間：1989年7月～1990年2月

■井上誠晶堂富山オフィス

所在地：富山県富山市針原中町
主要用途：事務所+倉庫

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
サイン：寺門デザイン事務所
家具：藤江和子アトリエ
施工：フジタ工業

敷地面積：7,034.769㎡
建築面積：1,390.41㎡
延床面積：1,498.75㎡
建蔽率：19.76%
容積率：21.33%
構造：S造

設計期間：1989年5月～1989年9月
施工期間：1989年10月～1990年5月

□オクタビオ1

主要用途：植物館
設計期間：1989年

□オクタビオ2

主要用途：展示場、会場
設計期間：1989年

□ディスク・シティ（新駅周辺再開発計画）

設計期間：1989年

□ブルースカイパーク

主要用途：博物館
設計期間：1991年

■伊丹市地下めいそう空間

所在地：兵庫県伊丹市荒牧
主要用途：多目的ホール

プロデュース：エー・エー・ビー
意匠設計：井上武吉、栗生明+栗生総合計画事務所
構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
施工：浜田組

敷地面積：15,000.15㎡
建築面積：13.00㎡
延床面積：1,361.44㎡
構造：SRC造、一部RC造

設計期間：1988年11月～1990年1月
施工期間：1990年3月～1991年5月

■神慈秀明会黄島道場

所在地：岡山県邑久郡牛窓町黄島
主要用途：宿泊研修施設

構造設計：木村俊彦構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
ラウンジ家具：エンドウプランニング
施工：大本組

敷地面積：6,703.96㎡
建築面積：956.75㎡
延床面積：1,679.41㎡
建蔽率：14.27%
容積率：25.05%
構造：RC造、木造集成材立体トラス造（屋根）

設計期間：1989年2月～1990年3月
施工期間：1990年5月～1991年7月

□Y市中心街再整備計画

設計期間：1990年

■福石Axia安岡SS

所在地：山口県下関市梶栗町
主要用途：ガソリンスタンド

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：共立システム設計事務所
色彩・サイン：寺門デザイン事務所
施工：安成工務店

敷地面積：1,894㎡
建築面積：667㎡
延床面積：667㎡
建蔽率：35.21%
容積率：35.21%
構造：S造

設計期間：1991年8月～1991年12月
施工期間：1992年1月～1992年7月

■セキショウつくばアネックス

所在地：茨城県つくば市東新井
主要用途：事務所

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
家具：藤江和子アトリエ
施工：清水建設+関彰商事

敷地面積：1,468.95㎡
建築面積：739.79㎡
延床面積：2,900.88㎡
建蔽率：50.4%

容積率：197.5%
構造：S造

設計期間：1990年6月～1991年2月
施工期間：1991年4月～1992年4月

■ギャザホール

所在地：埼玉県越谷市神明町
主要用途：結婚式場

構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
施工：五洋建設

敷地面積：2,964㎡
建築面積：1,845㎡
延床面積：6,286㎡
建蔽率：70%
容積率：177%
構造：SRC造

設計期間：1990年8月～1990年12月
施工期間：1991年1月～1992年5月

■信州博覧会コンストラクション・アート・ミュージアム／CAM

主要用途：博覧会施設

総合プロデュース：都市計画設計研究所
構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
展示設計：ケーピー、オートゥー
施工：鹿島建設

敷地面積：（会場全体）241,915.33㎡
（区画面積）1,440.00㎡
建築面積：220.15㎡
延床面積：207.05㎡
構造：RC造

設計期間：1992年8月～1992年12月
施工期間：1993年2月～1993年7月

■植村直己冒険館

所在地：兵庫県城崎郡日高町
主要用途：記念館

総合プロデュース：エー・エー・ピー
構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
ランドスケープ：プレイスメディア
展示・サイン：エー・エー・ピー
施工：大林組

敷地面積：31,500㎡
建築面積：957.98㎡
延床面積：944.89㎡
構造：RC造、S造(メモリアルウォール)

設計期間：1992年6月～1992年12月
施工期間：1993年3月～1994年1月

■鳩山ニュータウン・タウンセンター

所在地：埼玉県比企郡鳩山町
主要用途：店舗、事務所、コミュニティーセンター

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：共立システム設計事務所
サイン：寺門デザイン事務所
施工：清水建設

敷地面積：13,670.09㎡
建築面積：1,916.77㎡
延床面積：3,805.69㎡
建蔽率：29.96%
容積率：41.33%
構造：S造、RC造、SRC造(ガレリア部分)

設計期間：1992年3月～1993年2月
施工期間：1993年3月～1994年3月

■セキショウHFランド

所在地：茨城県筑波郡谷和原村
主要用途：展示場（ショールーム）

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
施工：清水・谷原JV+関彰商事

敷地面積：5,836.65㎡
建築面積：1,417.38㎡
延床面積：1,494.70㎡
建蔽率：24.3%
容積率：25.6%
構造：S造、RC造

設計期間：1992年9月～1993年5月
施工期間：1993年7月～1994年4月

■パトリ+清里フォトアートミュージアム

所在地：山梨県北巨摩郡高根町清里
主要用途：宿泊研修施設、美術館

総合プロデュース：エー・エー・ピー
構造設計：早稲田大学田中研究室
設備設計：総合設備計画
ランドスケープ：プレイスメディア
家具・インテリア：藤江和子アトリエ
サイン：久谷政樹（京都芸術短期大学）+エー・エー・ピー
施工：東海興業

敷地面積：18,642.75㎡
建築面積：3,083.09㎡
延床面積：3,850.82㎡
建蔽率：16.54%
容積率：20.66%
構造：RC造、一部S造

設計期間：1993年3月～1994年3月
施工期間：1994年4月～1995年5月

■新湊市営本江住宅

所在地：富山県新湊市本江北
主要用途：共同住宅

構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：共立システム設計事務所
施工：牧田組

敷地面積：12,193㎡
建築面積：1,238.50㎡
延床面積：3,654.52㎡
建蔽率：10.2%
容積率：30%
構造：RC造、一部S造

設計期間：1994年1月～1994年6月
施工期間：1994年9月～1995年7月

■群馬県営相生住宅団地

所在地：群馬県桐生市相生
主要用途：共同住宅

基本設計：栗生明+栗生総合計画事務所
実施設計：（監修）栗生明+栗生総合計画事務所（担当）群馬県建築設計センター（田中設計）
構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：石井設備設計
施工：（C棟、E棟）平澤建設（D棟）島田組（F棟）三浦建設（G棟）桐生建設

敷地面積：20,231㎡
建築面積：2,997.88㎡
延床面積：12,039.13㎡
建蔽率：14.82%
容積率：59.51%
構造：壁式RC造(中層棟)、SRC造(高層棟)

設計期間：1991年10月～1992年5月
施工期間：1992年12月～1995年8月

■セキショウいわきオフィス

所在地：福島県いわき市平正内町
主要用途：事務所、ガソリンスタンド、ショールーム

構造設計：ステム構造設計事務所
設備設計：共立システム設計事務所
サイン：寺門デザイン事務所
施工：三井・熊谷・錦JV+関彰商事

敷地面積：3,630.90㎡
建築面積：2,216.48㎡
延床面積：2,397.64㎡
建蔽率：61.04%
容積率：66.03%
構造：S造、一部RC造

設計期間：1994年9月～1994年11月
施工期間：1995年1月～1995年10月

□埼玉県都幾川村文化体育施設設計競技案

所在地：埼玉県比企郡都幾川村
主要用途：体育館、図書館

設計期間：1994年

□世界都市博覧会：江東区パビリオン

主要用途：博覧会施設

総合プロデュース：南條道昌
アドバイザー：森下慶子
展示計画：博報堂

敷地面積：345.8㎡
建築面積：150.0㎡

□世界都市博覧会：東京都・建設省合同パビリオン

主要用途：博覧会施設

総合プロデュース：都市計画設計研究所
設計協力：東内勝美、高下法道
構造設計：T.I.S & Partners
設備設計：総合設備計画
植栽：プレイスメディア
展示設計：ケーピー、オートゥー

敷地面積：3,013.0㎡
建築面積：1,575.0㎡
延床面積：1,402.8㎡

設計期間：1994年12月～1995年5月

□世界都市博覧会：青海第2地区

主要用途：広場、ゲート、協会施設

設計協力：大野博、東内勝美、高下法道
ゲート設計：宇野求+フェイズ・アソシエイツ、古谷誠章+スタジオナスカ
構造設計：T.I.S & Partners
設備設計：総合設備計画
ランドスケープ協力：プレイスメディア

敷地面積：111,863.0㎡
建築面積：12,203.3㎡

設計期間：1994年3月～1995年3月

□大分県アグリカルチャーパーク「楽市楽座館」設計競技案

主要用途：農業公園施設
設計期間：1995年

□埼玉県環境科学国際センター設計競技案

主要用途：研究施設、研修施設、展示施設
設計期間：1995年

■グリーン・ライフ・ミュージアム

主要用途：植物展示施設
設計期間：1995年～

■コアやまくに

所在地：大分県下毛郡山国町大字守実
主要用途：複合公共施設（集会施設、町役場、展示場、図書館、劇場、塔）
協力：高下法道

構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
劇場総合：シアターワークショップ
劇場音響：永田音響設計
特殊音響：サウンドクラフト
特殊照明：エム・ワークス
サイン：寺門デザイン事務所
施工：（建築）三井・三光・谷JV（機械）高砂・三好・三信管工JV

敷地面積：26,765㎡
建築面積：5,806㎡
延床面積：9,372㎡
建蔽率：21.7%
容積率：35.02%
構造：S造、RC造、一部SRC造

設計期間：1990年3月～1994年8月
施工期間：1994年10月～1996年3月

■チューリップ四季彩館

所在地：富山県砺波市中村
主要用途：展示場

総合プロデュース：エー・エー・ピー
構造設計：レン構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
ランドスケープ：環境事業計画研究所
展示サイン：エー・エー・ピー
施工：（建築）砺波・鷹栖JV（機械）新日本空調・吉井JV（電気）柴田電気・小川電気JV

敷地面積：19,639.41㎡
建築面積：2,757.76㎡
延床面積：2,921.76㎡
建蔽率：14.12%
容積率：14.96%
構造：S造、RC造

設計期間：1994年3月～1994年10月
施工期間：1994年11月～1996年3月

■岡崎市美術博物館（マインドスケープミュージアム）

所在地：愛知県岡崎市中央総合公園内
主要用途：美術博物館（収蔵庫棟）

構造設計：木村俊彦構造設計事務所+花輪建築構造設計事務所
設備設計：総合設備計画
家具：藤江和子アトリエ
ランドスケープ：プレイスメディア
霧の彫刻：中谷芙二子
サイン：寺門デザイン事務所
施工：（建築）鉄建、酒部、トーヨーJV（機械）大冷・武田JV（電気）東光・寺井JV

敷地面積：1,892,940.38㎡
建築面積：3,982.49㎡
延床面積：6,444.16㎡
構造：S造、RC造

設計期間：1991年8月～1992年10月
施工期間：1994年1月～1996年6月

略歴

1973年　早稲田大学大学院修士課程修了
　　(株) 槇総合計画事務所入社
1979年　(株) Kアトリエ設立
　　東京大学建築学科助手
1983年　文化庁委嘱芸術家在外研修員として
　　1年間渡欧
1987年　(株) 栗生総合計画事務所と改称
1996年　(株) 栗生総合計画事務所主宰
　　千葉大学工学部建築学科教授
　　東京大学建築学科非常勤講師
　　早稲田大学建築科非常勤講師

受賞歴

1982年　商空間デザイン大賞
1985年　商環境デザイン優秀賞
1987年　ＳＤレビュー鹿島賞
1989年　新日本建築家協会新人賞
1991年　日本建築学会作品選集入選
1993年　日本建築学会北陸建築文化賞
1995年　通産省グッドデザイン賞、ＪＣＤデザイン賞優秀賞
1996年　日本建築学会賞

(株)栗生総合計画事務所

岩佐達雄
大野文也
柿内正之
片山正文
吉村　務
鈴木弘樹
田中秀弥
芹澤光彦
矢野雅稔
古川達也
松本浩介
吉元和子
佐藤直実

■フォト・クレジット

岡本公二
p. 8、p. 26-33、p. 36上中段左と下段左から1、3、4番目、p. 37、p. 91

北嶋俊治
p. 10、p. 11、p. 12-13、p. 14、p. 15、p. 16、p. 17
p. 23、p. 92

ナカサ＆パートナーズ
p. 20-21、p. 83、p. 84上、p. 97、p. 99、p. 102、p. 105右、p. 106、p. 107、p. 115

山国町役場企画課
p.35

古館克明
p. 44-7、p. 49、p. 51-52、p. 93、p. 94、p. 96、p. 98、p. 100、p. 101上、p. 103、p. 104、p. 109

安カ川仁省
p. 53中段

一如社制作部
p. 58、p. 60-65、p. 67、p. 68上段右、p. 70上中段右

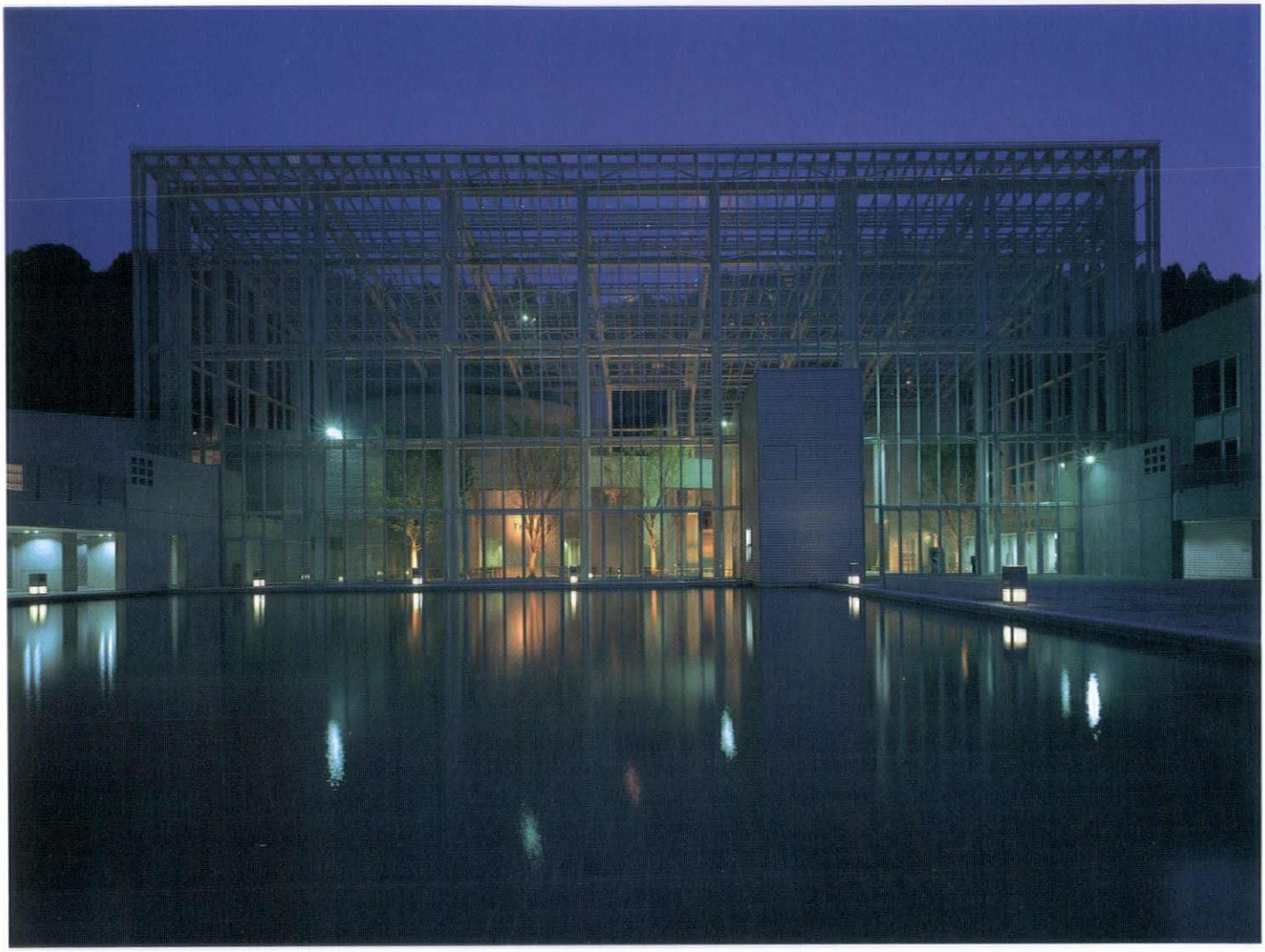
松村芳治
p. 74、p. 75、p. 76、p. 77、p. 78-79、p. 80上、p. 81、p. 85

PLACEMEDIA
p. 84下左

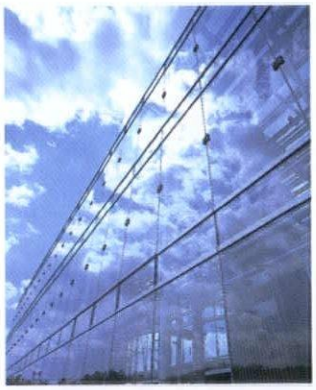
坂口裕康
p. 113

その他の写真は、(株)栗生総合計画事務所

私たちの仕事は設計者のコンセプトを把握することから始まります。



NAVEC as glass architect



ガラス建築を通して快適空間を創造する・・・

New Amenity & Valuable Engineering Constractor NAVEC

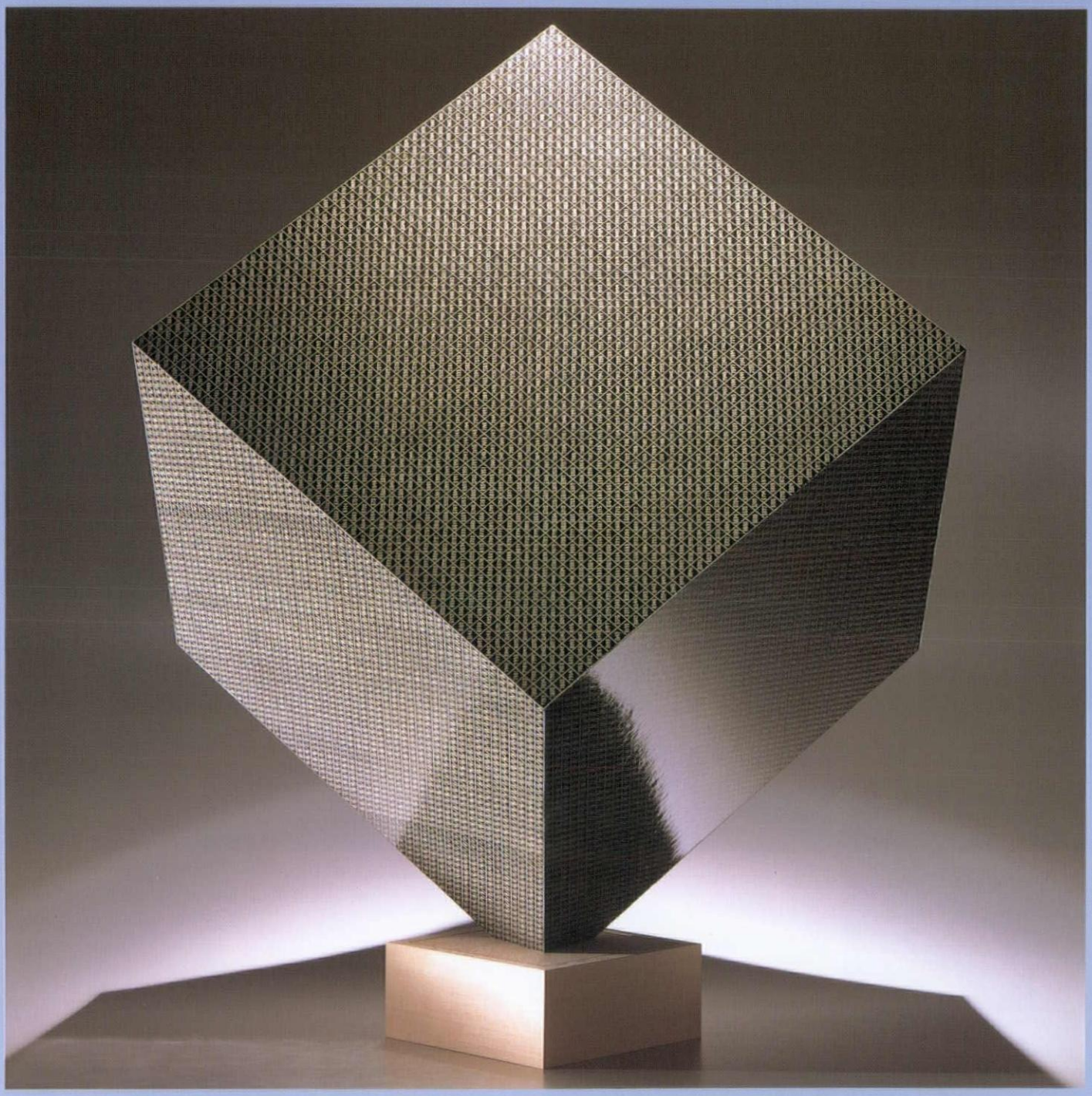
松下精工エンジニアリング株式会社
東京支店　03−5442−2672
名古屋支店　0568−81−0599
大阪支店　06−350−5330

apple tomology

トムの時空形象学　連載 ⑭

戸村 浩

MAGIC CUBE



中身がからっぽになる角砂糖の秘密を明かすと、それは、白い角砂糖の表面に、薄く樹脂を塗っただけのことである。樹脂の小さな穴から染み込んだ水が、浸透圧の現象を起こし、内部のお砂糖を勢いよく吹き出して、形ばかりのお砂糖の抜け殻が出来上がるのである。

ここに提示する「MAGIC CUBE」も、軽くて甘くない、表皮だけの「CUBE SUGAR CUBE」と同じく、中身のからっぽな立方体である。けれども、その表面には、細かい数字がびっしりと書き込まれて満杯だ。一種の立体魔法陣である。

魔法陣とは、縦、横、斜めのどの列を加えても、同じ和を作るように数が配置された正方形のことだ。デューラーの版画、1514と制作年を織り込んだ「メランコリヤ」などが、その不思議な魔法陣として有名である。古い起源をもち、現代にもいろいろと関わりがあるのに、あまり目立たない存在であるが、その魔法陣は、我々の身近にも、角砂糖のごとく、さりげなく転がっている。それが、何でもないサイコロであり、しかも、最小の魔法陣であることに気付いた時、サイコロによる魔法陣の制作を始めた。　●とむら・ひろし／造形美術家

撮影：田中 昇

光、最先端をめざして
IWASAKI

店舗・空間の雰囲気を演出する イワサキの照明。

イワサキのハイラックスは、
ニーズに合わせて四つの光色。

HYLUX

レストランやショーウィンドーはもちろんホテルや空港ターミナルのロビーなど、その用途やニーズに合わせ「高級感」「清潔感」そして「くつろぎ」や「やすらぎ」などの雰囲気の演出が欠かせません。イワサキのハイラックスは四つの色温度で照明の演色性にバリエーション。また、公園や庭園、施設や建造物のライトアップなど、屋外照明も季節や雰囲気に合わせて使い分ければ効果は抜群です。

●特徴●

▶夕日のような色温度＝2500K、朝日のような色温度＝3500K、太陽のような色温度＝4500K、青空のような色温度＝6500K。《色温度（ケルビン／単位K）とは、ランプの光の色を表すときの単位で、値が低いほど赤みを高くなるほど青みをおびてきます。一般に色温度が低い光源は暖かい印象を、高い光源は涼しい印象を与えます》

▶HID光源でコンパクト&低ワット。
しかも、あらゆるニーズに応える、
50W、70W、100W、150Wの４タイプ。

●ショールーム『イズ・キット』●

イズ・キットは光の未来を体感していただく岩崎電気のコミュニティスペース。最先端の光技術と応用システムをご覧ください。

EYE 岩崎電気株式会社

岩崎電気株式会社
東京都港区芝3-12-4 TEL.03-3769-8411(広報宣伝室)

ショールーム「イズ・キット」
東京都港区芝5-1-2 TEL.03-3769-6721

「都市景観・建築文化の10年」オープニング・シンポジウム

「都市景観・建築文化の10年」オープニング・シンポジウム
日時：1996年9月6日　会場：岡山シンフォニーホール
パネラー：岡田新一氏（建築家／CTOコミッショナー）
篠原修氏（東京大学教授／シビックデザインの提唱者）
マリ・クリスティーヌ氏（タレント／コミュニケーター）
小嶋光信氏（岡山経済同友会代表幹事）
戸川克重氏（岡山県土木部都市局長）
コーディネーター：前田 敦

「都市景観・建築文化の10年」事業（以下10年事業と呼ぶ）は、岡山国体が開催される2005年を目標とする10年間に、優れたデザインによる様々な施設整備や街並み整備のプロジェクト（ハード事業）と、都市景観等についての理解の促進と人材育成のためのプログラム（ソフト事業）を集中的かつ総合的に推進することにより、県内の各都市・各地域において「21世紀の顔」として誇れるような優れた都市景観・建築文化を創造しようとして岡山県が始めたプロジェクトである。

「くまもとアートポリス」、「クリエイティブTOWN岡山」（以下CTOと呼ぶ）等の「まちづくりプロジェクト」を通して必ず直面するのが、縦割り行政の認識の違い（土木と建築等）、事業年度の違い等の分厚い壁である。しかし、この10年事業においては、土木主導で行われてきたシビックデザイン事業と、建築主導で行われてきたCTO事業を、国体関連の施設整備をモーメントとして統合し、今後の都市整備の在り方を探っていこうという意図が興味深い。

平成8年9月6日、この事業のオープニング・シンポジウムが「岡山の顔づくり」というテーマで行われ、次のような内容で議論された。

歴史的に見て、都市・建築は、絶対的な権力者によって意図的に造られてきた側面と、産業構造・ライフスタイルによって自然発生的に造られてきた側面を持つ。高度情報化時代を迎える民主主義社会において、人的資源の育成とそのための環境づくり・システムづくりこそが都市景観と建築文化の醸成の基盤である。

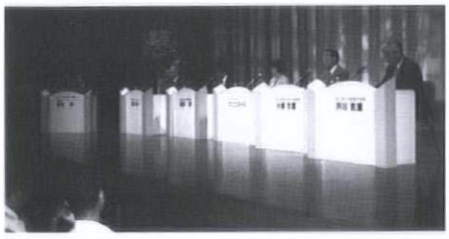
その方法として、地域に埋没している文化的資産の再発見や新しい試みの積極的導入等を身近なところから実践し、点から線へ、線から面へと連句式に発展させていこうとするプロセスが重要である。そして10年事業はそのための実験プロジェクトと位置づける。

私なりの所感を述べさせて頂くと、本質的に都市というのは、人々の潜在的な無意識や欲望が積層し合って成立している構造を持っている。一方、従来の行政主導の都市計画は意識の部分で計画され、しかもリアリティに欠ける総論的な内容のものであったため、行政と生活者との間には大きなズレが生じている。そのためか、会場からは「まちづくりに対してリアルな信頼感を感じない」との声も寄せられた。本来、分析的な視点であるハイパーイメージ（鳥瞰的視点）を中心に都市整備は捉えられてきた。そして体験的な視点であるリアルイメージ（目視線）によって意識される都市景観・建築文化については言及することのないまま、時限もなく地図の上に色分けされた都市計画図そのものがまちづくりの青写真と信じ込まされてきた生活者にとって、その会場の意見は当然の反応であったかもしれない。

しかし現在、都市基盤整備、都市マネージメントのプロセスを経て、リアルな快適性、リアルな安全性、リアルな美しさを兼ね備えた都市文化創造の時代へと孵化を始める中で、行政はもちろん、生活者各自が都市景観・建築文化に対する意識を変革していくことが最優先課題である。それは、万民が納得するという没個性的で実現不可能なグランドデザインを描くことではなく、文化という共通の帰属意識をもった人々が、身近で手頃なところから、リアルなまちづくりを実践していくことであろう。

2005年に開催が予定されている「都市・景観・建築文化展（仮称）」までに、岡山は都市整備において歴史的な節目を迎える。そんな今こそ、後世に残し得る都市景観・建築文化の創造の時代をリアルに体験したいものだ。

●前田 敦（建築家／オープニングシンポジウム・コーディネーター）



岡山県「都市景観・建築文化の10年」全体構想

景観形成プロジェクトの推進

参加プロジェクト
国体関連施設の整備を始めとして、クリエイティブTOWN岡山（CTO）*、シビックデザイン*等の手法を活用し、「10年」の主旨に沿って行われる各種の建築物や公共施設の整備、宅地開発、町並み修景などのプロジェクトを「10年」参加事業として登録し、その推進を図る。

デモンストレーション地区
上記のプロジェクトが集中的に行われることが予想され、先導的かつ面的に優れた都市景観の形成を図る必要がある地区は、「デモンストレーション地区（公開推進地区）」として位置付け、重点的に各種施策を展開する。

→ ←

普及啓発・人材育成プログラム

普及啓発プログラム
景観形成プロジェクトの進行状況や成果を広く公表するとともに、都市景観等に関する県民の理解を促進するため、シンポジウムや展示会の開催、優れた建築物等の顕彰、インターネットへのホームページの設置、広報誌の発行など幅広い普及啓発プログラムを継続的に実施する。

人材育成プログラム
長期的に岡山の都市景観・建築文化の形成を担う人材の育成を図るため、県内の若手建築家やデザイナーの育成と継続的支援、子供を対象とした環境学習機会の提供、県内の建築物等に関するボランティア・ガイドの養成など各種の人材育成プログラムを実施する。

↓ ↓

都市・景観・建築展（仮称）の開催——2005年
岡山国体に併せて開催する「都市・景観・建築展（仮称）」では、各デモンストレーション地区を中心に全ての参加プロジェクトの成果を公開展示するほか、岡山の町並みや歴史的建造物などの紹介、参加型イベントやシンポジウムの開催などを県内全域で展開する。

＊クリエイティブTOWN岡山（CTO）とシビックデザイン：いずれも平成3年度から開始された岡山県で進められている事業で、地域の自然、歴史、文化などに配慮し、文化的資産ともなるような質の高いデザインの施設等の整備を通じて、ゆとりとうるおいのある定住環境を創造しようとするもの。CTOは主に建築物を対象とし、個々の参加プロジェクトに対しては、コミッショナー（現在、岡田新一氏）が、そのプロジェクトに最も相応しい建築家やデザイナーを推薦する。シビックデザインは主に公共土木施設を対象とし、個々の参加プロジェクトについて、専門家等がアドバイスを行うとともに、関係者で構成する検討委員会で知恵を集めながら設計を進める。

誘う光・誘われる光――ホイホイとフラフラ

誘蛾灯に昆虫、集魚灯に魚、さて人間はどんな光に誘われてフラフラ？　今回は、私たち人間が実際のところ光にどのように反応しているのか、「誘う光、誘われる光の実体」について考察した。

闇夜の火祭りに、夏の花火に、スタジアムの夜間照明に、ガード下の赤提灯に、ラスベガス調に輝くパチンコ屋に、吸い寄せられるように人が集まる。どうして、私たち人間はこんなにまで光の誘惑に無防備なのだろうか。多彩に発光する現代都市のファサードは、洗練された光の表情をもって人の目を誘う。建築は夜の都市に対して、どれほど魅力的な顔を見せられるのか……。テーマが発する疑問符は多彩だ。

始めに探偵レポーターの窪田が、光に誘われる原理を解説し、現代人のサンプルを提示した。

言うまでもなく、動物や植物は走光性を持っている。その習性を利用したのが電撃殺虫灯、集魚灯やイカ釣り漁船である。しかし人間は本能的な部分では、真っ暗闇より明るいところを求めることはあっても、文明社会に於いては目で感じる刺激がそのまま行動に直結することは殆どない。実際は今までの経験で学習した知識や、気分に応じて、高度な情報処理や取捨選択を無意識のうちに行っている。

東京のような大都市での光の飽和状態にあって、いったいどのように私たちは光を選択し、誘われているのだろうか？。それを実験するために、事前に「3種の暇人ブラブラ紀行」の取材ロケを行い、その模様をビデオ上映した。

ブラブラ歩きの舞台なったのは吉祥寺。新宿や渋谷といったそれ自体が盛り場という場所を避けて、ある程度の匿名性とバラエティを持った街ということで選ばれた。1組目はいかにも今風の若い学生の女の子2人。2組目は日本に来たばかりという日本語が全くわからないハンガリー人男性。3組目は普通の暇そうなおじさんを街でつかまえて取材をするつもりだったが……。取材班の空腹と疲労からそこまで至らなかったのが悔やまれる。彼らには吉祥寺駅前を起点に、光に誘われるままに歩いてもらって、誘われる理由を述べてもらった。

ロケを分析してみると、誘われる光についての3つのキーワードが挙げられる。1つめは「図と地の関係」。地となる周辺の光環境によって、同じ光でも印象が大きく異なる。繁華街では競って光の量を増してもあまり効果がないが、薄暗いところでは電球一つでも誘われる。真っ暗な闇に一条の光を見いだすときの安堵は、まさにこれだ。

2つめは「○○らしい光」。街の光には、受け取り側が体験的に学習していくサインとしての機能を持ったものが多い。これは、取材した外国人の例を見ても明かで、彼の場合、イメージのなかでの「日本らしい」光，あかりを求めるため、きらびやかなイルミネーションには西欧的なものを感じるだけで誘われることは全くなく、パチンコ屋をクリスマスイルミネーションのよう、と表現したほど。暗闇に浮かび上がる白熱灯の明かりや、赤提灯や行灯に魅力を感じるが、赤い色が風俗営業を意味することが多い西欧と比較して、日本の赤のサイン性は主に飲み屋にあると即座に学習したようだ。

最後には「需要と供給の関係」。全く無目的にフラフラすることが少ないとすれば、実際にはそのときの目的、気分、欲求になどに応じて誘われる。商業看板こそは、その欲求を持った人たちを確実に誘い込むために、あの手この手で競いあっているという訳だ。

さて、今回のゲストは建築家の妹島和世氏。建築家の立場として、光をどのように捉えているのかを彼女自身の作品世界をモチーフに語って頂いた。

「光で誘う、誘われる」を考える時にその代表格としてまず思い浮かべるのはパチンコ

光にむかって整列！

パチンコパーラーも進化する

わいわいがやがや。おいしそうな光で誘ってる、誘われる

光はどこ？あーあ、がっくり

夜の表情はこんな風に

同じガード下なのに。どうしてお客がこないんだろうねえ

第9回テーマ：「誘われてフラフラ」
日時：'96　8／23　18:30〜
会場：東京デザインセンターガレリアホール
ゲスト探偵：妹島和世（建築家）
コーディネーター：面出薫

屋であろう。イタリアの大作家、イタロ・カルヴィーノ氏が生前日本を訪れた際に、パチンコ屋の「けばけばしいネオンや照明」に異様な光景を感じたように、パチンコ屋の極端な高照度は、日本の誘う光文化の代表格といってよい。しかし、近年、妹島氏が設計したユニークで軽やかなパチンコパーラーに見られるように、パチンコ屋の様相も存在価値も時代と共に変貌しつつある。

茨城県に出現した2つのプロジェクト〈金馬車・I II〉は、女性のためのパチンコパーラーというのがコンセプトであった。遊技場を背にして全面道路と平行に配されたガラスのボックスは、日中は太陽の光で自然に照らし出され、夜には自動制御された照明によって多様に演出されたライティングボックスとして浮かび上がる。女性が気軽に入りやすい開放的な空間がテーマで、クライアントに「絶対に明るくなくては客が入らない」と断言されたこと、夜は元来のパチンコ屋のきらびやかさを持ちつつ昼はもっと気持ちのよい快適な場所が考えられるはず、という2点がの光のことをかなり意識させられた要因だそうだ。

「照明デザイナーの立場としては、夜も煌々と白いというよりは、街全体の色温度が落ちて暖かいほうが一般論として好ましい」と主張する面出。それに対してスライドで妹島氏ご自身の作品を、昼と夜の表情を対比させながら解説して頂くなかで、一般的に妹島氏の建築物では白い光が圧倒的であることに気付く。そのことについては、光や色の好みというより、建築の素材や材料と光の関係に大きく負っているから、と回答。

「例えば石の街だったら、石の重さやテクスチャー、触覚などをより的確に引き出す光というのがある。私が作っている建築は重量的に軽いものが多いので、軽い素材の美しさを美しく出す光、夜になってより浮き上がってくる光、という関係から白い光の色が決まってきているように思う」と妹島氏。

「白い光」については、講座の最後に参加者から氏の作品である〈再春館製薬女子寮〉を引き合いに、24時間人が住まうスペースで、病院を連想させるような夜も真っ白というのはどうか、という質問も出た。氏は白い光のイメージを与えた建築でも、実際の生活空間では暖色光と交ざり合って使われていることを説明された。

白い光を好む建築家としては他に、前川国男、丹下健三、原広司の各氏。それに対し暖かみのあるオレンジの光を好む建築家として村野藤吾、槇文彦、磯崎新の各氏。伊東豊雄氏は両刀使い。面出の独断的解説は、建築家が目指すイメージの違いが分かり興味深い。

「非常に透明度の高い建築というのは、昼と夜のそれぞれの表情というのを必ず意識しなくてはならない。妹島さんのように自然光をたくさん取り入れようとすると、逆に夜になると内部から光が漏れ出す効果を呼ぶ。外から照らすライトアップという観念とは全く別の意味で、妹島さんの作品には自然に誘われてしまう。」と面出がコメントした。

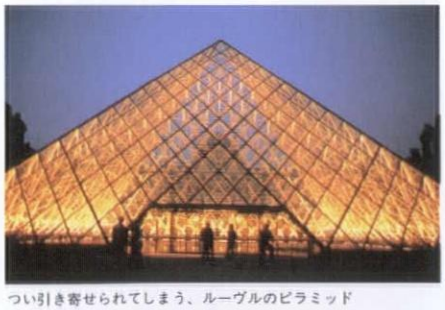
最後に、現代のデザインとしての誘われる光にはどんなものがあるか、スライドで「誘われる照明デザイン20選」が紹介された。香港のザ・リージェント、パリのグランアルシュ、ジャン・ヌーヴェルのリヨン・オペラ座、臨海副都心部のシンボルプロムナード、など。

実際のところは、都市のなかに溢れるたくさんの光を見渡す限り、つい「誘われてフラフラ」してしまうことよりも、私たちの欲望をうまくそそのかそうとする商魂たくましい「誘ってホイホイ」の光の方が多いのが現実のようである。太陽の光、祝祭としての火などの自然光と比べる由もないが、我知らず誰もが誘われてしまう光の魔法にで出くわすことは、なかなか無い。

ひとつでも多くの「優しく自然に誘われる光のデザイン」を目にしたいものである。

●葛西玲子／LPA

パリのグラン・アルシュ


つい引き寄せられてしまう、ルーヴルのピラミッド

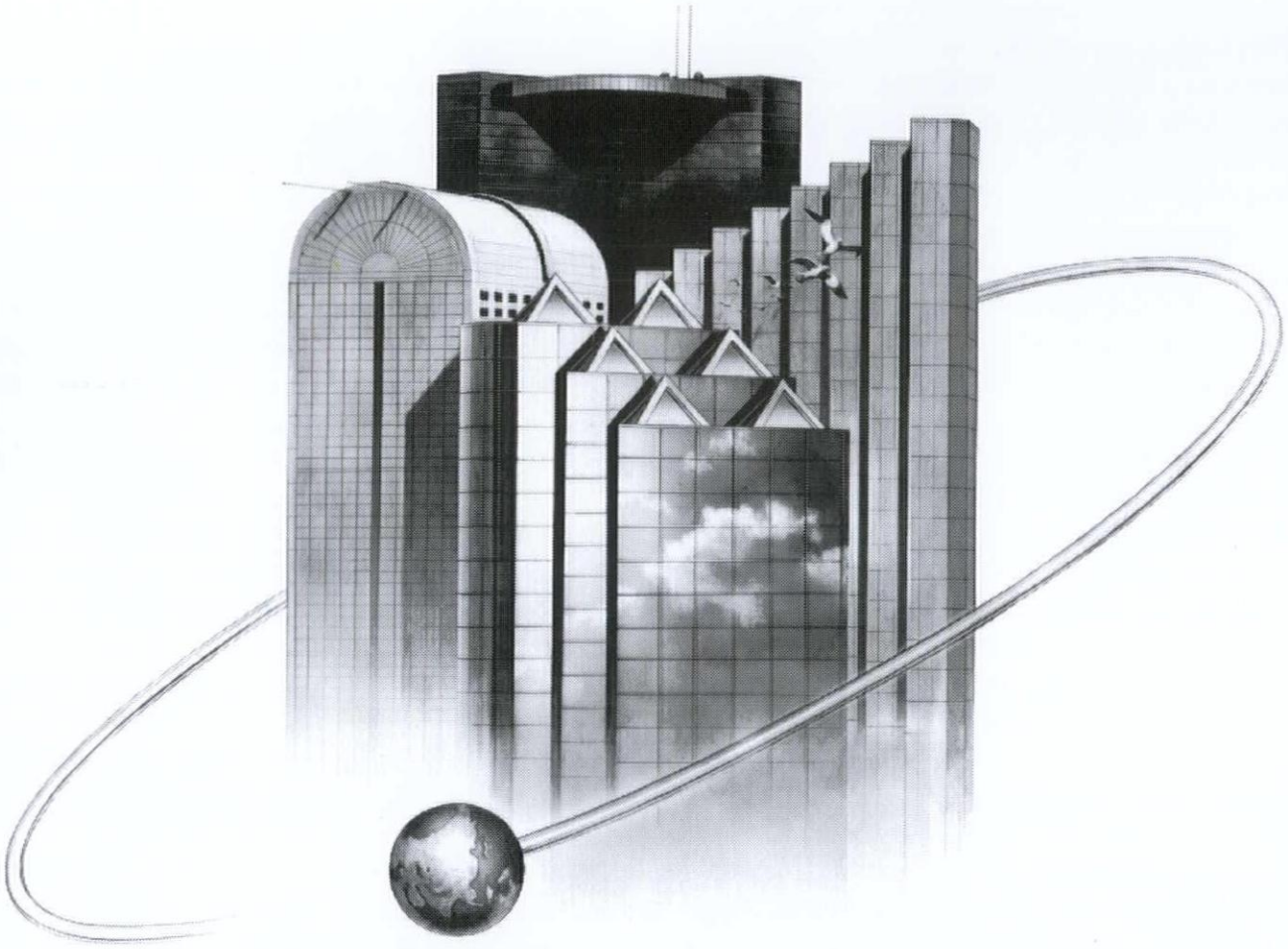
「吉祥寺にはあまり誘わる光がありませーん」

妹島さんもお気に入りのジャン・ヌーヴェルの赤

光でおもてなし。いらっしゃいませ

「赤提灯の光が一番！」呑んべいのミスターハンガリー

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

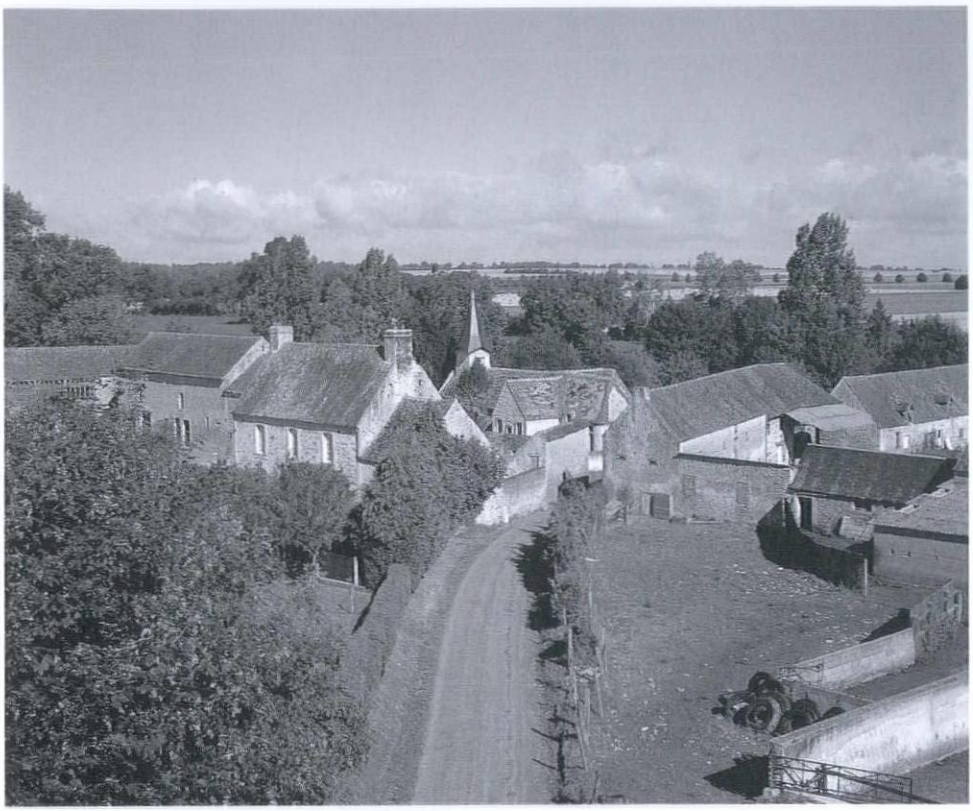
人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1　TEL.03 (3502) 6111

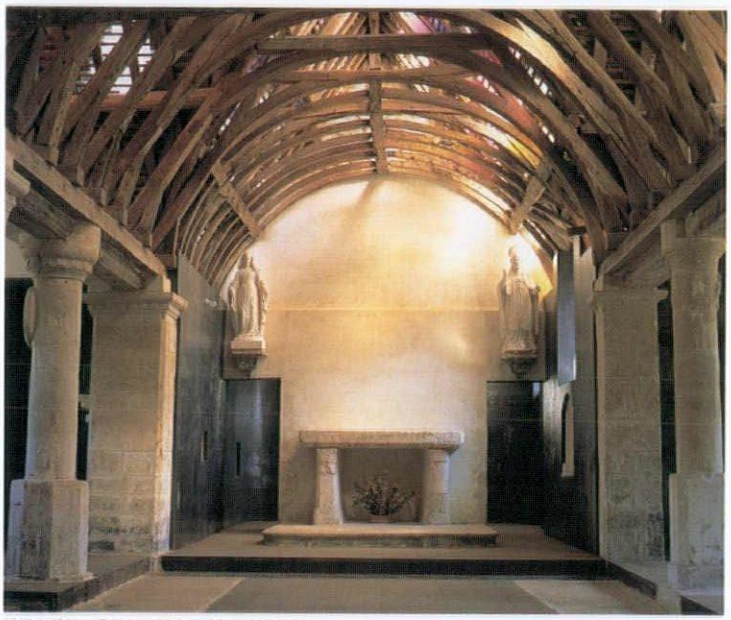
田窪恭治
サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト——3

Projet pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux par Takubo——3

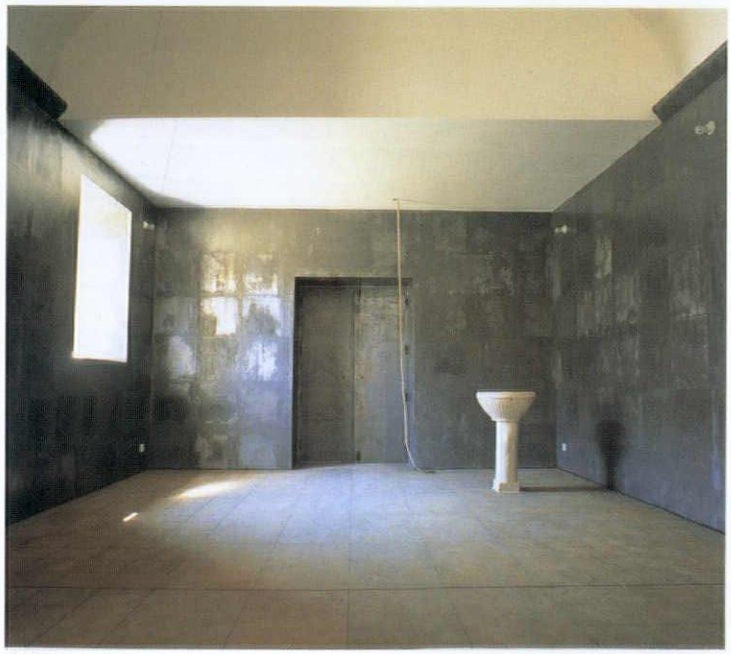


フランス・ノルマンディ地方にあるサン・マルタン・ド・ミュー村の小さな礼拝堂を修復、作品化して、永久保存するという、美術家・田窪恭治のプロジェクトが、足掛け10年の時を経ていよいよ完成の時を迎えた。
地元の人々との交流を深めつつ、進められたプロジェクトの経過を本誌93年11月号、94年12月号に引き続き報告する。

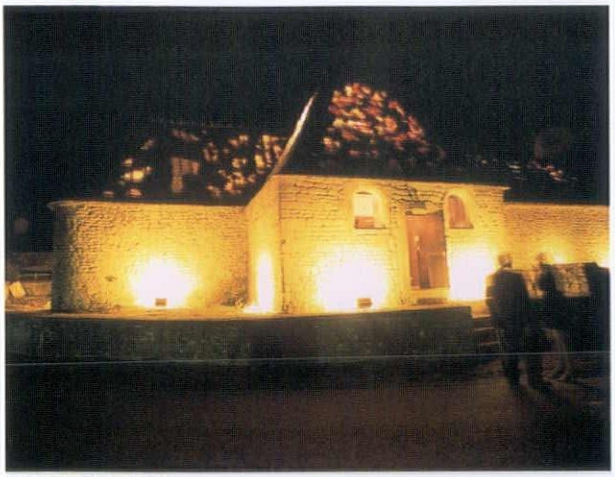
南側より



祭壇を望む。天井からガラス瓦の光がこぼれる



鉛が貼られた内部西側の壁と扉



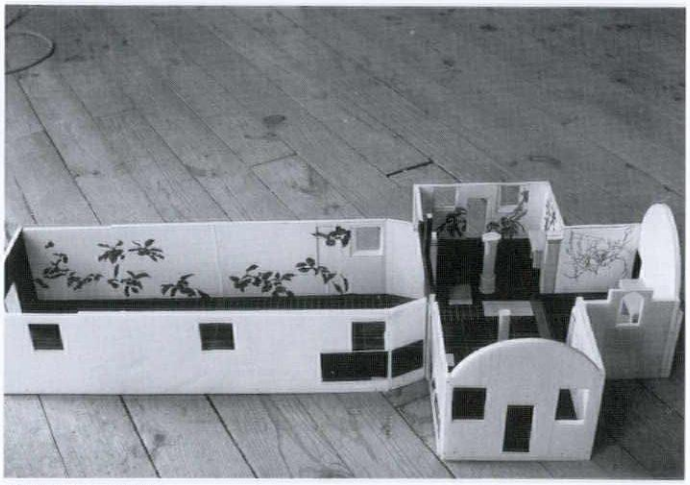
ライトアップされた教会

鉛が貼られた扉

内部床にはめ込まれたプロジェクターのガラスに屋根のガラス瓦の光が映り込む

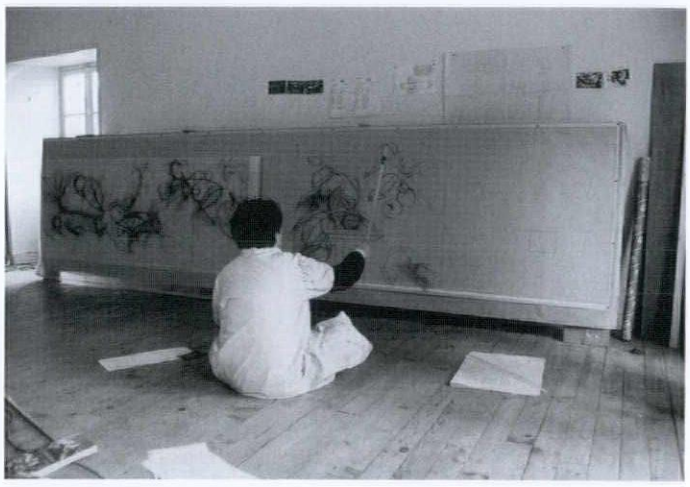
壁画の習作。鉛の壁の上に幾重にも塗り重ねられた顔料を削って、線を描いていく

壁画習作ドローイング3分の1サイズ



内部壁画イメージ模型

リトグラフによる内部壁画習作



完成、そして新たな始まり

ジャン-マルク・ユイトレル／訳＝三宅京子

長い道のりであったが、今ようやく、視界が開け、生け垣や木々に囲まれて、長い間エネルギーのすべてを傾けて目指してきたものが、いわばひとつの成果となって、その姿をあらわすところにまでたどりつくことができた。1996年のこの夏、多彩色の屋根が葺かれてからほぼ2年の月日を経て、ここに、田窪とその仲間がひるむこと無く取り組んできたものが出来上がろうとしている。サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂は第二の誕生の時を迎えたのである。

この間、この村ではさまざまな変化が生じており、とりわけ、サン・マルタンの方向からこの村に入る時に感じる風景の印象は一変した。研ぎ澄まされた線、以前にも増してシャープな形、くっきりと浮かび上がる建物、何か非常にすっきりと爽やかな光景なのだ。風景がこれほど洗練されたのは、電線や電話線などの配線がすべて地下に埋設されたことによる。村の現実にかくも神経を行き届かせるサン・ヴィゴール村は、また、「大いなる偶然の一致」のもつ圧倒的な力と幸運にも恵まれているようだ。そう、シュールレアリストたちがずっと待ち伏せながらもほんのときたましか出会うことができず、一方であの素晴らしい女ナジャの身には頻繁に起こったあの不思議な符号が、そこかしこに溢れているのだ。礼拝堂の輪郭は、近づくに連れて、変容し、棟木のラインは丸い背中に赤い毛をした、年老いた海の生き物のように波揺れる。建物は、イタリア・ルネサンスが問題にした絵画手法にも匹敵するかのように、彫刻作品として見通しよくパースペクティブのなかにおさまっている。北の方から回り込む場合には、道路を挟んで向かいに位置する果樹園から、素晴らしい壁を眺めることができる。そこは、石工の卓越した表現を借りれば、まさに「石が踊る」壁なのだ。

扉と窓も既に取り付けられた。扉はどれも鉛の薄板で覆われ、その為に一層精密さが際立っている。窓の方は、ひと続きの二重窓の形をとっている。すべてが相まって、フランスの文化と習慣に則った実にフランス的なこの建物を、彫刻と建築の混合した、独自のオブジェに仕上げていて、そこには、崇高なほどに非実用的な、あのピラミッドにも似た何かを感じとることができる。鐘楼だけが今のこの場所と時間を刻み込もうとしているかのようだ。見事に復元されたこの鐘楼には、頂上に田窪のデザインによる風見鶏が誇り高く立っていて（隣の農場の鶏を丹念に観察してデザインしたという）、屋根職人の伝統に従って銅製でつくられ、その上に金箔が貼られている。

この数年の間に何度もしたように、だが、今回は一層好奇心をそそられる分だけ何時になく幸せな気持ちで、樹齢数百年のイチイに守られた西の入口から礼拝堂へと入る。まだ足場のついた仮設の状態ではあるが、それでも、著しい変化が見て取れる。壁という壁には鉛の薄い板が張られていて、床の方はコールテン鋼で一面が覆われている（墓石のところだけを除いて）。一時取り外されていた石膏のヴォルトは、今また身廊の上に架けられており、内陣と翼廊からは天井の骨組みと多彩色の瓦の屋根へ行き来できるようになっている。すべてが見事に出来上がっており、コーニスのような細部にいたるまで丹念な仕上がりになっている。身廊から壁の上部繋ぎ目に沿って延びるはめ込み式のコーニスは、非常に効果的に、元の空間をこの場に残してくれている。確かに、というより、壁が二重になったにも関わらず（シポレックスと鉛の薄片による断熱）、内部の空間はゆったりとしたままプロポーションも維持されている。コールテン鋼は、日本の企業から提供され、日本で加工されたのだが、その1枚1枚の形によって、以前にここに敷かれていたカーンの石を思い起こさせる。薄く層を成す錆は、逆説的に保護膜の役目を果たしてくれるものであり、これを見ても、この芸術家が、リチャード・セラを知り、あるいは物派の芸術家たちの関心と関わったことによって、いかに材料をめぐって考察を深めているかが窺える。

ところで、田窪に関して、ミニマリスムの影響を余りに強調しすぎることは控えるべきだ。田窪の、これはまさに90年代の作品なのであって、彼は60～70年代の遺産を完全に消化し吸収したけれども、大分前からそれ以外の実にさまざまな源に向かっていて（近代のはるか向こうまでも）、それこそが、彼の芸術を培い育てているものであり、自由と実験と改革の広大な領域を彼の前に開いてみせてくれるものなのだ。

1996年の8月2日、日本人とフランス人の多くの人たち、それにこのプロジェクトのお蔭で結集できた友人たちの立会いのもと、建物の引き渡しが行われた。今やもう、照明もすべて取りつけられ、警報装置の類も万全に備えられた。警報の制御装置は地下納骨堂のなかに目立たないように集中しておかれている。この教会を作品として完成させるための田窪の仕事は、あとはもう、内部の装飾と、その後の付近の整備を残すだけとなる。残すのみとは言っても、あえて間違いを恐れずに言えば、内壁を装飾することにこそ実は最大の決め手がかかっているように思えてならない。「装飾」などと言いだすと話が厄介になるかもしれない。モダニスムのせいで、装飾という言葉が疑わしく思われているのは周知のことだ。しかし私としては、ここではこの言葉を使ってもかまわないと思う。装飾というものが、気晴らしのために付け足されるどうでもいいものなどではなく、全体の一部を成すもの、それも単に補足的な役割にとどまらず、調和と緊張の関係にあって全体を構成するものとして捉えてもらえるならば。

第一段階では、田窪は、鉛の上に、6色以上の色の顔料を幾重にも塗るつもりでいる。次いで、金メッキ工の鑿を駆使して、そこにさまざまなモチーフを彫ることを考えている。そうすることで、また同時に、彫り方の加減によって望み通りの色をそこに生み出し、時には下地の鉛までを再び表に出すことになるだろう。今考えられているモチーフは植物で、林檎の木の枝と葉、それに林檎を加えたモチーフである。これは日本の絵画とノルマンディーの風物との両方を視野に入れたものである。勿論、日本とノルマンディーとを愛した画家たち、すなわち印象派の画家たちに敬意を表してのことだ。実際に、ここ何年もかけて、田窪は林檎の木の写真を撮ってきた。彼はだから何千枚ものネガを持っていて、その中からディテールを少しずつ取り出しては絵

に用いていくことを考えている。私は先ほど、ミニマリスムに偏りすぎた批評をすることの危険性を強調したが、ここでもまた、彼を日本の伝統に結び付けて捉えようとするのは、同じように見間違える危険を冒すだけだということを指摘しておきたい。繰り返して言うが、田窪は、この1996年に、芸術の歴史や自身の最近の展開についても十分に明確な意識をもって創作しているのであり、ヨーロッパやアメリカの若い芸術家たちに近づけて論じることも可能なのである。しかしながら、彼の用いるテクニックは、若干の注目に値する。そのテクニックはデッサンと版画の両方から同様に多くのものを取り入れているのである。だが、土台となる素材に対しては疑問を感じずにはいられないということを付け加えておこう。要するに、全面に色を塗り込めて忽ち隠してしまうのであれば、これらの壁を鉛で覆ったのは果して何のためなのだろう。実際に、田窪にとっては、画布でもなく壁でもなく（画架の絵画もフレスコ画も共に拒否するということだ）、ひとつの空間を産みだすことこそが問題なのだ。もうそこに何かを覆い被せるのではなく、むしろそこから何かを炙りだすことを可能にしてくれる、生き生きと豊かで自立した一種の空間、そういう空間こそが創りだされるべきなのである。そこでは、ひとつの同じ仕種から（要するに探求者の仕事から）、デッサンと色彩とが現れ出るに違いない。そしてまた、壁は、最後の閃きの内にとらえられることになるだろう。それを創った芸術家自身、その表面が白になるか黒になるか最後まで知らないでいるのだ。

このように、田窪は自らの芸術に関して揺れ動き、ひどく迷っている。このように、この芸術家はこんな具合に我々を彼の不安と歓喜の間近に接させてくれるのだ。彼が絶えず繰り返し言い、また実際にその通りであることを見せてくれるように、我々1人1人が、彼の作品の、作品がなるべきものの、欠くべからざる部分をなしているのである。

1996年8月

●Jean-Marc Huitorel／美術評論家

プロジェクト・ドキュメント——3

1994

0922 フランス大蔵省からコールテン鋼免税が出来ないと返事が届く。

0924～26 池部啓太、一浦秀和と礼拝堂扉壁面実物大パネル制作。

1009 フジテレビ専務出馬氏礼拝堂を訪れる。

1019 シャン・ド・ヴァランヴラ氏病気のため死去。

1111 瓦募金者のためのミニコミ紙『かわら版if』第1号発行。

1120 作曲家パスカル・ドュ＝サパン氏の現代オペラ『tobesung』を見る。上演後、フランス文化省音楽部門担当官ジュネブォリ氏の紹介により礼拝堂に流す音楽の作曲を依頼。

1213、14 ドュ=サパン氏礼拝堂を訪問。その後哲学者ミッシェル・オンフレイ氏等と田窪宅で歓談。

1216 アソシエーション会長トムレル氏元官房長官、現国会議員、アンドレ・ファントン氏と会い、コールテン鋼の免税を陳情する。

1995

0130 ホルベイン社より習作のための絵の具を提供してもらう。

0228 ロンコ社礼拝堂の古い窓の撤去作業開始。

0315 ドュ=サパン氏礼拝堂再訪。礼拝堂のための音（パイプオルガンのパイプを使った）の内容を話す。

0318 元工業大臣、現商工会議所外務理事、アルジャンタン市長ドゥパン氏にコールテン鋼を無税にしてもらうよう陳情しに行く。

0328 フジテレビクルー番組制作のため田窪と会い礼拝堂および村、ファレーズを撮影。

0403 大工リキエ氏から鐘楼の大梁の傷みが進んでいることを知らされ、替えることに決めるリキエ氏鐘楼工事を始める。

0404 ジロー氏残りの屋根を撤去。プレスビテル（アトリエ）の鉛貼り工事を始める。

0406～10 アトリエゴレー礼拝堂残りの壁をはつる。

0417 照明器具のモデルを作る。

0419 リキエ氏鐘楼の大梁を入れ替える。尾高氏ビデオ撮影。

0511 アトリエで原寸大習作の色塗り開始。

0512 礼拝堂の周りにいるにわとりの写真が出来上がり、風見鶏に使うモデルを決める。

0529～0606 フジテレビクルー撮影（第2回目）。

0531 大工工事（リキエ氏）終了。

0601 フジテレビクルーと番組撮影のためル・コルビュジエのカップマルタンの休暇小屋と墓を見る。翌日、マチスの礼拝堂を再訪。

0606 風見鶏のデッサンをジロー氏に渡す。

0621 マスラン社に電気設備工事を契約発注。

0623 ロンコ社床基礎工事開始。

0703 新日鐵に礼拝堂床材のコールテン鋼を発注。

0706 屋根工事（ジロー氏）終了。

0710 フジテレビギャラリー山本社長ファレーズ来訪。プロジェクトの終了時期について話し合う。

0717 ホルベイン社より絵の具届く。

0723～26 NHKクルーが「ETV特集」のため撮影。

0802 コールテン鋼の運送に日本郵船のメセナ協力が決まる。

0810 写真家南川三治郎氏「芸術新潮」取材のため礼拝堂を訪れる。

0818 アルハンブラ宮殿を見学。

0905 朝日新聞「天声人語」でプロジェクトが紹介される。0909 ジロー氏と風見鶏の金箔張り作業を見学。

0911 マスラン社電気配線工事開始。

0915 フランス文化省音楽担当官ジュネボワ氏、作曲家ドュ＝サパン氏らとファレーズ近郊のパイプオルガンを見学。その後、パイプオルガン制作者ドュポン氏の工房を見学。

0916、17 「共同遺産の日」により一般公開。16日夜、マスラン社の協力によりライトアップされる中、風見鶏が取り付けられる。

0925 「芸術新潮」10月号発売。

0927 シラク大統領よりコールテン鋼を完全無税にするという手紙が届く。

0928 コールテン鋼運送保険に安田火災海上のメセナ協力が決まる。

0929 クリプト工事完成。

1003 二重壁工事開始（ロンコ社）。

1006～18 フジテレビクルー第3回目撮影。

1025 旭ガラスに提供されたガラスが礼拝堂に届く。

1104 NHK教育「ETV特集」放映。プロジェクトが紹介される。

1106 礼拝堂窓設置工事が始まる。

1124 アトリエ壁鉛貼り工事終了。

1127 フランス電力礼拝堂周りの電線地下埋め込み工事開始（12月24日まで）。

1203 東京大学教養学部教授小林康夫氏「建築文化」取材のため礼拝堂を訪れる。

1204 天井工事開始（ロンコ社）。

1208 東京にて礼拝堂内部壁画完成模型制作および撮影。

1220 電柱取り外し及び電線地下埋め込み工事終了。

1227 コールテン鋼礼拝堂に到着。

1996

0102 16時念願のラスコー洞窟壁画見学。

0109 東京より内部模型届く。

0115～19 アトリエにて内部壁画3分の1サイズのリトグラフ用下絵作成。

0125 建築文化2月号発売。

0205～07 長野、森工房にてリトグラフ制作。

0207 日本側支援委員会より7月31日をもってタクボプロジェクトを終了する旨の通知がファレーズに届く。

0322 礼拝堂壁および天井工事終了。

0325 礼拝堂鉛貼り工事開始。

0415～20 礼拝堂床暖房工事。

0423 コールテン鋼床設置工事開始。

0511 勅使河原宏氏礼拝堂を訪問。

0516 ギザのクフ王ピラミッドの中の石室に入る。

0610 ドア職人、ジロー氏、鍛冶職人と礼拝堂の4ヶ所の扉について打ち合わせ。

0723 礼拝堂壁鉛貼り終了。

0730 斎藤修三氏礼拝堂撮影のため来訪。

0730～0802 フジテレビクルー撮影（第4回目）開始

0802 礼拝堂扉取り付け、電気配線工事、床コールテン鋼設置工事完了。19時より礼拝堂工事完成式典を行う。

©TAKUBO-1996

Photos: Shuzo Saito (p.133～135)
Kyoji Takubo (p.136)

チューリップ四季彩館

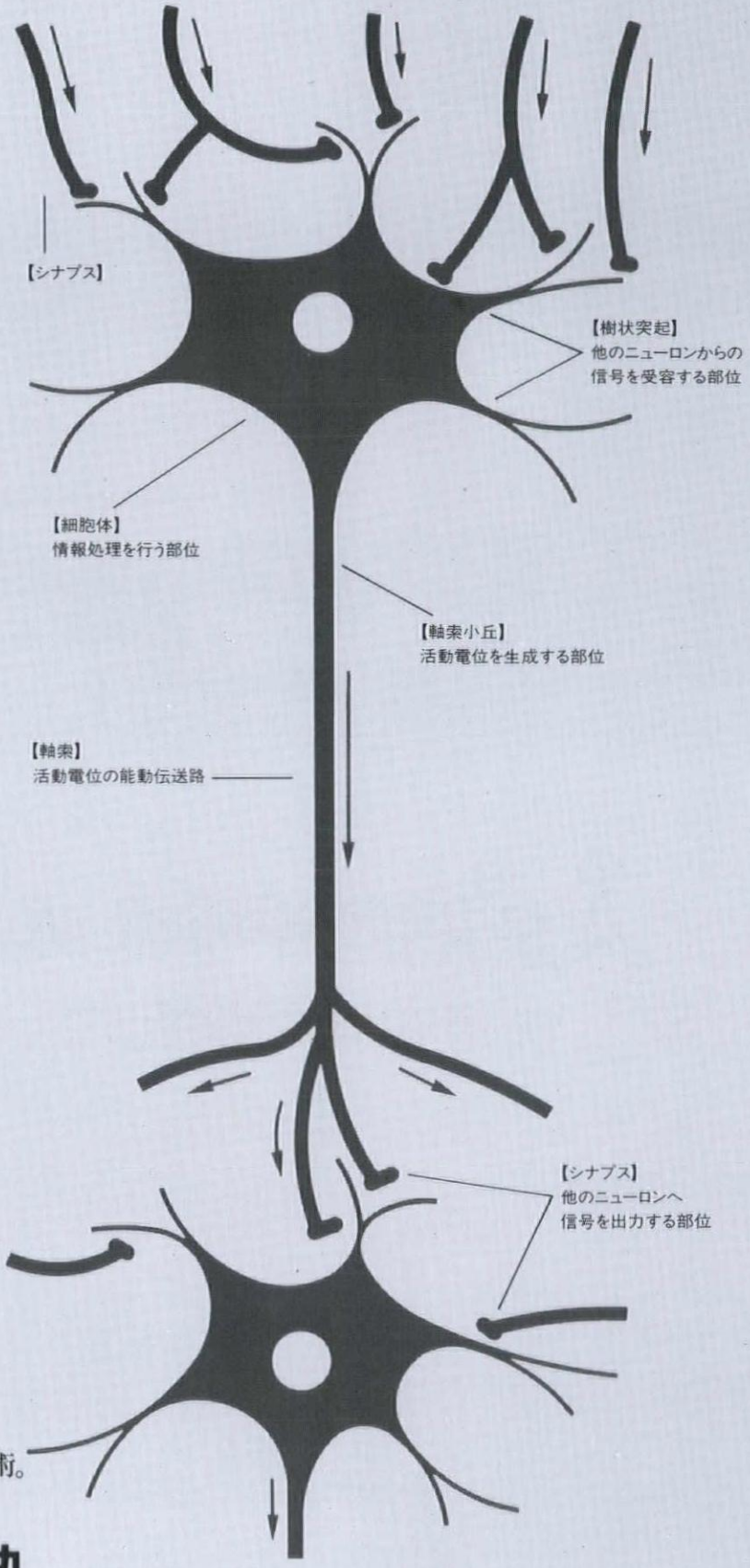
人間にやさしい

快適空間をめざして

立山アルミニウム工業株式会社

本社／〒933 富山県高岡市早川550番地（ビル建材事業部） TEL(0766)20-3321

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。

誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感知できないだろうか。そのテーマに応えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザイニング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。

東熱

「オリジナリティ」への問い
「日本の建築家による椅子展」より

日本の建築家による椅子展
会場：ギャラリーサカ
会期：1996年9月11日～9月27日

去る9月11日から9月27日まで、坂倉準三氏のメモリアルギャラリーである赤坂のギャラリーサカに於いて「日本の建築家による椅子展」が開催された。18名の日本人建築家による18脚の椅子と、特別展示として村野藤吾氏による2脚の椅子がその展示内容である。

第3回を迎えるこの展覧会は、回を経るたび、新しい展開を見せている。それは、若手建築家の作品が目立つことにある。逆に言えば、日本の若い建築家諸氏が、自らの建築に自らの手による家具をデザインする機会が得られるようになったあかしであると同時に、オリジナリティを追求する眼がその強さを増した様にも思われる。出品されている彼らの作品の良し悪しの議論ではなく、発表された作品に敬意を払うべきものだと思っている。日本においては、新しい作品を発表する場、あるいは、機会があまりにも少ない時代が随分過ぎた様な気がしている。建築の展覧会は、言うまでもなく多くないし、日本人建築家による新作家具に至っては、なおさらのことである。たとえば、毎年開催される、イタリア、ミラノのサローネ・ディ・モビーレは世界中から建築家や、家具のバイヤーが集まるので有名である。もちろん商業ベースで行なわれているものであるが、若手建築家、デザイナーにとっては、最高の発表の場であると同時に、毎夜行なわれているカクテルパーティーは、相互のコミュニケーションの場でもある。日本においても、それに似たことをイタリア家具メーカーが新作発表の場として開催するのであるが、やはり日本における独自性という意味で、残念なことも多い。

ともかく、新しい作品の発表の場であるこの展覧会は、3回目を数え、その新鮮さは注目に値する。日本の様々な現状に対してこの展覧会の主旨の中で、「輸入家具の多い中で日本の建築家の椅子を見直すべきだ…。」とある。読みかえれば、日本の建築家は、オリジナリティあるものをもっと創れと言っている様にも思う。それはネガティブな意見としてではなく、その土壌ができているのであるということを、示唆するものであると思う。もはや、何々風のデザインは死語である。イタリア風もフランス風もない。

「オリジナリティ」という言葉が、建築家の名のもとに存在していることを今、強く認識する必要があると思っている。

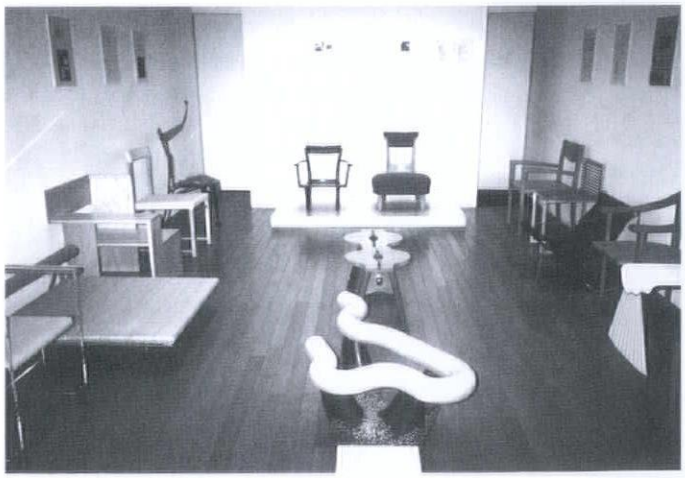
私は、建築の作品以上に家具をみると、その建築家のベーシックな部分がよく現れてくる気がしている。素材に対する考察力、フォルムを形づくるときの厳密さが、そして、一人間としての哲学が、新しいアイディアとして1脚の椅子に込められる。椅子のデザインは建築を創るときと同じくらい複雑な思考と考察力を必要とするのである。「座る」という機能的制限が存在している中で、正しく機能する形態を見付けだそうと試みるのである。その本質的探求の過程にこそ真実のオリジナリティが存在していると思っている。椅子に座った時の快適さ、素材感の良さ、フォルムの美しさの重要性は言うまでもないことである。

この展覧会がより開放された自由な発表の場として展開していってほしいと願う。1等賞が存在しない、各作品のオリジナリティの豊かさを認め合う展覧会になることは疑わないものである。もし可能であれば、作品を広く一般公募して、年に1回その中から、プロトタイプをおこして展開するということもできればよりすばらしいものになると思う。結果として、日本の家具メーカーから、新作として発表する可能性がでてくれば、日本の現状も少しは変化するし、若手建築家にとっては、願ってもないチャンスである。第4回を期待したい。

私は、都心のこの木立ちの中の小さなギャラリーに、自由で新鮮な空気が漂っているのを感じた。深呼吸しましょう。

●河合俊和／建築家

出展者：青木淳、荒知幾、伊坂重春、大友洋佑、沖健次、木村丈夫、久保田章敬、隈研吾、椎名英三、清水文夫、鈴木恂、建畠嘉門、原尚、久田修司、平倉直子、増沢幸尋、丸山欣也、六角鬼丈、村野藤吾（特別出展）



書評

『際の都市論』
植野糾＋若松久男＋森徹＝著
A5判　245頁
山海堂　3502円

評者＝
真壁智治

都市に潜在する際を探る

本書は、「都市観測」という視点からとらえられたコンテンポラリーな「東京」をステージにした都市論である。

都市＝東京をモチーフに、植野糾、若松久男、森徹の三氏がこれまで継続的に行なってきた図像化＝作品化の成果が本書の骨格になっており、全体が際の観相学、際の統計学、際の幾何学、際の建築学から成る構成となっている。

何よりも本書がユニークでラジカルなのは都市の際に注目し、それを読みとろうとする明確な姿勢にある。

彼らの規定によれば、都市の際とは「全ての既製の領域から独立した存在であり、すなわち誰にとっても他所であるがゆえ、そこでこそ人や物や情報が本来の都市的潜在力を表出し活発化しているはずだ」という彼らの作業仮設に基づくものであった。

確かに都市の際には矛盾が露呈し、歪みが噴出してくるのが予測される。

皇居を巡り、その内側と外側との際を見極めたり(「沈黙する円環」)、電波によってつくり出される「見えない都市」と現実の「見える都市」との際に存在する電波塔(「波動する鋭角」)に注目したりと、都市の中に縦横に潜在する際の在り様を明らかにしてゆく作業は、視点が明解なだけに痛快ですらある。

本書では都市の中で私達が普段、自覚的に構造化しにくいもの、関係が見えづらいもの、さらには不可視な領域のもの、同時には検証しがたいもの、時間の経過を含むものといった局面から新たな場所や物や情報やヒトの関係式を抽出し、都市＝東京の薄皮を剥いで、実相を浮かび上がらせていく。

私もこれまで都市を読むことに強い関心をもって取り組んできた。その意味からも本書で展開される作品に対しては、その方法的視座、分析方法、表現方法について共感を覚えると共に、本書が都市の読み取りの可能性の枠を拡張した意義を評価したいと思う。

また、際の観相学も際の断片的イメージの断章ではあるが、刺激的で大変面白かった。三人三様の感性が活かされており、都市に対するビジュアルなイメージが拡がってゆく、まさに都市のイリュージョンを観相する思いがした。

本当のことを言うと、この際の観相学を言葉を駆使するだけでなく、ビジュアルな表現としても展開して欲しかった気がする。そうすればもっと都市の際の事態を鮮明にすることができたかもしれないと思うのだが。

ところで、どうしても気になることが本書に関してある。

本書の版型と構成についてである。

ほぼA5変形タテ版。こうしたヴィジュアルがポイントになる本の場合、その版型の設定はきわめて重要だ。

作品を印象的に理解する上からも、作品からイメージを膨らませる上からも、もう少し大判のサイズが必要だったように思う。解りやすさ、読みやすさ、イメージのしやすさ、使い勝手の良さがこうした本には是非とも必要であり、せっかくの労作が凡庸な本の版型に埋もれ息づいていないのが大変残念だ。

おそらく参考になるのは、R.S.ワーマンの本づくりが挙げられよう。

本の版型の設定。本の構成方法。文字と図のフォーマット設計。いわゆるエディトリアル・デザインである。

The MIT Press「The Nature of Recreation」、講談社「Tokyo Access」などに見られるワーマンのエディトリアル・デザインに対する自在さはおおいに参考になると思う。

この本の個々の作品の切り口が面白いだけに、本から体現される際の都市像の散漫さが私にはとても気になったところであった。

●まかべ・ともはる／M.T.Visions代表、プロジェクト・プランナー

Metropolitan Library

11月の評者＝
高島直之

社会的にも、また個人的にも、政治的アパシーが少しづつ広がっていった1970年代の中頃。何かしらの精神的維持のために読み出した本の系列がいくつかあった。そのひとつが、フランクフルト学派の既訳書であり、まず、晶文社版ベンヤミン著作集の『1.暴力批判論』と『2.複製技術時代の芸術』。河出書房新社からは、H.マルクーゼの『一次元的人間』と『反革命と叛乱』が出ていた。

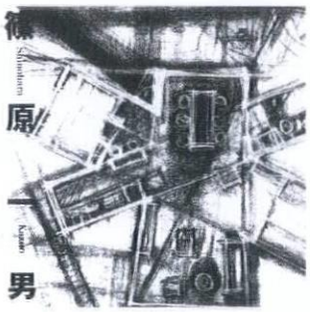
これらをとっかかりとして読書計画のようなものを立てていった。といっても、筆者自身、政治思想や哲学の専門でも何でもないので、全く気儘な素人読みを始めただけである。上記のうち3冊は1969年と1970年に訳刊されており、70年代の半ばに頁を開くのは、のんびりしたことなのだが、ともかく読んでいなかったわけである。ほどなく、彼らの著作のリズム（翻訳の）に合ったと言うべきか、引き込まれていった。

なぜこのふたりなのかといえば、いま思えば、共に正面から「芸術と社会変革」といったテーマと取り組んでいたからだろう。マルクーゼは、マルクスと毛沢東と並んで「3M」と呼ばれ、60年代後半の「叛乱の時代」の象徴であった。したがって、筆者が本を手に取った頃ですら「遅れたもの」という印象は拭えなかった。しかし、当時マルクーゼは、晩年だがまだ健在であり、続く理論活動があるかぎり「必読書」ではあった。とくにその挑戦的な文体は魅力的で、後の遺著、『美的次元』のおとなしさに少しがっかりさせられたことが、記憶にある。

さて、アドルノである。この時期、アドルノの訳書は、イザラ書房や法政大学出版局から刊行されていたが、『アドルノ――非同一性の哲学』の著者、細見和之の言葉を借りれば、「自己撞着をきたすよ

書評

『篠原一男』
篠原一男＝著
A3変型判　415頁
TOTO出版　9800円



評者＝
土居義武

アイロニーとしての幾何学

本書には、篠原一男の最初期の住宅作品から横浜港埠頭のコンペ案に至るまで、計画案を含むほとんどの作品が紹介されている。これは1996年の時点での集大成であり、レトロスペクティヴなものである。論文は自分の作と論を改めて論じなおした、自己分析風な書き下ろしである。スケッチや計画案の模型写真はカラーであるが、五つの時代に分類された作品の図版や写真はモノクロで、時に粒子は粗く、彼のスタイルは変わらない。三宅理一による、篠原の最近の動向を幾何学と力学とに関連づけた解説文もある。

篠原に対する評価は極端であった。ある層、特に学生等は彼を神格化する傾向があった。一方、批評家や歴史家は概して批判的であった。彼の議論は、抽象的であり、時に芸術至上主義的であり、現実との関係を過度に抽象化していたし、概して反語的であった。たとえば初期には「住宅は芸術である」とか「住宅はひろければひろいほどよい」という旨のことを述べ、「無駄な空間」に言及した。それは機能主義、最小限住居という近代建築の概念へのアンチテーゼであった。彼は他者と卑近なレヴェルで問題意識を共有することを、こうした反転の思考により、断固として拒否してきた。

このモノグラフでは、彼の歩みは第一の様式から第五の様式までという風に、五つの時期に区分されている。第一の様式の時代は、世は日本的デザインが流行していたが、彼もまた日本的空間をテーマとし、日本的な木造住宅を建てていたものの、空間の分割を主題とし、日本家屋の土間と畳の間の区別を手法として用いながら、そのレヴェル差をゼロにすることで伝統を無視した。第二の様式はRC住宅の時代で、＜同相の谷＞や＜東玉川の住宅＞等に見られるように空間の亀裂がテーマであった。第二の様式における亀裂はワンルーム住居の形式への、第三の様式におけるY字型等の架構は空間の均質化への、アンチテーゼであった。

第四の様式は、バブル経済の時代を含んでいるが、彼は東京という都市にカオスの美を発見しながら、「機械」や「浮遊」をキーワードとし、幾何学的な純粋形態が空中に浮かぶさまを夢想した。彼は都市が不可視的なものになった状況のなかで、ますます可視的な造形を目指すのである。それは彼が、カオスのなかで異化作用を発生させようとしているということである。

そしていよいよ第五の時期に突入するのだという。

一方、彼のドローイングは微頭微尾、平面的である。彼はすべてを平面に還元して考えているのではないか、という気がした。パースは著しく少なく、空間構成さえ立面によって決定されている。それは幾何学的なパターン解析である。初期の作品のスケッチがないのは残念だが、彼は空間を断面図から発想しているように見受けられた。幾何学はそもそも発生論的には二次元であり、それを後から三次元以上に発展させているにすぎない。そして二次元の幾何学ほど、彼の観念的な世界を象徴しているものはない。

芸術はその始まりにおいて、二次元であった。つまり多様な現象を平面に投影するには、ある認識の枠組みが定められる必要があるし、そこには強力な観念が必要だ。幾何学はそこに発生した。篠原の幾何学へのこだわりは、ここにあるのではないか。つまり、幾何学は始まりではなく、現象の還元である。そして彼の最大のアイロニーは、自分以前を芸術以前とすることなのかもしれない。

●どい・よしたけ／九州芸術工科大学助教授

うな言明を意識的に並べている」ような印象で、とっつきにくく、筆者は、なかなか行き合えぬ、という感じをもっていた。しかしその後、そして現在、『啓蒙の弁証法』、『美の理論』、『否定弁証法』の主著のほか、既刊本の改訂版・新訳を加えて、その全体像を捉まえる機会が訪れた。とりわけ、『啓蒙の弁証法』は、ホルクハイマーとアドルノの、啓蒙（つまり文明開化）総体を問い返しつつ、その矛盾の内部にとどまり凝視する、という微視的態度と、その批判理論の基本が確認できた。

細見和之の「アドルノ――非同一性の哲学」は、現代の思想家を解読するシリーズの内の1冊である。いわば「入門書」の役割が与えられている。だが、この本は、入門書の枠を飛び越えて、哲学者の思考の本質に迫り、「現在に生きるアドルノ」像を描き出している。まず前半に、ベンヤミンとアドルノを対峙して、その現代的な課題を投げかけ、読者の思考を誘発する。さらに、主著の内容紹介を通して、現実と観念、実践と理論、いずれにも加担することなく、批判的思考を汲み出すアドルノの「哲学の可能性」を救済し、最終章でアドルノとP.ツェラン、そしてJ.デリダにつなげて、「非同一的な主体」のありかを彫り出していく。

本書の前提軸としての、ベンヤミンとアドルノの対立と交流については、同時期にH.ローニツ篇『ベンヤミン――アドルノ　往復書簡』が翻訳刊行された。2著互いに補い合う関係となったのは、偶然の恵みか。蛇足だが、このふたりの思想家に、上記のマルクーゼを加えてみると、3者を貫く具体的なキーワードのひとつは「シュルレアリスム」と言えそうだ。なお、『否定弁証法』（作品社）も訳出された。

『アドルノ――非同一性の哲学』（『現代思想の冒険者たち15』）
細見和之＝著
講談社　2600円
『ベンヤミン――アドルノ　往復書簡　1928-1940』
ヘンリー・ローニツ＝編　野村修＝訳
晶文社　5300円

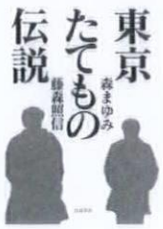
SKK

自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の
三建設備工業株式会社
本　社　東京都中央区日本橋蠣殻町1丁目35番8号
☎(03)3667－3431(大代)
支　店　北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

新刊紹介

『東京たてもの伝説』
森まゆみ十藤森照信＝著
A5版　260頁
岩波出版　2000円
地域雑誌の編集者森まゆみと、「建築探偵」藤森照信が、東京に残る古い建物を探訪する。二人が建築巡りをしながら交わした会話を対談形式で収録し、臨場感のある構成となっている。同潤会アパートや、明治の洋館、関東大震災復興期の看板建築等、東京の近代建築を取り上げる。



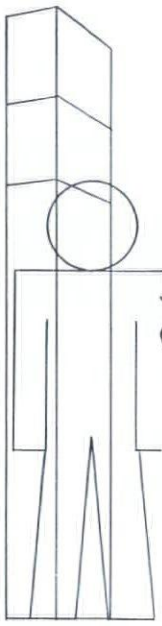
『サレジオ』
北田英治＝著
A4判　85頁
TOTO出版　3500円
数々の賞を受賞した東京サレジオ学園を始め、育英サレジオ小・中学校、聖高原サレジオの家を北田英治が撮った、創立50周年記念の写真集。
「人が建築を作り、建築が人を育てる。
建築が街を作り、街が建築を育てる」という北田の言葉通り、建築と共生する人々が切りとられている。

『現代建築集成――商業施設』
浦 一也＝監修
A4変型判　224頁
メイセイ出版　16000円
92～95年に竣工した、時代性、個性、特色のある商業施設26作品を、大型施設、複合施設、ショップ／ストア／レストラン、ショールーム／アミューズメント施設といった分野別に収録。設計コンセプト、データ等詳細に記載されており、デザインのヒントとしても活用できる1冊。

『図説――「満州」都市物語』
西澤泰彦＝著
B5判変型　128頁
河出書房　1800円
ハルビン、大連、瀋陽、長春の満州の四つの都市を舞台に、帝政ロシア、日本、中国が繰り広げた侵略とそれに対する抵抗の歴史を、建築を通して見る。当時寒村だったハルビンが帝政ロシアの政策のもと東清鉄道の拠点となり、急速に街が活気づく様など、豊富な写真や図を用いてリアルに構成されている。

『Interior Design』
内田 繁十三橋いく代十西岡 徹＝著
A4判変型　176頁
TASCHEN　3000円
内田繁が率いるスタジオ80の作品集。福岡の「ホテル・イル・パラツォオ」で協働したアルド・ロッシが「内田繁へのオマージュ」を寄稿している。インテリア・デザインへの接し方として、「取り組むべき課題は、人間、社会、自然の関係をバランス良く結びつける作業である」という言葉が印象的。

『パピエ・コレ Vol.3』
長澤均＝編集
A4判　120頁
パピエ・コレ　1500円
デザイン事務所Papier Collé s.a.が企画、編集、一部執筆。特集は「球体と円環のマニエラ」。教会堂のドーム建築、古代ローマの円形神殿、あるいは球体建築の思想を分析する。執筆者には高山宏、三宅理一ら。誌面デザインも一見の価値あり。巻頭にはドイツ現代写真の動向など。



からだのしくみは「骨格と筋肉」だけではありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないでしょうか。
ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴しい**居住性**が生れると思います。
しかし……
それだけで終ったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴しいことではありませんか。
集中管理或は**集中制御**によって……省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完べきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能を**フル**に発揮できるのではないでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社
KAWASAKI ELECTRIC CORP.

東京本社　〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(3454)5271(代)
本　　社　〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011(大代)

お知らせ

TNプローブ展覧会「ヘルツォーク＆ド・ムーロン展：知覚への探求」

会期：11月22日(金)～2月22日(土) 11:00～19:30
日曜祝日休館
会場：TNプローブ　東京都港区六本木5-14-35　無料
講演会
日時：11月22日(金) 18:30～20:30
会場：TEPIAホール　東京都港区北青山2-8-44
申込方法：Faxか郵送にて、氏名、会社名、入場券送付先を明記の上「TNプローブ講演会係」迄
11月11日必着
問い合わせ：TNプローブ
Tel.03-3505-8800　Fax.03-3505-8810

工藤強勝「書物の仕事」展

300冊の造本装幀とコンセプション+創作白本の展示
会期：11月5日(火)～11月15日(金) 10:00～18:00 無休
会場：王子ペーパーギャラリー銀座
東京都中央区銀座3-7-12 王子不動産ビル1F
Tel.03-3567-7790
問い合わせ：デザイン実験室　Tel.03-3479-1670

おだやかな暮らし・木曽の家具展

会期：11月19日(火)～11月24日(日) 10:00～20:00
会場：六本木アクシス4F ギャラリーアネックス
主催：奥村昭雄(建築家)
問い合わせ：木曽三岳奥村設計所
Tel.0264-46-2183　Fax.0264-46-2356

「田窪恭治――サン・ヴィゴール・ド・ミュ礼拝堂プロジェクト」展

会期：11月18日(月)～12月13日(金)
会場：フジテレビギャラリー
東京都新宿区河田町3-1
問い合わせ：フジテレビギャラリー
Tel: 03-3357-0660

ノバオーシマ「セントラル・マーケット」開店

場所を問わず選ばれた様々なデザイングッズを集めたノバオーシマの新しいショップ「セントラル・マーケット」が1ヶ月間オープンする
会場：東京都目黒区青葉台1-6-35(代官山ヒルサイドテラス向かい)
問い合わせ：ノバオーシマ
Tel.03-3464-3641　担当／柴崎

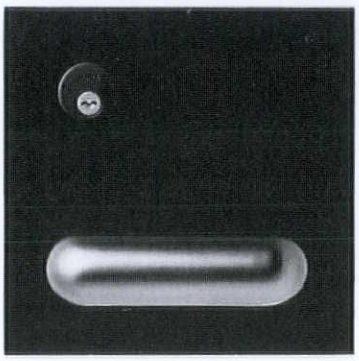
きーろい地球を、まぁるくつつむ。
日立電線

情報とエネルギーのネットワークをつくる日立電線――

情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまぁるくつつむ…」。日立電線は、いま、
快適で豊かなくらしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会――
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの――
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

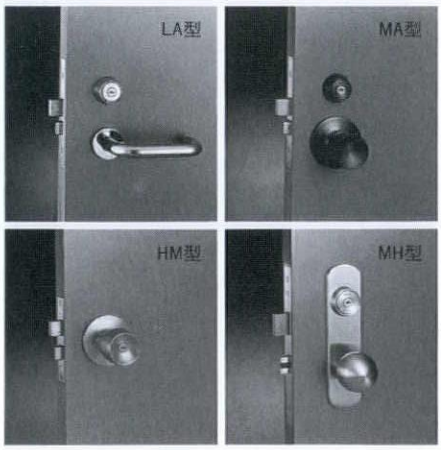
日立電線株式会社 ☎東京(03)3216-1616

なぜINTERFACEは



いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用していただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせません。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。



時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させることが必要です。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システマチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的に行ってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

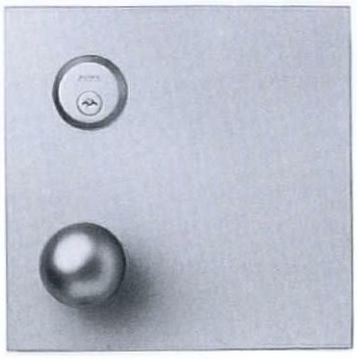
●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

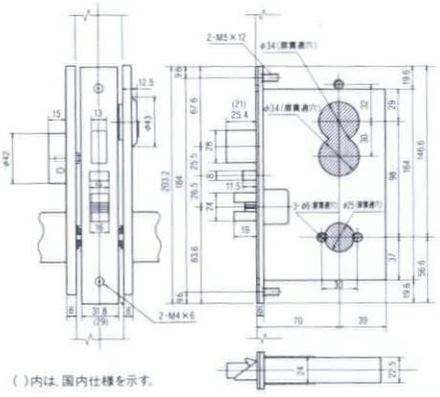
ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。

美和ロック株式会社 〒105 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551㈹

MIWA

生まれたのか。





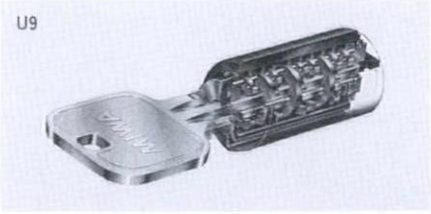
( )内は、国内仕様を示す。

●ANSI規格はロックの機能を統一。

ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステマチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

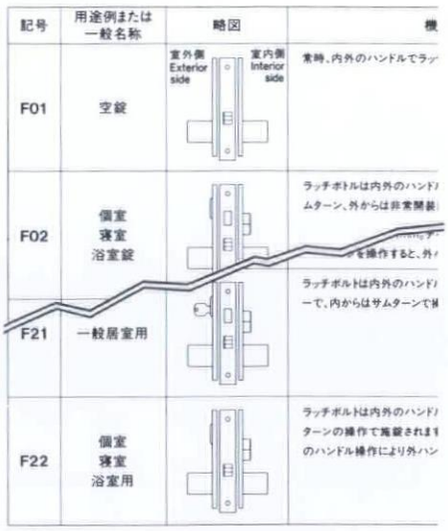
INTERFACEの安心を支える『U９』。

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとほぼ同時期に完成した主力シリンダー『U９』は、約１億５千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少もありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。



格調を重視したシステマチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エスカチオンは自由な組合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げることにより、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。



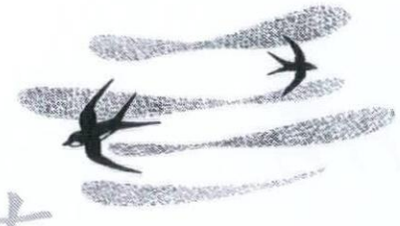
記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠	室外側 Exterior side / 室内側 Interior side	常時、内外のハンドルでラッ
F02	個室 寝室 浴室錠		ラッチボルトは内外のハンド ムターン、外からは非常開錠 を操作すると、外
F21	一般居室用		ラッチボルトは内外のハンド ーで、内からはサムターンで
F22	個室 寝室 浴室用		ラッチボルトは内外のハンド ターンの操作で施錠されま のハンドル操作により外ハン

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

INTERFACE

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

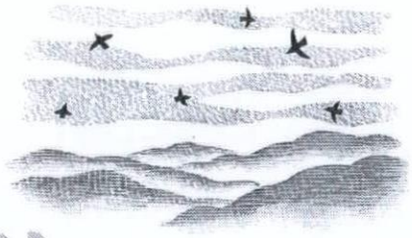
目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピューイ、ピューイ。
澄みわたった空気に、
待望の囀りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一歩一歩標高を稼ぐ。
セミの合唱に負けじと
梢で声を
張り上げているのは
クロツグミだろうか。
樹齢は数百年に
及ぶだろう、
ブナの巨木を見上げると、

夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。
山の秋は短い。
頂から麓へ向かって
早くも赤や黄に色づきはじめた
林の中を歩くと、
よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

秋

休日。ちょっと早起きして
近くの山に足を運んでみた。
枯れ落ちた木の葉を
踏むたびに
ガサッガサッという音が
林全体に響き渡る。
見上げると
餌を探しているのだろうか、
シジュウカラの仲間の群れが
盛んに鳴き交わしながら
枝から枝へ飛び回っている。

冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。
新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION
本社:〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151㈹ 支社:札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

海外建築情報リミックス

Theme: **機能**
その3「建築と自然」

エコロジーに関する論説には極めて中途半端な印象を与えるものが多い。それは、エコロジーという概念的存在を論じているにも関わらず、自らの立脚する前提条件をはっきりさせずに具体的な事象へと飛躍しているためである。無限のレベルに連鎖していくエコロジーの話の部分を切り取って語る時、そのスタンスを明示しなければ、論としては決して完結しない筈なのである。しかし、そのような論説もある程度の説得力を感じさせるほど、「自然」の概念は我々の直感に根付いているのだとも言えるだろう。「機能」シリーズ最終回の今回は、近代以降の建築の原罪意識の源ともいえる「自然」と建築の関係に触れたいが、言うまでもなくエコロジー問題の具体的解決については、建築あるいは都市という枠組みの中で為し得るものではない。建築を主体として論じるこのコーナーで「建築と自然」をテーマとするのは、あくまでも、建築に対するエコロジーからの反駁という図式から脱するような建築の「機能」を構成することが目的である。ある意味で人間の活動とエコロジーの関係のモデルであるともいえる建築から人間、さらには建築を否定しない自然像の獲得に繋がる可能性を汲み取ろうということである。

建築の初源的な機能のひとつに外部環境の遮断がある。そして意図的に人間にとって安全で快適な内部環境が構成される。その技術は確実に進歩しており、快適さのために自然物が必要ならばそれを内部に取り込み、コントロールして利用することも可能である。現在、エコロジカルな問題意識から低エネルギー消費、環境維持に配慮したサスティナブル・デザインが語られることが多いが、建築をつくるという行為の免罪符として自然に従属しているという状態から、いまだ抜け出していない。ここには強迫的に二者択一を迫りかねない現在のエコロジーと同様の混迷があるように思われる。しかし、サスティナブル・デザインの台頭には、我々が、支配の度合いが強まった自然からは十分な快適さを得られなかったという背景があり、実際にはエコロジーの視点よりはこちらの方が大きいように思われる。人間はその身体性における本能的な緊張感を通じて、対峙する存在としての「自然」を認識するのではないだろうか。自然が支配され、リアリティを失うということは、その相対物としての建築(都市、あるいは人間)のリアリティの喪失でもある。我々が漠然とした危機感を持ちつつも今ひとつ環境問題を実感できないように、都市や建築の存在意義のリアリティも、消費的風潮の中で希薄になってしまったのではないだろうか。そして時に、地震や台風などの天災によって不意にもたらされるリアリティに慄然とさせられるのである。

確かにエコロジーという言葉の流行は、地球環境問題の重要性や、科学に対する自然の価値を我々に意識させる役には立った。しかし、反面その言葉がコマーシャリズムによって表層的に使用されたり、一部の団体がいたずらに危機感を煽ったりするうちに、「自然」や「環境」に対するリアリティは、むしろ遠のいている感すらある。一方、次々とつくられる植物園や水族館の人気を見ると、人がリアリティを求めているのもまた確かなようである。「支配のモデル」そのものともいえる水族館においても、最近欧米では手を入れて魚に触れる水槽が設置されるのが普通らしい。生物の展示方法も、図鑑的な分類学よりも、より自然状態に近く見えるものが流行しているようだ。そして人工的につくられる自然の最たるものが生態系のモデル、ビオトープ・ガーデンである。ビオトープ・ガーデンは、そこに人間が存在しなくても機能し続ける「自然」である。それは、そこに置かれる人間を相対化し、理解し易い通常の建築空間とは異なった身体性を与える存在である。このような相対化によって、本質性を伴った自然と、日常性の中にある我々の身体との関係が、リアルに知覚され始める。本物の自然状態の体験すら「他者」として感じる都市生活者にとって、身体性に働きかけるもっとも現実的な抽象である建築が、エコロジカルな意味を持つとすれば実にこの1点なのではあるまいか。

このシリーズでは、「機能」という言葉を「現代において建築に必然性をもたらすもの」として定義してきた。そこで今回扱うのは、自然という相対物の存在によって、我々の身体性にリアリティを獲得させ得るような建築の「機能」である。現実に、人間が現在の環境をいつまでも享受することができないとすれば、この役割を果たすことは建築が自らのリアリティを失わず存在し続けるために必要な「機能」なのではないかと思うのである。つまり、今回エコロジーを論じるスタンスは、あくまで意識におけるリアリティの獲得であるから、単にスキマを緑化するような行為や設備的に負荷を減らすような工夫だけでは論の対象にはならない。自然を前提条件とし、それが身体性に新鮮なリアリティをもたらす表現をとっている作品である。そういう意味で今回の「機能」は、「本質の顕在化」という最もアートに近い意味を持つものとなる。特に建築のアート性が否定されがちな風潮の中で、以下の各論で提示するように、エコロジー建築は実にエネルギッシュに展開している(主に公共事業においてではあるが)。それらは「自然を目的とした人工物」という自己否定的な矛盾を、意識におけるリアリティとして克服していく可能性を持つものである。そしてそれに取り組むエネルギーこそ、「機能」を求める建築の本能であるように思えるのである。

山本想太郎

9611

飯田都之麿
小室光矢
斉藤 理
福田能梨絵
堀井義博
山内彩子

「機能=現代において建築に必然性をもたらすもの」を論じる3回目。「場所」「中身」による機能を論じた前2回に続き、今回はエコロジーと建築の関わりについて論じる。部分緑化やリサイクル資材など、本質的な問題解決能力のない、言い訳じみたエコロジーを脱し、次の意識段階を獲得するためのステップとなるような建築の「機能」を、「自然を作る」行為の中に模索してみたい。

コア・スタッフ'96
岩下暢男
今井公太郎
アトリエ・ワン
曽我部昌史
山本想太郎

AR: Architectural Review
TA: Techniques & Architecture

自然＋人間

アトリウム空間の緑化はこのところよく見かける光景である。だが、その維持には負荷を多く必要とするため、「流行性緑化ビル症候群」などと診断され、かえって「エコロジー（生態環境）」には貢献しないまやかしものといわれもする。なるほど、冷静に眺めてみると、あの植栽群はテカテカに光った定食屋のハンバーグ・サンプルの如く疑似的だ。しかし、一方で我々にとってひき肉のハンバーグだろうが、蝋のそれだろうがそのリアリティに関する感覚が麻痺していたのもまた事実ではないだろうか。

かつてアドルフ・ロースは、自らの住宅写真に手を加え、窓越しに自然の眺めをフォトモンタージュした。決して風になびくことも落葉することもない木々。これは、あらゆる時を瞬時にフリーズさせる写真のなかでこそ可能なイメージ操作であった。しかし、ロースは、写真が現実を表現しきれない、その限界を認識した上でそれを行った。作品は触覚的にも再現されなければならなかったのである。だが、いまや我々はすでにその「虚構の前提」を意識のなかに持ち合わせていないかのように思われる。

オートピアのなかにあっては、すばやいカットで流れる映像の断片をつなぎ合わせているうちに、いつの間にか自然はひとつの非物質化した「通り過ぎる物（映像）」として認識されてしまう。だが、それによってリアリティを失ったというよりは、我々はむしろ虚実の境界が希薄なハイパーリアルな世界のなかで自然に接しようとしているといった方が的確なのかもしれない。物質性を感得させる外界から孤立した我々が、地球エコの赤信号を我々の身体的知覚ではなく、やはり、メディアというハイパーリアリティのチャンネルを通して把握しようとするのはそのためである。

人間＋建築

数年前のある映像は、多くのモニターが石材を遮断するシーンを創出しているが、それは建築がもはや物質の因果性から遊離してしまおうとしていることを伝えている。

一方、その建築と人間の間の行為者であるアーキテクトには何が期待されるのだろうか。フレデリック・ジェームソンは「あらゆるものが厚みを消去して同時代の上に平らになる方向に向かう」と表層的な拡散運動を続けている今日を表現するが、やはり建築もその中に位置し、様々な同時代的解釈を与えられる一個の現実体であることは間違いない。とするならば、建築家はテクストとしての建築を媒体としながら多様な位相のずれを語る準備をしなければならないだろう。それは、多様な自然を人間の身体性に投げかける表現力を持ったコミュニケーション・システムとしての建築を模索していく試みでもある。

建築＋自然

エコロジーをテーマに活躍するマレーシアの建築家ジミー・リムは、「エコ」を模索した自邸を建築する実験的活動を続けている。敷地周辺の自然エレメントには一切手を加えず、いかに気候、植生を最大限に活用するかの実験がなされているのである。その活動は17年間にもわたり、単なるトレンドでないことは明らかだ。例えば、直感的発想から対流効果を期待してガラス屋根を採用した結果、上部の高温空気層が上昇し、涼気を導き入れるのに成功した、といったノウハウがこの家には多く蓄積されてきた。しかし、これは実践的自然観に基づくものなのではない。そこにあるのは、建築と自然との間にある閉じられたリアリティではなく、むしろ無限の広がりを持っている「つくること」のリアリティをめざす姿勢であるといえる。壁面積を抑え、天井を高くすることによって生み出した躍動的なヴォイド空間は、ベンチレーションを可能にするシステムを提供すると同時に、プロダクションとしての自然を導き入れ、その創造力（ダイナミズム）に倣ってさらに有機的な空間を生み出そうとする効力を与えてくれる場なのである。つまり、リムは、まさに「創造的自然」の表象としての建築を日々獲得し続けているわけだ。ここでは、建築が自然そのものの生命力の下に歩みをともにする、そのインタラクティヴな営みにこそ意義がある。その際、「建築と自然とは等速度なものではなく、建築はあくまで謙虚に『通りすがり』の存在であろうとしなければならない」*1と彼は主張する。

建築、自然の持つ速度系のずれを思い知らせてくれる、この表現形の持つパワーのなかには、自然との間を再び物質的緊張感を伴って対面させようとする「機能」が見え隠れするのである。

このように自然、人間、建築の持つ位相の差異を知覚させてくれるとき、「いい子（エコ）」のポーズを取って理想的パセリを飾る建築よりも、「創造的自然」を表現する試みの方がより示唆的であることがはっきりするのではないだろうか。

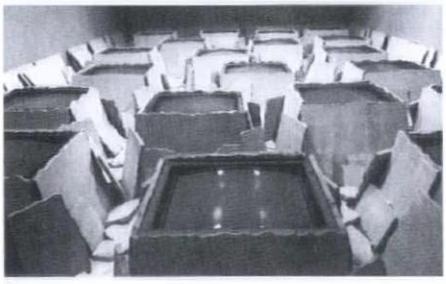
＊1：at9604より

自然＋人間＋建築

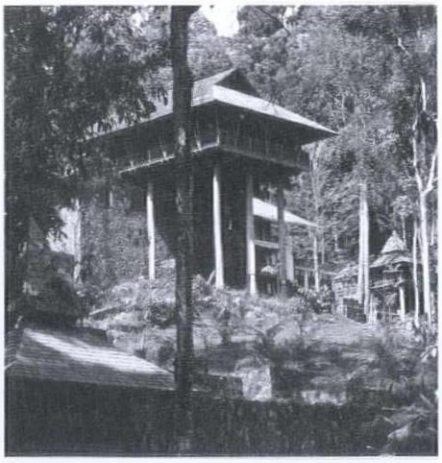
斉藤 理

Khuner Villa——1
architect: Adolf Loos
キューナー邸の窓に写真がハメコミ合成されている
"Privacy and Publicity", Beatriz Colomina, MIT Press
Fabrizio Plessiによるビデオ・インスタレーション(1989年)——2
DAIDALOS 56
Jimmy Lim House——3
architect: Jimmy Lim
なんと階段は端切れ材を利用して組み立てられている
at9604
Hotel Langkawi——4
architect: Kerry Hill
シンガポールを拠点とする建築家ケリー・ヒルも、ジミー・リムと同様のデザイン・コンセプトのもとに活躍している
AR9409

1


2

3


4

ハンフリー・レプトンは造園の4原則のひとつとして、「庭園は自然美を発揮するとともに自然の欠点を隠蔽すること」であると述べた。こうした考え方は、長い間造園の歴史をつくり、近現代においても庭園をはじめ多くの公園に採用されてきたように思う。しかし近年、「エコロジー」の一般化と共に、建築や人と自然の関係も少し変化してきたようだ。

「エコロジー」や「ビオトープ」といった言葉以前に、建築の中に積極的に植物を生育させる施設として機能してきたものに「温室」がある。建築としての「温室」は、植物の博物学的蒐集、分類を展示するという目的に端を発するが、後の水晶宮に繋がる鉄とガラスの大架構という建築のひとつの革命をもたらした、J.パクストンのパームハウス（大熱帯植物温室）（1840年）の実現により、その土地に本来生息できない植物を大空間に閉じ込めることが可能となった。一般の人は博物館を見に行くようにここを訪れ、珍しく多様な温室の植物を楽しんだ。しかし近年、植物をもって何かを教育しようという、文化教育施設としての植物園の方向性は大きく変化している。

近年、エコシステムといったより大きな環境を、美しくというよりはより高次なミクロコスモスを構築して、よりリアルな自然を再現する努力がされているように思われる。しかし、「リアルな自然」といわれても実感しにくい現代において、自然のリアリティとはどう表現されるのか、そこでの建築の役割とは何なのか。それは、自然と人との距離や関係の取り方のデザインによるのか、かつて欠点として「隠蔽されていた」自然を何らかの形で復帰させるのか、あるいはリアルな自然環境を構築して教育、啓蒙するというプログラム自体に問題があるのか。ここに、90年代につくられた温室にみられる、リアリティの表現への努力がある。顕著な3つの例を示そうと思う。

イギリスのセント・オーステルの14haの敷地にできた〈エコロジカル・センター〉は、イギリスのコーンウェルの起伏のある地形に、生物の生息環境によって独立したビオームといわれる4つのゾーン（地中海沿岸、砂漠、熱帯雨林、亜熱帯）を設定し、各々に巨大な屋根をかけて温室としている。丘陵を利用しているため、高低差はひとつのビオーム内においても大きく、空間全体が自然の地形によってダイナミックに変化し、そこを層状に巡らされた通路によって内部の自然の中を歩き回ることができる大空間となっている。とりわけ熱帯雨林ビオームでは、通路はそれ自体が整然とした建築物を成し、樹木の上部まで巡っているため、一見野性的な植物が建築の要素に組み込まれたようで、自然そのもののリアリティが、建築によって打ち消されているようである。そして、エンターテイメント性が増して、博物館というよりはテーマパーク的な印象を受ける。その背後にビオームを維持するための温室があるのだが、こちらの内部の非空間的空間の方がよりリアルな自然を閉じ込めているように思えてならない。

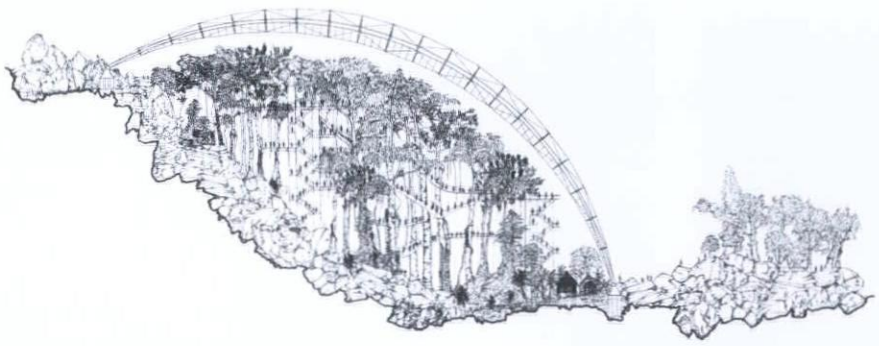
これに対して、ブラジル人の画家、ミュージシャン、彫刻家、テキスタイル・デザイナー、植物学者、園芸家、エコロジストといった複数の異名をもつひとりの作家による〈Cascade Garden〉の「温室」は、テーマをブラジルの熱帯に限り、それをより効果的にひとつの立体的な壁面として構成させ、個々の植物の自然における役割の断面を凝縮させて効果的に体験させるものとなっている。これは1200平方フィートの温室内にブラジルのある海岸沿いの地域の植物、石、水といった個々の要素を持ち込んでもとあった実際の機能をもたせてそこに再構成している。凝縮されているために、葉や花などの色や質感が触覚としてリアルに感じられ、加えて16の滝は、植物に適度な水蒸気を満たすと共に人と植物を引き寄せる効果を担っているという。この温室は、コーンウェルの例と比較すると極めて技巧的であり、温室自体の建築の構造、人の動線に対する工夫等も乏しいが、人が自然をリアルに感じる工夫がさりげなくデザインされている。自然がより高密であることは人にとって快適とはいえないかもしれないが、温室の内部には必然的に自然の全てを含めないことを考えると、こちらの方が、建築や人との関係がより緊密であるようだ。

以上のふたつの例に対して、1994年に行われたある設計競技でユニークかつ実用的な温室が提案されている。これは、フランスのナント市における55万人のための植物による浄水場で、下図はその管理棟の部分である。一見していかにも高密で、それ自体が浄水装置として機能している温室を見学することを考えるといささか気味悪く、自然のリアリティそのものを見せつける建築である。社会的都市的機能を併せ持つエコロジカルシステムの一部として温室を利用する際に、植物の実用的機能、教育やエンターテイメントといったそこに人を呼び込む建築的プログラムと仕掛け、大きな意味での自然と人間、建築との関係のひとつの解がここに垣間見えるような気がした。

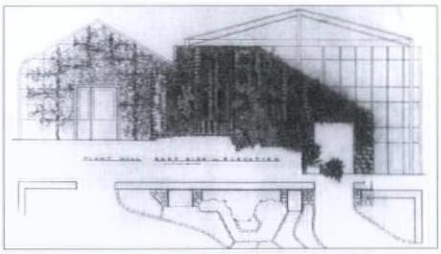
温室の機能

山内彩子

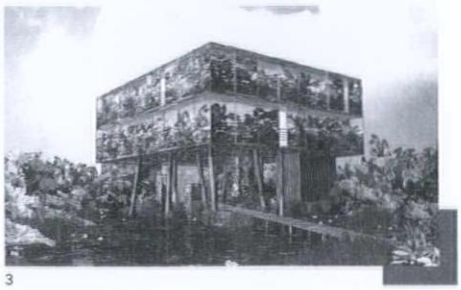
Ecological Center——1
architect: Nicolas Grimshaw & Partners, Engineer: Anthony Hunt Associates
AR9603
Cascade Garden, Longwood, 1993——2
architect: Roberto Burle Marx
Landscape Architedture9403
Station d'epuration Nantes, 1994——3
architect: Edouard Françis, Duncan Lewis
TA9510-11



1



2



3

ちょっと前になるが、面白かった本がある。室井滋さん著作の『まんぷく劇場』である。その中の「やらなきゃ損!?」という章では、ディスコ(クラブではないらしい)で踊っているオネーサマ方がサイバーパンク(あるいは機械人間?)における人間?みたいに変化する。別に人工心臓等のようなことではなく、視覚に訴える変化するらしい(僕は残念?ながら、まだ見ていない)。そのオネーサマ方はブラックライトによって体の断片が発光し、それも美人系にその傾向があるという。つまり、形成によって身体に挿入させたシリコンが発光するそうである。この発光する身体の断片を目撃した著者の友人は、その発光する人数に驚き、ダイエット等をして自己の理想とする表象に接近すること(大抵の場合、忍耐と努力が伴う)自体にバカバカしさを感じ、室井さんに一緒に病院へ行こう、と誘うのだが、この中には面白い内容が含まれている。その内容に触れながら展開していきたいと思う。

まず、「媒介(フィルター)」による「地としての記号から図への転換」の発生。つまり、ブラックライトのない場所では、体の一部として機能し、かつ第三者には全体の中の単なる部分としての記号が、機能を満たしたまま、ブラックライトによってその部分のみが、図として第三者に顕在化するという現象。

次に、環境(枠組み、体系)における記号の量、数による「新たなる地への転換」と、「概念転換」の発生。つまり、ディスコにおいて、形成された断片の数や形成した人の人数が多ければ多いほど、その記号は第三者にとってみれば当たり前になり、その記号自体が再度、体の一部と化してしまう。また、その量、数によって既成の概念に対して疑問を抱かせずに、新たな概念を第三者に与えてしまうという現象。

そして、認識される記号の展開、あるいは限界?つまり、室井さんは自ら経験し、デザインという操作(形成、ダイエット)の意味に気付きながらも、室井さんに一緒に病院へ行こうと誘うという現象。

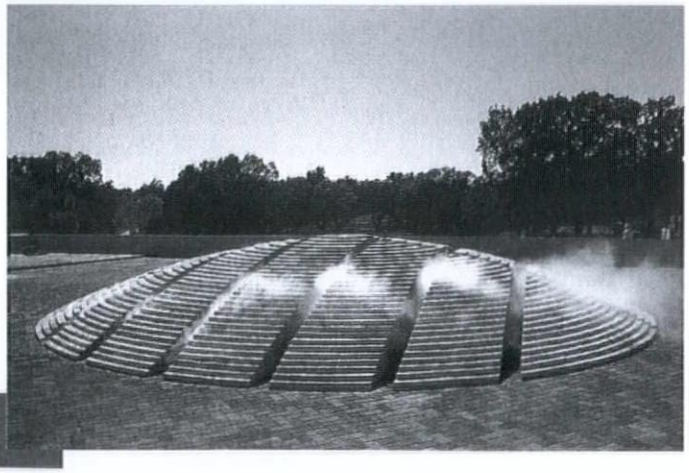
以上の話は、ディスコで発生した「顕在化」と「概念転換」、そして結果的なる「ナチュラルそのものとは?」という話ではあるが、ランドスケープ・アーキテクチュアとナチュラル(自然的、エコロジー……)の関係そのものであるように思う。今までのランドスケープ・アーキテクチュアは、地(環境に以前から含まれている、あるいは深層で眠っている要素)としての記号の特性を理解、認識し、そしてそれが最大限引き出され、顕在化されるように、あるフィルターを介入する。その上でその記号を図として転換し、知覚可能な対象として第三者に提示する操作だったと思う。手法自体に「記号の操作」が含まれるので、結果的に操作される記号は、操作されたが故に顕在化し、そして後々まで残ってしまう。残ったものは文字通り、意味が与えられ、枠付けされ、そして消費されてしまう。つまり、文字としての中身による顕在化と同じであるように思う。そこで、人間とエコとの関係においてはあえて(積極的な)、「声としての中身」による顕在化があるように思う。

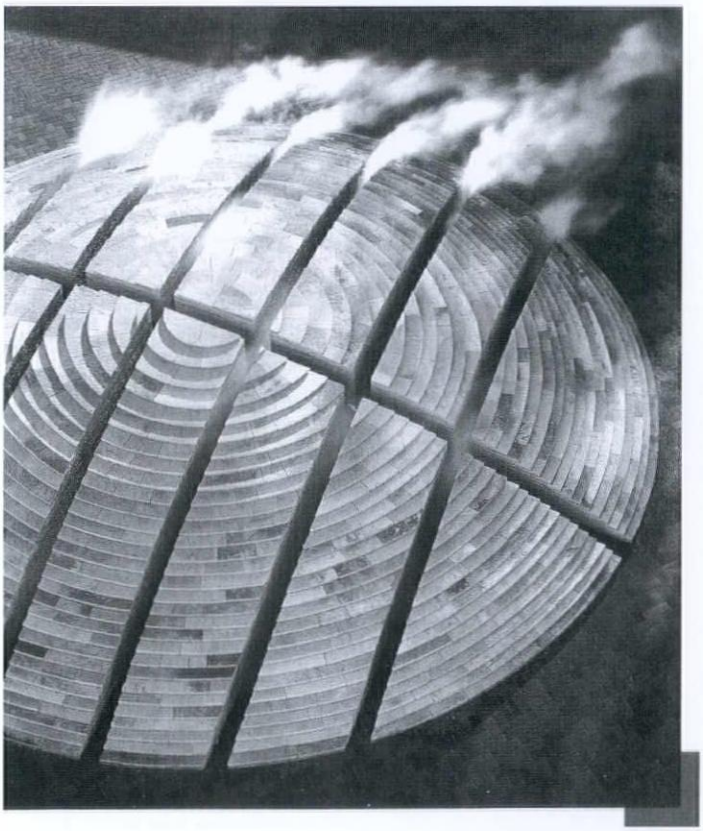
これはPeter WalkerとWilliam Johnson & Partnersの作品、〈The Solana Complex〉にある〈Fountain-mound〉であるが、これは声としての顕在化ではなかろうか。人間に対して無関係に成長するエコロジーと、意識としての主体に対して無関係に知覚してしまう身体に対して、ある媒介(フィルター)はそれこそ無関係に周囲の空間を満たし、かつ現在進行系(形ではなく、座標、フレームとしての系)で消失していく。ある媒介とは「Fountain-mound」から噴出する蒸気である。この蒸気は、周囲の記号群が「ナチュラル」なまま存在することを可能にし、文字としての顕在化のような現象を発生させることなく、周囲の記号群の境界を不明瞭にし、その不明瞭さによってその対象となる記号自体の存在を曖昧にする。その曖昧さによって記号に対する枠付けを不可能にし、意味の不在を生じさせ、空間においてあえて「空白」を構築する。この空白こそがエコロジーを人間が受肉し、知覚可能にする瞬間であり、瞬間を知覚させ、瞬間を構築するためには現在進行系で消失していくフィルターが必要なのだと思う。また、手法自体に対する積極性は、あえて幾何学的なる形態を地盤に挿入し、幾何学的構成によって構築した隙間から蒸気を噴出させているところからも伺える。そしてこれらによって、エコロジーと身体性との緊張、不安から生じるリアリティの把握が促されるのではないかと思う。

空白による顕在化

小室光矢

IBM-MPT Solana Headquaters, Westlake
landscape design: Peter Waler & William Johnson and Partners
architect: Legrreta Arquitectors, Mitchell Giugola
planners: Barton Meyers and Associates
Lotus87





時間と空間の間には、様々なものが潜んでいる。自然もまたこの間に存在する怪物である。生成し、崩壊し、多様性を生み出す。時間と空間によって自然を記述することはできても、それでは、自然が生まれる説明にはならない。自然は、時間と空間以前の混沌の中に住んでおり、人は、自らの混沌とした感覚によってそれを感じる。その感覚は、常に新しい経験を要求する。我々は、建築と自然の間において、次の新しい経験に突入することはできないのだろうか。我々は、日常の中において、ある事柄を目にしている。例えば、そこにサファイアがある。それは緑であり、硬い。そのふたつの質は全く異なる。しかし、そのふたつが浸透するとき、新たな固有の感覚「サファイア」を経験することができるのである。浸透とは引き離すことである。そして境界を消すように、同じ所に存在させることができた時、その異なる質の間に新たな経験を期待することができる。

建築家パトリック・ベルジェと造園家ジル・クレマンのチームによって設計された13haの広さを持つアンドレ・シトロエン公園では、建築が自然と同じ風景として語られている。

このセーヌ川沿いにある公園に近づくと、草木の中に6つの小さなガラスでできた温室が並んでいるのがわかる。夕暮れの空に、それらのガラスの小温室は、背後に流れる雲と手前の木立を、以前はひとつであった風景から分離する。分離させられたとたん、それぞれの異質の時間を絡ませながらひとつに重なり、ある感覚になって身体へ流れ込んできた。それは、ある経験の強度をつくりだして身体へ流れ込んだのである。

浸透の前提1（解放：引き離すこと）

建築を意識へ、自然を沈黙へ引き離す。それは、浸透の始まりそれらのである。等間隔に並ぶ6つのガラスの小温室は、反復として現れる。反復は意志が造る時間である。純粋立体とガラスで純化され、始まりと終わりを持ち、それは意識的である。この反復と引き離されるのは永遠性である。この公園の北西にあった未開墾地はあえて野生のままに残されている。ここでの発展のリズムは、鳥と雨と風が決定する。自然は、それ自身のために存在し、我々が見ていることを問いもしない。我々の意志を超えているが故に、ここは聖なる荒野である。ジル・クレマンは、「運動の庭園」と名付けた。我々の記憶以前から、おそらく記憶の後まで、その永遠性を持っている。このふたつの時間の質を引き離すことは、建築を、与えられる意味の世界へ、自然を、意志の介入できない沈黙の世界へ解放することである。このふたつの時間の質は、この風景にある固有の時間感覚をもたらしている。

浸透の前提2（境界を和らげること）

現実には、どうしても異なる質の間に境界ができてしまう。境界は、質を見えにくくする。公園では、様々な技法で水が使われている。「泡」は長いスロープを流れ、大温室の間には、吹き上がる無数の「水の列柱」がある。これらは、自然と建築の抽象的な境界を和らげる。温室のガラスは、細いワイヤーによって吊られ、境界面の透明性を強め、大地と建築と空はなめらかにつながる。すでに、自然と建築は、認識の上で密接に関わり始める。

浸透の前提3（異なる質の間に量をもたせること）

異なる質の間に、量を考えることができるだろうか？ 例えば色と匂い、音と光、そして建築と自然の間に。異質なものの間に量を持ち込んで、それ自体を設計する時、浸透は強くなる。パトリック・ベルジェは、この小温室において、曖昧な線を排除して、形を押し殺している。それに代わり、ガラスの透明度と木の柱の色、柱のプロポーションと屋根の構造の厚み、構造の密度と周囲の空白（ボイド）の比など、抽象的な対比を用いて強さを持たせている。具体性を弱められた建築と、豊富な自然が等価になって迫る時、ひとつの経験としての強さを持って現れる。

対峙と浸透

浸透は、対峙ではない。シトロエン公園のすぐ隣には、同じ時期に、リチャード・マイヤーの建物が建てられている。マイヤーの建物は、白と幾何学をもって大地の上に自らのロジックを構築する。自然との結び付き方が、シトロエン公園とは全く異なる。自然は切り離され、対峙されてから関係づけられる。秩序ある明晰な空間を、我々は混沌とした感覚ではなく、明晰な意識によって感じる。マイヤーの建物では、感覚と意識は分離される。意識で建築を捉え、感覚で自然を捉える。それらは独立したまま身体に流れる。これに対して、シトロエン公園のデザイン・アプローチは、感覚――意識の間を問題にしている。

浸透と身体性

浸透は、身体の中で起こる。浸透した風景では、建築と自然を単独で捉えることができない。常に、感覚――意識の間をさまよう。並んだ温室の時間軸のブリッジを歩きながら、匂い、風、庭園の変化を感じる。我々が感じる自然との接点は、建築と自然の関係の運動の変化によって生じる。風景の変化の中で、意識と感覚の間を揺れ動いたとき、その運動の軌跡に自分の身体の境界線を見つける。それは、身体の現実性となる。身体は、そのために常に風景を求める。その探検は詩情となる。風景とは、「サファイア」のような新たな固有の経験であり、諸々のものが深く浸透するとき、その経験の強度を増すのである。

オスモーシス
浸透する自然

飯田都之麿＋福田能梨絵

André Citröen（主に北側部分）
arcitect: Patrick Berger
landscape architect: Gilles Clément
写真＝筆者撮影

01：シニフィアンコシニフィエ
人間の営みのほとんどを何らかの形で支配しているのにもかかわらず、もっとも忘れ去られている「自然」の条件のひとつに「重力」を挙げることができる。「重力」は、人間の営みだけではなく、今日の人間の身体の仕組や形状にも影響している。「もし『重力』のない空間に棲む生物がいるとすれば球形の生物であろう」という、しばしばSFに出てくるもっともらしい仮説によれば、そこでは、人間もまたいずれは球形になるそうだ。果してそれを「人間」と呼んでよいものだろうか。極悪非道の殺人鬼に対して「あいつは人間ではない」などと言う場合の「人間」という語の使用は、「人間であると想定される物体」についての形而上学的な意味が期待されているが、しかし実際には、「人間」というシニフィアンには、今日の私たちの形状（＝見かけ）をもその意味の領野に含んでいるのではないだろうか？

02：飼い馴らし≒去勢
「重力」は、あまりにも当り前すぎて、忘れ去られている自然の条件である。ありきたりの日常生活では、うっかりワレモノを落として粉々にしたときぐらいしか、重力の支配を思い出すことなどめったにないだろう。「建物」などの人為的な空間の中で、「重力」を顕在化させることはほとんど不可能だ。何故なら、少なくとも「建物」に関して言えば、「重力」は、「建物」が成立するにはあらかじめそれを十分に飼い馴らしておかなければならないという前提＝常識があるために、「建物」が出来上がった時点ではすっかり忘れ去られている。飼い馴らされた「自然」は、去勢された飼いイヌのようなものだが、しかし、飼いイヌが主人を噛まないという保証はない。

03：裂け目≠開口部
「建物」という概念が、「一定の閉じた領域」という意味合いを持っているとしたら、その領域の境界面に存在する「裂け目」を一般的には「開口部」と呼んでいる。しかしながら「裂け目」は、その性質上、「建物」の自立性を危うくする。主体（＝「建物」の空間それ自体）が、「建物」として成立するためには、裂け目は、閉じられなければならない（そうでなければ、「建物」のアイデンティティは外部へ「流出」し、また「侵犯される」）。それ故、「建物」が自身のアイデンティティを確立するためには、象徴的な意味で「裂け目」を必要としながら、同時にそれらは封鎖されねばならない。「建物」に限らずいかなる主体であれ、その主体の生成過程には、このような弁証法的なせめぎあいの中を生き抜くという「試練」が必要不可欠である。

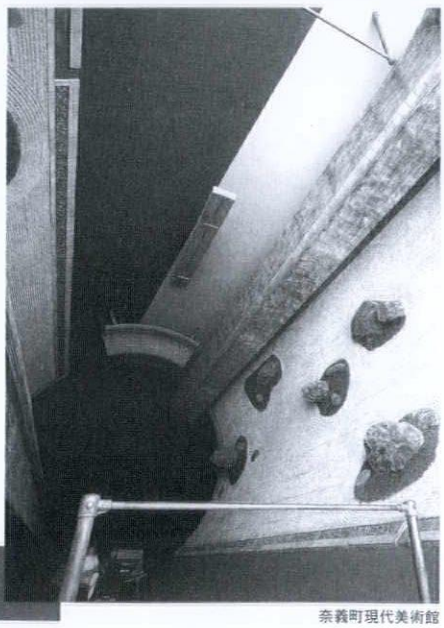
04：アラカワ＝消失する媒介者
最近の荒川修作の作品は、あたかも「重力」をテーマにしているかのようだ。彼自身にとっては、「重力」そのものはさほど重要ではないらしく、より広範な意味で、ヒトが知覚を形成する原初的な場面へ引き戻そうとしている。しかしながら、そこでは肉体および肉体とは不可分な関係にある精神が、すでに飼い馴らしたかのように見做されている「重力」が露出し、その支配力を主張し始める（それ故に、彼はこれを「我々を下に引っ張る力」などと呼ぶ）。ヒトは、アラカワ空間において、自分が重力による圧倒的な支配を受けている存在に過ぎなかったことを、いまさらながらに知る。一方で、重力こそがヒトをこれまでヒトたらしめていたし今後もそうであり、自身が既にそうであったところのものへと漸近することが出来る、ということを学べれば、アラカワ空間の使用法としては上出来だ。映画「12monkeys」の象徴的な一場面を思い出してみよう。主人公、ジェームズ・コール（ブルース・ウィリス）が2035年の世界で見せられた1996年の資料の中に、「世界の破滅はここから始まる」という旨の街頭の落書きの写真があるが、それを書いたのはテロリストではなく、彼を信じる唯一の味方、キャサリン・ライリー（マデリーン・ストゥ）である。彼女は、自分ではそれと知らずに、宿命的な立場を占有し、未来の記憶を現在において書き込む。この行為は、物語上の重大事件とは実は何の関係もないのだが、注意すべきなのは、それにもかかわらずこの行為によって彼女は、未来において「知っていると想定された主体」の位置を占めてしまうという点である（他方で、彼女はストーリー上もっと重大な行動をとってしまうが、観ていない人のためにこれは伏せておく。必見）。同じように、「見えない自然」としての重力がアラカワによって教えられ、気付かされることを私たちは重視せねばならないが、アラカワそのものは問題にはならない。ここでは、「知っていると想定された主体」とは、私たち自身なのだ。「教育」というプロセスの成就とは、学び手が、それを教えてくれた教師をもはや必要としなくなることだが、「未来からやってきたアラカワ」が示唆する問題群が、今後、建築家が考慮して当然となったときに初めて、アラカワの意図が私たちに伝わったのだと言える。その時まで、一見「狂人」である彼は、暴れ続けるだろう。

05：余分な付け足し＝染み
私が、本誌94年12月号のこの欄に寄せた荒川に関するコラムを読んでいただいただろうか。今回こうして私の文に目を通したついでに、ぜひそちらも参照していただきたいが、そこでは「荒川修作が自らを建築家と名乗るべきである」旨を述べている。それから約2年、まさか彼が私のコラムを読んだとは思えないが、ついに、彼は自らを建築家と名乗るようになり、『現代思想』1996年8月臨時増刊号／総特集：荒川修作＋マドリン・ギンズ（青土社）では「荒川修作（建築家）」とクレジットされている。

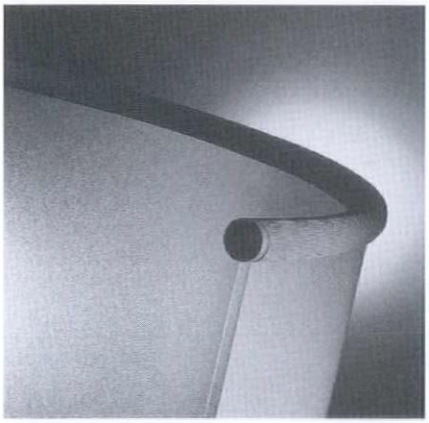
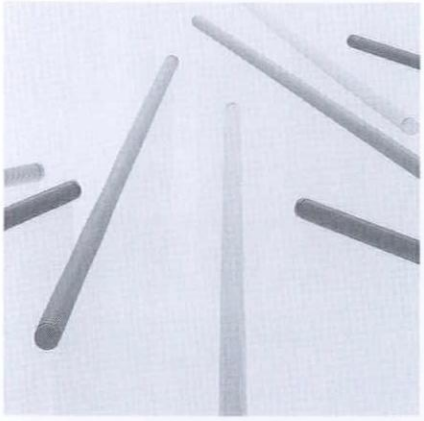
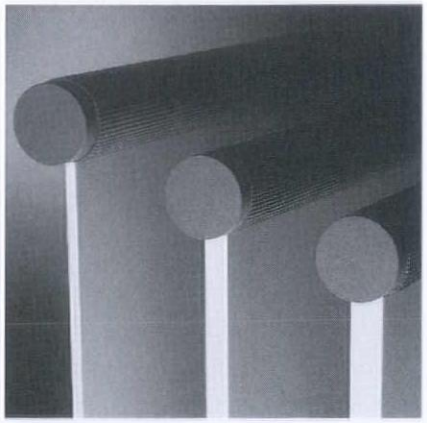
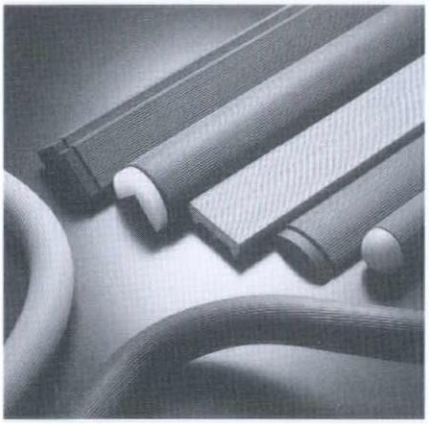
見えない自然

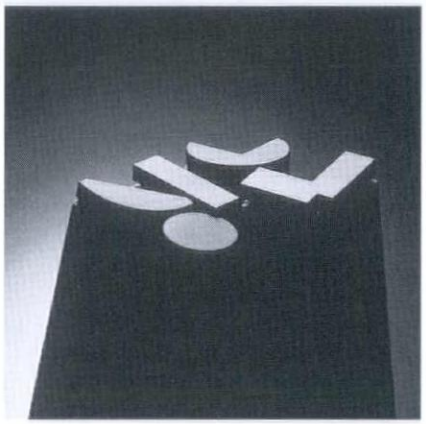
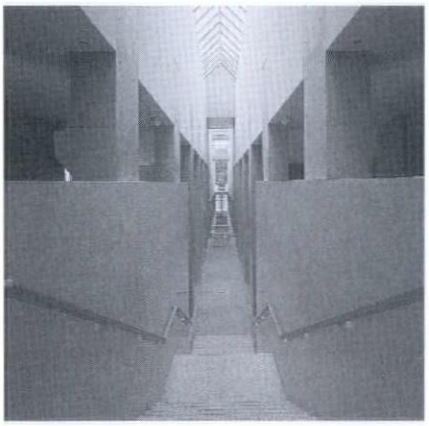
堀井義博

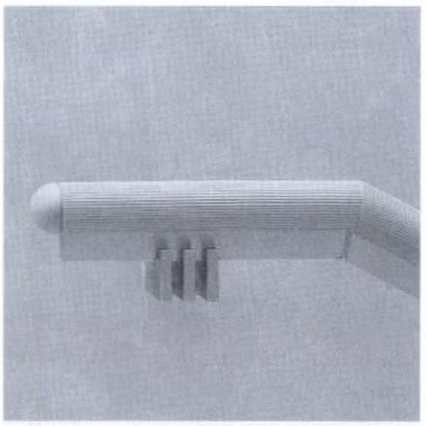
『新建築』9408号、9511号


奈義町現代美術館

養老天命反転地



写真下段：パトリ＋清里フォトアートミュージアム

'94通商産業省選定
グッド・デザイン商品

実用新案・意匠登録出願

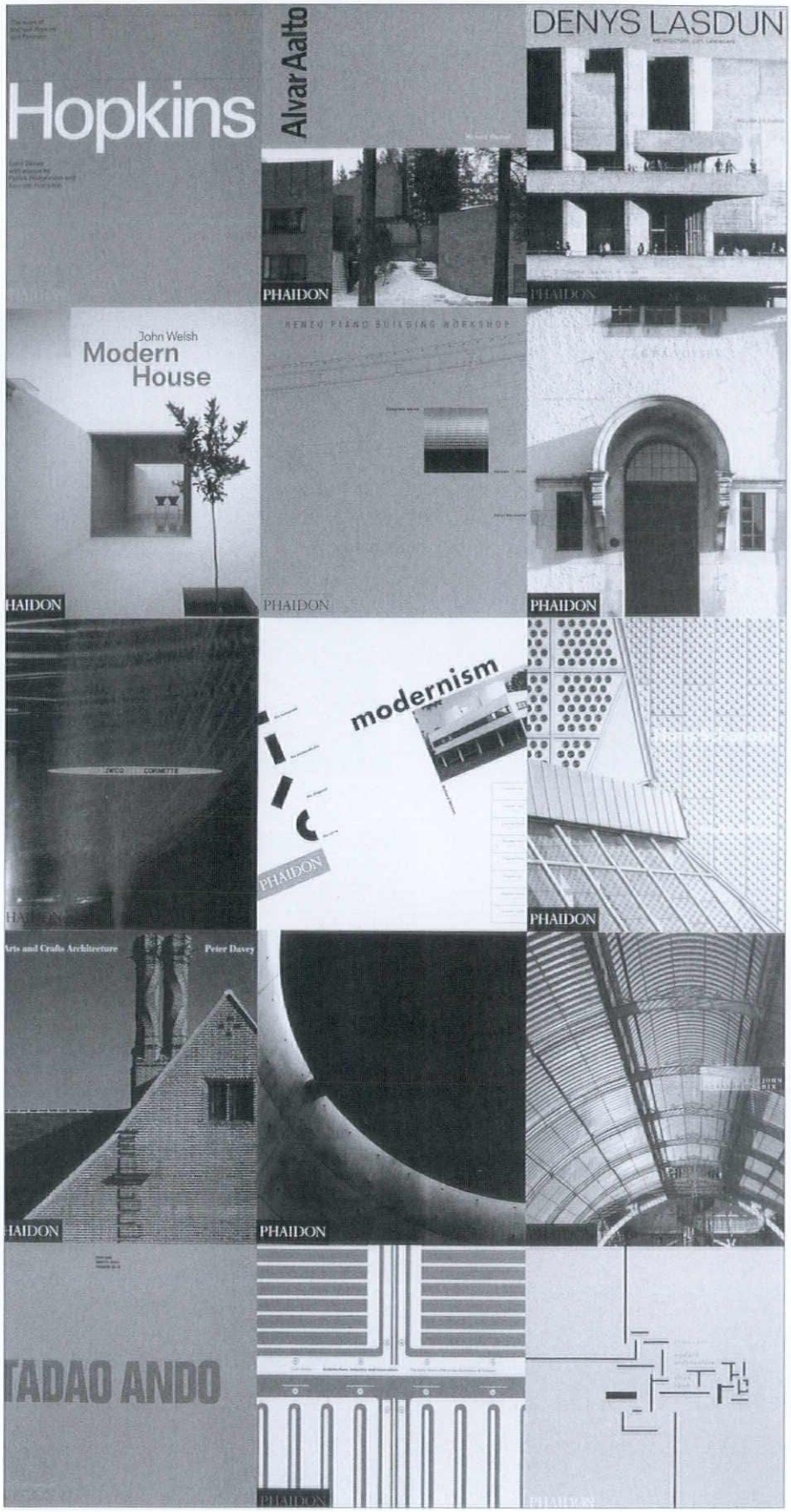
ゴムだからこそできた楽しい自由空間

素材が生んだメリットのひとつ「柔軟性」を生かし曲線部をふんだんにとり入れた楽しい空間づくりにもフレキシブルに対応したゴムテック。笠木やバンパーなど4種類をアイテムに取りそろえました。肌ざわりやカラー・スタイリングなど触覚・視覚をも満足させ、仕上げ材として生まれた、ホクシヨーが自信を持っておとどけするゴム建材シリーズです。ゴムの特徴を知り尽くしたゴム建材のプロ集団ホクシヨーは、これからもさまざまな空間づくりに貢献していきます。

ホクシヨー

販売元：ホクシヨー株式会社

本　　社　〒174 東京都板橋区上板橋1-2-8
TEL.03-3933-1156（代）FAX.03-3933-1160
大阪営業所　〒543 大阪市天王寺区勝山2-2-14
TEL.06-771-7407　FAX.06-771-7474
福岡営業所　〒812 福岡市博多区比恵町7-22
TEL.092-411-1021　FAX.092-471-5865



Odile Decq Benoît Cornette
Clare Melhuish

290 x 250mm, 160 pp
c.150 colour illustrations, 100 line drawings
£29.99 Hb
0 7148 3343 6

Glass in Architecture
Michael Wigginton

250 x 290 mm, 320 pp
c.200 colour, 150 b&w illustrations, 100 line drawings
£60.00 Hb
0 7148 2922 6

Modernism
Richard Weston

290 x 250 mm, 240 pp
Over 250 colour & b&w illustrations
£45.00 Hb
0 7148 2879 3

Tadao Ando
The Colours of Light
Richard Pare
Introduction by Tom Heneghan

290x 250 mm, 288 pp
180 colour, 55 b&w illustrations, 110 line drawings
£60.00 Hb
0 7148 3374 6

Modern Architecture Since 1900
3rd edition
William J R Curtis

245 x 210 mm, 736 pp
310 colour, 367 b&w illustrations, 185 line drawings
£29.99 Hb
0 7148 3524 2

£19.99 Pb
0 7148 3356 8

The Glasshouse
John Hix

290 x 250 mm, 240 pp
c.350 colour and b&w illustrations
£45.00 Hb
0 7148 3211 1

Tadao Ando
Complete works
Edited by Francesco dal Co

240 x 220 mm, 524 pp
100 colour, 370 b&w illustrations, 512 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 3471 8

Renzo Piano Building Workshop
Complete works, **Volume 3**
Peter Buchanan

290 x 250 mm, 240 pp
c.300 colour, 250 b&w illustrations, 250 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 3543 9

Complete works, **Volume 2**

290 x 250 mm, 240 pp
409 colour, 283 b&w illustrations, 261 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 2859 9

Complete works, **Volume 1**

290 x 250 mm, 240 pp
295 colour, 245 b&w illustrations, 242 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 2809 2

Architecture, Industry and Innovation
The Early Work of Nicholas Grimshaw & Partners
Colin Amery

250 x 250 mm, 256 pp
150 colour, 50 b&w illustrations, 120 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 2923 4

Structure, Space and Skin
The Work of Nicholas Grimshaw & Partners
Introduced by Kenneth Powell
Edited by Rowan Moore

250 x 250 mm, 256 pp
150 colour, 50 b&w illustrations, 120 line drawings
£25.00 Pb
0 7148 3457 2

Alvar Aalto
Richard Weston

290 x 250 mm, 240 pp
185 colour, 110 b&w illustrations, 140 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 3159 X

Hans Scharoun
Peter Blundell Jones

290 x 250 mm, 240 pp
190 colour, 160 b&w illustrations, 260 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 2877 7

Hopkins
The work of Michael Hopkins and Partners
Colin Davies
Essays by Kenneth Frampton and Patrick Hodgkinson

290 x 250 mm, 240 pp
250 colour, 90 b&w illustrations, 80 line drawings
£25.00 Pb
0 7148 3456 4

Denys Lasdun
Architecture, City, Landscape
William J R Curtis

290 x 250 mm, 240 pp
184 duotone illustrations, 63 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 2871 8

Modern House
John Welsh

290 x 250 mm, 240 pp
215 colour, 93 b&w illustrations, 148 line drawings
£45.00 Hb
0 7148 2889 0

C F A Voysey
Wendy Hitchmough

290 x 250 mm, 280 pp
250 colour, 90 b&w illustrations
£45.00 Hb
0 7148 3003 8

Arts and Crafts Architecture
Peter Davey

290 x 250 mm, 256 pp
139 colour, 178 b&w illustrations
£45.00 Hb
0 7148 2874 2

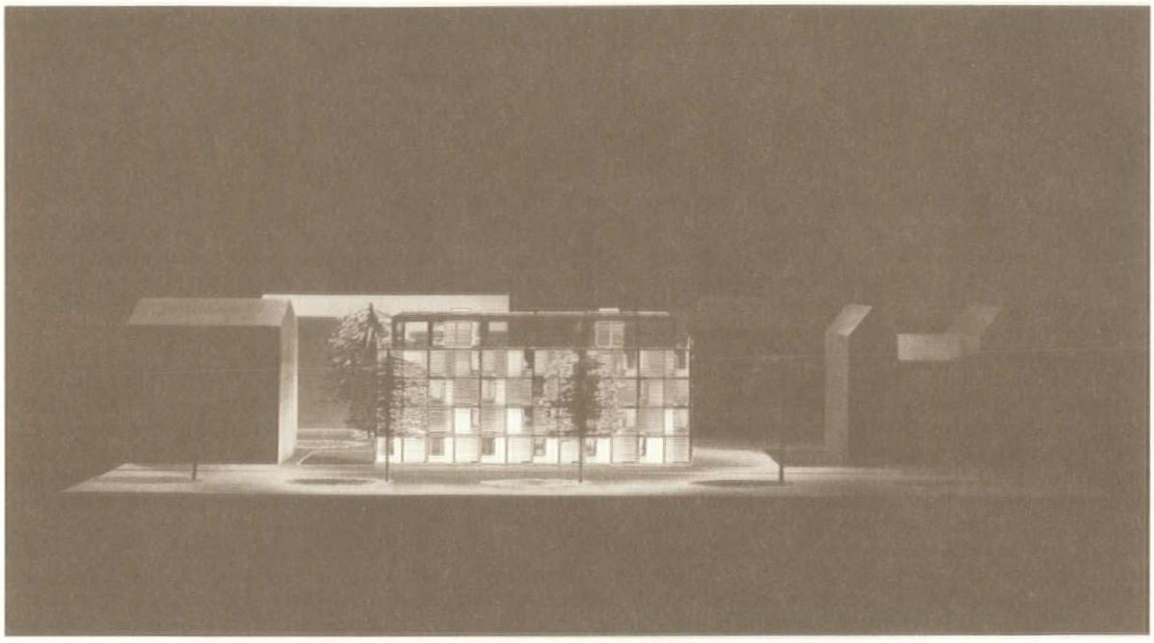
Los Angeles Architecture
The Contemporary Condition
James Steele

290 x 250 mm, 232 pp
156 colour, 87 b&w illustrations
£45.00 Hb
0 7148 2869 6

PHAIDON

SD

12月号予告



ハウスゾンネ／ユストス・ピザール＋ペーター・ルーゲ（Pysall Ruge Architekten）

9612

特集

SDレビュー1996

SDレビュー1996
今年で15回目を迎えたSDレビュー。今年からあらたに開催された大阪芸術大学での大阪展の様子も含め、SDレビュー1996入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。

［入選者］
RE[ ]/Responsive Environment、城戸崎和佐建築設計事務所、黒木正郎＋横田千晶（日本設計）、佐藤光彦＋横溝 真、三分一博志＋西尾通哲＋塚田哲也＋土井一秀、高橋昌巳（シティ環境建築設計）、長田直之＋筏 真司＋清水裕二（I.C.U.）、西沢大良、宮沢 透、宮脇 勝、安田光男＋杉山陽子、ユストス・ピザール＋ペーター・ルーゲ（Pysall Ruge Architekten）、由田 徹＋岡本美樹、吉松秀樹（アーキプロ）、渡辺真理＋木下庸子（設計組織ADH）＋三谷 徹＋長谷川浩己（S.E.D.O.）

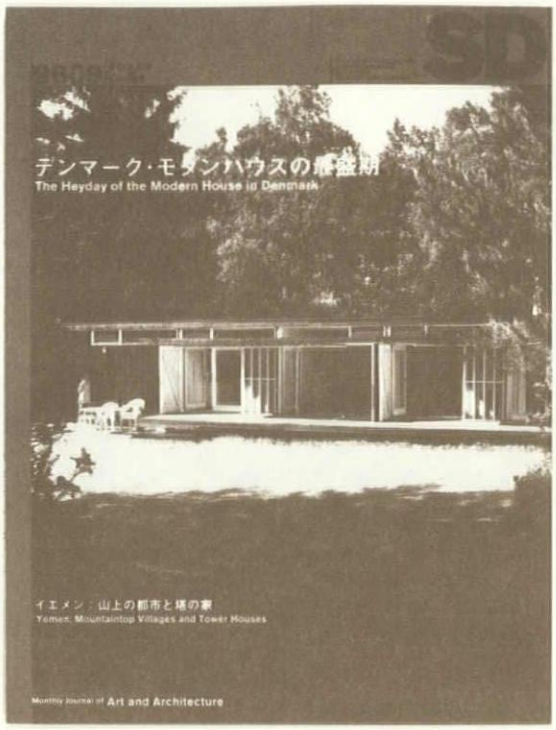
［審査員］
香山壽夫（建築家、東京大学教授）、渡辺邦夫（構造家）、内藤 廣（建築家）、妹島和世（建築家）

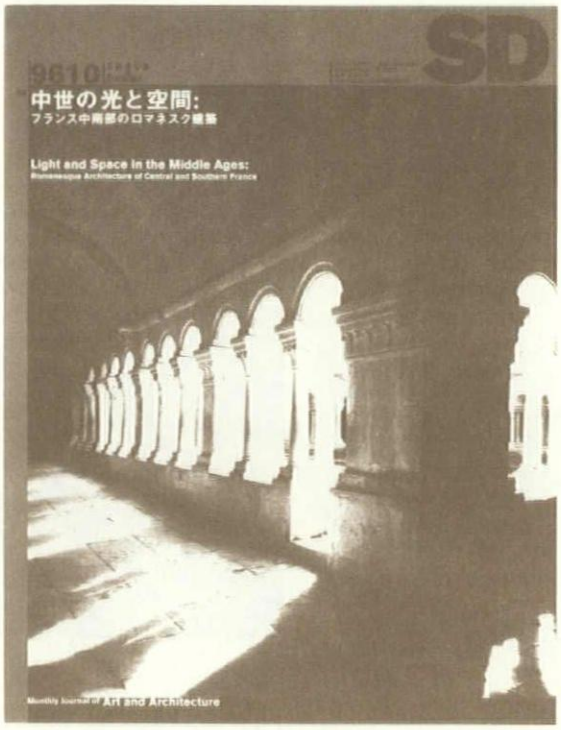
伊丹潤の近作より——石彩の教会、木の教会、土の教会

「軽さ」「透明性」を主張する建築とは対極に位置し、むしろ「もの派」とも呼べる建築家・伊丹潤。石・木・土といった自然素材を大胆に使用し完成したふたつの教会と、進行中のプロジェクトを紹介する。
［作品］石彩の教会、木の教会、土の教会
［文］林 芳史

連載：トムの時空形象学 15／戸村 浩
連載：照明探偵団・連続実践講座レポート9／LPA

SD
バックナンバー





9609

特集

デンマーク・モダンハウスの最盛期

機能主義的なデザインセンスが培われてきたデンマークの土壌に、近代建築はみごとに根を下ろした。シンプルな造形と機能性を特徴とした逸品が、40年以上経った今も生き生きと使われる。
[作品]
ニルス・ボーアのサマーハウスの別棟、ヴィルヘルム・ヴォリャト／スーホルムⅠ、アルネ・ヤコブセン／ケアホルム自邸／ネアルムヴェンゲ、パッレ・スーエンソン／キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他
[文] リズベット・バルスレフ・ヨーゲンセン、マルレーネ・ホークスナー、三宅理一、木下壽子、斎藤光代、他
[インタビュー] ハンナ・ケアホルム、ポール・M.イェンセン、アルフレッド・ホーマン、イェンス・ムーラー・イェンセン

山上の都市と塔の家
イエメン：都市と住居の形態学

イエメンでは、低地に比べ過ごしやすい山岳地帯に都市が形成される。ユニークな塔状の住居を特徴とする山上の都市を実測図を交えて紹介。
[事例] シバーム、サユーン、サヌア、ハジャラ、ワディ・ダハール、コーカバン・シバーム、クーラン、スーラ、他
[文+写真] 芦川 智

連載：トムの時空形象学 12／戸村 浩
照明探偵団：連続実践講座レポート 7／LPA

定価＝1,950円／本体1,893円

9610

特集

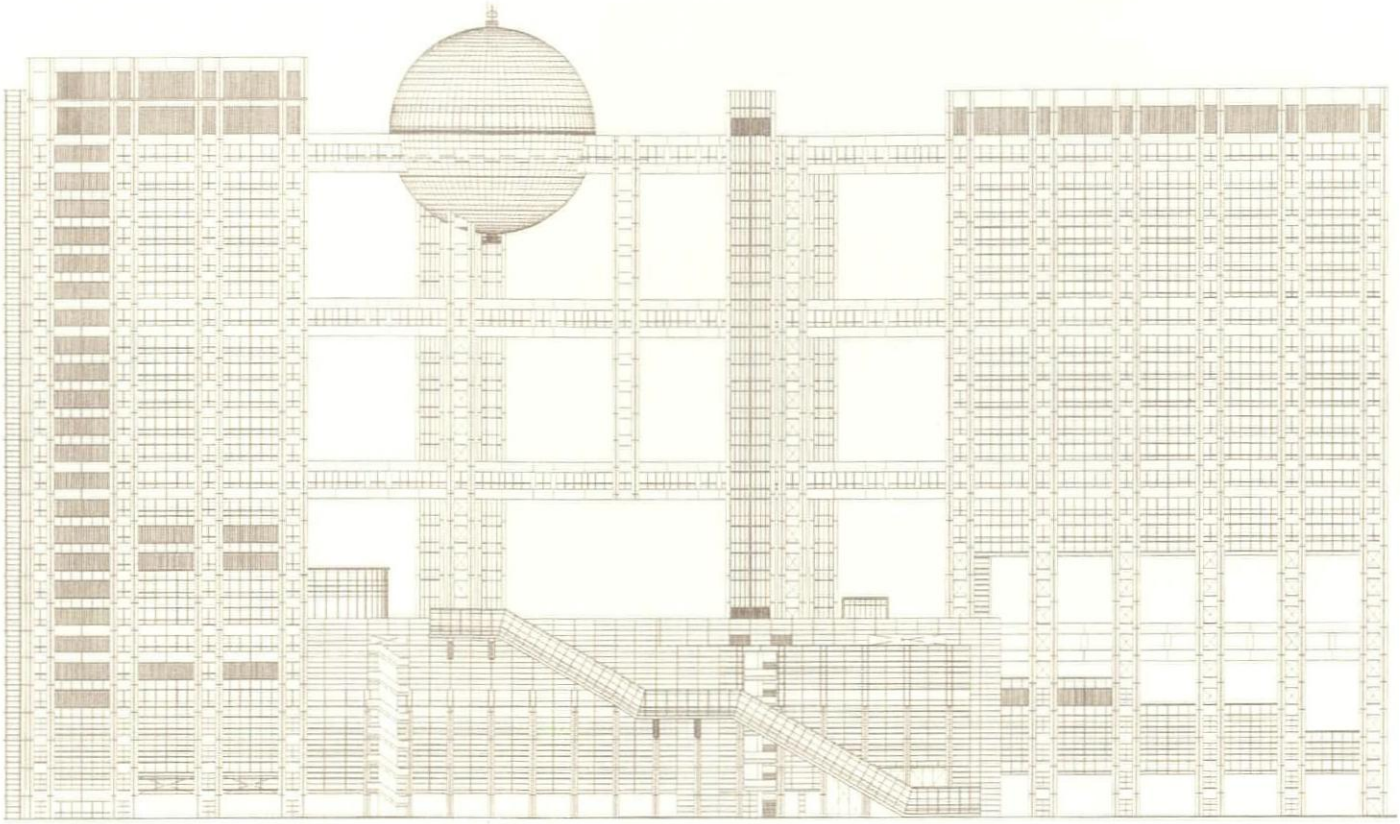
中世の光と空間
フランス中南部のロマネスク建築

キリスト教精神に裏付けられたヨーロッパ中世文化のもとに発展した教会・修道院建築。高い精神性をもって築き上げられたこれらロマネスク建築のもつ、荘重で力強い石造り建築の空間は、今もなお人々を魅了する。本特集では、幾何学・回廊・彫刻・石積み・イスラム・ランドスケープ等々のキーワードをかかげ、クリュニー派、シトー会派を含めたロマネスク建築のもつ空間の解析を試みる。

[紹介予定建築]
ル・トロネ修道院、シルヴァカンヌ修道院、セナンク修道院、サン・マルタン・ド・ロンドル教会、サン・タンドレ教会、サン・ミッシェル・ド・キュクサ修道院、サン・マルタン・ド・カニグー修道院、他約30例
[文]
香山壽夫、羽生修二、馬杉宗夫、西田雅嗣、河辺哲雄、山田幸正、渡辺道治、饗庭孝男
[写真]
堀内広治

連載：
トムの時空形象学 13／戸村 浩
照明探偵団：連続実践講座レポート8

定価＝1,950円／本体 1,893円



SD別冊29

判型・体裁：A4判変形・並製
総頁：168頁

フジテレビ本社ビル

1996年10月中旬発行予定

臨海副都心台場地区に建設されたフジテレビ本社ビルは、豊かな人間性と文化性とを取り込んだ創造的な空間を、都心部地域では得られない恵まれた環境の中で実現している。それはまた次世代のオフィスビルとしての最新の機能と、躍動感溢れる美しさを備えている一方で、放送を中核としたさまざまなメディアの受信・発信基地として高度な安全性と最先端の通信技術を有する。

本別冊では、豊富な写真、多数の図面、文章などにより、さまざまな角度からフジテレビ本社ビルを紹介する。その中には、全体構成の詳細な検討過程、新しい構造システム、最新のスタジオの詳細、直径32mの球体のリフトアップ工法などが含まれる。

建築の設計、施工に携わる人はもちろん、新しい建築技術に興味を持つ人、都市の将来像、放送施設やオフィスビルの未来像に関心のある人などにとっても興味のある内容。

目次抜粋

[プロセス編]
臨海副都心事業とプロジェクトの始まり
基本設計から実施設計までのスタディ
[コンセプト編]
オフィス計画
スタジオ計画
構造計画
設備計画
防災計画
外構計画
[デザイン編]
基準階外装
球体外装
シースルーエスカレーター
1階シアター
展望室
大会議室
V4スタジオ
V9報道スタジオ・オフィス
DAVスタジオ
試写室
ラジオ・スタジオ
[施工編]

SD

SDライブラリー

21世紀を築くデザイン叢書

1 アールデコの摩天楼

1920〜30年代のニューヨークの摩天楼を分析し，アール・デコの摩天楼のデザインとはどんなものか，またアール・デコの時代とはどんな時代であったのかを，今日的問題にひきつけて詳述。

小林克弘著
A5・272頁　定価3,502円

2 屋外空間の生活とデザイン

本書は，住宅地域や市街地の公共空間—広場や街路などの屋外空間—のデザインを，そこで住む人びとの生活やそこで繰りひろげられる行為や行動を，分析・考察し提案をするもの。

J.ゲール著　北原理雄訳
A5・248頁　定価3,399円

3 近代建築の系譜(上)
1900年以後

長い間待ち望まれていた本書は，近代建築史の全貌を通読に堪えるようバランスのとれたタッチで描き出している。著者は，実用面，美的面，そして社会性の諸次元を重ね合わせたアプローチを採っている。感動的概論書！

W.J.R.カーティス著
五島朋子，澤村明，末廣香織共訳
A5・400頁　定価4,738円

4 近代建築の系譜(下)
1900年以後

目次(上・下巻)第一部　近代建築形成の岸辺　第二部両大戦間における近代建築の結晶化　第三部1940年以降の普及と変容。

W.J.R.カーティス著
五島朋子，澤村明，末廣香織共訳
A5・400頁　定価4,738円

5 アーキテクト
建築家とは何か

本書は建築学科の学生および卒業したての人たちにむけて，建築家とはどういう職業か，何を期待すべきか等を説き指針を与えるとともに，自己を見詰め直し再認識するテクストである。

R.ルイス著　六鹿正治訳
A5・306頁　定価3,914円

6 デザインの思考過程

本書はデザインの過程での思索や思考の普遍化を試みている。いわば，建築や都市を創造するために，個人的な次元に直接関係する考察の構造や探究の焦点を明らかにすることが目的。

P.ロウ著　奥山健二訳
A5・256頁　定価3,399円

7 ガウディの七つの主張

本書は，同著者による「アントニオ・ガウディ」「ガウディの建築」につぐ3作目でありそれぞれ独立しているが三部作を構成する。今回は豊富な語録を頼りにガウディ建築の不可解さを解明。

鳥居徳敏著
A5・224頁　定価2,987円

8 イタリア・ルネッサンスの建築

本書は，15・16世紀を中心にルネッサンス建築を時代と都市，そして建築家という三つの視点から論じている。各章共，建築家の主要作品が見易い図版・写真により解説された良き案内書。

P.マレー著　長尾重武訳
A5・280頁　定価3,811円

9 光と風と構造

本書は，複雑な構造物の応用解析などに用いる現代の工学的方法を平易に紹介し，それを古代から近代までの石造天井を架けた大建造物に応用した研究をまとめたもの。

R.マーク著　飯田喜四郎訳
A5・192頁　定価2,987円

10 パタンランゲージによる住宅の建設

著者は，現代の住宅生産システムの中でも，パタンランゲージの精神とその理論の枠の中で住宅建設が可能であることを証明した。また手作り住宅が格安にできることを説いている。

C.アレグザンダー他著　中埜 博監訳
A5・288頁　定価3,708円

11 デ・アーキテクチュア
脱建築としての建築

本書は，ミケランジェロからピカソまでの美術の成果を踏まえ，建築への新しい視点を探るものである。著者は本書によって，現代人の心を捉える建築表現を展望する。

J.ワインズ著　大島哲蔵，三好庸隆共訳
A5・322頁　定価4,326円

12 コラージュ・シティ

20世紀の都市デザインを支配してきた理想都市の2つの方向性—未来派的ファンタジーと伝統的な都市へのノスタルジアの概念が調和した都市が著者の追求する都市の理想である。

C.ロウ，F.コッター著　渡辺真理訳
A5・288頁　定価3,914円

13 ミース再考
その今日的意味

K.フランプトン，P.アイゼンマンら，現在第一線で活躍中の建築家・史家によるヴァラエティに富んだ評論集。従来のモダニズム賛否という二元論的視点から解き放ち，親しみやすい一書。

K.フランプトン他著　澤村 明，EAT訳
A5・224頁　定価3,399円

14 ルイス・カーン建築論集

「沈黙と光」という言葉に象徴される近代建築の巨匠ルイス・カーンの美しいディテールと崇高な空間の織りなす建築。それを産み出すフィロソフィを伝える10編のオリジナル・アンソロジー。

L.カーン著　前田忠直編訳
A5・258頁　定価3,708円

15 メガロポリスを超えて

今日，高度情報化社会・テレコミュニケーションの発達に伴う巨大都市の再編成について論述し，未来都市の軌道修正を提言。都市の地球規模での相互作用に留意しながら分析する。

J.ゴットマン，R.A.ハーパー共編
宮川泰夫訳
A5・352頁　定価5,871円

16 18世紀の建築
バロックと新古典主義

ヨーロッパの18世紀は，バロックとロココによって幕を開けた。諸都市では多くの教会堂や宮殿が建てられ，黄金期を迎える。後半になると新古典主義への転向がみられた。

J.サマーソン著　堀内正昭訳
A5・208頁　定価3,502円

17 デザイニング・ドリームス
映画に見る近代建築

美しい映画の演出は，20世紀初頭より近代建築の表現，セット・デザインの効果を重視。160余点のスチールで，ミース，コルビュジエ他のモダニズムを検証。映画界の躍進を“建築”で展望。

D.アルブレヒト著　萩正勝訳
A5・272頁　定価4,017円

18 アダムの家
建築の原型とその展開

本書は，建築の原型という理念が建築史のなかでどのように変化し実現化されていったかを，ギリシャ，ローマの時代から現代に至るまでの主要な建築理論と建築作品を考察した建築論。

ジョセフ・リクワート著　黒石いずみ訳
A5・296頁　定価4,120円

19 圏外からの建築
映画・写真・鏡・身体

著者アグレストは，本書の9つの章を通じて，映画・写真・鏡・身体を参照しながら，機能主義に代表される硬直化したモダニズム都市イデオロギーを批判する。

ダイアナ・アグレスト著　大島哲蔵訳
A5・240頁　定価3,708円

20 建築と非建築のはざまで

本書は，建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。イマジナリーな建築に言及する。

ロバート・ハービンソン著　浜田邦裕訳
A5・208頁　定価3,193円

21 空間を生きる

バルセロナの現代建築家ボフィールが語る建築論。全体は三部構成で，バルセロナ，パリ，ニューヨーク，モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な条件について語る。

リカルド・ボフィール著　太田泰人訳
A5・192頁　定価2,987円

明日を築く知性と技術　●鹿島出版会　〒107 東京都港区赤坂6-5-13 ☎(03)5561-2551(営業)　●図書目録送呈

SD選書 待望の名著復刊！〈11点〉

永らく品切れでご迷惑をおかけしましたが，読者の皆様の強いご要望により下記11点を復刊しました。部数に限りがありますので，お早目にお申し込み下さい。

⑦フランク・ロイド・ライト
谷川正己著
四六・230頁 定価1,854円
アメリカの生んだ近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトが遺した偉大な業績を紹介し，その建築と思想との関連を語る，ライト研究の入門書。

⑫新桂離宮論
内藤 昌著
四六・268頁 定価2,060円
桂離宮ほど多くの人びとを魅了し，論究された建築はない。本書は著者が小屋裏まで登っての調査をもとに新たな展開を試みて世に問う野心作。

⑭現代絵画の解剖
木村重信著
四六・236頁 定価2,060円
現代作家は何を求めて現代絵画を描いているのか，ユニークな分析と論理で現代絵画の特質をあきらかにする。現代絵画鑑賞の手引書。

⑮ユルバニスム
ル・コルビュジエ著 樋口 清訳
四六・296頁 定価1,854円
ル・コルビュジエの都市計画の基本理念はすべて本書を出発点としており，ル・コルビュジエの警告は，年月を経た今日もまだ生きている。

⑰私と日本建築
A.レーモンド著 三沢 浩訳
四六・260頁 定価2,060円
著者は戦時中を除いて，わが国で活躍した第一線の建築家である。本書は彼の講演，評論11編を集めた評論集で，代表作60点の写真を付してある。

㉗イタリアの美術
A.ブラント著 中森義宗訳
四六・252頁 定価2,060円
イタリア・ルネッサンス期からマニエリズム期の芸術家アルベルティ，ダ・ヴィンチ，ミケランジェロ等の芸術理論を，彼らの作品・著作から論ずる。

㊻環境とデザイン
G.エクボ著 久保 貞訳
四六・313頁 定価2,060円
アメリカのランドスケープデザインの第一人者である著者が，環境デザインに対する姿勢・計画案のプログラムづくりなど問題を解明した基本図書。

㊻天上の館
J.サマーソン著 鈴木博之訳
四六・308頁 定価2,060円
イギリス建築史界の泰斗である著者の西洋建築史論文集。ゴシック建築から，ル・コルビュジエに至る西洋建築の代表的エポックを論説した名著。

㊻キモノ・マインド
B.ルドフスキー著 新庄哲夫訳
四六・250頁 定価2,060円
一外国人のみた日本人及び日本文化に対する興味ある批判の書。著者は2年間日本に滞在，日本各地を旅し執筆したもので，皮肉とユーモア溢れる書。

㊼住まいの原型 II
吉阪隆正他共著
四六・264頁 定価2,060円
『住まいの原型 I』の続編。本書では，モンゴル，フィリピン，台湾，インドネシア，インド，エジプト，中南米など，15の地域の住居を取り上げ紹介する。

㊻続住宅論
篠原一男著
四六・230頁 定価1,854円
世界の〈共時都市〉の中に，民家集落の調査の中に，自らの設計の中に求めて，一人の建築家の内部に燃焼する空間理念を謳いあげた評論。

SD選書 好評の既刊・近刊

㉑ボッロミーニ
G.C.アルガン著 長谷川正允訳
四六・208頁 定価1,854円
イタリア・バロックを代表する建築家ボッロミーニの生涯と業績を簡潔に論じたモノグラフ。イタリアの著名な美術史家G.C.アルガンが平易明解に書いた著作。

㉑ヴィオレ・ル・デュク
羽生修二著
四六・220頁 定価1,854円
歴史的建造物の保存・再生に新しい理論と方法を打ち出した19世紀フランスの修復建築家の生涯と仕事を紹介。修復理論と方法を著述と実施事例の双方から検討

㉑トニー・ガルニエ
吉田鋼市著
四六・224頁 定価1,854円
「工業都市」の計画等で知られる近代建築のパイオニア，トニー・ガルニエの都市計画史，近代建築史上での先駆性を，理想都市の系譜，モダニズムの流れから紹介

㉑住環境の都市形態
P.パヌレ他共著 佐藤方俊訳
四六・224頁 定価1,854円
本書は，英仏蘭独4ヵ国における近代の集合住宅と街区のプロジェクトを詳しく紹介している。パリ改造計画／ロンドンと田園都市／輝く都市／街区の変容など

㉑古典建築の失われた意味
G.ハーシー著 白井秀和訳
四六・240頁 定価1,854円
何故に建築家が未だに古典的なオーダーを用いるのか？本書は古典建築のオーダーについての歴史的意義を簡潔に論じた格好の入門書。

㉒パラディオへの招待
長尾重武著
四六・224頁 定価1,854円
16世紀建築家パラディオの人と作品を紹介。1 パラディオへの招待，2 パラディオの生涯と作品。3 メッセージ，4 ヴィッラ，5 ロトンダ，6 ロトンダの誘惑，ほか

㉓ディスプレイデザイン
魚成祥一郎監修
四六・200頁 定価1,854円
都市・建築・インテリア・グラフィックなど，あらゆるデザイン領域を横断・統合するスーパーデザインとしての「ディスプレイデザイン」の入門書。

㉔芸術としての建築
S.アバークロンビー著 白井秀和訳
四六・244頁 定価1,854円
建築がいかに芸術として成立しうるかを，具体的な要素を分析しながら解明した入門書。同じ著者による既刊『インテリア・デザインの美学』と補完し対をなす好著。

㉕フラクタル造形
三井秀樹著
四六・224頁 定価1,854円
本書は構成学の立場から形の秩序と構造，自然形態とフラクタル，今日の建築・デザインの潮流とフラクタルの関係などをわかりやすく論じた造形の入門書。図版多数。

㉖ウイリアム・モリス
近代デザインの原点
藤田治彦著
四六・224頁 定価1,854円
近代デザイナーの先駆者ウイリアム・モリスはデザイナー・工芸家のみならず，ヴィクトリア朝を代表する詩人であり，本書は彼の生涯とその多彩な活動を紹介する。

㉗エーロ・サーリネン
穂積信夫著
四六・240頁 定価1,854円
若くして急逝したエーロ・サーリネンは寡作であり，その素顔は知られていない。サーリネンの事務所に在籍した著者が，彼の建築作品と生涯を綴る。

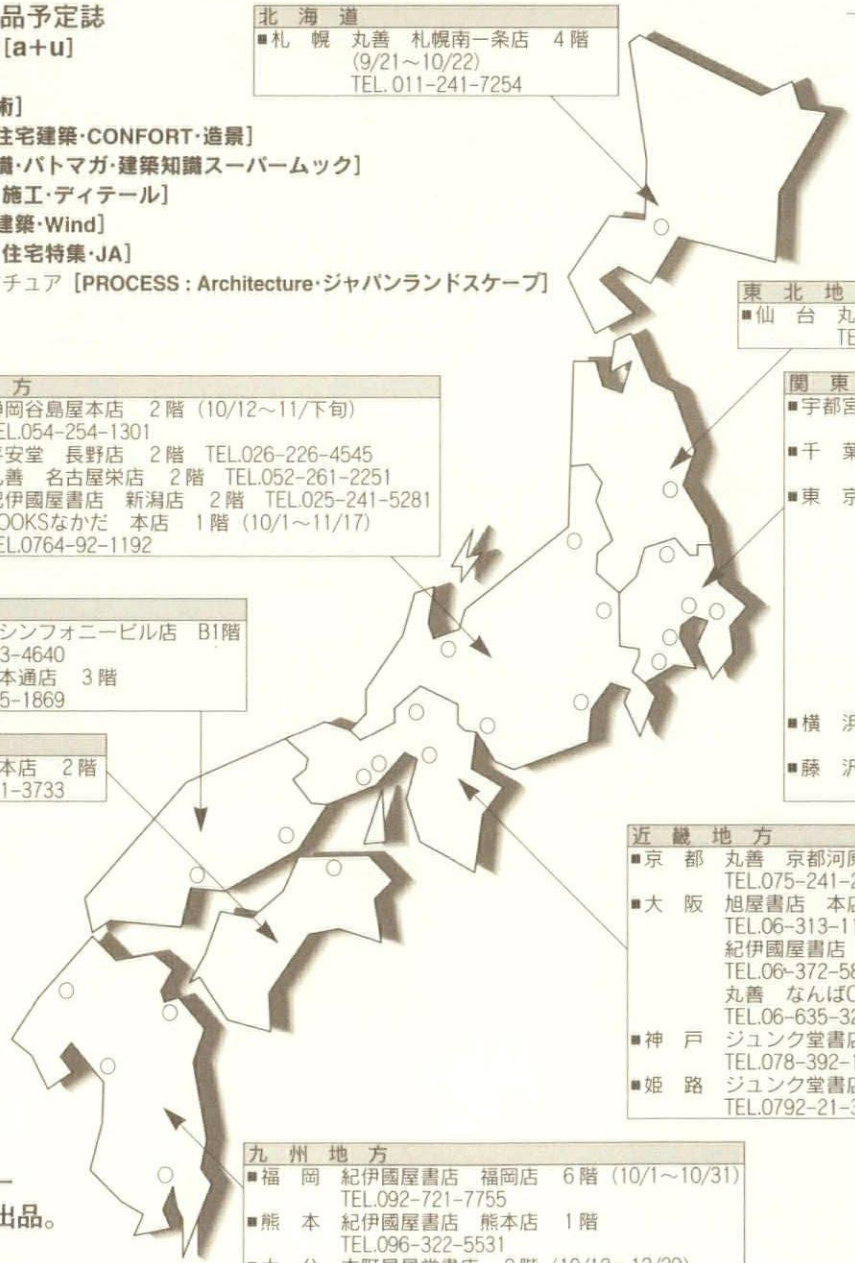
明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 〒107 東京都港区赤坂6-5-13 ☎(03)5561-2551(営業) ●図書目録送呈

建築関連雑誌
ARCHITECTURAL MAGAZINES' BACK NUMBER FAIR
バックナンバーフェア

'96.10/12(土)～11/11(月)

全国29書店同時開催

■出品出版社・出品予定誌
㈱エー・アンド・ユー［a+u］
㈱鹿島出版会［SD］
㈱建築技術［建築技術］
㈱建築資料研究社［住宅建築・CONFORT・造景］
㈱建築知識［建築知識・バトマガ・建築知識スーパームック］
㈱彰国社［建築文化・施工・ディテール］
㈱商店建築社［商店建築・Wind］
㈱新建築社［新建築・住宅特集・JA］
㈱プロセスアーキテクチュア［PROCESS : Architecture・ジャパンランドスケープ］
※増刊・別冊含む



北海道
■札幌　丸善　札幌南一条店　4階
(9/21～10/22)
TEL. 011-241-7254

東北地方
■仙台　丸善　仙台一番町店　1階
TEL. 022-224-8018

中部地方
■静岡　静岡谷島屋本店　2階（10/12～11/下旬）
TEL.054-254-1301
■長野　平安堂　長野店　2階　TEL.026-226-4545
■名古屋　丸善　名古屋栄店　2階　TEL.052-261-2251
■新潟　紀伊國屋書店　新潟店　2階　TEL.025-241-5281
■富山　BOOKSなかだ　本店　1階（10/1～11/17）
TEL.0764-92-1192

関東地方
■宇都宮　宇都宮ブックセンター　2階
TEL.028-627-7700
■千葉　千葉そごうブックセンター　8階
TEL.043-245-8331
■東京　八重洲ブックセンター　本店　3階
TEL.03-3281-8203
紀伊國屋書店　新宿本店　4階
TEL.03-3354-0131
三省堂　神田本店　5階
TEL.03-3233-3312
紀伊國屋書店　渋谷店　5階
(10/12～11/2) TEL.03-3463-3241
芳林堂書店　池袋本店　5階
TEL.03-3984-1101
■横浜　有隣堂　本店　3階
TEL.045-261-1231
■藤沢　有隣堂　藤沢店　4階
(10/1～10/31) TEL.0466-26-1411

中国地方
■岡山　丸善　岡山シンフォニービル店　B1階
TEL.086-233-4640
■広島　丸善　広島本通店　3階
TEL.082-245-1869

四国地方
■高松　宮脇書店　本店　2階
TEL.0878-51-3733

近畿地方
■京都　丸善　京都河原町店　3階（11/1～11/30）
TEL.075-241-2168
■大阪　旭屋書店　本店　4階（10/1～10/31）
TEL.06-313-1191
紀伊國屋書店　梅田店　1階（10/22～11/9）
TEL.06-372-5821
丸善　なんばOCAT店　5階
TEL.06-635-3225
■神戸　ジュンク堂書店　三宮店　B1階（10/1～10/31）
TEL.078-392-1001
■姫路　ジュンク堂書店　姫路店　7階
TEL.0792-21-3167

九州地方
■福岡　紀伊國屋書店　福岡店　6階（10/1～10/31）
TEL.092-721-7755
■熊本　紀伊國屋書店　熊本店　1階
TEL.096-322-5531
■大分　本町晃星堂書店　2階（10/12～12/29）
TEL.0975-33-0231
■鹿児島　ジュンク堂書店　鹿児島店　M2階
TEL.099-239-1221

建築関連雑誌
出版社9社の
協賛により、

バックナンバー
19誌を一堂に出品。

全国主要都市の
29書店で同時開催。

※一部の書店では開催期間が異なります。

SD Space Design
Back Issues

9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriyama City Museum of Art; etc.. ¥2,700

9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Disign Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950

9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last sky-scraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800

9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia:NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950

9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000

9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Eiji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950

9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horiike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800

9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreeinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesso D'Artico, etc.. ¥1,950

9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,500

9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥1,950

9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Waiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥1,950

9606 111Chairs Designed by Architects: Reintroducing 111 chairs designed by overseas architects from 19 century to now. Architects: Adolf Loos, Charles Rennie Mackintosh, Antonio Gaudi, Otto Wagner, Eliel Saarinen, Walter Gropius, El Lissitzky, Erik Gunnar Asplund, Le Corbusier, Mies van Der Rohe, Bruno Taut, Charles Eames, Carlo Scarpa, Aldo Rossi, etc. ¥3,000

9607 The Architecture of Kameki Tsuchiura: A Reappreciation: Reintroduce Kameki Tsuchiura's works before and after world war II. Works: Tsuchiura House I and II, Tokuda Building, Hosaka Clinic, etc. **Multi-unit Housing by the Kenchiku Design Studio:** Introduce the idea of housing which Kenchiku Design Studio have kept showing new FH HOYA-II project. ¥1,950

9508 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥2,400

9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jorn Utzon; etc. text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥1,950

9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martine de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥1,950

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●

断熱ドア

ウインテック22・20

●

新日軽株式会社

新日軽㈱では，新たな設計思想から生まれた，断熱ドアの新しい形，ウインテック22･20を新発売した．　Ⅰ地域～Ⅴ地域まで，全国どこでも金融公庫の割増融資が受けられるＢＬ優良住宅部品Ｓ型認定品である．

特長

①枠の外側にドア本体をオーバーラップさせることで，ドアと枠の隙間を遮断し，高い断熱性を発揮する画期的なオーバーラップ方式を採用．

②同社独自のアルプラ技術を導入した複合素材のドア枠を採用．　室外側には耐久性・耐候性の高いアルミ形材を室内側には熱伝導率の低いプラスチックを採用．

③室内側の施錠ツマミおよび台座カバーを樹脂製に，ドア本体と台座部の間にはゴムパッキンをはさみ込む，ドア本体には断熱効果に優れた発泡ウレタンを充填するなど細部にいたるまでの徹底した結露防止対策．

④玄関内部を明るくするツートンカラーである．

⑤ピボットヒンジ採用により，従来の丁番タイプと比べ，すっきりとした外観である．

⑥繊細な表現が可能なアルミ鋳物をモールやハンドルに採用し，従来にない高級感あふれるデザインである．

価格（写真タイプ）

483,000円

新日軽株式会社　住宅建材事業本部
東京都江東区木場２丁目７番23号
〒135　Tel　03-3820-2159

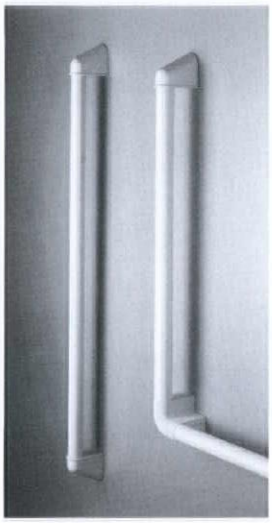
●

手摺

ソフトハンド

●

ナカ工業株式会社



ナカ工業㈱では，ディンプル樹脂笠木を採用した補助手摺，ソフトハンドＰ-30Ｖ・Ｐ-30Ｍを新発売した．人にやさしい住まい作りに役立とうと同社は従来より手摺の開発に力を入れていたが，更に使いやすく高性能の握りやすいディンプル模様付きの製品を開発した．製品は，Ｐ-30Ｖ（プレーン）とＰ-30Ｍ（木目色）があり，安全性･耐久性に優れＢＬ認定品となっている．

特長

①画期的なディンプル笠木が手のすべりを防止する．

②子供からお年寄りまで，握りやすいφ30笠木である．

③ビスを表面に出さない安全設計である．

④施工が簡単．　スピーディーに取付けられる．

⑤ウッドタイプの採用により，様々な建築空間に調和する．

⑥抗菌剤入りで，カビやバイ菌をシャットアウトする．

⑦用途は玄関，トイレ，洗面所，浴室など．

価格

6,200円～

ナカ工業株式会社　住宅関連営業部
東京都千代田区麹町３番４号
〒102　Tel　03-5211-0722

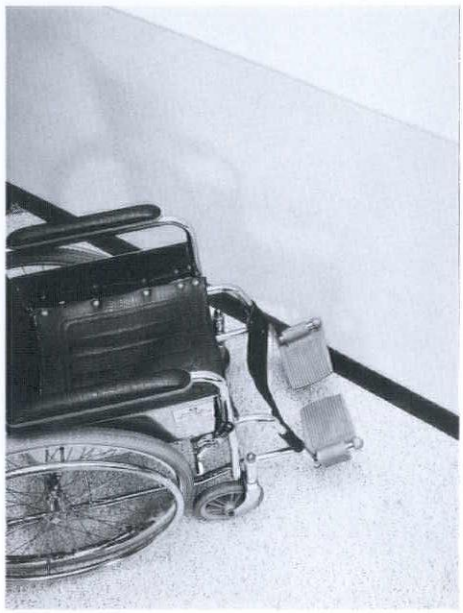
●

腰壁保護材

カイデックス

●

株式会社エービーシー商会



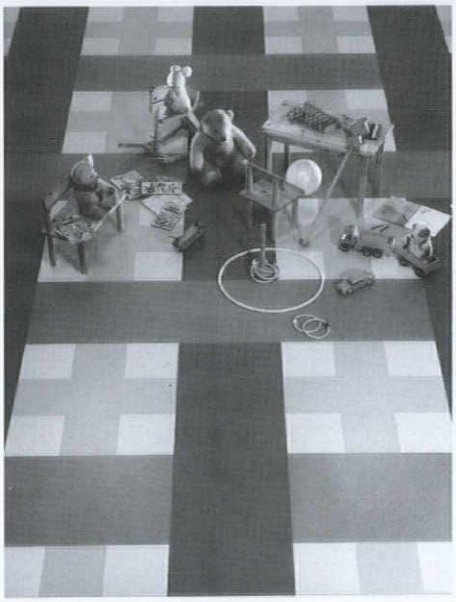
㈱エービーシー商会では，腰壁保護材カイデックスを新発売した．　病院内で頻繁に走行するストレッチャー・車椅子や，スーパーマーケットのショッピングカート，工場の台車など什器の衝突による衝撃，また，従来の塗装や壁紙，ビニル系壁面被覆材では保護できなかった摩耗，切り傷から建物内の腰壁部分やドアなどを保護する物理特性にすぐれた耐久性の高い腰壁保護材である．　耐薬品性にも優れ，強い洗剤での清掃にもシミや色褪せがなく，落書きや汚れなども洗い落とすことができる．　厚みは，0.7㎜と1.5㎜の２種類．色は，10色を用意．

株式会社エービーシー商会　化成品事業部
東京都千代田区永田町２丁目12番14号
〒100　Tel　03-3507-7176

●
張床

ロンドンタイル

●
株式会社タジマ



㈱タジマでは，5のテーマカラーをもつ，新しいベーシックカラータイル，ロンドンタイルを新発売した．ロンドンタイルの5つのテーマカラーは，ベーシック，ナチュラル，フェミニン，キッズ，ダンディである．カラーコーディネートの幅が広がり，多様な床表現が可能になった．　用途は，デパート，ショッピングセンターなどのコンコース，通路，売場，レジャー施設，オフィス，学校，病院など．

寸法
2.0㎜（厚さ）×304.8㎜×304.8㎜

色数
34色

価格
2,200円／㎡

●
カーテン

東リスタイルカーテンVOL.6

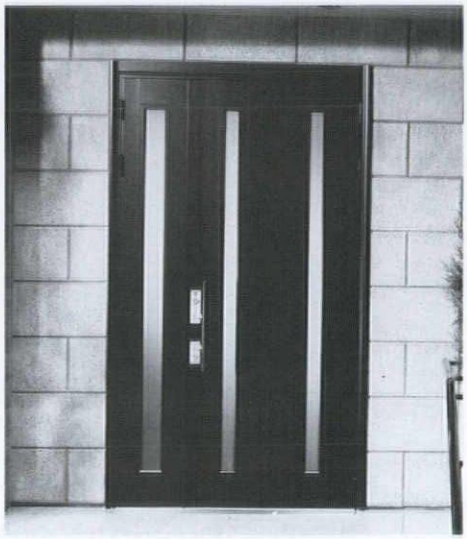
●
東リ株式会社

東リ㈱では，多様化する窓形態や個性的な生活空間を求める消費者ニーズに応える，東リスタイルカーテンVOL.6を新発売した．　東リスタイルカーテンは，スタイルの美しさを演出するために生地を厳選するとともに，新しいスタイルとして，バルーンシェードEタイプ（写真タイプ）など新スタイル4タイプを加え，スタイル，生地，カラーともバリエーションに富んだ構成となっている．　バルーンシェードEタイプは，バルーンのやわらかいシルエットと開閉自在のドレープカーテンのそれぞれの表情が楽しめる．　また，ヨーロッパの小径から見上げた素敵な窓のように，おしゃれな小窓用のスタイルカーテン，ティニーシェード，出窓用のスカラップEタイプなどを揃えている．

●
玄関ドア

ＢＦプレナス23

●
トステム株式会社



トステム㈱では，住居内外の移動や生活動作上の障害を取り除いたバリアフリータイプの玄関ドア，ＢＦプレナス23を新発売した．

特長
①単体で有効開口852.5㎜，親子で有効開口1,167㎜とし，車椅子でも楽に通過できる開口設定とした．
②つまずき防止や車椅子での通過も考慮し，下枠の段差は3㎜とした．
③下枠室外側に段差解消に伴う水仕舞いのため，グレーチングを用意している．
④暗くて見えにくい夜や，視力が悪い方でも，キーを鍵穴に差し込みやすくするため，鍵穴は回りをすり鉢状にし，外側に蛍光樹脂を仕様するなどの配慮をしている．　また，差し込むキーに左右は設けず，どちらから差し込んでも錠の操作ができる．
⑤大型把手で，アルミタイプと触り心地が温かな木製タイプも用意している．　デザインは，押し下げて開閉するレバーハンドルや手をかけて引くだけのバーハンドルなど計6タイプ．
⑥ボトムエアタイト気密材で高い気密性を保つことができる．　また，安全性を配慮した合わせガラス，断熱性に優れた複層ガラスを採用している．

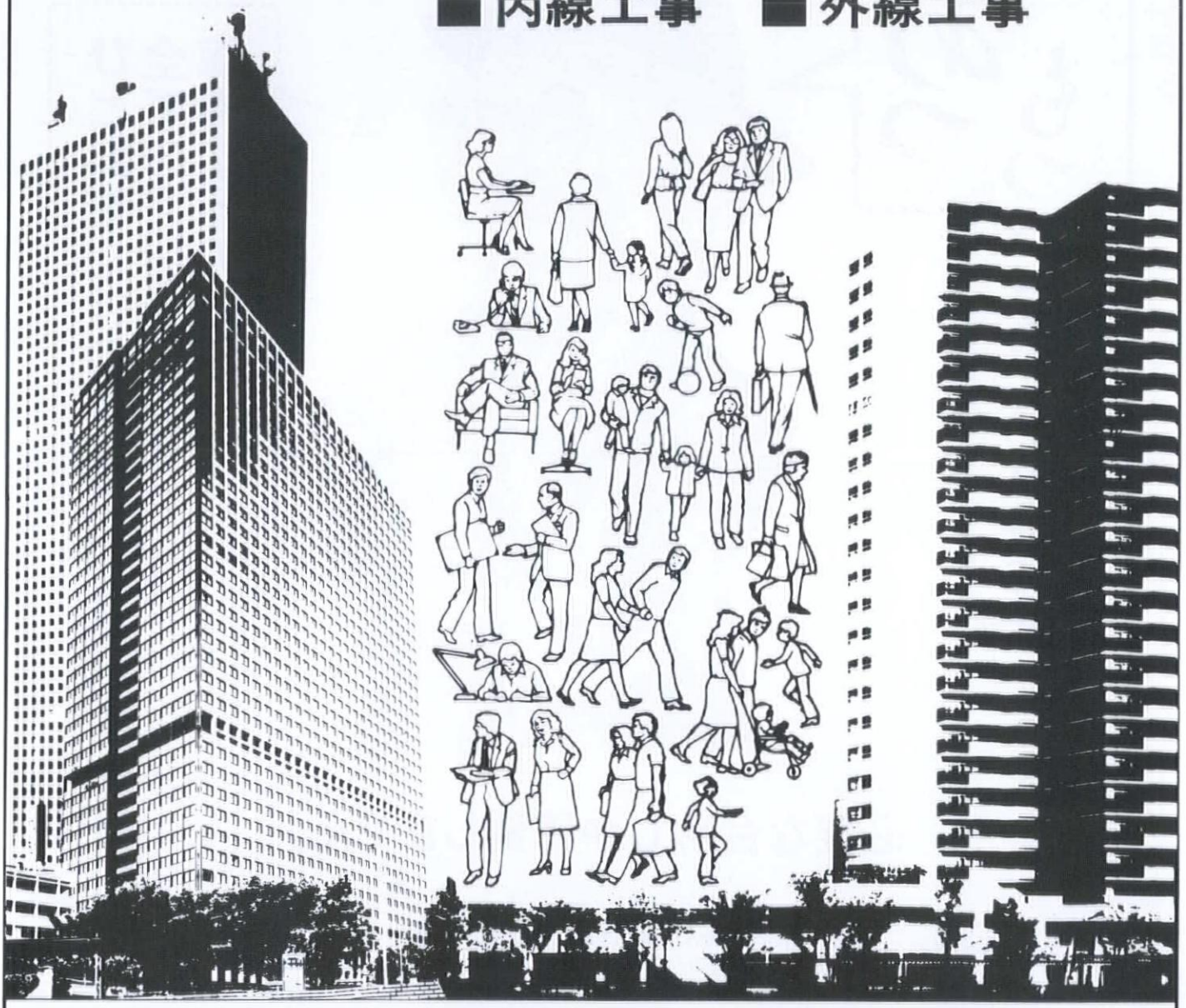
株式会社タジマ
東京都千代田区岩本町3丁目11番13号
〒101　Tel　03-5821-7731

東リ株式会社　営業企画部
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664　Tel　06-494-6605

トステム株式会社　広報部
東京都江東区大島2丁目1番1号
〒136　Tel　03-3638-8115

技術と伝統の…

■内線工事　■外線工事



東光電気工事株式会社

取締役社長　江　原　　景

東京都千代田区西神田1－4－5　〒101　電話／東京 3292－2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

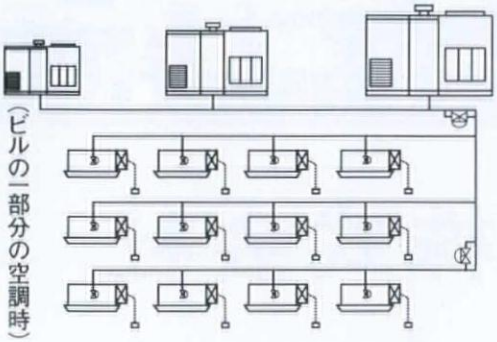
YAZAKI

ノンフロン 省エネルギー

あっ
もったいない。

ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をいかんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコントロールパネル【DCP】のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。

デジタルコントロール
パネル

スーパーアロエース

アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.0534-61-5112

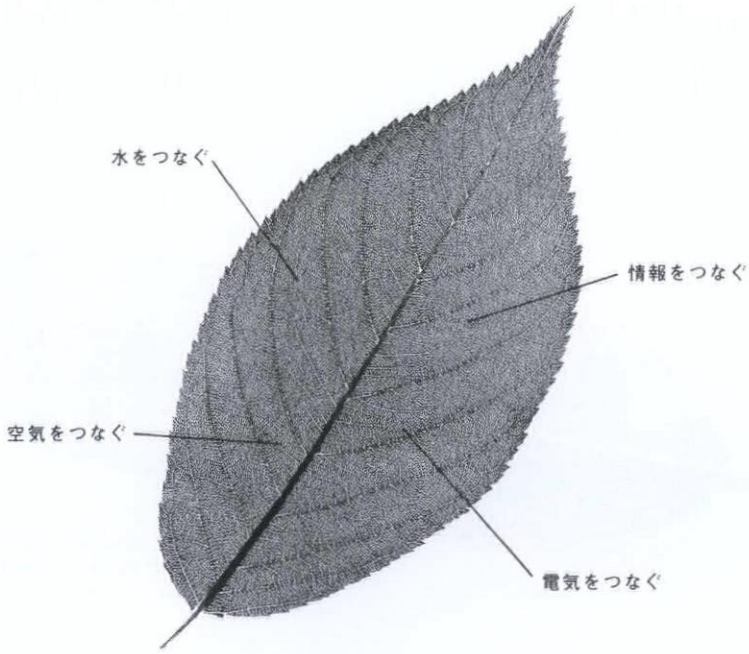
札幌支社	TEL.011-852-2914	名古屋支社	TEL.052-833-8415	中国支社	TEL.0829-23-2115
仙台支社	TEL.022-284-9115	大阪支社	TEL.06-458-4825	四国支社	TEL.0878-33-3336
東京支社	TEL.03-3298-3140	北陸支社	TEL.0764-41-6516	九州支社	TEL.092-411-4835

SEM

ビルの、工場の、街の、
すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

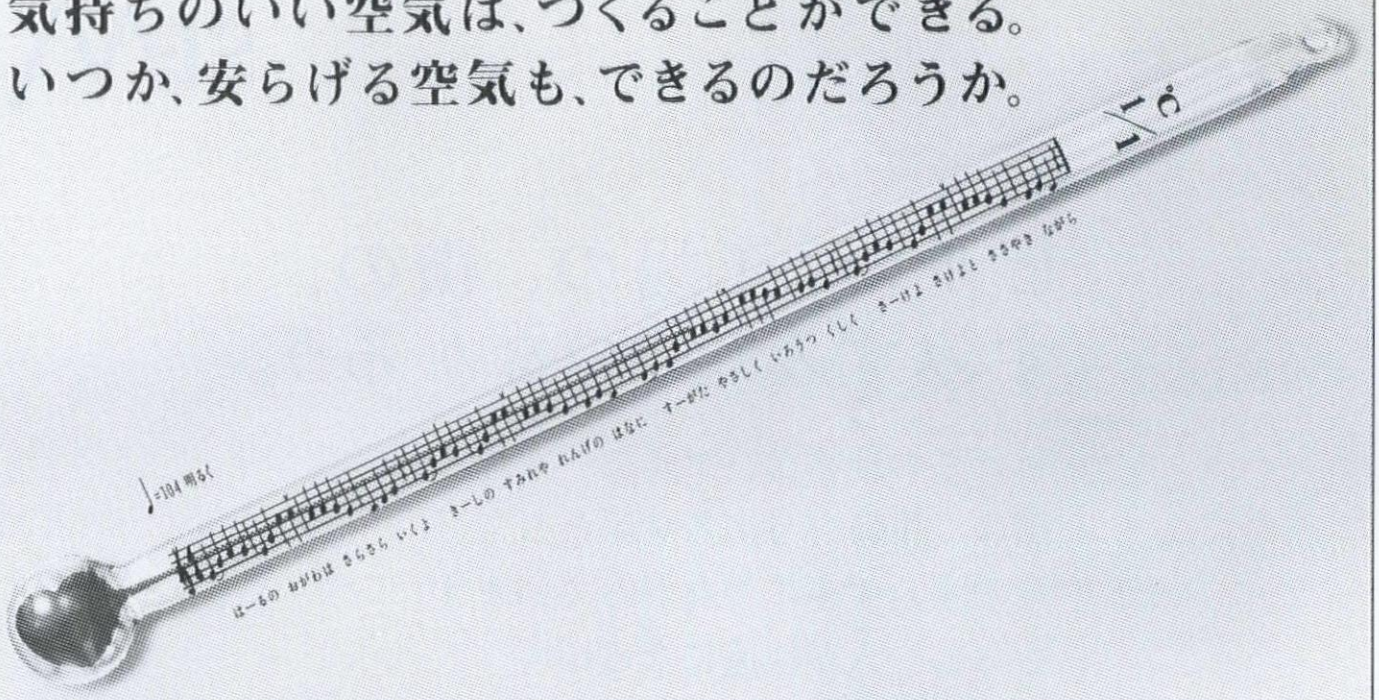
あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社
大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

気持ちのいい空気は、つくることができる。
いつか、安らげる空気も、できるのだろうか。



(熱学は、快適の先へ。) さて、現代。空調の重要性は、さまざまな分野で広がりつつあります。たとえば、空気の質(温度・湿度・気圧、清浄度、気流)。人間にとっての快適な環境はもちろん、半導体、液晶、製造プロセスのクリーンルームなどは、高度化した空調技術の象徴といえるでしょう。私たちのテーマは、心から安らげる空気を提供していくこと。音楽が奏でる心地好さを、一歩前進させた形で、みなさまの生活に貢献します。

人・空気・未来
高砂熱学工業
本社 〒101 東京都千代田区神田駿河台4-2-8

ひとのいる場所に、
夢をひろげる
建材でありたい。

エービーシー商会は、本当に価値ある建材を
納得価格でお届けし、新鮮な発想と総合力で、
空間づくりの「満足、納得、安心」をご提案します。

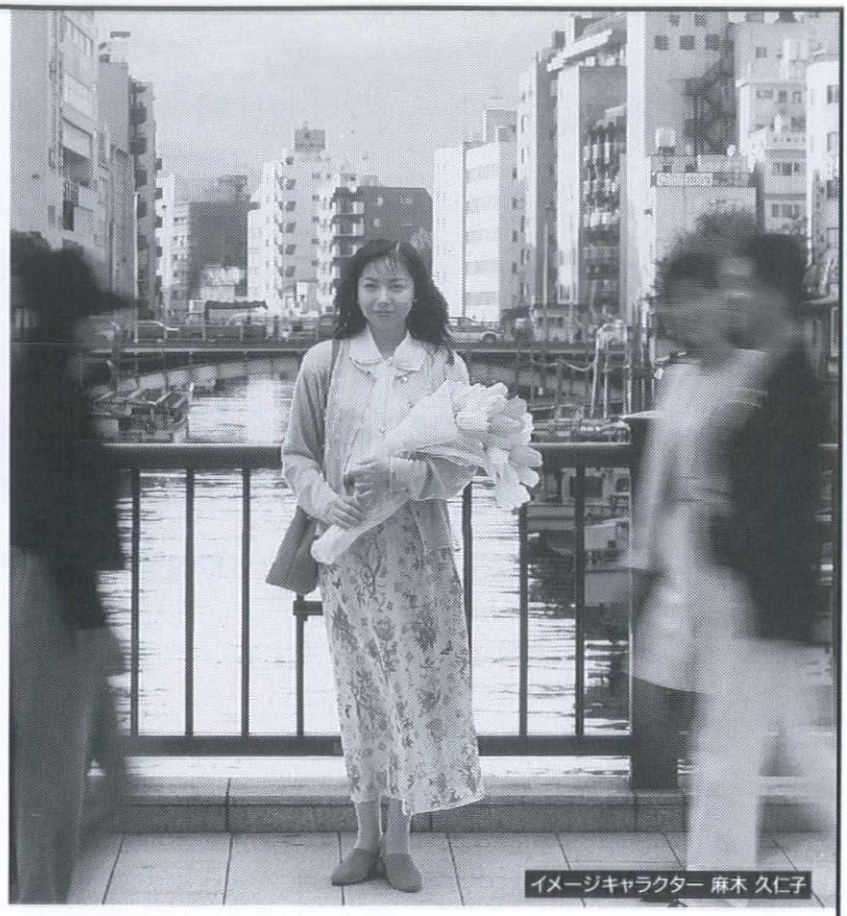
天井材のことなら… 大型格子ルーバー マグナグリッド / システム天井パネル アルメックスパネル / 建築化照明ボックス アーキライズ

㈱エービーシー商会 ルーバー・システム建材事業部
本社 〒100 東京都千代田区永田町2-12-14 TEL 03-3507-7232

ABC shokai

あの人がいるから、という発想。

建物の中に人がいるのではない。
人のまわりに建物がある。
だからいつも、人を出発点にして考えたい。
きっと、技術を使いこなす人が、
人を幸せにするにちがいない。
だからはじめに、大切なあの人のことを
一生懸命考えたい。



TEKKEN 信用と技術の 鉄建

代表取締役社長 永尾 勝義 〒101 東京都千代田区三崎町2-5-3 TEL.03-3262-3411(代表)

MK BOARD

人間だけがゴミを出す。

その結果を予測できるのも人間です。

廃棄時に燃やしても、そのまま埋めても
環境を汚染する有毒ガスが出ない型枠を
つくりました。
MKボードは、熱帯林保護と国土緑化の立場から、
国産の間伐材を活用した型枠材です。
建造物に型枠として打ち込まれたあとも、調湿・
断熱・吸遮音・ガス(アンモニア)抜きなどの
機能を発揮します。

未来に責任。打放し一発工法の透水性型枠。
セラミック粉混入木織セメント板、MKボード。

準不然(個)第2878号
MKボード

株式会社 エムアンドケー 〒101 東京都千代田区三崎町3-1-11中村ビル TEL.03-3237-7587(代表) FAX.03-3237-7657

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工

大栄電気株式会社

代表取締役社長　伊藤　赳

本　　社　東京都中央区銀座3－7－10　TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所　大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

M Works

創造空間に於ける演出支援

Audio

創造空間の再現と、鮮明な音場再生を目的とする音響設備。

コミュニケーションメディアの筆頭とされる映像設備。

Visual

Light & dimmer

空間を立体的に演出展開する照明設備。

空間可変と、カラクリの意外性を可能とする機構設備。

Mechanism

株式会社　エムワークスコーポレーション

本　　社　：　東京都港区南青山 2-21-35　南青山ﾋﾙｽﾞ　〒107　TEL. 03(3479)4090　FAX. 03(3479)0170

大阪営業所　：　大阪市北区西天満 3-1-5　英和ﾋﾞﾙ 302　〒530　TEL. 06(361)4341　FAX. 06(361)4344

日章工業株式会社

●本　　社　〒101　東京都千代田区内神田3－11－7（日立神田別館）☎03-3254-3000
●大阪支店　〒541　大阪市中央区高麗橋2－4－6（大正不動産ビル6階）☎06-201-5704
●仙台営業所　〒980　仙台市青葉区中央3－2－27（日産生命ビル）☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備（新明和工業）
バスユニット（日立化成工業）
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備
自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

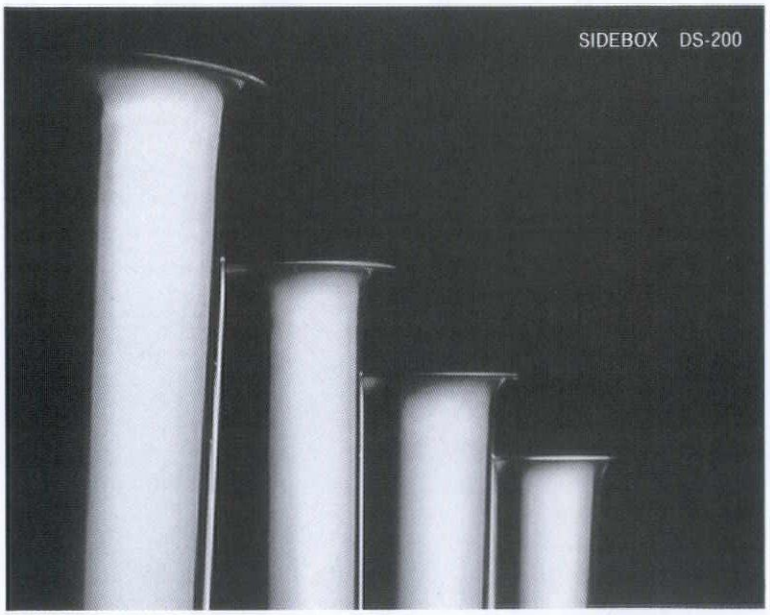
AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

物言わぬ素材に生命をふき込む職人技。ダイチは、常に最高の品質を追求します。

品質が生命（いのち）



Gマークコレクション認定

皆様に長年愛されご使用いただいている弊社の製品が　通商産業省によるグッドデザイン（Gマーク）商品選定事業の40周年を記念した「Gマークデザインコレクション」として認定されました。
ここに感謝の気持ちを込めてご報告させていただきます。
皆様に育てていただき　お蔭様で今また、高い評価を得たダイチ製品。
今後ともよろしくお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

インテリア事業部 センスの追求 STAINLESS INTERIOR
サイン事業部 ソフトとシステムの追求 D-SIGN
都市アート開発事業部 快適な街作りの追求 HEART
ダイチはステンレスでアート＆ハートをサポートします

The BEST QUALITY STAINLESS INTERIOR.

DAICHI　株式会社ダイチ
本社　〒135 東京都江東区東陽3-24-14
tel.03-3647-1185㈹　fax.03-3644-9373

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work

テクノロジー&システム

中立電気株式会社

〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号中立ビル (03)3356-2511(代)

広告目次

ＳＤ誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
ＦＡＸ（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
ＦＡＸ06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
ＦＡＸ03（3818）1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
ＦＡＸ06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
ＦＡＸ（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

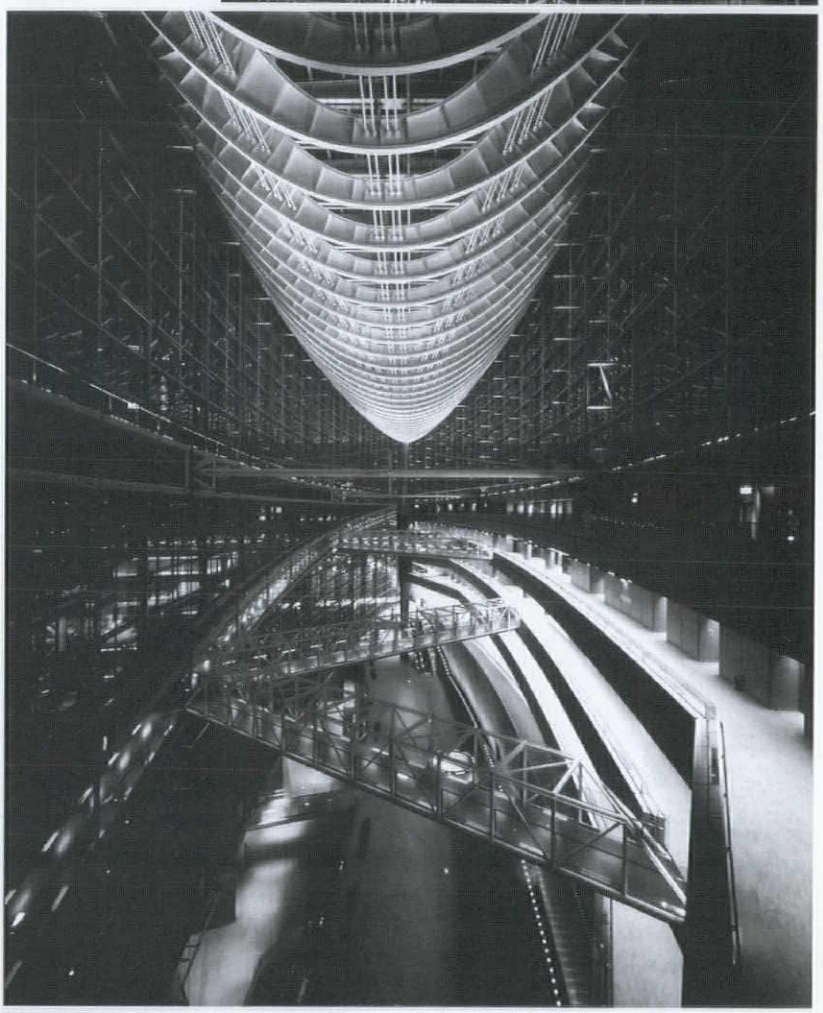
東京――東京都千代田区岩本町2-5-12
神田ポンピアンビル（3863）6011㈹

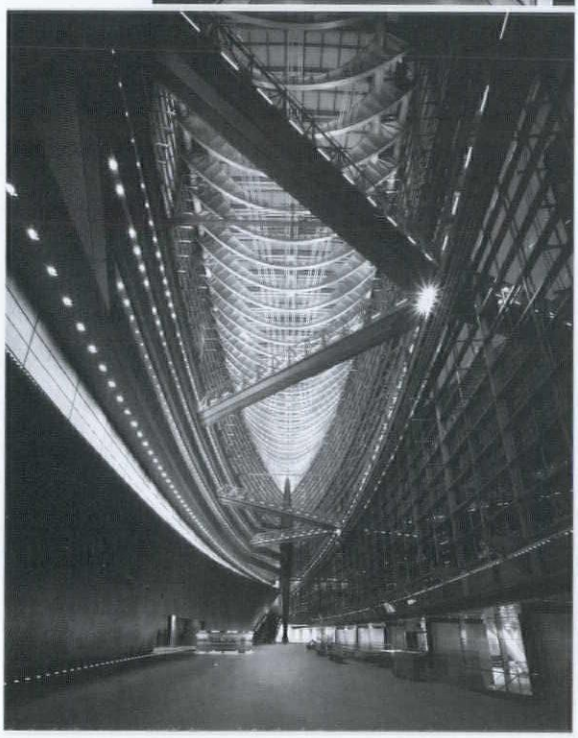
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

イ　岩崎電気㈱――128
エ　㈱エービーシー商会――A26
　　エムアンドケー㈱――A27
　　㈱エムワークスコーポレーション――A28
オ　大崎電気工業㈱――A1
　　㈱大林組――A3
カ　㈱関電工――A4
　　鹿島――A10・A11
　　軽井沢ホテル鹿島ノ森――A12
　　川村噴水㈱――A16
　　川崎電気㈱――145
キ　㈱きんでん――A20
コ　㈱神戸製鋼所――A15
サ　三和シヤッター工業㈱――A6
　　佐藤道路㈱――A18
　　三機工業㈱――132
　　三建設備工業㈱――144
シ　清水建設㈱――A5
　　神鋼ノース㈱――A16
　　新菱冷熱工業㈱――148
ス　住友精化㈱――A17
　　住友電設㈱――A25
タ　大成建設㈱――A7
　　㈱竹中工務店――A9
　　大興物産㈱――A14
　　ダイダン㈱――A15
　　大冷工業㈱――A17
　　立山アルミニウム工業㈱――139
　　高砂熱学工業㈱――A26
　　大栄電気㈱――A28
　　㈱ダイチ――A29
チ　㈱中電工――A19
テ　鉄建建設㈱――A27
ト　東海興業㈱――A18
　　東洋熱工業㈱――140
　　東光電気工事㈱――A23
ナ　中立電気㈱――A30
ニ　日新工業㈱――A8
　　日本バルカー工業㈱――A19
　　日章工業㈱――A29
ヒ　㈱日立製作所――表2
　　日立電線㈱――145
フ　ファイドン・プレス・リミテッド――156
ホ　ホテルイースト21東京――A13
　　ホクショー㈱――155
マ　松下電器産業㈱――A2
　　松下精工エンジニアリング㈱――125
ミ　美和ロック㈱――146・147
ヤ　山田照明㈱――A32
　　矢崎総業㈱――A24
ロ　ロンシール工業㈱――表3
ワ　YKKアーキテクチュラルプロダクツ㈱―表4

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。





現 場 名：東京国際フォーラム
設計監理：東京都財務局営繕部国際施設建設室
ラファエル ヴィニオリ建築士事務所

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161
仙台支社／ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630
横浜支社／ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731
大阪支社／ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL.06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442
鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (新栄ビル) TEL.0992-58-0031
名古屋営業所 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東屋ビル) TEL.052-252-5161
静岡営業所 〒420 静岡市西草深 23-9 TEL.054-247-0811
宇都宮出張所 〒321-02 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381
札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119
長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL.0262-43-8420